
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第121集

熊野遺跡 XII

2011.3

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第121集

くま の い せき
熊野遺跡 XII

2011.3

深谷市教育委員会



5号住居跡No.23



5号住居跡No.26



6号住居跡No.4



10号住居跡No.14

序

埼玉県北部に位置する深谷市は、古代には武藏国に属し、榛沢郡・幡羅郡・男衾郡の3郡にまたがっていたと考えられています。

平成3年の発掘調査では、榛沢郡家の一部と想定される倉庫群跡が、中宿遺跡から検出されました。県内初の発見例であることから、「中宿古代倉庫群跡」として県指定史跡となりました。

今回報告する熊野遺跡は、この中宿遺跡の南に隣接しています。これまでの166次におよぶ発掘調査の結果、7間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする大規模建物群や堅穴住居跡などとともに、道路状遺構・連房式鍛冶工房・石組井戸など特殊な遺構も検出されました。さらに、役人が使用したと考えられる帶金具や円面硯なども数多く出土しており、熊野遺跡は役所的機能を有していたことが想定されています。

本報告書は、各種開発に先立ち実施した熊野遺跡135・152・156次調査の成果をまとめたものです。古代から中世に至る様々な遺構・遺物が検出されました。特に135次調査からは、帶金具や円面硯・銅鈴など榛沢郡家との係わりを連想させる遺物が出土しました。また、152次調査では、室町時代中期と想定される区画溝をもつ建物群が検出され、五十子陣との関連が注目されます。本書が学術・教育関係はもとより、文化財の保護・保存の啓蒙・普及を図る資料として広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成まで、多大なるご理解とご協力を賜りました関係各位・諸機関に心より御礼申し上げます。

平成23年3月

深谷市教育委員会
教育長 小柳光春

例　　言

1. 本書は、埼玉県深谷市岡2,905番地における熊野遺跡135次調査、岡1,900番地1における熊野遺跡152次調査、岡286番地1における熊野遺跡156次調査の成果をまとめたものである。
2. 熊野遺跡発掘調査の期間および担当者は、次の通りである。

135次調査	平成10年6月1日～平成10年7月31日	宮本直樹・竹野谷俊夫
152次調査	平成12年5月9日～平成12年7月10日	宮本直樹・竹野谷俊夫
156次調査	平成13年11月8日～平成13年11月26日	鳥羽政之・今村直樹
3. 出土品の整理及び実測・観察表作成は、竹野谷俊夫が行った。
4. 図版作成は、宮本直樹と竹野谷俊夫が行った。
5. 本書の執筆は、第Ⅲ章1及び2を竹野谷俊夫が、それ以外を宮本直樹が担当した。
6. 本書に掲載した資料は、深谷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 発掘調査位置図は岡部町全図（1/10,000）及び岡部町平面図（1/2,500）を、遺跡分布図は国土地理院発行『本庄』（1/25,000）を使用した。
2. 遺構実測図は、現場では基本的に1/20、カマド実測図を1/10とし、本書掲載の段階で1/60及び1/30とした。遺物については、基本的に1/3で掲載した。
3. 図中の方位は、座標北を示す。
4. 遺物観察表の数値に（ ）のあるものは推定値、《 》のあるものは残存値を示す。
5. 土層断面図及びエレベーション図のスクリーントーン（斜線）は、地山を示す。また、図中の数値は、標高値を示す。
6. 遺構実測図中の英数字は、以下を表す。

S J 竪穴住居跡　　S D 溝跡　　S E 井戸跡　　S K 土坑　　S F 火葬土坑

目 次

序	
例言・凡例	
I 発掘調査に至るまでの経緯	1
1. 発掘調査の経緯	1
2. 整理・報告書刊行の組織	2
II 遺跡の地理・歴史的環境	5
1. 地理的環境	5
2. 歴史的環境	5
III 発見された遺構と遺物	8
1. 熊野遺跡135次調査	8
2. 熊野遺跡152次調査	61
3. 熊野遺跡156次調査	185
IV まとめ	198

挿図目次

第1図	熊野遺跡の範囲と調査地点	3	第42図	11号住居跡出土遺物実測図(1)	44
第2図	熊野遺跡135次調査地点位置図	3	第43図	11号住居跡出土遺物実測図(2)	45
第3図	熊野遺跡152次調査地点位置図	4	第44図	11号住居跡出土遺物実測図(3)	46
第4図	熊野遺跡156次調査地点位置図	4	第45図	12号住居跡カマド実測図	48
第5図	周辺の遺跡分布	7	第46図	1号掘立柱建物跡実測図	49
第6図	熊野遺跡135次調査全測図	9	第47図	1号溝跡実測図	50
第7図	熊野遺跡135次A区調査全測図	10	第48図	1～11号土坑実測図	52
第8図	1号住居跡実測図	11	第49図	熊野遺跡135次B区調査全測図	53
第9図	1号住居跡カマド実測図	11	第50図	1号井戸跡実測図	54
第10図	2号住居跡実測図	12	第51図	1号井戸跡出土遺物実測図(1)	55
第11図	2号住居跡カマド実測図	13	第52図	1号井戸跡出土遺物実測図(2)	56
第12図	2号住居跡出土遺物実測図	13	第53図	1号溝跡実測図	57
第13図	3号住居跡実測図	15	第54図	2・3号溝跡実測図	58
第14図	3号住居跡カマド実測図	16	第55図	1～5号土坑実測図	60
第15図	3号住居跡遺物出土状況図	16	第56図	熊野遺跡152次調査全測図	61
第16図	3号住居跡出土遺物実測図(1)	17	第57図	1号掘立柱建物跡実測図	64
第17図	3号住居跡出土遺物実測図(2)	18	第58図	1号掘立柱建物跡出土遺物実測図	65
第18図	4号住居跡実測図	19	第59図	2号掘立柱建物跡実測図	66
第19図	5号住居跡実測図	21	第60図	3号掘立柱建物跡実測図	67
第20図	5号住居跡カマド実測図	21	第61図	4号掘立柱建物跡実測図	68
第21図	5号住居跡遺物出土状況図	22	第62図	5号掘立柱建物跡実測図	69
第22図	5号住居跡出土遺物実測図(1)	23	第63図	1号住居跡実測図	71
第23図	5号住居跡出土遺物実測図(2)	24	第64図	1号住居跡断面図	72
第24図	6号住居跡実測図	26	第65図	1号住居跡出土遺物実測図	73
第25図	6号住居跡出土遺物実測図	27	第66図	2号住居跡実測図	74
第26図	7号住居跡実測図	29	第67図	2号住居跡出土遺物実測図	74
第27図	7号住居跡カマド実測図	30	第68図	3号住居跡実測図	75
第28図	7号住居跡出土遺物実測図(1)	30	第69図	3号住居跡出土遺物実測図	76
第29図	7号住居跡出土遺物実測図(2)	31	第70図	4号住居跡実測図	76
第30図	8号住居跡実測図	33	第71図	4号住居跡出土遺物実測図	77
第31図	8号住居跡カマド実測図	34	第72図	5号住居跡実測図	78
第32図	8号住居跡出土遺物実測図(1)	34	第73図	5号住居跡出土遺物実測図	78
第33図	8号住居跡出土遺物実測図(2)	35	第74図	6号住居跡実測図	79
第34図	9号住居跡実測図	36	第75図	6号住居跡出土遺物実測図	79
第35図	9号住居跡出土遺物実測図	36	第76図	7号住居跡実測図	80
第36図	10号住居跡実測図	37	第77図	7号住居跡出土遺物実測図	80
第37図	10号住居跡カマド実測図	38	第78図	8号住居跡実測図	82
第38図	10号住居跡出土遺物実測図(1)	39	第79図	8号住居跡カマド実測図	82
第39図	10号住居跡出土遺物実測図(2)	40	第80図	8号住居跡遺物出土状況図	82
第40図	11号住居跡実測図	43	第81図	8号住居跡出土遺物実測図(1)	83
第41図	11号住居跡遺物出土状況図	44	第82図	8号住居跡出土遺物実測図(2)	84

第83図	9号住居跡実測図	85	第127図	土坑群実測図(13)	155
第84図	9号住居跡出土遺物実測図	85	第128図	土坑群実測図(14)	156
第85図	10号住居跡実測図	86	第129図	土坑群実測図(15)	157
第86図	11号住居跡実測図	87	第130図	土坑群実測図(16)	158
第87図	11号住居跡出土遺物実測図	88	第131図	土坑群実測図(17)	159
第88図	12号住居跡実測図	89	第132図	土坑群実測図(18)	160
第89図	12号住居跡出土遺物実測図	90	第133図	土坑群実測図(19)	161
第90図	13号住居跡実測図	90	第134図	土坑群実測図(20)	162
第91図	1・2号戸跡実測図	92	第135図	土坑群実測図(21)	163
第92図	1号戸跡出土遺物実測図	93	第136図	土坑群実測図(22)	164
第93図	2号戸跡出土遺物実測図	93	第137図	土坑群実測図(23)	165
第94図	3号戸跡実測図	94	第138図	土坑群実測図(24)	166
第95図	1号溝跡実測図	96	第139図	土坑群実測図(25)	167
第96図	1号溝跡出土遺物実測図	97	第140図	土坑群実測図(26)	168
第97図	3号溝跡出土遺物実測図	97	第141図	土坑群実測図(27)	169
第98図	2号溝跡実測図	98	第142図	土坑群実測図(28)	170
第99図	7号溝跡実測図	98	第143図	土坑群実測図(29)	171
第100図	3号溝跡実測図	99	第144図	土坑群実測図(30)	172
第101図	4号溝跡実測図	100	第145図	土坑群実測図(31)	173
第102図	5号溝跡実測図	101	第146図	土坑群出土遺物実測図(1)	174
第103図	6号溝跡実測図	103	第147図	土坑群出土遺物実測図(2)	175
第104図	6号溝跡出土遺物実測図(1)	104	第148図	土坑群出土遺物実測図(3)	176
第105図	6号溝跡出土遺物実測図(2)	105	第149図	土坑群出土遺物実測図(4)	177
第106図	6号溝跡出土遺物実測図(3)	106	第150図	ピット群実測図	179
第107図	8号溝跡実測図(1)	107	第151図	1・4～7号ピット出土遺物実測図	
第108図	8号溝跡実測図(2)	108			180
第109図	9・10・12号溝跡実測図	109	第152図	調査区出土石器実測図	181
第110図	11・13・14号溝跡実測図	112	第153図	調査区出土埴輪実測図	182
第111図	15～18号溝跡実測図	113	第154図	調査区出土錢貨拓影(1)	183
第112図	19・20号溝跡実測図	114	第155図	調査区出土錢貨拓影(2)	184
第113図	7・8・9・13・15・18号溝跡出土遺物 実測図	115	第156図	熊野遺跡156次調査全測図	186
第114図	1～3号火葬土坑群実測図	116	第157図	1号住居跡実測図	187
第115図	土坑群実測図(1)	143	第158図	1号住居跡遺物出土状況図	187
第116図	土坑群実測図(2)	144	第159図	1号住居跡力マド実測図	188
第117図	土坑群実測図(3)	145	第160図	1号住居跡出土遺物実測図(1)	189
第118図	土坑群実測図(4)	146	第161図	1号住居跡出土遺物実測図(2)	190
第119図	土坑群実測図(5)	147	第162図	2号住居跡実測図	191
第120図	土坑群実測図(6)	148	第163図	2号住居跡遺物出土状況図	191
第121図	土坑群実測図(7)	149	第164図	2号住居跡出土遺物実測図(1)	192
第122図	土坑群実測図(8)	150	第165図	2号住居跡出土遺物実測図(2)	193
第123図	土坑群実測図(9)	151	第166図	2号住居跡出土遺物実測図(3)	194
第124図	土坑群実測図(10)	152	第167図	2号住居跡出土遺物実測図(4)	195
第125図	土坑群実測図(11)	153	第168図	3号住居跡実測図	196
第126図	土坑群実測図(12)	154	第169図	1号土坑実測図	197
			第170図	1号土坑出土遺物実測図	197

写 真 図 版

- | | |
|-------------------|------------------|
| 図版 1 猿野I35次A区遺構 | 図版16 猿野I52次遺構 |
| 図版 2 猿野I35次A区遺構 | 図版17 猿野I52次遺構 |
| 図版 3 猿野I35次A区遺構 | 図版18 猿野I52次遺構 |
| 図版 4 猿野I35次A区遺構 | 図版19 猿野I52次遺構 |
| 図版 5 猿野I35次A区遺構 | 図版20 猿野I52次遺構 |
| 図版 6 猿野I35次A・B区遺構 | 図版21 猿野I52次遺構 |
| 図版 7 猿野I35次A区出土遺物 | 図版22 猿野I52次遺構 |
| 図版 8 猿野I35次A区出土遺物 | 図版23 猿野I52次遺物 |
| 図版 9 猿野I35次A区出土遺物 | 図版24 猿野I52次遺物 |
| 図版10 猿野I35次A区出土遺物 | 図版25 猿野I52次遺物 |
| 図版11 猿野I35次A区出土遺物 | 図版26 猿野I56次遺構 |
| 図版12 猿野I35次A区出土遺物 | 図版27 猿野I56次遺構・遺物 |
| 図版13 猿野I35次A区出土遺物 | 図版28 猿野I56次遺物 |
| 図版14 猿野I52次遺構 | 図版29 猿野I56次遺物 |
| 図版15 猿野I52次遺構 | 図版30 猿野I56次遺物 |

I 発掘調査に至るまでの経緯

1. 発掘調査の経緯

埼玉県北部に位置する深谷市は、埋蔵文化財の宝庫として古くから知られてきた。なかでも、縄文時代草創期の土器を出土した西谷遺跡を筆頭に、弥生土器を出土した上敷免遺跡、鹿島古墳群・黒田古墳群、郡衙正倉跡と想定される中宿遺跡など、各時代を通して著名な遺跡が多い。さらに畠山重忠をはじめ多くの武蔵武士たちが活躍した地域もある。

今回報告の3件の発掘調査は、アパート及び工場建設に先立ち、熊野遺跡内において発掘調査を実施した。各調査とともに事業主や土地所有者の協力の下、必要最小限の措置を講じたものである。

以下、発掘調査に至るまでの経緯を記す。

熊野遺跡（県登録番号No63-017）は、JR岡部駅の北西に立地し、県道蛭川普濟寺線と国道17号線に挟まれた範囲である。東西約1,300m、南北約1,000mを測る市内でも大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると煙地が多く残っていたが、平成元年に『岡中央土地区画整理事業』が立ち上がり、景観が大きく様変わりした。

この区画整理事業に先立つ発掘調査は、平成4年度から実施され、道路建設や個人住宅の移転などに伴う調査件数が急増した。熊野遺跡における発掘調査は、現在までに166次に及ぶ。また、この区画整理事業地内に埼玉県住宅供給公社が岡中央団地を建設するにあたり、（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埼理文」と記す）も4次にわたる調査を実施している。

(1) 第135次調査

アパート建設に伴う建築確認申請に先立ち、平成9年9月10日付で、埋蔵文化財の所在についての照会文書が、茂木一郎氏（以下、「事業主」と記す）から岡部町教育委員会（当時、以下「町教委」と記す）宛に提出された。これを受け町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答するとともに、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後平成9年9月17日付で事業主より試掘調査

依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、平成10年3月19日に試掘調査を実施したところ、堅穴住居跡7軒、井戸跡2基など遺構の存在が明らかとなった。

これらの遺構を保存するべく事業主と調整を進めたが、工事の変更が困難なことから、記録保存のための発掘調査を岡部町遺跡調査会に委託して実施することで合意した。

開発に先立ち事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、平成10年5月25日付けで文化庁長官宛に提出された。これを受けて、岡部町遺跡調査会から文化財保護法57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が、同年5月29日に提出された。

(2) 第152次調査

工場建設に伴う建築確認申請に先立ち、平成10年5月1日付で埋蔵文化財の所在についての照会文書が、ヤマト・インダストリー株式会社・浦和工場長菅野裕之氏から町教委宛に提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答するとともに、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、同年5月20日に試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなった。

このため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立つ平成12年4月19日に事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受けて、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年4月26日に提出した。

(3) 第156次調査

アパート建築に伴う建築確認申請に先立ち、平成13年9月1日付で埋蔵文化財の所在についての照会文書が、小林初太郎氏から町教委宛に提出された。これを受けて町教委は、埋蔵文化財包蔵地図により開発予定地が熊野遺跡内であることを書面で回答するととも

に、遺跡の詳細な把握をするための試掘調査が必要である旨を伝えた。

その後事業主より試掘調査依頼書が提出されたため、町教委では事業主や重機等の日程調整を行い、試掘調査を実施したところ、遺構の存在が明らかとなつた。

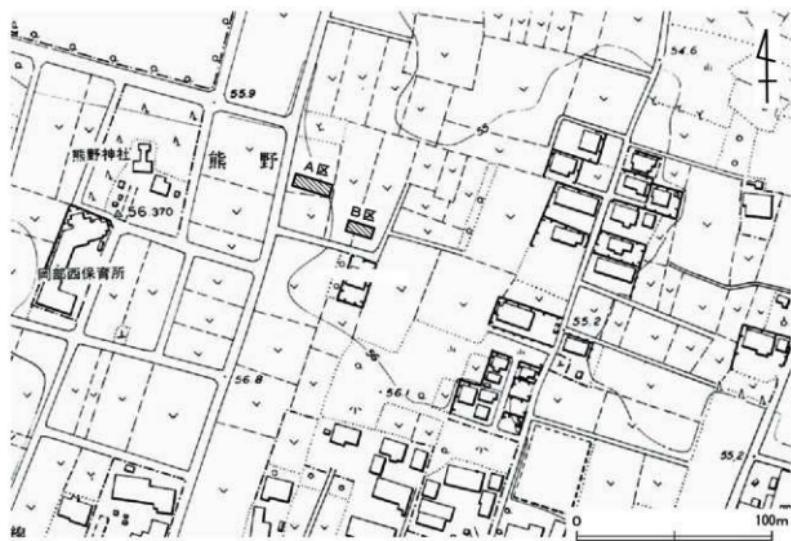
このため、発掘調査を実施することで調整を進めた結果、開発に先立つ平成13年11月1日に事業主から文化財保護法57条の2に基づく埋蔵文化財発掘届が、文化庁長官宛に提出された。これを受け、町教委では、文化財保護法98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を同年11月2日に提出した。

2. 整理・報告書刊行の組織

教 育 長	小柳 光春
部 長	塚原 寛治
教 育 次 長	澤出 晃越
課 長	小林 穀
課 長 補 佐	吉場 厚仁
係 長	村松 篤
主 査	宮本 直樹
*	知久 裕昭
主 任	荻野 直美
主 事	幾島 審
*	飯島 峻輔
臨 時 職 員	竹野谷俊夫
*	伊藤万里子
*	北本ゆかり
*	佐藤 由江
*	布施みゆき



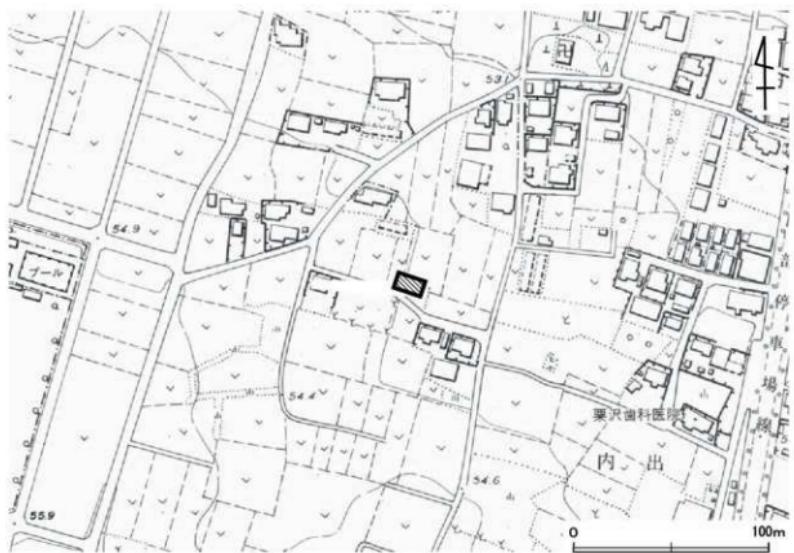
第1図 熊野遺跡の範囲と調査地点



第2図 熊野遺跡135次調査地点位置図



第3図 熊野遺跡152次調査地点位置図



第4図 熊野遺跡156次調査地点位置図

II 遺跡の地理・歴史的環境

1. 地理的環境

埼玉県の北部に位置する深谷市は、北は利根川を挟んで群馬県と接する。南部には荒川が東流し、両河川が最も近接する地域である。

深谷市の南半部は櫛引台地、北半部は妻沼低地であり、地形的に二分できる。櫛引台地は、荒川によって形成された荒川扇状地が浸食されてできた洪積台地である。寄居付近を頂点として、西側の櫛引面と東側の一段低い寄居面、両者に挟まれるように御稲ヶ原面からなる。この間を唐沢川や藤治川が北流する。また、台地上には、観音山（標高77m）、仙元山（標高98m）、山崎山（標高117m）などの独立丘陵が存在する。台地の北端は崖線を形成し、比高差5～10mで妻沼低地と接する。

妻沼低地は、利根川の作用で形成された沖積低地である。さらに、利根川をはじめ小山川・福川などによって、自然堤防や後背湿地が形成されたと推定されている。

熊野遺跡は、櫛引台地北部の深谷市岡字熊野他に所在する。JR高崎線岡部駅の北西に位置し、東西1300m、南北1,000mの範囲に及ぶ大規模な遺跡である。かつては、駅から少し離れると住宅もなく、畠地が広がっていたが、近年は区画整理事業等により、市街化が急激に進んでいる。

2. 歴史的環境

熊野遺跡の立地する櫛引台地北部は、早くから開発が進み、これらに伴う発掘調査が多く実施してきた。調査の結果、縄文時代～中世に至る様々な遺構・遺物が検出されている。

縄文時代では、西谷遺跡から爪形文系・多縄文系土器などが検出され、草創期の土器として研究上重要なもののである。早期では、撚糸文系土器が西龍ヶ谷・西谷・茶臼山遺跡から発見されている。前期では宮西遺跡で関山式期、四十坂遺跡で黒浜式期、神田・東光寺裏遺跡で諸磯B式期の集落跡が検出されている。中期では、水窪遺跡で勝坂式期～加曾利E1式期、

菅原遺跡で加曾利E3式期の環状集落が発掘調査されている。後期では、上宿遺跡で敷石住居跡が検出されている。晩期では、原ヶ谷戸遺跡の発掘調査で、安行IIIa式期の良好な資料が出土している。

弥生時代では、四十坂遺跡より繩文晩期～弥生初期の土器群が出土し、弥生初期のまとまった資料として早くから注目されてきた。平成2年の発掘調査では、再葬墓や土坑墓群が検出され、弥生時代の開始を窺わせる資料として重要な資料である。

古墳時代に至ると、遺跡数は急増し、重要な遺構も多数確認されている。

四十坂遺跡からは、五頭～和泉期に至る方形周溝墓群が検出され、この段階から後期群集墳まで連続と埴輪が営まれていたことが知られる。中でも四十塚古墳は、横矧板鉢留短甲・五鈴鏡板付轡などを出土し、これらの遺物から5世紀後半の当地域の首長墓と捉えられている。

その後、6世紀代には、やはり首長墓と想定される實稻荷塚古墳（前方後円墳）が四十塚古墳群内に出現する。これ以降、首長墓は、お手長山古墳（帆立貝式古墳）・内出八幡塚古墳（円墳）・前原愛宕山古墳（方墳）と順次南東方向へ移動しながら単独で築造されたことが認められる。

原ヶ谷戸遺跡は、方形周溝墓6基、円形周溝墓1基、円墳21基、帆立貝式古墳1基が検出されている。四十坂遺跡と針ヶ谷排水路の両岸に立地し、両古墳群の変遷過程のあり方が共通することが注目される。

熊野遺跡の東に接する白山古墳群では、6世紀代の古墳24基（円墳23、帆立貝式古墳1）が調査された。弾琴埴輪や壺を持け持つ巫女の埴輪など6体の人物埴輪が、ほぼ完全な形で出土した。

この他に、菅原古墳群・前原古墳群・上原古墳群などが台地上に展開する古墳群であり、西山古墳群・千光寺古墳群・諏訪山古墳群などが丘陵上に立地する古墳群である。

なお、櫛引台地北部における古墳時代の集落は、現在のところ中宿遺跡や上宿遺跡など数か所が確認されているに過ぎない。この時代の集落は、妻沼低地に立地する砂田前遺跡・岡部条里遺跡や本庄台地上の六反田遺跡・大寄遺跡・宮西遺跡などがあり、櫛引台地以

外に分布の中心が認められる。

また、該期の遺跡として、貉山祭祀遺跡が挙げられる。烟の開墾中に偶然土製模造品が出土し、3回の開墾で形が判明したものだけでも100点を超える模造品を中心に数点の土師器が含まれる。遺跡が古代榛沢郡と児玉郡・那珂郡の郡界に存在する山崎山丘陵の斜面に位置することから、坂の神を祭った遺跡であったことが推定されている。

奈良～平安時代になると、様相は一変する。それまで墓域として利用されてきた熊野遺跡内に、突如集落が営まれる。これまでに166次に及ぶ調査が実施され、720軒を超える竪穴住居跡、160棟の掘立柱建物跡をはじめ、道路状遺構・大溝・石組井戸・連房式鍛冶工房など特殊な遺構が多数検出された。また、和銅開寶・円面鏡・帶金具・唐三彩の陶枕・刻字紡錘車・陶製仏殿・置きカマドなど他の集落では見られない貴重な遺物も多数出土している。

なお、集落の開始時期は、131次調査の1・2号竪穴住居跡から出土した畿内産土師器の年代観から、7世紀第3四半期と考えられている。さらに、1次調査において検出された7間×3間をはじめとする大型建物の存在から、該期の熊野遺跡は初期評家と想定されている。

また、櫛引台地縁辺部に位置する中宿遺跡からは、5次にわたる調査の結果、大規模な総柱式建物跡20棟が規則的に配置された状態で検出された。榛沢郡衙に伴う正倉跡と推定され、7世紀後半の成立であることから熊野遺跡との関連が想定される。また、中宿遺跡が立地する台地直下から、「滝下大溝」が検出された。その北東で条里遺構が確認されたことから、灌漑と運河の機能を併せ持っていた大溝であったことが想定される。

さらに、熊野遺跡の北東に位置する岡遺跡は、8世紀第2四半期と考えられる蓮華文軒丸瓦などが古くから多量に表採され、廃寺跡と推測されてきた。平成14年度に町教委が実施した確認調査により、版築された基壇状遺構が検出された。近接する住居跡からは、「棒」の刻字瓦や「寺」と墨書きされた土師器坏なども出土し、寺院跡である可能性がほぼ確実となった。

なお、この岡廃寺の北側、中宿遺跡の東側にもあたる台地末端上に、島護產泰神社が鎮座する。北側は崖線であり、現在でも湧水が認められる。創建時期は不明であるが、これらの状況から、古代に遡る可能性を指摘しておきたい。

このように、奈良～平安時代の櫛引台地北部は、中宿遺跡・熊野遺跡を中心として、その周辺に集落や寺院が展開していた状況が窺われる。

古代から中世にかけては、猪俣党の岡部六弥太忠澄や丹党の榛沢六郎成清の活躍が『平家物語』などから知られる。

14世紀中ごろ、北関東の新田氏の勢力を抑え、さらに関東から越後に至る通路確保のために関東管領上杉憲頭の命により六男憲英が庁鼻と城を築いたのが、深谷上杉氏の始まりであるといわれる。深谷城は、古河公方の勢力に備えるために、深谷上杉氏が康正2年(1456)に築城した説が有力であるという。当年9月17日には利根川沿いの岡部原(現在の深谷市岡部周辺)で古河軍と上杉軍が衝突している。この他に、岡部六弥太館跡からは、方形に廻る堀跡や井戸、土坑墓などが検出された。同様な堀跡は、熊野遺跡と白山遺跡からも検出され、館跡に付属するものと推定されている。西龍ヶ谷遺跡では、軸を描えて並んだ6棟の掘立柱建物群が確認された。



- | | | | |
|-------------|----------------------|--------------|---------------|
| 1. 熊野遺跡 | (律令期集落・官衙・中世居館) | 18. 東光寺裏遺跡 | (绳文・平安集落) |
| 2. 中宿遺跡 | (郡衙正倉・律令期集落) | 19. 棲沢六郎成清館跡 | (中世) |
| 3. 滝下遺跡 | (河川跡・律令期集落) | 20. 石菖蒲遺跡 | (古墳～平安集落・周溝墓) |
| 4. 岡庭寺 | (寺院跡・古墳～律令期集落) | 21. 地神祇遺跡 | (古墳～平安集落) |
| 5. 間部柔里遺跡 | (古墳集落・柔里水田・律令期居宅) | 22. 千光寺遺跡 | (古墳群・平安集落) |
| 6. 砂田前・埴詰遺跡 | (古墳～平安集落) | 23. 西谷遺跡 | (绳文) |
| 7. 白山遺跡 | (古墳群・律令期集落・中世居館) | 24. 茶臼山遺跡 | (古墳群) |
| 8. 新田遺跡 | (律令期集落) | 25. 伝上杉館跡 | (中世) |
| 9. 上宿遺跡 | (绳文・古墳～律令期集落) | 26. 山河聖天社 | (中世) |
| 10. 四十坂遺跡 | (绳文集落・弥生再葬墓・周溝墓・古墳群) | 27. 西龍ヶ谷遺跡 | (律令期集落・中世居館) |
| 11. 原ヶ谷戸遺跡 | (绳文・古墳集落・古墳群) | 28. 伝岡部六郎太館跡 | (中世) |
| 12. 水産遺跡 | (绳文・古墳集落・周溝墓・古墳群) | A. 四十坂浅間山古墳 | (円墳) |
| 13. 新井遺跡 | (律令期集落) | B. 宮崎荷塚古墳 | (前方後円墳) |
| 14. 東五十子遺跡 | (古墳・中世集落) | C. お手長山古墳 | (帆立貝式古墳) |
| 15. 六反田遺跡 | (古墳・中世集落) | D. 前原愛宕山古墳 | (方墳) |
| 16. 大寄遺跡 | (绳文・弥生～律令期集落) | E. 内出八幡冢古墳 | (円墳) |
| 17. 西浦北遺跡 | (绳文・古墳～律令期集落) | F. 四十塚古墳群 | (古墳群) |

第5図 周辺の遺跡分布

III 発見された遺構と遺物

1. 熊野遺跡135次調査

【A区第1号住居跡】

第1号住居跡は、調査区A区の西側隅に位置する。第1号掘立柱建物跡と重複し切り合い関係から、第1号住居跡の方が新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸4.4m、短軸3.0m、確認面からの深さ20cmを測る。主軸方位はN-85°-Eを示す。

床面は概ね平坦で、カマド前面から住居中央部にかけてよく踏み固められていた。なお、中央部の貼床下には深さ58cmの掘り方が確認された。また、深さ約10cm程の壁溝が全周する。

カマドは西壁側中央に設置されていた。袖は白色粘土と砂質土の造り付けである。焚き口部の幅は45cm、煙道部までの長さは110cmを測る。底面は焚き口から若干くぼみ、緩やかに煙道部へ立ち上がる。

ビットは大小合わせて6基検出された。平面形態は略円形で規模は、直径20~64cm、深さ15cm~45cmである。カマド右脇には貯蔵穴と思われるビットがあるが、掘立柱建物跡と重複しており、規模は不明確である。

出土遺物は少なくカマド及び覆土から土師器と須恵器の破片が出土したが、図示できるものはなかった。

住居の時期は不明確であるが、第1号掘立柱建物跡との重複関係から8世紀前半以降~9世紀と推定される。

【A区第2号住居跡】

第2号住居跡は、調査区A区の西側に位置し、第

3号、4号住居跡と重複する。切り合い関係から、新旧は古い方から4号→2号→3号となる。

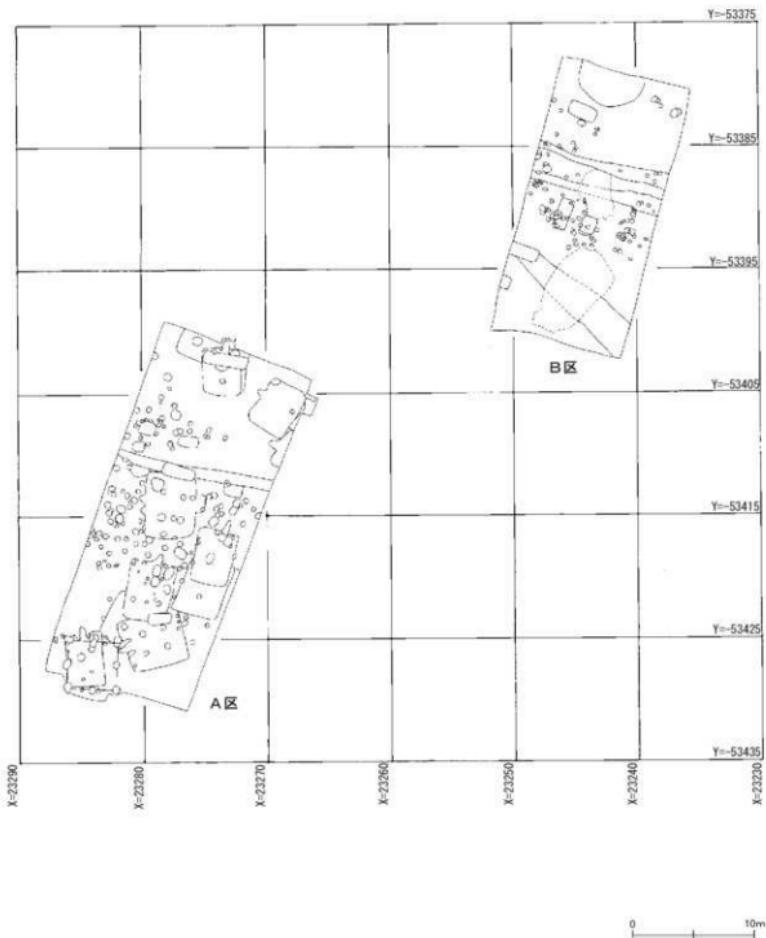
平面形態は隅丸方形で、規模は、長軸4.8m、短軸4.4m、確認面からの深さ40cmを測る。主軸方位はN-19°-Wを示す。床面は平坦で、西壁から南壁にかけて壁溝が廻る。

カマドは、北壁中央部に設置されている。袖から煙道部は白色粘土と砂質土による造り付けである。焚き口部の幅は55cm、燃焼部の長さ83cm、幅50cm、煙道部の長さ65cmを測る。火床面はほぼ平坦で、煙道部に至り急角度で立ち上がる。火床面下の掘り方は船底状を呈する。

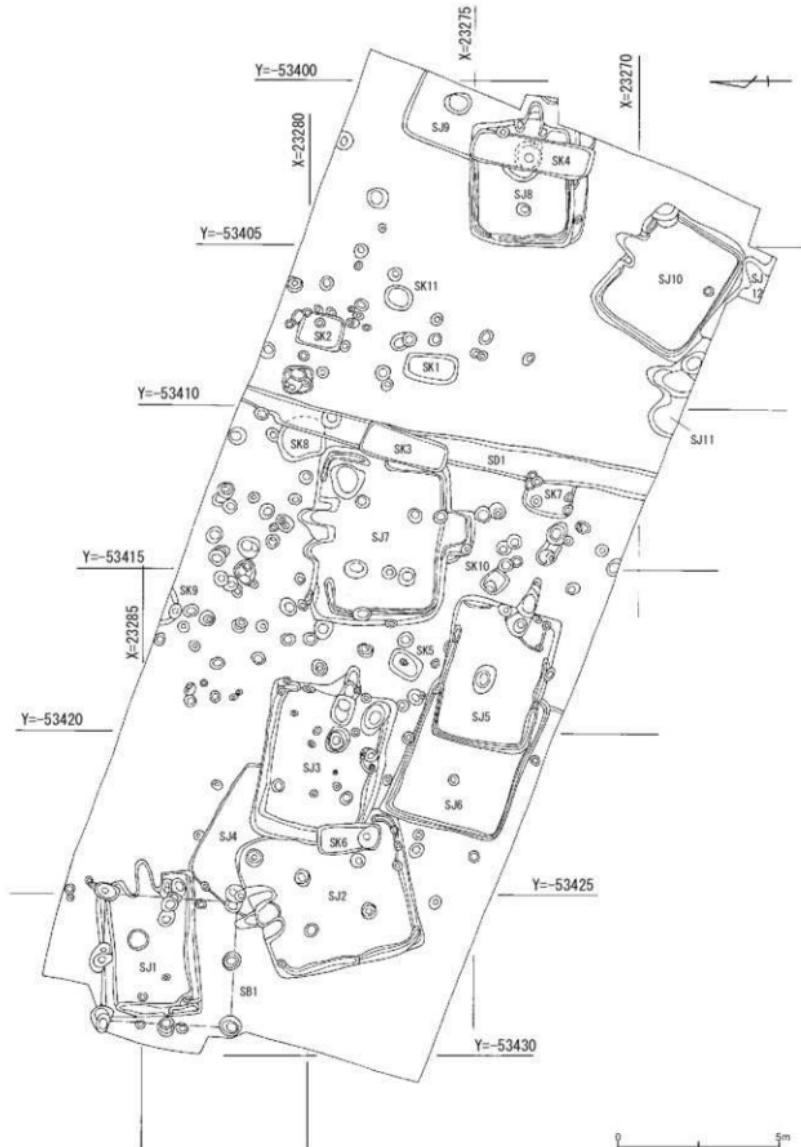
ビットは5基検出された。規模は直径45cm~56cm、深さ30cm~55cmを測る。P1~4は主柱穴で、基本的な4本柱穴である。カマド右側のビットは貯蔵穴であろうか。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器盤・蓋、刀子、棒状鉄製品が出土した。土師器壺1は丸底形態の北武藏型壺、2は平底である。3は須恵器盤で、底部が回転窓ケズリされる。色調が灰白色を呈し、ややざらつく。群馬（西毛）産と思われる。4は壺口蓋で薄手の作りである。混入か或いは、壺として使用されたものが残ったものか、第4号住居跡の遺物の可能性もある。未野産。6は刀子で刃部の使い減りが著しく、短い。7は細い角棒状の鉄製品で、鉄錠の茎部か。

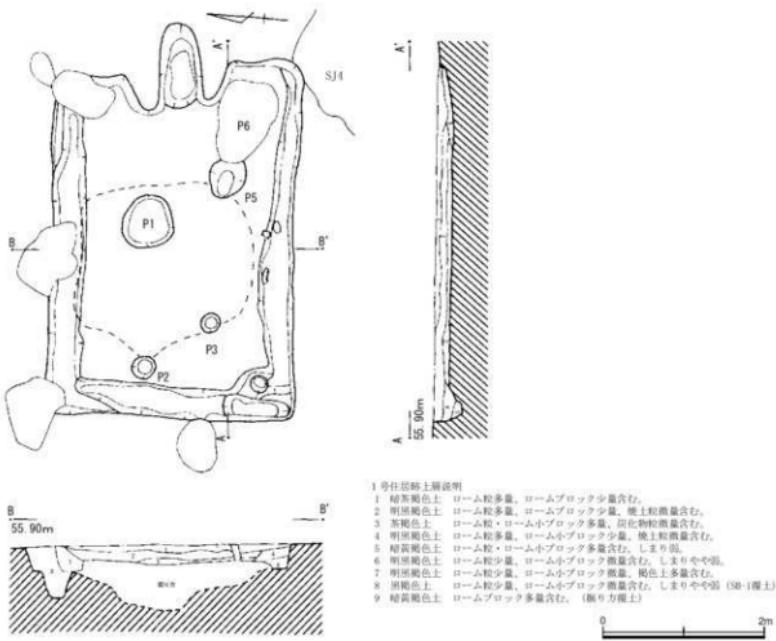
住居の時期は不明な点が多いが、土師器壺、須恵器盤の年代や、3・4号住居跡との切り合い関係から8世紀前半~中葉と推定される。



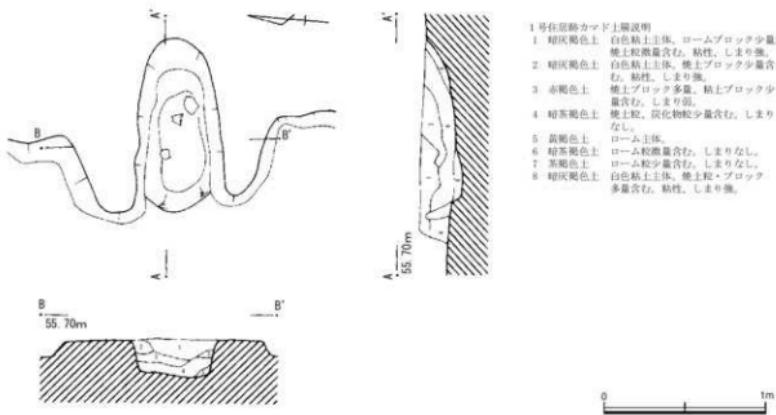
第6図 熊野遺跡135次調査全測図



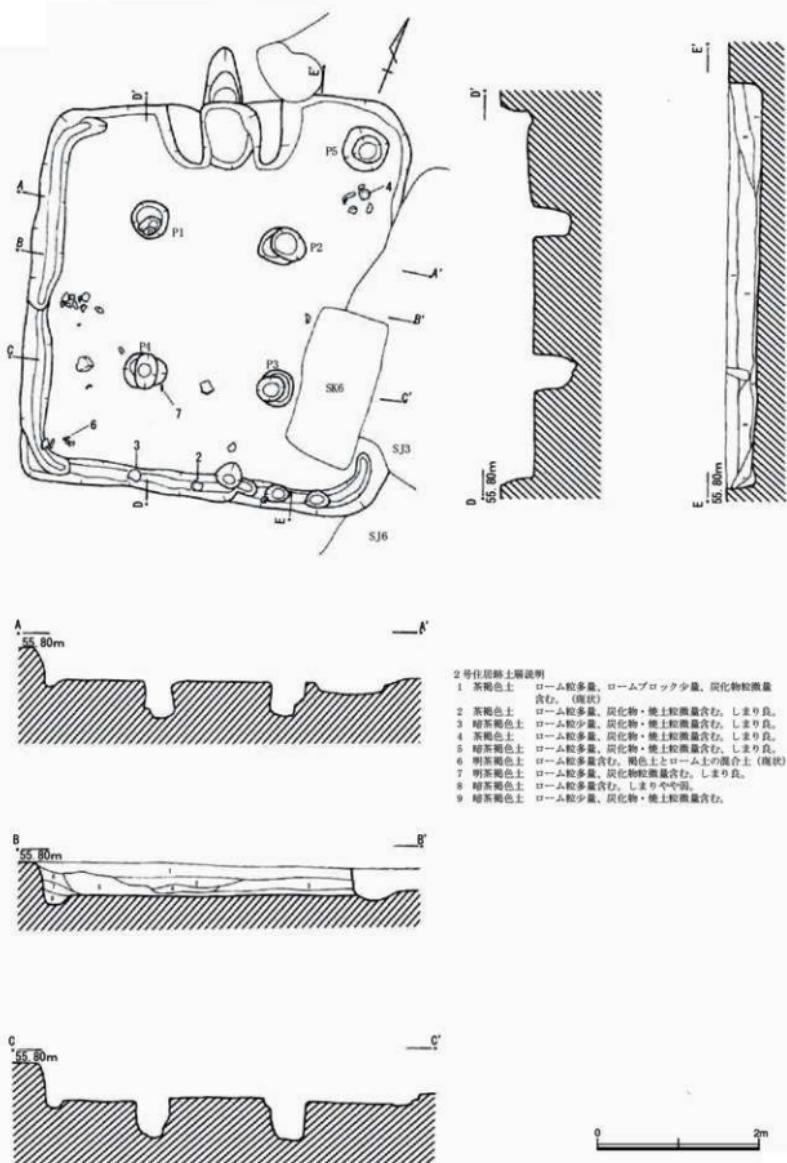
第7図 熊野遺跡135次A区調査全測図



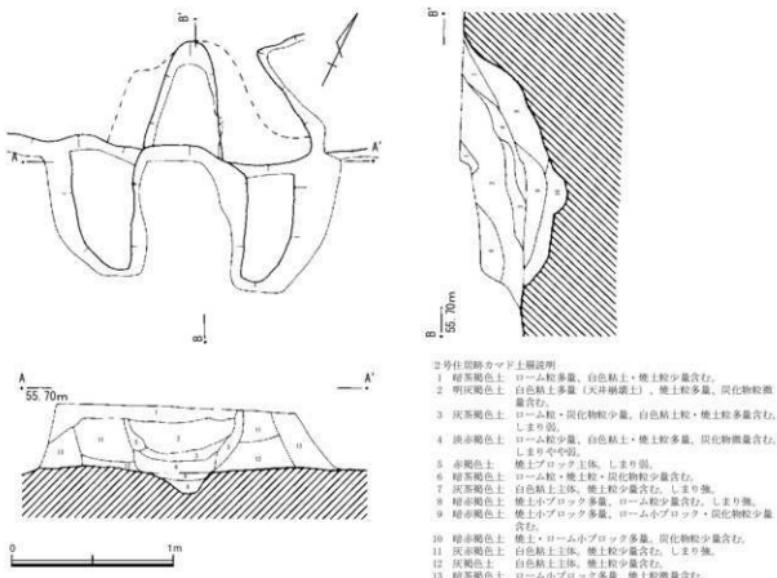
第8図 1号住居跡実測図



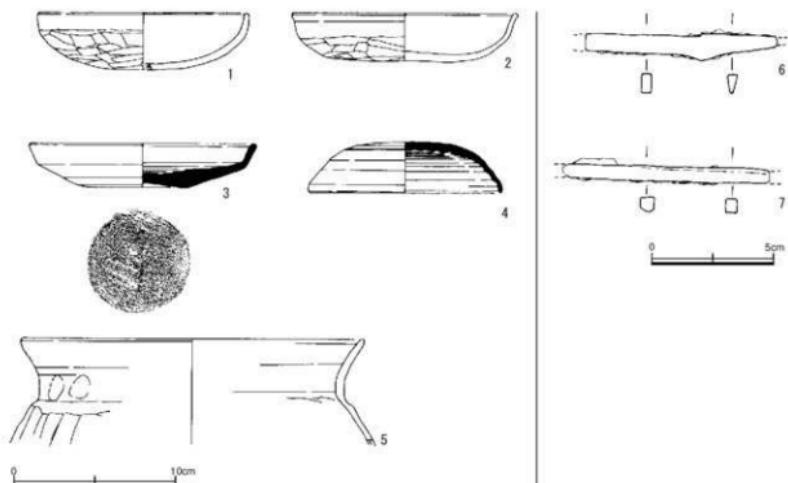
第9図 1号住居跡カマド実測図



第10図 2号住居跡実測図



第11図 2号居住跡カマド実測図



第12図 2号居住跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	(12.7)	3.4	-	暗褐色	良好	石英、雲母、角閃石	40%	覆土
2	杯	13.5	3.0	-	暗褐色	良好	石英、角閃石、チャート、微砂粒	80%	図示
3	須恵盤	13.8	2.7	6.1	灰白色	普通	石英、チャート、砂粒	90%	図示、底部回転抜け目り、群馬産
4	須恵蓋	11.7	3.1	-	明灰色	普通	石英、チャート、長石、微砂粒、繊維	90%	図示、坪日蓋、末野
5	甕	(20.8)	(3.5)	-	暗褐色	普通	石英、微砂粒	図示35%	覆土
6	刀子	長さ7.8cm	幅1.1cm	厚さ0.4cm	重さ6.5g	-	-	90%	図示
7	棒状鉄製品	長さ8.5cm	幅0.6cm	厚さ0.6cm	重さ8.2g	-	-	-	破片 図示、鐵器の茎部か?

【A区第3号住居跡】

第3号住居跡は、調査区A区西側に位置し、第2、4号住居跡を切って構築されており本住居の方が新しいものと確認された。また西南隅は中、近世と思われる第6号土坑によって切られていた。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸4.9m、短軸3.7m、確認面からの深さ25cmを測る。主軸方位はN-101°-Eを示す。床面は若干凹凸があるがよくしまっていた。壁溝は深さ約10cmでほぼ全周する。

カマドは東壁側に設置されていた。袖は白色粘土の造り付けで、左側の袖には土師器の甕が補強材として使われていた。規模は、焚き口の幅50cm、煙道部までの長さ120cmで、焚き口から煙道部へ緩やかに立ち上がる。火床面には倒立状態の土師器甕が残されていた。火床面の下は掘り方で船底状を呈する。

ピットは大小13基検出した。P 1は長軸80cm、短軸70cm、深さ20cmを測る。P 4、5は直径18cm~39cm、深さ15cm~20cm、11、13は深さ5cm~10cmと浅く、柱穴としては考えにくい。他のピットは住居に伴う可能性は低い。カマドの右側には、灰溜め状土坑を検出した。焼土塊、及び炭化物、灰が多量に詰まっていた。

出土遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・壺・蓋、鉄製品、砥石等が出土した。土師器杯1~8はいず

れも浅みの杯で、3~7は内面放射状暗文、8は放射状とらせん暗文が施文される。9~14は須恵器杯で口径11.0cm~13.2cm、いずれも南北比産である。底部は全面回転ヘラケズリ調整である。15、16は須恵器蓋で15は針状物は確認できないが、南北比産の可能性がある。16は末野産である。17、18は壺で底部周辺回転ヘラケズリである。19~21は土師器甕で、20は肩が張る武藏型甕で、21は胴部が張らない長胴甕である。22~23は鉄製品で、23は刃部の大半を欠くが大形の刀子と思われる。24は砥石である。

住居の時期は、住居の切り合い、出土遺物から8世紀後半と考えられる。

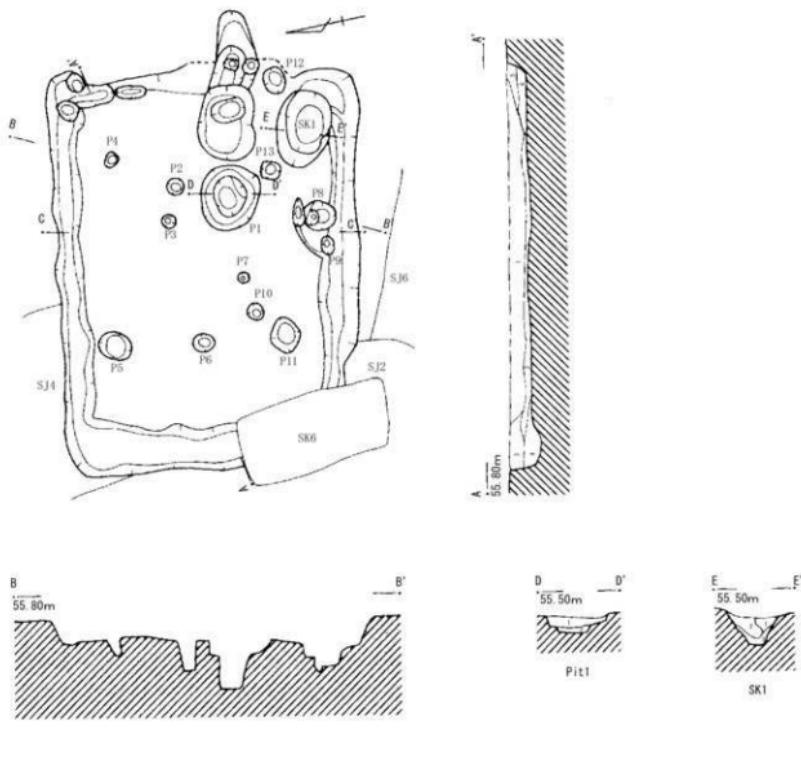
【A区第4号住居跡】

第4号住居跡は、調査区A区の西側に位置し、第2号、3号住居に遺構の大半を切られている。また、第1号掘立柱建物跡のP 1に切られている。平面形態は、長方形と思われ、規模は遺存している北壁側で4.0m、確認面からの深さ20cmを測る。主軸方位はN-120°-Eを示す。

床面はほぼ平坦でしまっていた。カマド、ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はほとんどなく、少量の土師器片が出土したが、図示できるものはなかった。

住居の時期は、遺構の切り合い関係から7世紀中葉~後半頃と考えたい。



第13図 3号住居跡実測図

3号住居用土 削説明

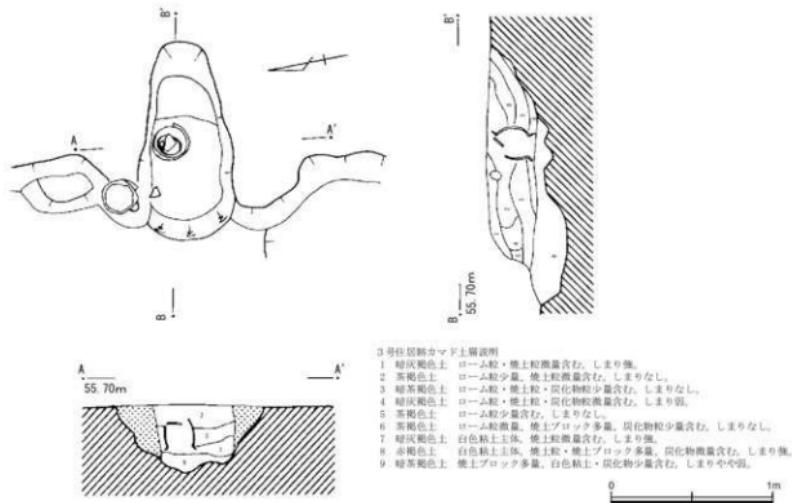
- 1 布暗褐色土 ローム粒多量。ローム小ブロック少量、炭化物、焼土粒微量含む。
- 2 暗褐色褐色土 ローム粒少量。炭化物、焼土粒微量含む。
- 3 暗褐色褐色土 ローム粒少量。ローム小ブロック、炭化物、焼土粒微量含む。
- 4 暗褐色褐色土 ローム粒多量。ローム小ブロック、炭化物、焼土粒微量含む。
- 5 茶褐色土 ローム粒、灰色粘土粒多量、炭化物、焼土粒微量含む。
- 6 暗褐色褐色土 ローム粒多量、灰色粘土粒少量、炭化物、焼土粒微量含む。
- 7 暗褐色褐色土 ローム粒、灰色粘土粒少量、炭化物、焼土粒微量含む。
- 8 暗褐色褐色土 ローム粒多量、ローム小ブロック微量含む。

3号住居跡Pit上層説明

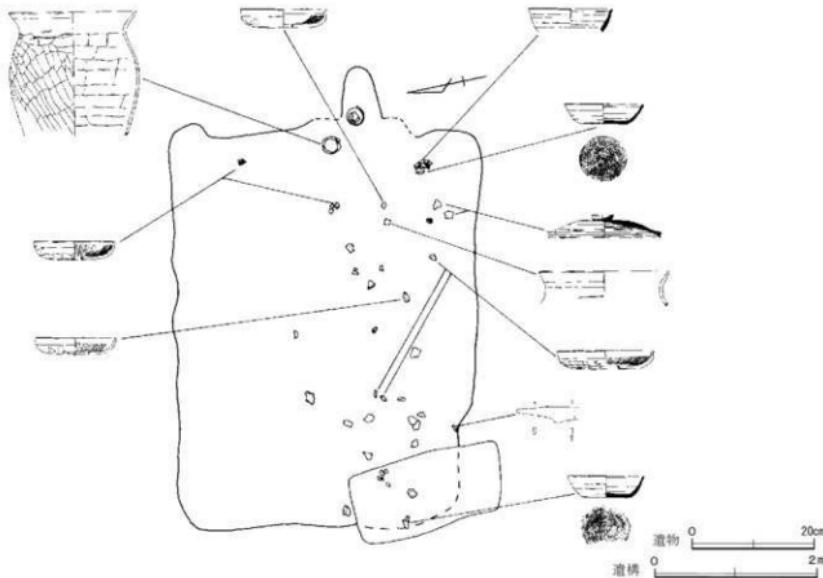
- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量、焼土粒少數含む。
しまり弱。
- 2 暗茶褐色土 艶光粘土多量、ローム粒・焼土粒・
炭化物少數含む。しまり弱。

3号住居跡1号土坑上層説明

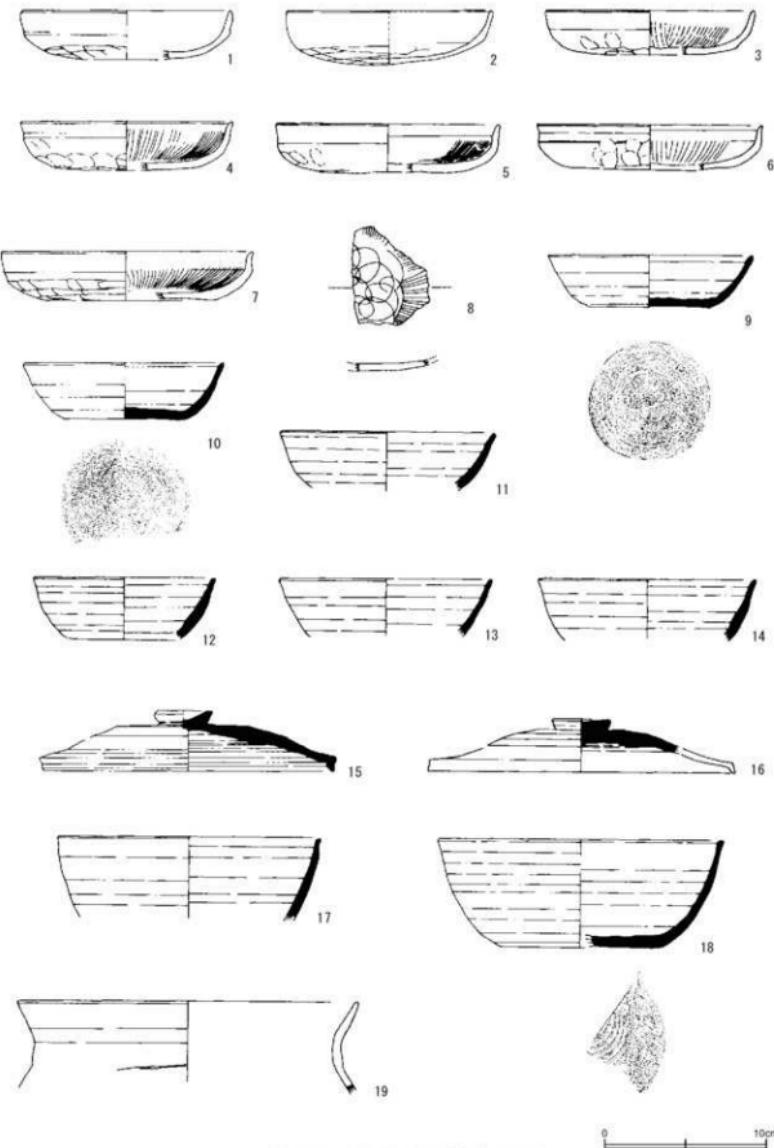
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・
焼土粒少數含む。しまり不良。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロック・
焼土粒・炭化物少數含む。
しまり不良。
- 3 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量含む。
しまり不良。



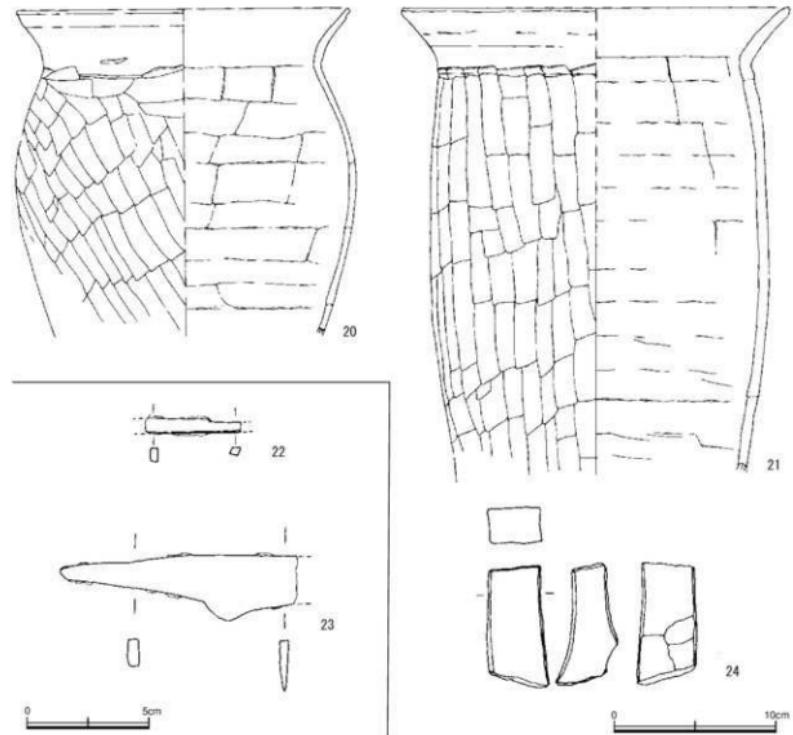
第14図 3号住居跡カマド実測図



第15図 3号住居跡出土遺物出土状況図



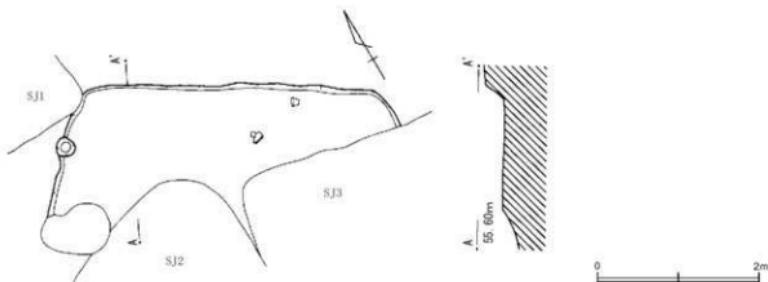
第16図 3号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図 3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	施成	胎土	残存率	備考
1	环	(12.7)	(3.0)	-	暗褐色	良好	石英、雲母、角閃石	図示40%	覆土
2	环	12.5	3.4	-	暗褐色	普通	雲母、角閃石、褐色粒	50%	図示。内外面油脂状黒斑
3	环	(12.7)	7.2	-	暗褐色	良好	石英、雲母、角閃石、チャート	図示30%	図示。内面放射状暗文
4	环	(12.8)	(3.0)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、雲母、赤色粒	図示30%	図示。内面放射状暗文
5	环	(13.6)	(3.0)	-	暗褐色	良好	石英、長石、雲母、チャート	図示25%	図示。内面放射状暗文+らせん暗文
6	环	(13.8)	(2.8)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示25%	覆土。内面放射状暗文
7	环	(15.3)	(3.0)	-	暗褐色	普通	石英、雲母、チャート	図示45%	図示。内面放射状暗文
8	环	-	-	-	赤褐色	良好	雲母、長石、酸化鉄粒	破片	覆土。内面放射状暗文+らせん暗文
9	須恵環	12.4	3.2	7.5	青灰~灰褐色	良好	石英、長石、海綿骨針	90%	図示。底部全周回転鑑けずり、南北企
10	須恵環	(12.1)	3.4	7.4	青灰~灰褐色	良好	石英、長石、海綿骨針	40%	図示。底部全周回転鑑けずり、南北企
11	須恵環	(13.0)	(3.6)	-	暗灰色	普通	石英、海綿骨針	図示20%	覆土。南北企
12	須恵環	(11.0)	(3.8)	(6.4)	淡灰色	良好	石英、海綿骨針	図示10%	覆土。南北企
13	須恵環	(13.0)	(3.6)	-	淡灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示10%	力下下。南北企
14	須恵環	(13.2)	(3.8)	-	淡灰色	普通	石英、海綿骨針	図示10%	図示。南北企
15	須恵蓋	(18.0)	3.7	-	明灰色	良好	石英、長石、繊維	40%	図示。南北企?
16	須恵蓋	-	-	-	淡灰色	やや悪	石英、長石、片岩、黑色粒、微砂粒	40%	覆土。末野
17	須恵壇	(16.0)	(5.0)	-	灰褐色	良好	石英、長石、黒色粒	図示10%	覆土。末野
18	須恵壇	(17.3)	6.6	(9.5)	明灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	図示20%	覆土。底部周回転鑑けずり、南北企
19	甕	(20.8)	(5.6)	-	暗褐色	普通	石英、長石、雲母、微砂粒	図示20%	図示。20%
20	甕	20.3	(20.2)	-	暗褐色	普通	石英、雲母、角閃石、長石、微砂粒	図示70%	カマド
21	甕	23.0	(28.5)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、繊維、酸化鉄粒	図示80%	カマド
22	不明	長さ3.8cm 幅0.6cm	厚さ0.3cm	重さ2.7g	-	-	破片	覆土。鉄錆か?	
23	刀子	長さ9.5cm 幅2.7cm	厚さ0.5cm	重さ19.9g	-	-	40%	図示。刃部切欠損、大型	
24	砥石	長さ7.5cm 幅3.5cm	厚さ2.1cm	重さ117.1g	石材凝灰岩	-	-	ビット覆土	



第18図 4号住居跡実測図

【A区第5号住居跡】

第5号住居跡は、調査区A区中央の南側に位置する。

重複する第6号住居跡は、第5号住居跡によって切られている。第6号住居跡の埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土を基調としており、第5号住居跡構築時に埋め戻された可能性がある。

平面形態は、隅丸長方形で、規模は長軸4.5m、短軸3.3m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-105°-Eを示す。

床面はほぼ平坦でよくしまっていた。また床面中央やや西寄りで炭化物が多量に検出された。壁溝は、深さ約10cmで北東コーナーと南東コーナーで一部途切れるが、ほぼ全周する。

カマドは西壁中央やや南寄りに設置されていた。袖は白色粘土と砂質土の造り付けである。規模は、焚き口の幅50cm、燃焼部の幅55cm、長さ120cm、煙道部の長さ30cmを測る。火床面は焚き口から煙道部へ緩やかに立ち上がる。カマド焚き口付近から完形の暗文土師器と須恵器壺が出土している。また、カマド右脇には灰溜め土坑がある。

ピットは住居の中央に1基検出した。平面形態は不整梢円形で、規模は長軸92cm、短軸63cm、深さ9cmを測る。位置的に第6号住居跡のカマド掘り方に手を加えたものと考えられる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・高台塊・擂鉢・甕、石製紡錘車の他、多量の金属製品（刀子、鉄斧、鎌、足金物、銅鈴）が出土した。土師器壺1～6はいずれも浅身のもので、5、6は内面に放射状暗文、1はらせん暗文と放射状暗文が施文される。在地産。須恵器壺7～13は、口径が11.6～13.5cm、器高が3.5cm前後でやや浅身である。7、12が底部周辺回転籠ケズリ、8、13は全面回転籠ケズリ、9手持ち籠ケズリ、10、11が回転糸切り未調整である。7～11が末野、12、13が南比企産である。14、15は須恵器蓋で、14が南比企産である。16

は高台塊で、貼り付け高台である。17は須恵器擂鉢で体部を回転カキ目で調整される。南比企産の可能性がある。18は須恵器甕、19～21は土師器甕である。22は蛇紋岩製の紡錘車で、被熱している可能性がある。23は小形の銅製の丸鞘である。表金具で鈎足が3個付く。24は鉄製の双脚足金物で、断面は台形状、中央に長方形の孔がある。25は鉄製袋状鉄斧で、柄の一部が残存する。26は青銅製の鉈で、直径2.3cm、高さ2.5cm、重さ3.3g、腹帶を有する小形の鉈である。製作技法は鍛造で、内部に入る丸は鉄製である。27は鉄鎌で基部を欠損する。28～30は鉄製の刀子で、28は茎部先端を欠損する。29は刃部が使い減りにより短くなっている。30は全長23.2cmの大形の刀子で、略究存する。

住居の時期は出土遺物及び第6号住居跡との重複関係から8世紀後半と考えられる。

【A区第6号住居跡】

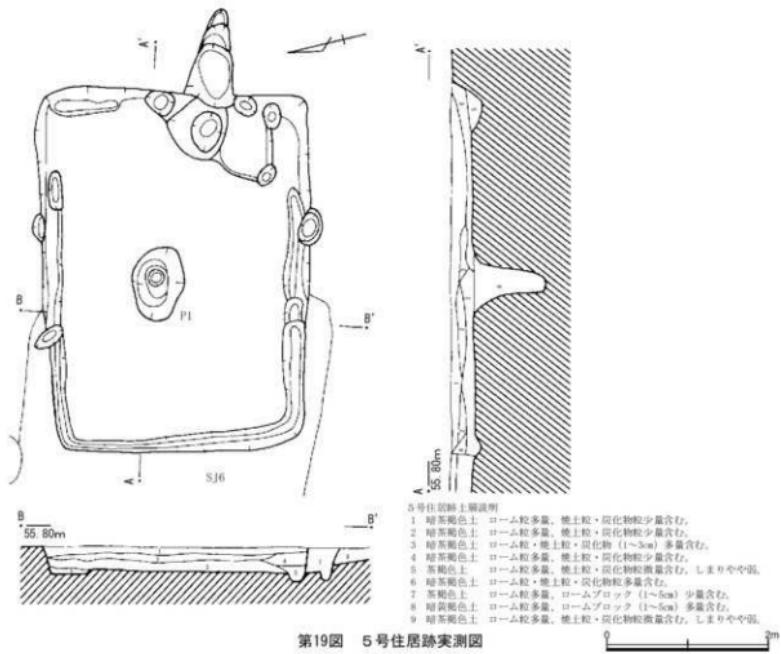
第6号住居跡は、調査区A区中央の南側に位置し、第5号住居跡に切られていた。第6号住居跡の埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土を基調とし、一括埋め戻しの可能性がある。

平面形態は長方形で、規模は長軸4.7m、短軸3.7m、確認面からの深さ30cmを測る。主軸方位はN-112°-Eを示す。

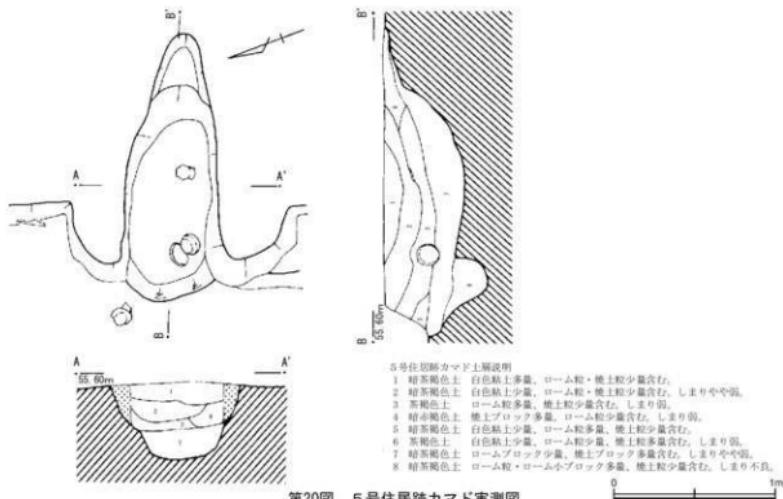
床面は平坦でよく締まっていた。壁溝は、第5号住居跡によって填された東壁を除き、全周する。カマドは検出されなかった。おそらく第5号住居跡構築時に破壊されたものと思われる。

ピットは住居中央のやや西寄りに1基検出された。平面形は円形で、直径約30cm、深さ36cmを測る。

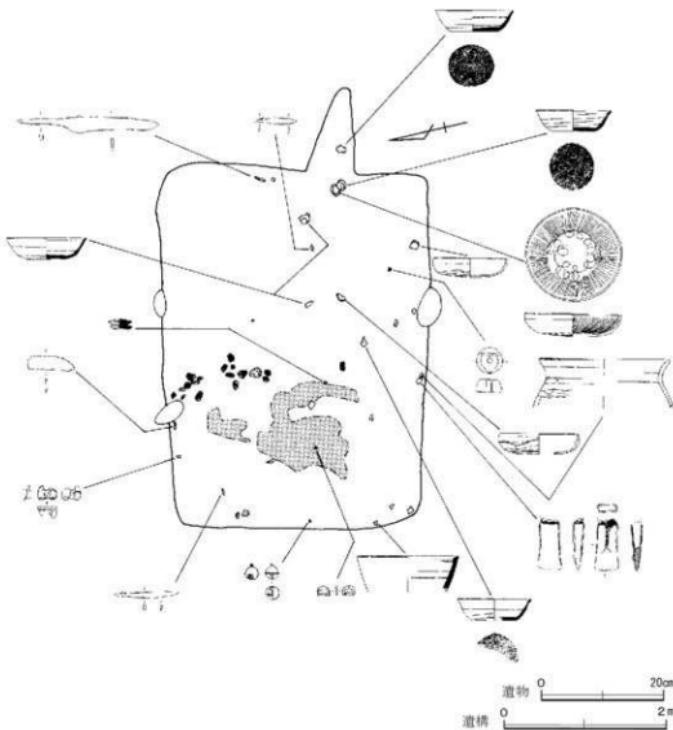
出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・高台塊・高盤・短頭蓋・鉢、土錐、刀子の口金が出土した。1～5は土師器壺で、1は北武藏型壺で、2～5は平底の壺である。2内外面に油脂状の黒色物が多量に付着していた。3、4の内面には放射状暗文が施



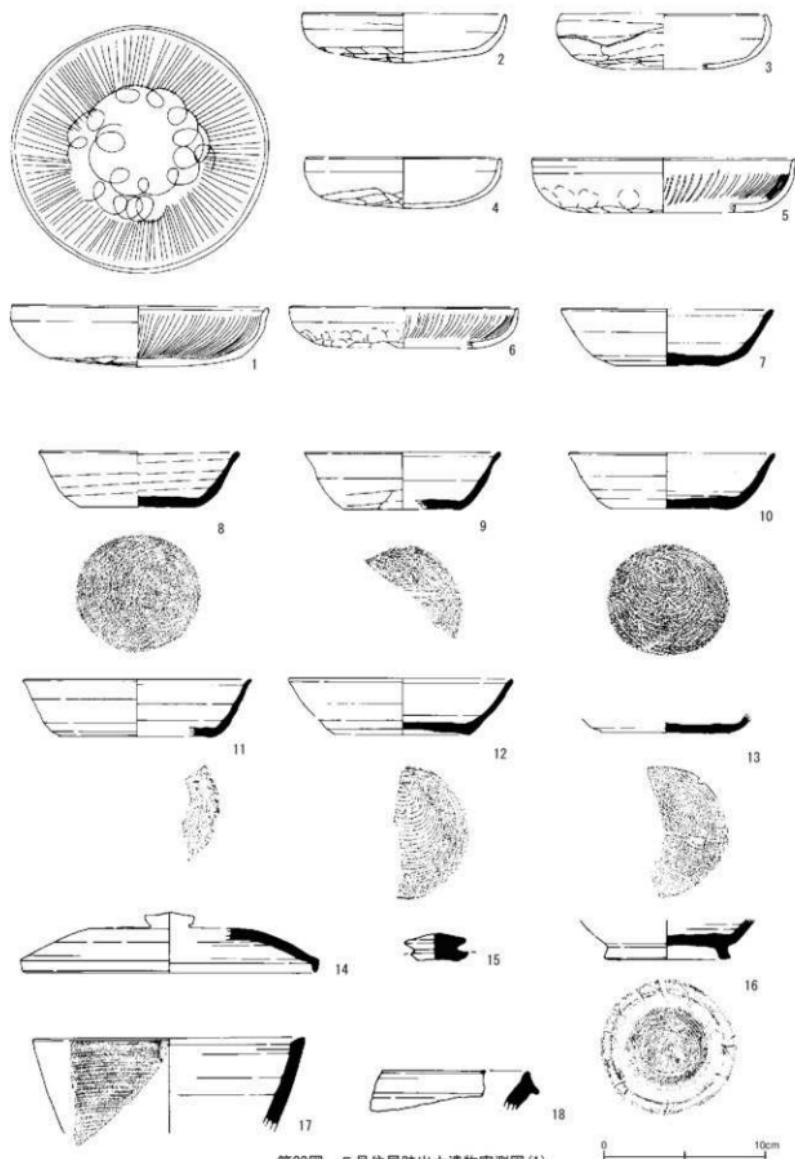
第19図 5号住居跡実測図



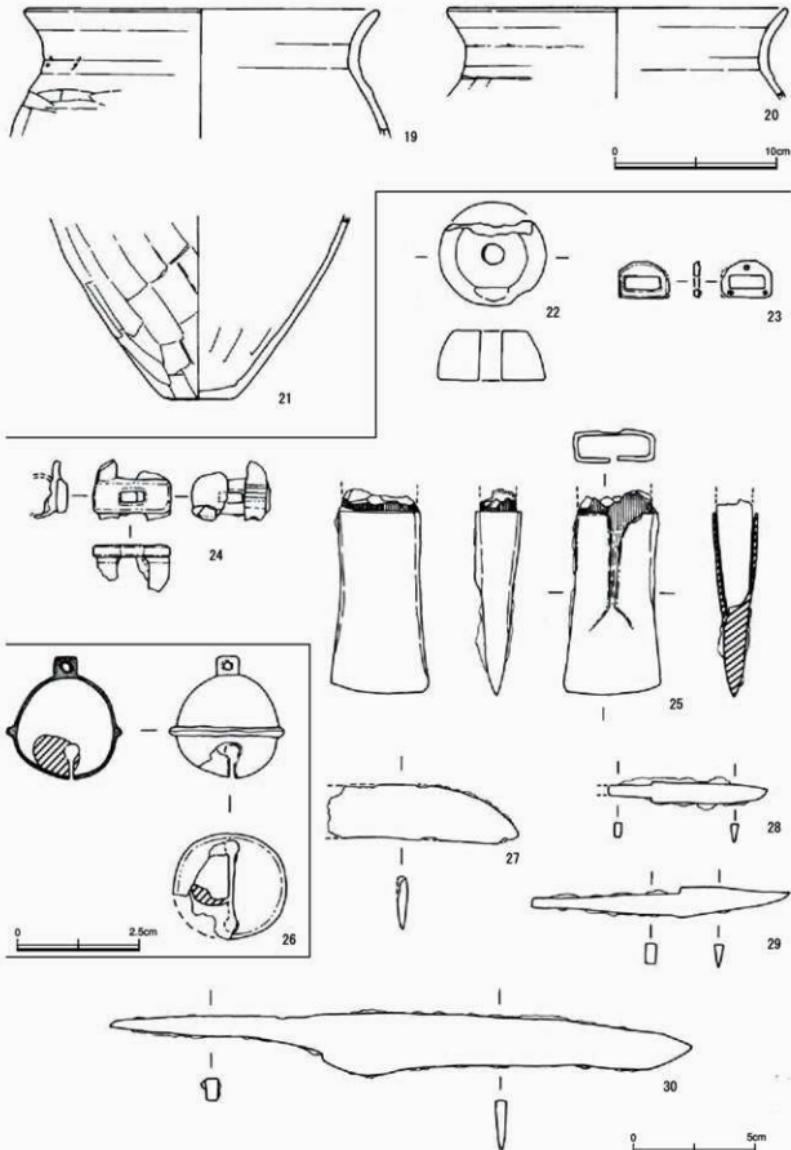
第20図 5号住居跡カマド実測図



第21図 5号住居跡遺物出土状況図



第22図 5号住居跡出土遺物実測図(1)



第23図 5号住居跡出土遺物実測図(2)

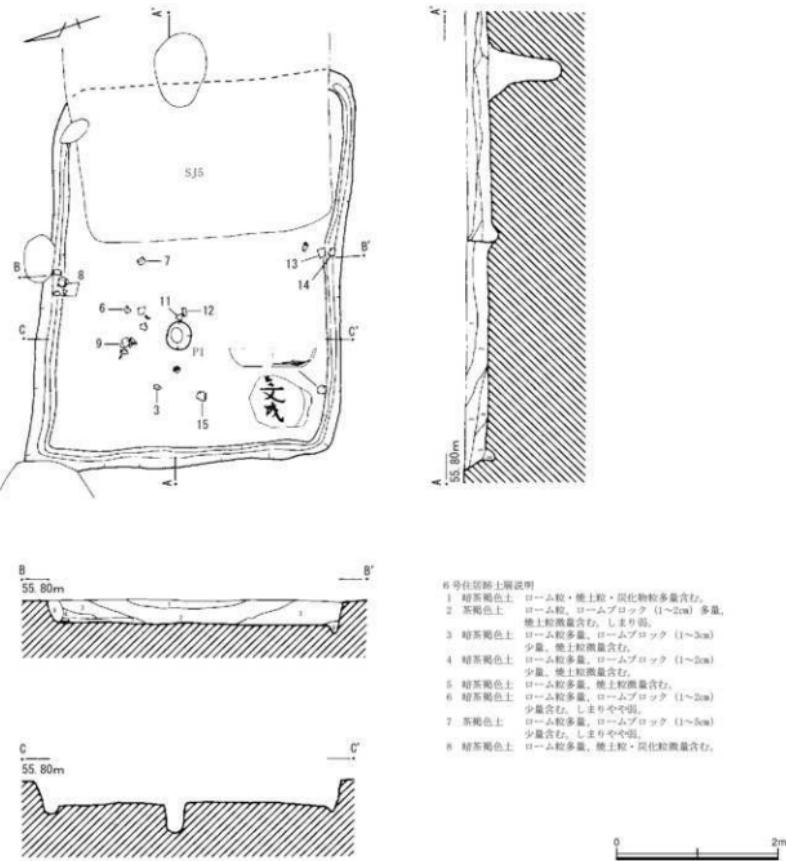
第5号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	杯	15.3	3.7	-	橙褐色	普通	石英、雲母、チャート、 磁鐵、酸化鉄粒	100%	カマド、内面放射状暗文 +らせん暗文、滑落あり、 在地産
2	杯	12.3	3.0	-	灰褐色	やや悪	石英、雲母、角閃石	60%	床直 + カマド
3	杯	(12.4)	3.3	-	にぶい褐色	普通	石英、雲母、角閃石	図示30%	図示
4	杯	11.8	3.1	-	にぶい褐色	普通	石英、雲母、角閃石	100%	図示
5	杯	(15.7)	(3.3)	-	橙褐色	良好	石英、雲母、長石、角閃石	図示30%	覆土、内面放射状暗文
6	杯	(13.7)	(2.5)	-	暗褐色	良好	石英、雲母	図示30%	覆土、内面放射状暗文
7	須恵杯	12.6	3.5	6.2	橙褐色	普通	石英、長石、雲母、チャート + 赤色粒	90%	カマド、酸化鈦、底部周 辺回転箇けずり、未野
8	須恵杯	11.9	3.5	7.0	明灰色	普通	石英、長石、片岩、細繩	90%	カマド、底部全面回転箇 けずり未野
9	須恵杯	(11.6)	3.5	7.0	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示30%	図示、底部手持ち箇けず り、未野
10	須恵杯	12.4	3.4	7.0	灰褐色	やや悪	石英、長石、チャート、 片岩、細繩	60%	カマド、底部周回転糸切り 未調査未野、滑落あり
11	須恵杯	(13.5)	3.5	(9.0)	暗灰色	良好	石英、長石、酸化鉄粒	図示20%	覆土、底部回転糸切り未 調査、未野
12	須恵杯	(13.3)	3.4	8.0	灰色	良好	石英、長石、海綿骨針	30%	覆土、底部回転箇けずり + 南比企
13	須恵杯	-	(1.2)	7.8	明灰色	普通	海綿骨針	図示20%	覆土、底部全面回転箇け ずり、南比企
14	須恵蓋	(17.7)	(2.7)	-	明灰色	良好	チャート、海綿骨針	図示10%	覆土、南比企
15	須恵蓋	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	破片	図示、未野
16	須恵高台壺	-	(2.5)	7.5	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示80%	覆土下層、未野
17	須恵鉢	(16.2)	(5.8)	-	淡灰色	普通	石英、長石、チャート	図示15%	図示、南比企?
18	須恵甕	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒、片 岩	破片	覆土、未野
19	甕	(20.8)	(8.0)	-	赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微 砂粒	図示20%	図示
20	甕	(20.2)	(5.6)	-	にぶい褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示20%	覆土
21	甕	-	(11.3)	4.2	赤褐色	普通	石英、チャート、雲母、 砂粒	図示70%	カマド
22	石製鋸鋸車	長径 4.3cm	短径3.0cm	乳径 0.9cm	厚さ 2.0cm	重さ 44.9g	石材・蛇紋岩	70%	図示
23	丸削	長さ 2.0cm	幅1.5cm	厚さ 0.2cm	重さ 1.0g	材質・銅製	透かし孔 1.5×0.6cm	95%	図示、表金具、額足 3個
24	双脚足金物	長さ 3.1cm	幅1.4cm	厚さ 0.5cm	重さ 9.6g	材質・鉄製	透かし孔 1.1×0.6cm	80%	図示、縫付着
25	袋状鉄斧	長さ 7.0cm	幅3.9cm	厚さ 1.8cm	重さ 106.8g	-	-	99%	図示、柄の木質残存
26	鋼鉗	長径 2.3cm	短径2.2cm	厚さ 0.07cm	高さ 2.5cm	重さ 3.3g	-	80%	図示、内部の丸は鉄製
27	鉄鍊	長さ 7.6cm	幅2.2cm	厚さ 0.4cm	重さ 14.0g	-	-	60%	図示、基部欠損
28	刀子	長さ 0.4cm	幅0.8cm	厚さ 0.3cm	重さ 3.8g	-	-	90%	図示、茎部欠損
29	刀子	長さ 10.3cm	幅1.3cm	厚さ 0.4cm	重さ 8.8g	-	-	99%	図示、刃部に木質付着
30	刀子	長さ 23.2cm	幅2.6cm	厚さ 0.5cm	重さ 43.5g	-	-	95%	カマド、錆び腐、剥離、 大型

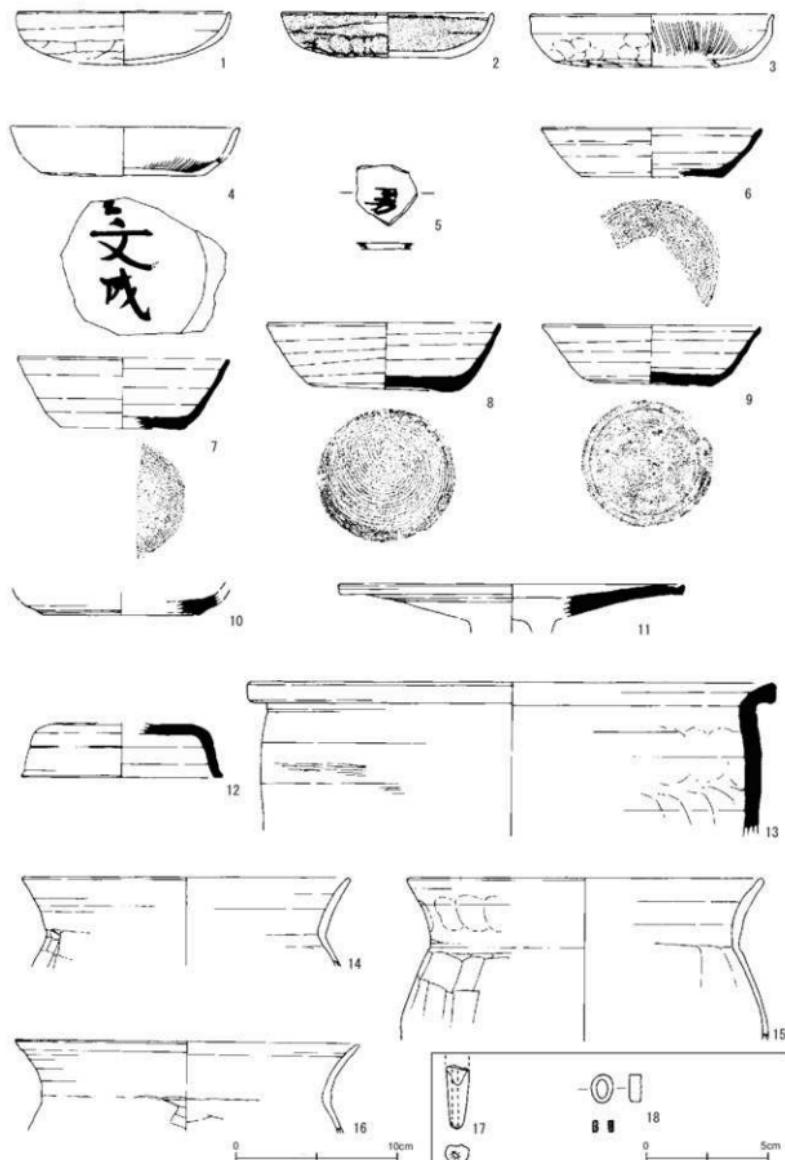
文されている。4の底面には「口文成」と墨書が記されていた。また、5の杯底面には「男」と読める墨書が記されていた。6～9は須恵器杯で、口径が12.6～14.0cm、6、9は底部全面回転箇けずりで浅身、未野産。7は底部周辺箇けずりで深身、南比企産。8は底部回転糸切り後、面取りを施す。未野産。10は須恵器高台付杯で、削り出し高台である。群馬（西毛）産と思われる。11は須恵器高盤で未野

産。12は須恵器蓋で、短頸壺の蓋である。未野産。13は須恵器鉢で、体部に平行叩きを施し、後に回転ナデを施す。14～16土師器甕で14の内面に油脂状黒色物が付着している。17は土錐、18は刀子の口金で、銅製である。

住居の時期は出土遺物及び第5号住居跡との重複関係から8世紀中葉～後半と考えられる。



第24図 6号住居跡実測図



第25図 6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	12.7	3.3	-	棕褐色	普通	雲母、角閃石、黒色粒、酸化物粒	50%	覆土
2	壺	12.7	2.7	-	暗褐色	普通	石英、雲母	70%	覆土、内外面に油脂状付着物
3	壺	(14.7)	3.2	-	棕褐色	良好	石英、雲母、酸化鉄粒、微砂粒	図示55%	図示、内面放射状暗文
4	壺	-	(1.2)	(10.0)	暗褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	40%	図示、内面放射状暗文、底部外側に墨書きあり【口文成】
5	壺	-	-	-	黒褐～暗褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	-	底部破片
6	須恵壺	(13.2)	3.0	8.4	明灰褐色	普通	石英、長石、黒色粒	図示30%	図示、底部全面回転掛けずり、木野
7	須恵壺	(12.6)	4.3	(7.3)	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒、海綿骨片	図示30%	図示、底部周辺回転掛けずり、雨北企
8	須恵壺	14.0	4.0	8.3	黄灰～明灰	普通	石英、長石、黒色粒	90%	図示、底部回転角切り後曲取り、火摩祖、木野
9	須恵壺	13.1	3.6	7.0	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	80%	図示、底部全面回転掛けずり、火摩祖、木野
10	須恵高台付壺	-	(1.4)	(9.2)	乳白色	普通	石英、長石	図示10%	薄土、削りだし高台、群馬(西毛産)
11	須恵高盤	(20.8)	(2.0)	-	明灰褐色	普通	石英、長石、片岩	図示15%	図示、木野
12	須恵短頭盞	(12.0)	(3.3)	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示40%	図示、木野
13	須恵鉢	(31.5)	(9.4)	-	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示15%	図示、体部全面叩き後回転ナメ木野
14	甕	(19.6)	(5.5)	-	棕褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示13%	図示、内面に油脂状黒斑
15	甕	(21.4)	(15.0)	-	橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示15%	図示
16	甕	(20.5)	(5.5)	-	灰褐色	普通	石英、雲母、角閃石、酸化鉄粒	図示10%	覆土
17	土鍤	長さ2.8cm	幅1.0cm	孔径0.3cm	重さ1.6g	普通	微砂粒	50%	覆土
18	口金	長径1.5cm	短径0.9cm	幅0.5cm	厚さ0.2cm	重さ1.0g	材質・銅製	-	破片

【A区第7号住居跡】

7号住居跡は、調査区A区のほぼ中央に位置する。住居の東側壁は第1号溝と第3号土坑に切られている。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸5.4m、短軸4.1m、確認面からの深さ42cmを測る。主軸方位はN-4°-Eを示す。床面はほぼ平坦でよく締まっていた。壁溝はほぼ全周する。また、住居南側に幅1.4m、長さ0.9mの張り出し部を持つ。この張り出し部の性格については、住居との重複ではないこと、隅にピットがあること。カマドに対峙する位置にあることから、出入り口としての施設の可能性がある。

カマドは北壁に2基設置されていた。袖は粘土と砂質土の造り付けである。袖の遺存状態から、第1号カマドから、第2号カマドに付け替えられたものと考えられる。遺存する第2号カマドの規模は、焚き口の幅48cm、煙道部までの長さ113cmを測る。火床面はほぼ平坦で、焚き口から、燃焼部、煙道部へ

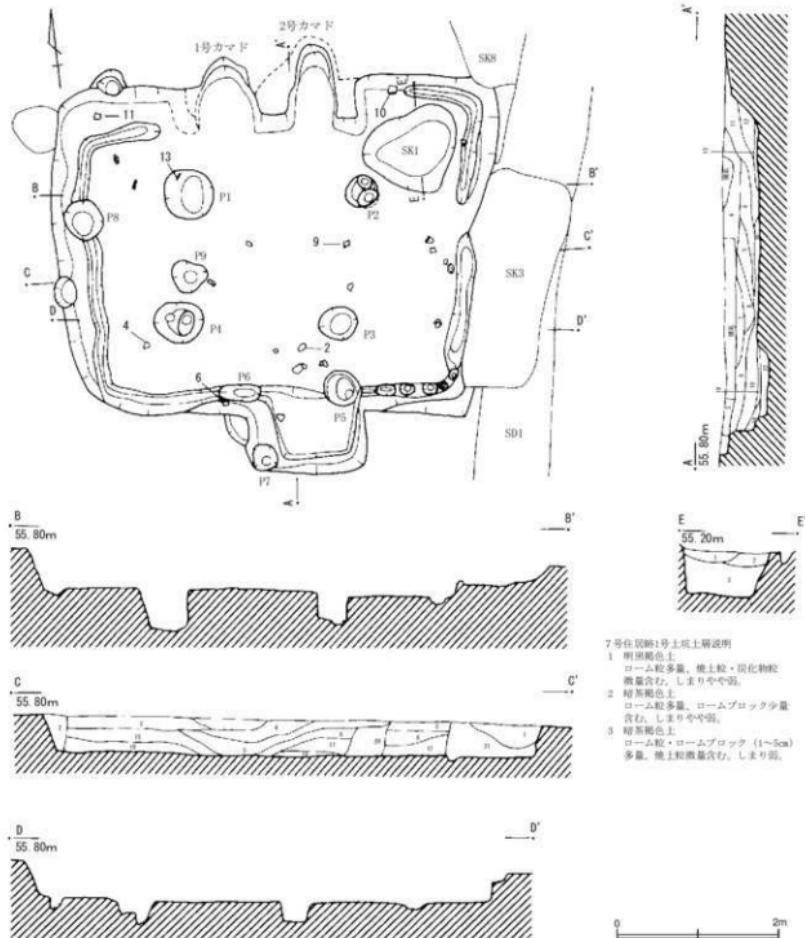
至り立ち上がる。

ピットは9基検出された。P1～P4は直径40～65cm、深さ23～50cmで主柱穴と思われる。P5～P7は張出し部に関わるピットと考えられる。

また、北東部コーナーには貯蔵穴と考えられる土坑を検出した。平面形は不整梢円形で、長軸120cm、短軸100cm、深さ55cmを測る。

出土遺物は、土師器壺・皿・鉢・甕、須恵器壺、土鍤、鐵鍤、金銅製の剥片等が出土した。土師器壺1、2は北武藏型壺で、1は小形、2は中形で、やや浅身である。3～6は土師器皿で、5は、やや深身である。8は土師器鉢で、器壁が厚めでぼってりしている。7は須恵器壺で、口径17.0cm、器高4.4cm、深身で大ぶりの壺である。末野産。9～11は土師器甕で、9は小形甕、10は胴張り甕、11は長胴甕である。12は土鍤、13は鐵鍤である。14は金銅製の剥片で、刀装具の一部と思われる。

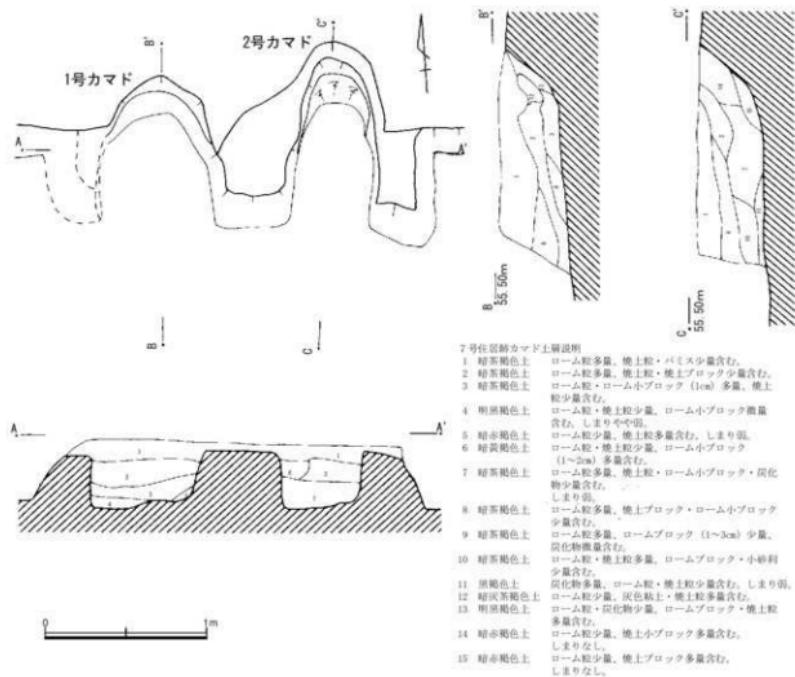
住居の時期は7世紀後半と考えられる。



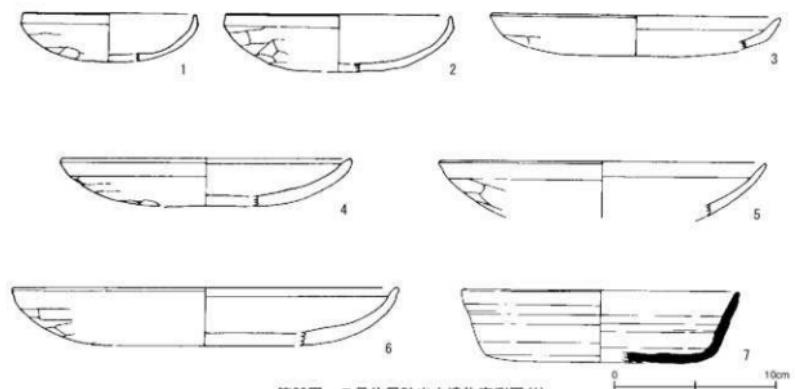
7号住居跡上層説明

- 1 床面色土 砂質でしまりなし。(30-1段上)
- 2 暗褐色土 ローム粒・他と微量含む。しまりなし。
- 3 苔褐色土 ローム粒多量含む。しまりなし。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック(5cm) 少量含む。しまりなし。
- 5 苔褐色土 ローム粒多量。他上粒・炭化物粒微量含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒微量。小窓(2cm) 少量含む。しまりなし。
- 7 剥離色土 ローム粒・ロームブロック(5cm) 少量含む。しまりなし。
- 8 暗褐色土 ローム粒微量含む。しまりなし。
- 9 苔褐色土 ローム粒・ロームブロック(2~5cm) 多量。地土粒微量含む。
- 10 苔褐色土 ローム粒多量。他土粒・炭化物粒微量含む。しまりなし。
- 11 明照褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。他土粒微量含む。しまりなし。
- 12 苔褐色土 ローム粒・他土粒微量。粘土ブロック少量含む。
- 13 黑褐色土 開拓物粒。他土粒多量含む。
- 14 苔褐色土 ローム粒少量。他土粒微量含む。しまりなし。
- 15 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック(3~5cm) 少量含む。しまりなし。
- 16 黑褐色土 ローム粒微量含む。しまりなし。
- 17 苔褐色土 ローム粒少量含む。しまりなし。
- 18 暗茶褐色土 ローム粒多量。他土粒微量含む。
- 19 黑褐色土 切削面。ローム粒少量含む。他土粒微量含む。
- 20 黑褐色土 ローム粒多量。他土粒微量含む。しまりなし。
- 21 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量含む。しまりなし。(30-3段上)
- 22 黑褐色土 ローム粒少量。ロームブロック多量。他土粒微量含む。

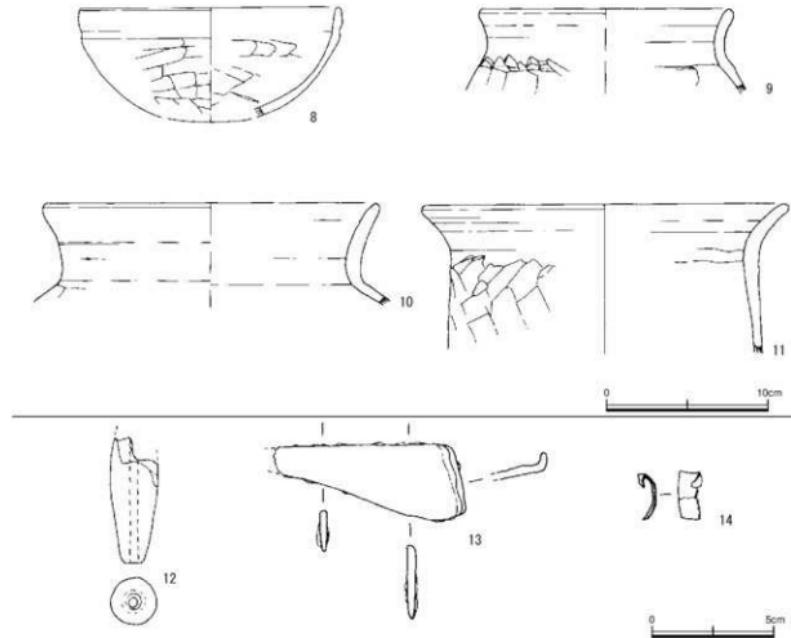
第26図 7号住居跡実測図



第27図 7号住居跡カマド実測図



第28図 7号住居跡出土遺物実測図(1)



第29図 7号住居跡出土遺物実測図(2)

第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	環	(10, 3)	(3, 0)	-	褐褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	覆土
2	環	(13, 6)	(3, 6)	-	淡橙褐色	普通	石英、角閃石、長石、雲母	25%	図示
3	環	(17, 6)	(2, 5)	-	褐褐色	普通	雲母、長石、醸化鉄粒	図示5%	覆土
4	環	(17, 2)	(3, 0)	-	褐褐色	普通	石英、角閃石、長石	図示10%	図示
5	環	(19, 8)	(3, 4)	-	灰橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示15%	覆土
6	環	(23, 2)	(3, 2)	-	橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、醸化鉄粒	図示10%	図示
7	須恵環	(17, 0)	4.4	(13, 6)	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示30%	覆土、底部全面回転築け
8	鋤	(15, 7)	(7, 0)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、バミス、砂粒	図示15%	カマド
9	甕	(15, 0)	(5, 2)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示20%	図示
10	甕	(20, 0)	(6, 4)	-	暗灰橙褐色	普通	石英、長石、角閃石、微砂粒	図示20%	図示
11	甕	(21, 8)	(9, 2)	-	灰橙褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示15%	図示
12	土鍤	長さ5.1cm 幅1.9cm	孔径0.4cm	重さ1.1g	普通	微砂粒、醸化鉄粒	53%	覆土	
13	鉄鍤	長さ7.7cm 幅3.1cm	厚さ3.5cm	重さ18.0g	-	-	93%	図示、刃部先端欠損	
14	不明	長さ2.0cm	幅1.0cm	厚さ0.4cm	重さ0.3g	-	剥片	北側確認曲、金剛製、刀	器具の一部か

【A区第8号住居跡】

第8号住居跡は、調査区A区の東側中央部に位置し、第9号住居跡と第4号土坑と重複する。重複関係は、9号住居跡の西壁側を切り、4号土坑によつて8号住居跡のカマドを除く東側大半が切られてしまつた。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸3.9m、短軸3.64m、確認面からの深さ34cmを測る。南壁側は拡張のためか約30cm程幅が広がる。主軸方位はN-94°-Eを示す。床面は若干の凹凸があるが、ほぼ平坦で、締まっている。壁溝は土坑に切られている場所を除き、北壁側と南壁から東壁に巡る。

カマドは東壁側に設置されていた。袖は白色粘土と褐色土の造り付けである。焚き口の幅は45cm、燃焼部の幅50cm、煙道部までの長さは102cmを測る。火床面は焚き口から煙道部へ緩やかに立ち上がり、排煙部に至り急角度で立ち上がる。

ピットは2基検出した。P1は直径40cm、深さは26cmである。P2は住居に伴わない。

土坑はカマドの手前に1基検出された。土坑上面が第4号土坑により切られており、遺存状態が良くない。直径90~126cm、深さ50cmで不整楕円形を呈する。8号住居跡の床下土坑と思われる。

出土遺物は、土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・高台壺・高台皿・長頸瓶が出土した。土師器壺1~3は底部平底で、軽い手持ち範ケズリ、体部は無調整。須恵器壺4~6は底部回転糸切り未調整で体部が大きくひらき、口唇部が外反する。4、5の切り離し径が小さい。末野産。7は須恵器壺蓋で、口縁端部が短い。末野産。9は高台皿で口縁部が大きく外反する。末野産。10は灰釉長頸瓶で、胎土は緻密で硬質。猿投産と思われる。土師器甕11、12は「コ」の字状口縁で、焼きは良好。

住居の時期は9世紀後半と考えられる。

【A区第9号住居跡】

第9号住居跡は調査区A区の東端に位置する。重複関係で第9号住居跡が最も古いことが確認されている。

規模は、住居の東側半分が調査区外であることや、検出した遺構の大半が第8号住居跡及び第4号土坑に切られているため全体の規模は不明である。残存する北西コーナーの深さは約40cmを測る。床面は平坦でよく締まっていた。また、床面の一部に長さ84cm、幅68cm、厚さ7cm、平面形態は楕円形の硬く焼土化した部分を検出した。この焼土址の性格は不明であるが、小鍛冶に関わる遺構か。ピットは3基検出した。規模はP1、2が直径22~30cm、深さ16~19cmである。カマド、壁溝は検出されなかった。

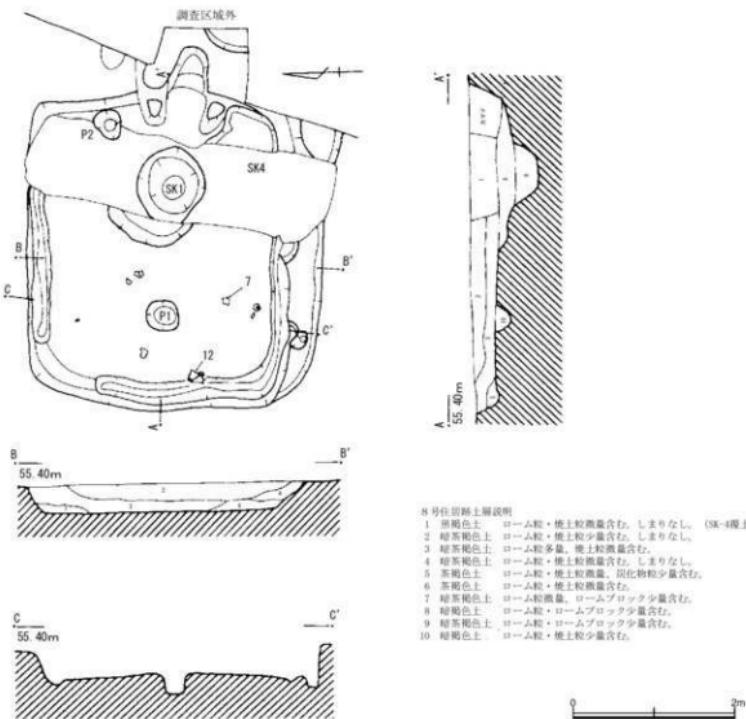
出土遺物は、土師器壺・皿、須恵器壺・蓋、鉄製品が出土した。土師器壺1~5は、1、3、4が北武蔵型壺である。2、5は半球形で、2は暗文のないタイプ、5は内面に放射状暗文を施すタイプである。8は土師器皿である。6、7は須恵器壺である。6は小形で口径12.5cm、7は中形で14.6cm、深身で底部はいずれも手持ち範ケズリである。末野産。9、10は壺蓋で、かえりをもつものである。10は大型の壺蓋である。11は細い角棒状の鉄製品で端部を欠く。和釘か？

住居の時期は、7世紀後半と考えられる。

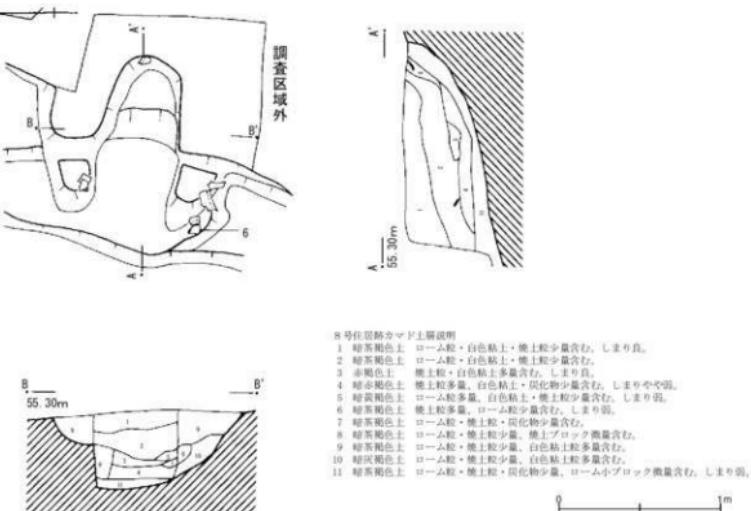
【A区第10号住居跡】

第10号住居跡は、調査区A区の東南側コーナーに位置する。第11号住居跡と第12号住居跡と南壁側で僅かに重複する。

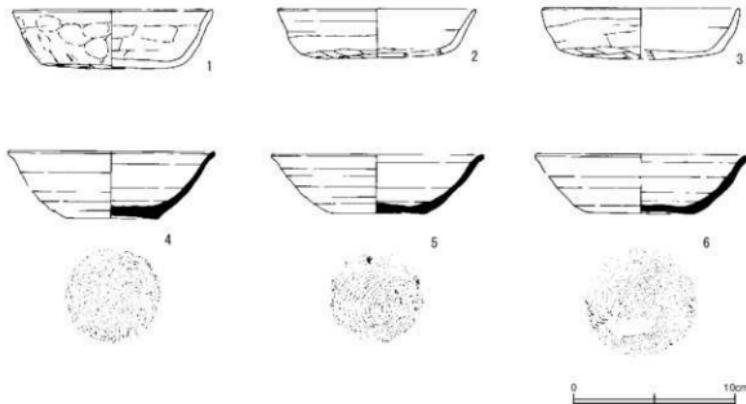
平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸4.1m、短軸3.3m、確認面からの深さ50cmを測る。主軸方位はN-32°-Eを示す。床面は平坦でよく締まっていた。壁溝は全周する。



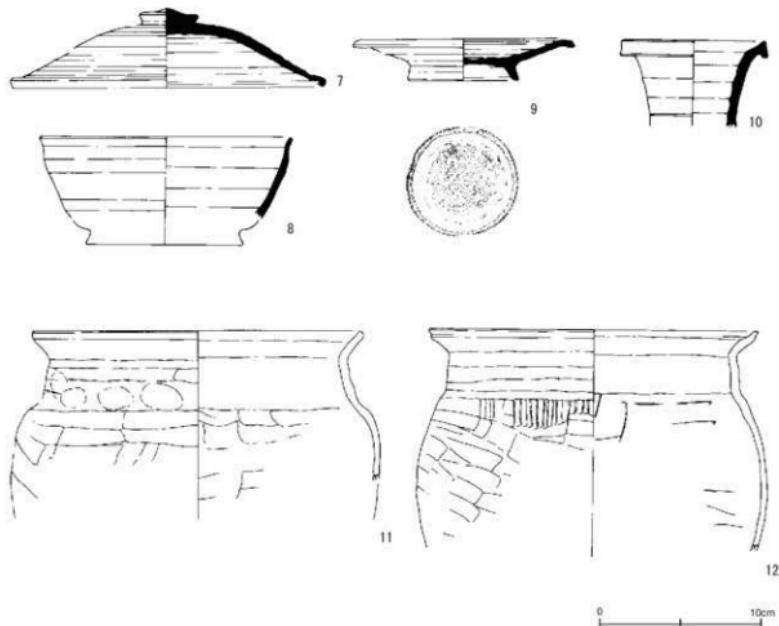
第30図 8号住居跡実測図



第31図 8号住居跡カマド実測図



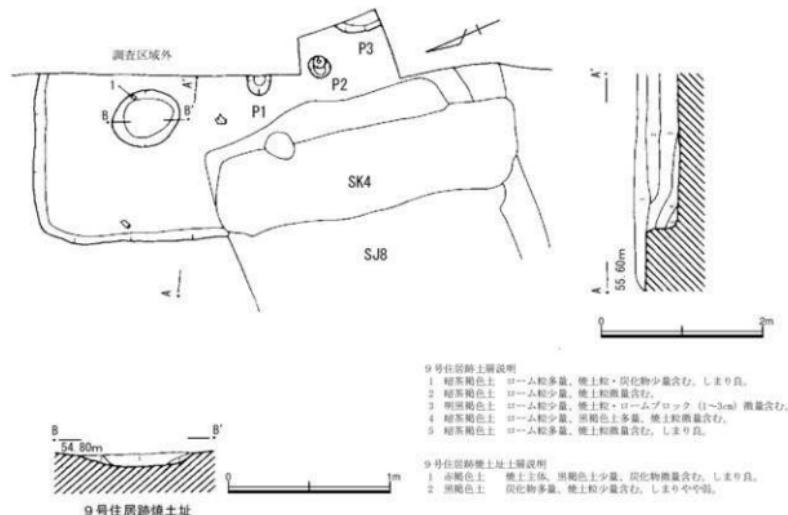
第32図 8号住居跡出土遺物実測図(1)



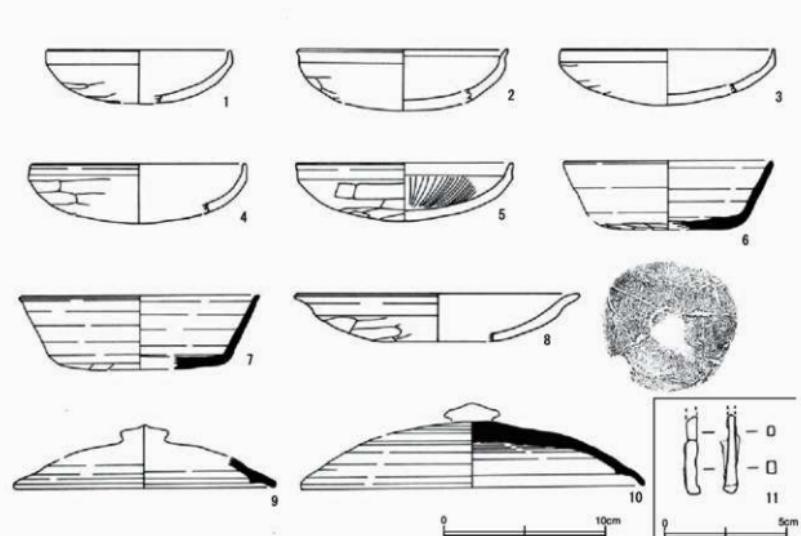
第33図 8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	11.8	3.6	3.0	橙褐色	普通	石英、雲母、チャート、角閃石	95%	力マド
2	环	11.8	3.2	9.0	橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石	55%	覆土
3	环	(11.8)	3.1	(9.8)	橙褐色	普通	石英、雲母、角閃石	40%	確認面
4	須恵環	(12.3)	4.1	5.5	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	60%	覆土、底部回転糸切り未調整、目土粘土熔着、未野
5	須恵環	12.7	3.6	5.5	暗茶褐色	やや悪	雲母、片岩、酸化鉄粒	70%	覆土、底部回転糸切り未調整目土粘土熔着、酸化焰、未野
6	須恵環	(12.8)	4.0	6.1	灰褐色	やや悪	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	60%	力マド、底部回転糸切り未調整未野
7	須恵蓋	(18.7)	4.8	-	灰色	良好	石英、長石、片岩、黒色粒	70%	図示、未野
8	須恵高台瓶	(15.1)	(5.0)	-	淡灰褐色	不良	石英、長石、片岩、酸化鉄粒	図示20%	確認面、磨滅あり、未野
9	須恵高台皿	(13.4)	2.3	6.7	にぶい灰色	普通	石英、片岩、細繊、黒色粒	70%	確認面、未野
10	灰釉長須瓶	(8.6)	(5.0)	-	淡灰茶色	良好	精良、均一	図示20%	確認面、猪投
11	甕	19.8	(11.5)	-	褐色	普通	石英、雲母、角閃石、微砂粒	図示70%	力マド
12	甕	(19.8)	(13.4)	-	暗茶褐色	普通	石英、雲母、角閃石、酸化鉄粒	図示30%	図示



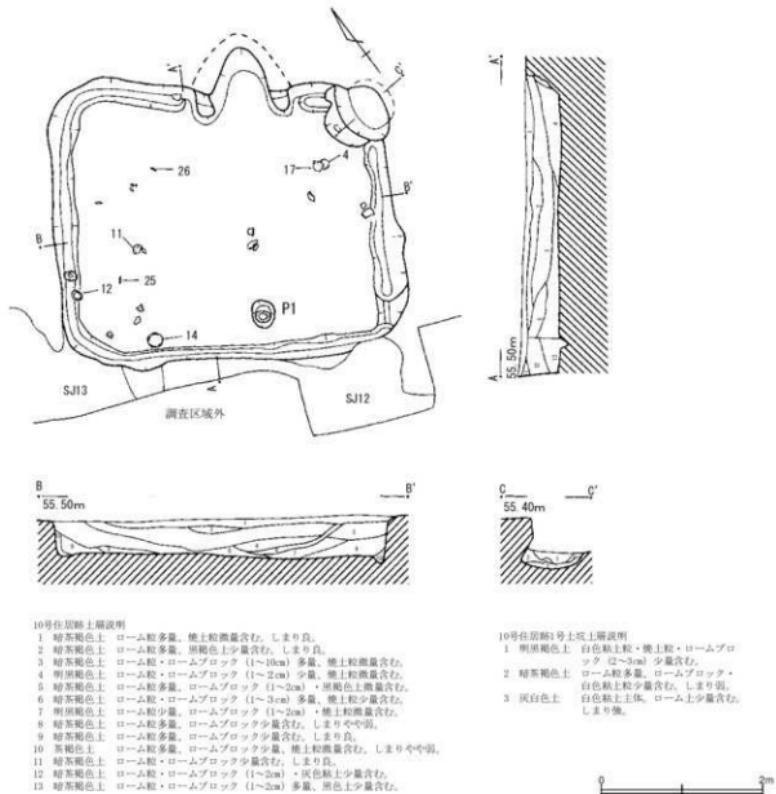
第34図 9号住居跡実測図



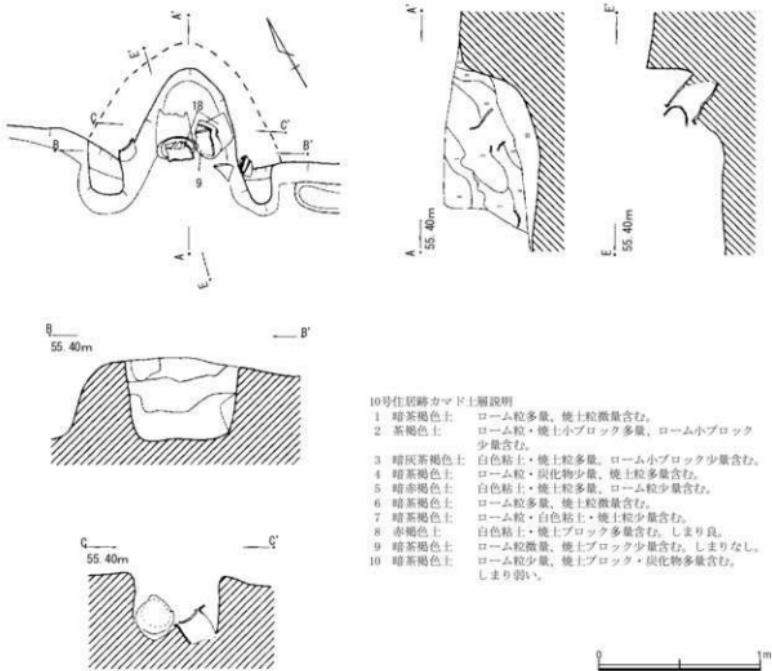
第35図 9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物觀察表

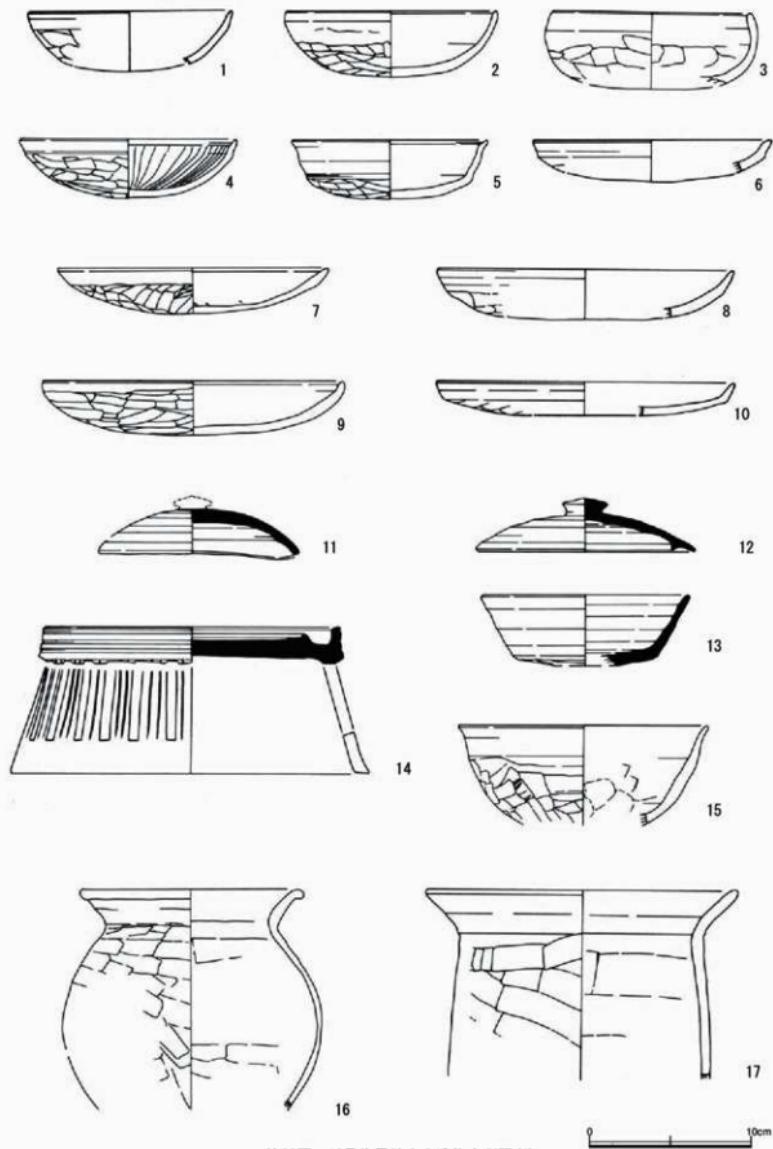
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(11, 0)	(3, 3)	-	淡褐色	普通	石英、雲母、長石、酸化鉄粒	図示5%	図示
2	壺	(12, 8)	(3, 8)	-	褐褐色	普通	長石、角閃石、酸化鉄粒	図示5%	確認面
3	壺	(13, 0)	(3, 5)	-	淡褐色	普通	石英、雲母、角閃石	図示5%	覆土
4	壺	(12, 8)	(3, 6)	-	淡褐色	普通	角閃石、雲母	図示10%	確認面
5	壺	(13, 0)	3.6	-	褐褐色	普通	石英、長石、角閃石、雲母、酸化鉄粒	20%	確認面、内面放射状暗文
6	須恵壺	(12, 5)	4.2	8.0	灰褐色	やや悪	石英、片岩、褐色粒、黑色粒	50%	覆土、底部手持ち鑿けずり、磨滅あり。木野
7	須恵壺	(14, 6)	(4, 5)	(10, 0)	淡灰色	普通	石英、片岩、チャート	20%	確認面、底部手持ち鑿けずり、木野
8	皿	(17, 4)	(3, 1)	-	淡褐色	普通	石英、長石、雲母、チャート	図示10%	確認面
9	須恵蓋	(15, 8)	(1, 8)	-	淡灰色	普通	石英、長石、片岩	図示5%	確認面、木野
10	須恵蓋	(21, 0)	(4, 0)	-	灰褐色	普通	石英、長石、チャート、片岩、黑色粒	50%	確認面、磨滅あり。木野
11	不明鉄製品	長さ3.2cm	幅0.6cm	厚さ0.6cm	重さ1.3g	-	-	-	破片 覆土、細い角棒状、針か?



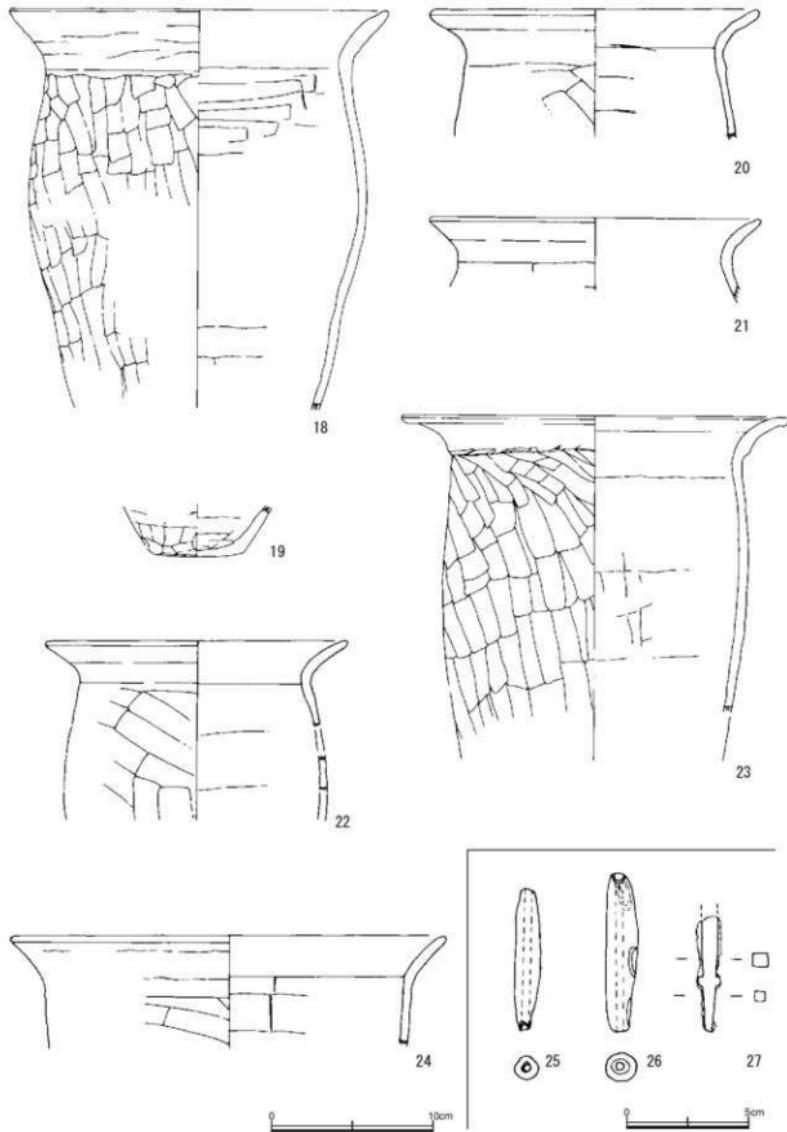
第36図 10号住居跡実測図



第37図 10号住居跡カマド実測図



第38図 10号住居跡出土遺物実測図(1)



第39図 10号住居跡出土遺物実測図(2)

第10号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺	(12.4)	(3.8)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒	10%	覆土
2	壺	(12.7)	4.0	-	暗褐色	良好	石英、角閃石、酸化鉄粒	40%	覆土
3	壺	(12.0)	(4.4)	-	暗褐色～黒褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示30%	覆土
4	壺	(13.0)	3.7	-	赤褐色	良好	角閃石、パミス、酸化鉄粒	100%	図示、内面放射状略文
5	壺	(11.8)	3.6	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	30%	覆土
6	皿	(14.6)	(2.5)	-	茶褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒	図示5%	覆土
7	皿	16.3	3.0	-	黃褐色	良好	石英、雲母、パミス	55%	覆土
8	皿	(18.0)	(3.0)	-	淡褐色	普通	石英、角閃石、砂粒、粗い	図示10%	覆土
9	皿	(18.1)	3.3	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	30%	カマド
10	皿	(18.2)	(2.0)	-	灰褐色	やや悪	石英、角閃石、パミス、砂粒、粗い	図示5%	覆土
11	須恵蓋	(12.0)	(2.7)	-	暗灰色	良好	石英、長石、片岩	70%	図示、鋸欠損剥離面研磨、重みあり、末野
12	須恵蓋	13.2	3.3	-	にぶい灰色	良好	石英、長石、片岩	99%	図示、木野
13	須恵壺	(12.5)	4.4	8.8	暗灰色	普通	長石、片岩、繊維	30%	覆土、底部荒切り後無調整、重みあり、末野
14	須恵円面鏡	外径17.8	内径13.8	残存高2.3	明灰色	普通	石英、長石、片岩	50%	図示、透かし孔23個で鏡側あり脚折損部磨耗、末野
15	鉢	(15.0)	(6.1)	-	灰褐色	普通	石英、雲母、長石	図示40%	覆土
16	小形甕	13.0	(13.5)	-	暗赤褐色	良好	石英、雲母、角閃石、パミス	図示80%	図示
17	甕	(18.8)	(11.5)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示25%	図示
18	甕	(22.7)	(24.5)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、雲母、パミス、微砂粒	図示80%	カマド
19	甕	-	(3.2)	5.4	灰褐色	普通	石英、雲母、角閃石、パミス	図示50%	覆土
20	甕	(19.7)	(7.8)	-	明褐色	普通	石英、微砂粒	図示10%	覆土
21	甕	(20.0)	(4.4)	-	淡茶褐色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	図示30%	カマド
22	甕	(18.1)	(10.1)	-	茶褐色	普通	石英、雲母、角閃石	図示20%	覆土
23	甕	(23.2)	(21.0)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、パミス、砂粒	図示80%	カマド
24	瓶?	(26.4)	(6.2)	-	淡褐色	普通	石英、パミス、微砂粒	図示20%	覆土
25	土錐	長さ5.8cm	幅1.0cm	孔径0.3cm	重さ3.2g	普通	精良	95%	図示
26	土錐	長さ6.5cm	幅1.3cm	孔径0.3cm	重さ8.6g	普通	精良	90%	図示
27	鉄錐	長さ4.7cm	幅0.9cm	厚さ0.5cm	重さ4.0g	-	-	-	破片 カマド、鉢籠被

カマドは北壁を掘り込んで設置されていた。掘り方に白色粘土を充填し、燃焼部及びカマド袖を造りつけている。規模は焚き口の幅70cm、煙道部までの長さ90cmを測る。遺存状態は良好で燃焼部から土師器甕が2個体出土した。火床面は約10度の傾斜で緩やかに立ち上がり煙道部に至る。

ピットは1基検出した。規模は直径30cm、深さ24cmで、カマドの反対側の南壁際に位置する。また、カマド右側の北東コーナーに土坑を検出した。規模は幅90cm、深さ20cmで、壁を20cm程抉り込んで掘られていた。土坑の中には白色粘土が残されており、カマドの補修に使われたものか。

出土遺物は、土師器壺・皿・鉢・甕・須恵器壺・蓋、円面鏡、土錐、鉄錐等が床面及び覆土から出土した。1～5は土師器壺で、1、2は丸底で器形的には暗文壺形態だが暗文は施文されない。3は厚手でぼってりした作りで、体部の丸みが強く、口縁部

が内屈する。4は北戦型暗文壺、5は有段口縁壺である。6～10は土師器皿で、6、10は体部に稜があるもの、7、8は稜の浅いもの。9は体部の稜がなく丸みのあるもの。須恵器蓋11、12はかえりのある小形の壺蓋である。11は鉢の剥離した部分を研磨して再利用している。13は須恵器壺で底部は範切り後無調整。14は円面鏡で住居の南側の床面より出土した。脚部を欠くが硯部は完存する。脚破損部は研磨修理している。透かし孔は長方形と思われ、孔と孔の間に範状工具による線刻を施す。硯部はよく磨り込まれている。裏面も利用したものと思われ磨耗している。須恵器はいずれも末野産である。15は土師器鉢である。16～23は土師器甕で、16は小形甕である。24は瓶か。25、26は小形の土錐である。27は鉄錐の破片で鉢籠被と思われる。

住居の時期は、7世紀後半と考えられる。

【A区第11号住居跡】

第11号住居跡は、調査区A区の東南側に位置し、第10号住居跡と第12号住居跡と僅かに重複する。規模は、住居の南側大半が調査区外であるため造構の詳細は不明であるが、検出した北側で東西約2.8m、深さ36cmを測る。床面は若干凹凸があり、縁まりにやや欠ける。壁溝は検出されなかった。カマドの前庭部右側に幅62cm、深さ42cmの土坑を検出した。覆土に炭化物を多量に含むことから、灰溜め土坑と考えられる。

カマドは北壁側を掘り込んで設置されている。掘り方に白色粘土を充填し燃焼部及び袖を造りつけている。カマドの規模は、焚き口の幅45cm、煙道部までの長さ90cmを測る。カマド内から土師器壺・甕・鉢等が出土している。また、燃焼部に台付甕が逆位で出土した。おそらくカマドの支脚として使われたものと思われる。

出土遺物は、カマドの左側から須恵器長頭瓶がほぼ完形の状態で出土し、また土師器壺がほぼ完形で5個体出土した。その他に土師器甕、須恵器壺・高台壇・水瓶・鉢・甕、石製鋸錘車、棒状鉄製品が出土している。1～5は土師器壺で底部が平底、体部に指頭痕が顕著に残る。いずれも内面に油脂状の黒色物が付着していた。5は内面に放射状暗文を施文する。6～10は須恵器壺で、底部は回転糸切り未調整である。6は南比企産、7～10は末野産である。11～13は高台壇で、11は口縁部が直線的で、13は口縁部の外反が強い。14は水瓶と思われる。内外面に濃緑色の自然釉が熔着している。胎土は精良で黒色粒の吹き出しがある。群馬産（秋間窯）か。15は鉢で胴部の丸みが強い。末野産である。16は甕で、末野産。17は長頭瓶で口縁部を欠くが略完存する。器形は胴部が撫で肩で丸みが強い。南比企産である。18～25は土師器甕で19～21は台付甕である。口縁部の形態は「コ」の字に近くなっている。26は

石製鋸錘車で表面がよく磨かれている。蛇紋岩製である。27は細い棒状の鉄製品で用途不明。

住居の時期は9世紀前半～中葉と考えられる。

【A区第12号住居跡】

第12号住居跡は、調査区A区東南に位置する。住居の北側で第10号住居跡と第11号住居跡と接する。造構の大半が調査区外のため詳細は不明である。検出したカマド部分は遺存状態が比較的よく煙道部の排煙口が残存していた。カマドの規模は焚き口の幅52cm、煙道部までの長さ95cm、排煙口の直径13cm、を測る。カマドの袖、燃焼部、煙道部は白色粘土と砂質土の造り付けである。火床面及び燃焼部の壁は被熱し硬く焼土化していた。

出土遺物は少量の土師器甕、壺の破片と須恵器片が出土した。図示できるものはなかった。

住居の時期は、造構の重複関係と少量の遺物から推測して8世紀中葉～後半と考えたい。

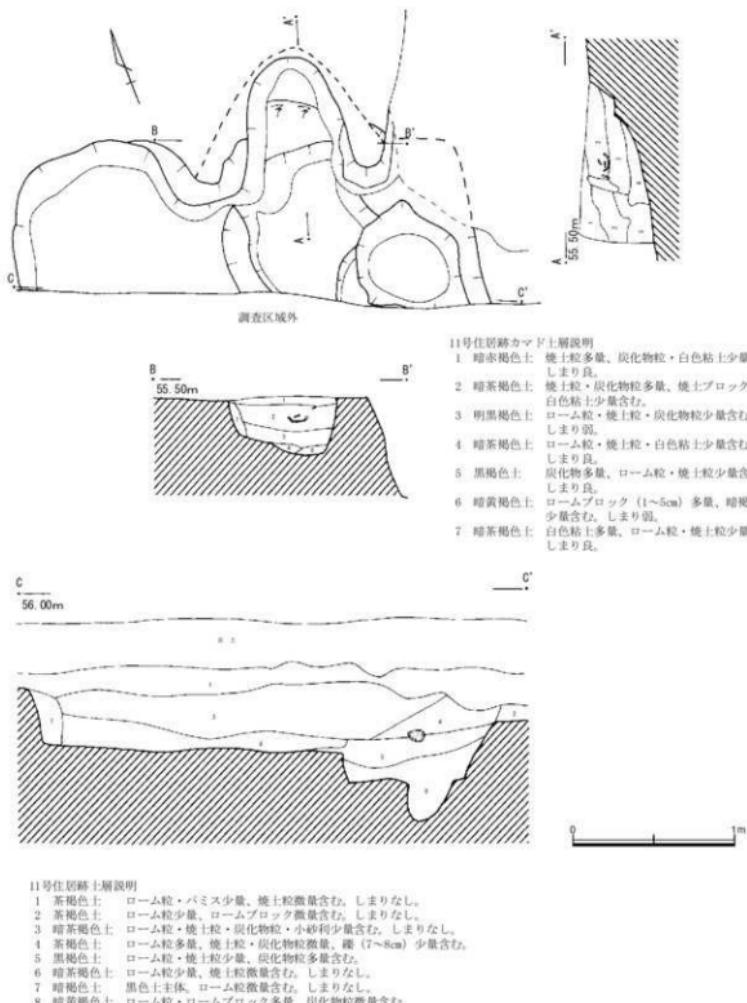
【A区第1号掘立柱建物跡】

第1号掘立柱建物跡は、調査区A区の西端部、北西コーナーに位置する。重複する第1号住居跡にP5～P8が切られ、第4号住居跡をP1が切る。

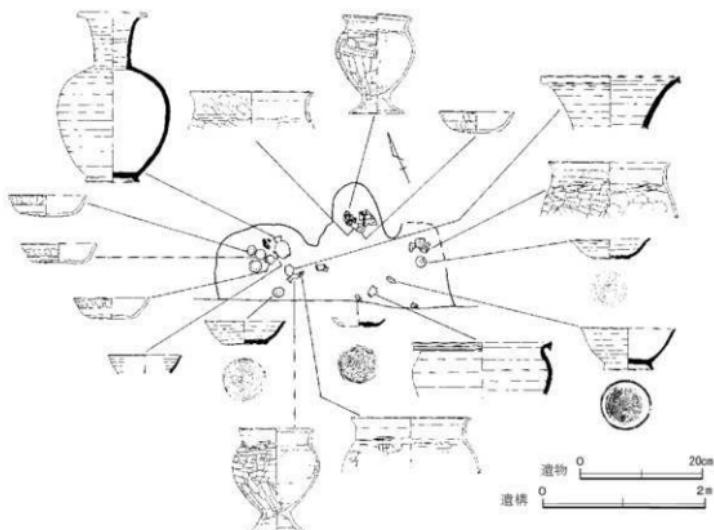
2×2間の側柱建物で、規模は桁行4.0m、梁行4.0mである。主軸方位はN-92°-Eを示す。柱間は桁行2.0m、梁行2.0mを測る。柱穴の掘り方は円形、楕円形で、径は50cm～90cmで、深さは40cm～86cm程度である。掘り方の埋土はローム粒混じりの黒褐色土を主体とする。

出土遺物は、少量の土師器片と須恵器片が出土したが図示できるものはなかった。

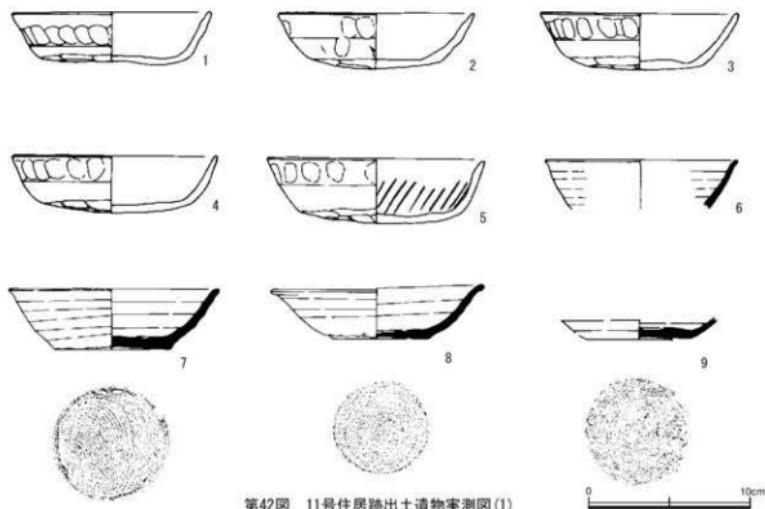
建物の時期は重複する第1号住居跡と第4号住居跡との重複関係から7世紀末～8世紀初頭と考えたい。



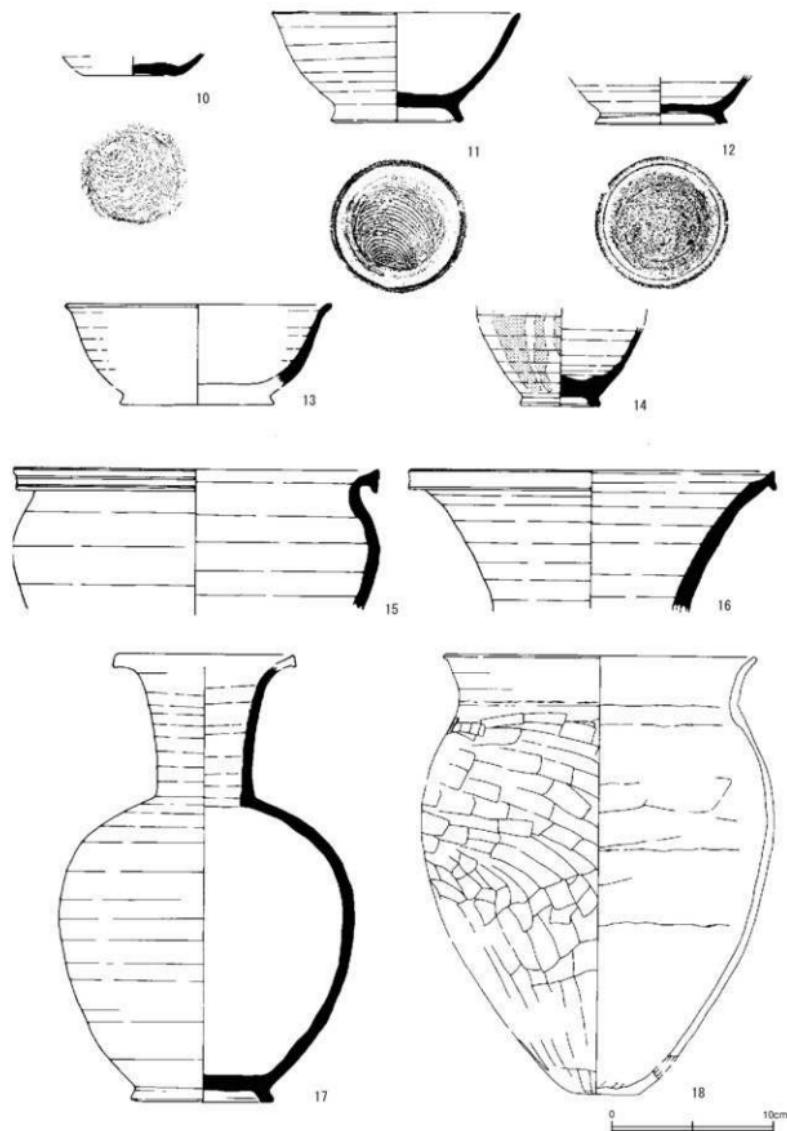
第40図 11号住居跡実測図



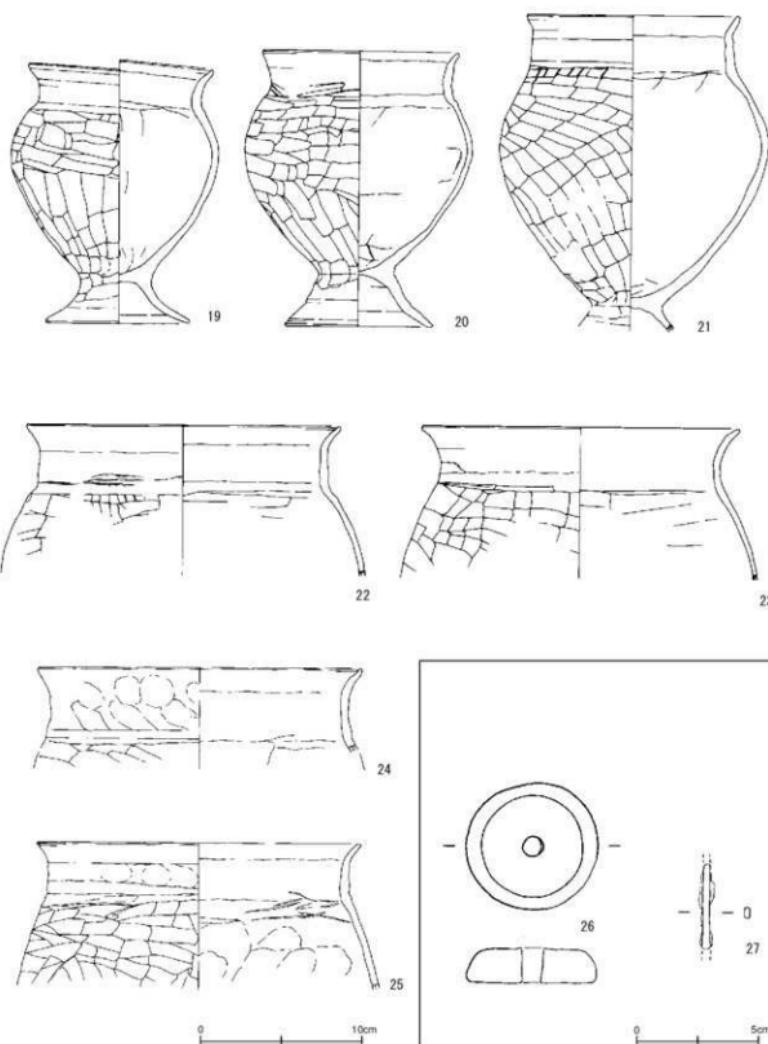
第41図 11号住居跡遺物出土状況図



第42図 11号住居跡出土遺物実測図(1)



第43図 11号住居跡出土遺物実測図(2)



第44図 11号住居跡出土遺物実測図(3)

第11号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	11.9	3.2	8.5	淡橙褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	100%	図示
2	环	11.8	3.4	7.6	橙褐色	良好	石英、長石、雲母	100%	カマド、釜みあり、内外面に油脂状黒色付着
3	环	11.8	3.5	6.9	淡橙褐色	普通	石英、雲母	100%	図示、内外面に油脂状黒色付着
4	环	12.2	3.5	8.8	淡橙褐色	普通	石英、雲母	99%	図示、内外面に油脂状黒色付着
5	环	13.2	4.0	8.6	淡茶褐色	普通	石英、長石、雲母、角閃石	100%	覆土、内外面に油脂状黒色付着、放射状暗文
6	須恵環	(11.6)	(3.0)	-	灰黒～黄灰	不良	石英、長石、海綿骨針	図示15%	図示、磨滅あり、南北企
7	須恵環	12.4	3.7	7.0	灰黒～灰褐	やや悪	石英、片岩、雲母、黑色粒、細繩	100%	図示、底部回転糸切り未調整、木野
8	須恵環	12.7	3.3	5.9	暗灰色	良好	長石、細繩	100%	図示、底部回転糸切り未調整、木野
9	須恵環	-	(1.2)	6.2	茶灰褐色	不良	石英、片岩、雲母、酸化鉄粒	100%	図示、下層一括、底部回転糸切り未調整、磨滅あり、末野
10	須恵環	-	(1.3)	6.0	明灰色	普通、軟質	石英、長石、片岩、黑色粒	図示30%	図示、底部回転糸切り未調整、木野
11	須恵高台壇	14.7	6.6	7.6	淡灰色	普通、軟質	石英、長石、黑色粒	90%	図示、木野？
12	須恵高台壇	-	(3.0)	8.0	明灰色	普通	石英、長石、黑色粒	図示35%	下層一括、末野
13	須恵高台壇	(15.8)	(5.2)	-	灰色	普通	石英、長石、黑色粒	図示10%	下層一括、末野
14	須恵水瓶？	-	(6.0)	4.8	淡灰色	良好、堅綱	黑色粒	図示60%	下層一括、外側に自然縫、群馬(秋間産)か
15	須恵鉢	(22.0)	(8.8)	-	灰褐色	軟質	石英、片岩、チャート	図示15%	カマド、木野
16	須恵甕	(22.0)	(8.6)	-	暗灰色	普通	石英、長石	図示20%	図示、外側自然縫、木野
17	須恵長颈瓶	-	(28.7)	8.5	灰褐色	普通	石英、長石、海綿骨針	95%	図示、南北企
18	甕	18.8	26.8	4.0	橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	70%	カマド
19	台付甕	11.0	15.7	8.6	橙褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	95%	カマド
20	台付甕	11.6	16.9	8.8	暗灰色	普通	石英、雲母、微砂粒	95%	図示、内外面に煤付着
21	台付甕	12.9	(19.5)	-	暗褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	85%	下層一括、内外面に煤付着
22	甕	(18.8)	(9.2)	-	橙色	普通	石英、角閃石、チャート、微砂粒	図示25%	図示
23	甕	(19.2)	(9.3)	-	褐色	普通	石英、角閃石、バミス	図示25%	カマド
24	甕	(19.3)	(6.2)	-	明褐色	普通	石英、角閃石	図示15%	カマド
25	甕	(19.4)	(9.0)	-	明橙褐色	良好	石英、雲母、角閃石、バミス	図示25%	図示
26	石製筋輪車	長径5.3cm 短径4.0cm 孔径0.9cm	厚さ1.4cm	重さ68.7g	石材・蛇紋岩	-	-	95%	下層一括
27	不明鉄製品	長さ3.5cm 幅0.3cm 厚さ0.4cm	重さ1.3g	-	-	-	-	-	破片

【A区第1号溝跡】

第1号溝跡は調査区A区の中央やや東寄りに位置し、調査区を南北に横断する。重複関係は第7号住居跡の東壁側と第3、7、8号土坑を切っていることから、第1号溝跡が最も新しいことが確認されている。幅は50～100cm、深さ5～20cmである。埋土は砂質で、浅間A軽石が多量に含まれる。

出土遺物は、混入と思われる土師器片が少量出土した。

遺構の時期は近世以降と思われる。

【A区第1号土坑】

第1号土坑は、調査区A区の中央部からやや東

寄りに位置する。

平面形態は、隅丸長方形で、規模は長軸1.8m、短軸0.9m、深さ22cmを測る。主軸方位はN-10°-Eを示す。

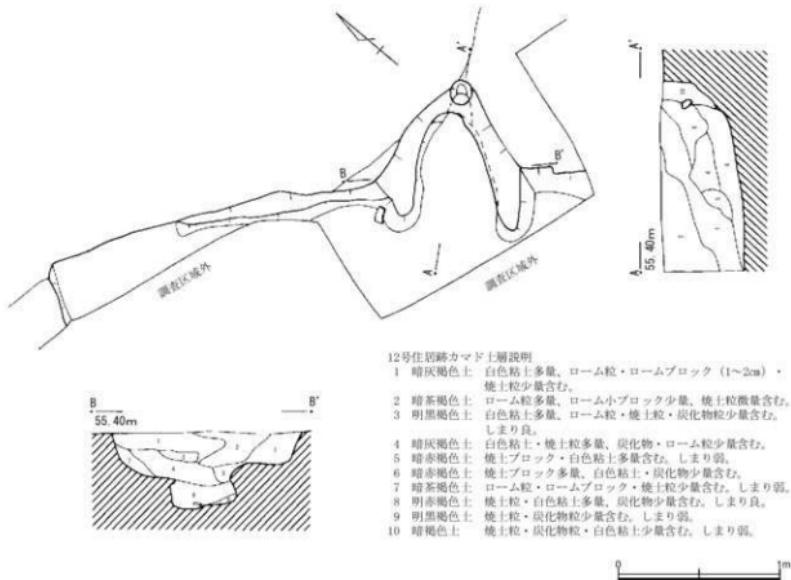
出土遺物はなかった。

【A区第2号土坑】

第2号土坑は、調査区A区の中央部からやや北東寄りに位置する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.36m、短軸1.14m深さ28cmを測る。主軸方位はN-14°-Eを示す。

出土遺物はなかった。



第45図 12号住居跡カマド実測図

【A区第3号土坑】

第3号土坑は、調査区A区の中央部やや東に位置し、第7号住居跡を切り、第1号溝に切られている。

平面形は長方形で、規模は長軸2.06m、短軸1.1m、深さ30cmを測る。主軸方位はN-17°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、重複関係から浅間A降下時期以前、中近世の所産と思われる。

【A区第4号土坑】

第4号土坑は調査区A区の東端に位置し、第8、9号住居跡を切る。覆土は黒褐色土を主体とする。

平面形態は長方形で、規模は長軸3.73m、短軸1.05m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-11°-Eを示す。出土遺物はなかった。

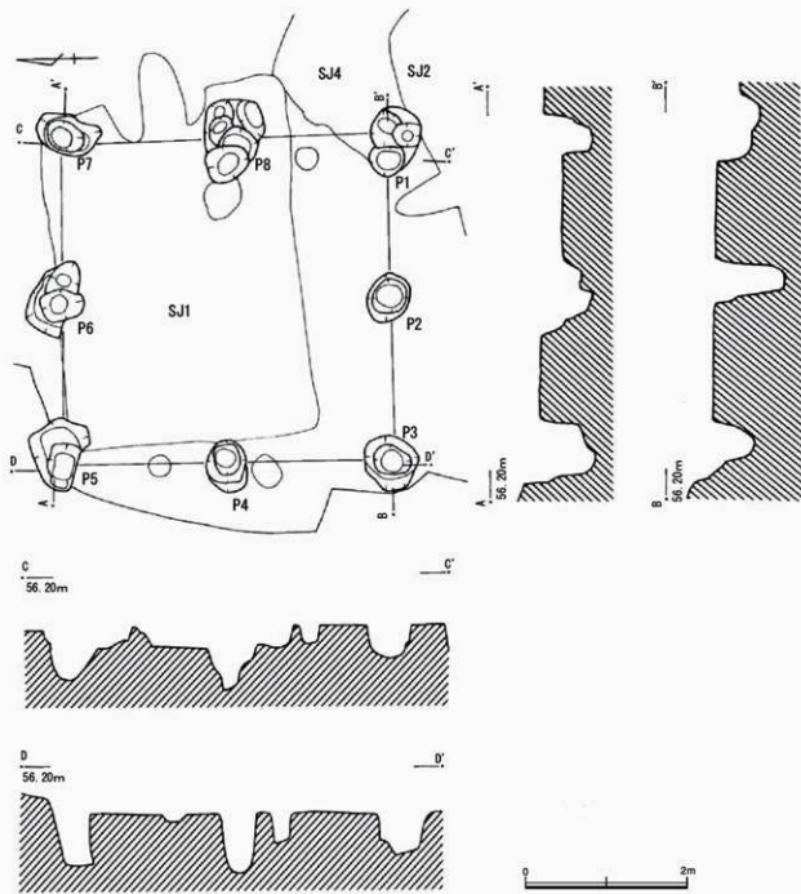
時期は第8、9号住居跡との重複関係から10世紀以降と思われる。

【A区第5号土坑】

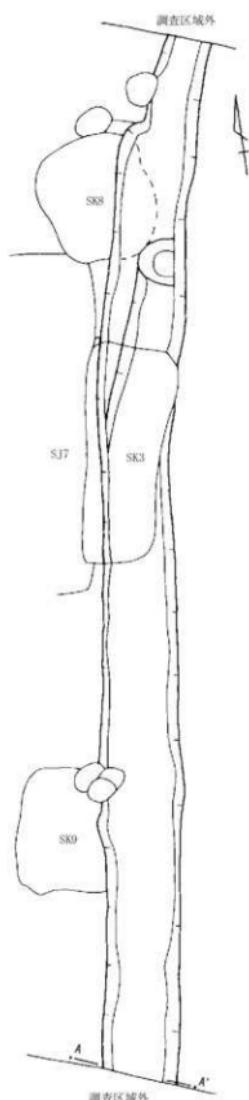
第5号土坑は調査区A区の中央部に位置する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.03m、短軸0.78m、深さ40cmを測る。主軸方位はN-35°-Eを示す。

出土遺物はなかった。



第46図 1号掘立柱建物跡実測図



【A区第6号土坑】

第6号土坑は調査区Aの西寄りに位置し、第2、3号住跡を切っている。

平面形態は長方形で、規模は長軸1.83m、短軸0.93m、深さ10cmを測る。主軸方位はN-5°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

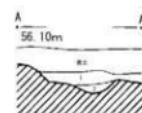
時期は重複関係から、9世紀以降と思われる。

【A区第7号土坑】

第7号土坑は調査区A区の中央部やや南寄りに位置する。土坑の東壁が第1号溝に切られている。

平面形態は推定隅丸長方形と思われる。規模は長軸1.5m、短軸(現存長)1.1m、深さ18cmを測る。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物はなかった。



1号溝断面図説明

- 1 基礎柱上 ローム粘土層、パミク多量含む、粘性・しまりなし。
- 2 粘土層上 ローム粘・パミク少量含む、しまりなし。中砂質。

第47図 1号溝跡実測図

【A区第8号土坑】

第8号土坑は調査区A区中央部の北寄りに位置し、1号溝に東側半分が切られている。

平面形態は不整円形で、規模は長径1.5m、深さ20cmを測る。

出土遺物はなかった。

【A区第9号土坑】

第9号土坑は調査区A区中央部の北側に位置する。遺構の大半が調査区外の為、平面形態、規模は不明である。

出土遺物はなかった。

【A区第10号土坑】

第10号土坑は調査区A区中央部のやや南寄りに位置し、第5号住居跡の北側に隣接する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸0.8m、短軸0.66m、深さ20cmを測る。主軸方位はN-50°-Wを示す。

出土遺物はなかった。

【A区第11号土坑】

第11号土坑は調査区A区の東寄りに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長軸0.88m、短軸0.8m、深さ26cmを測る。

出土遺物はなかった。

【B区第1号井戸跡】

第1号井戸跡は調査区B区の東端部に位置する。遺構の半分が調査区外の為、全容は不明である。

平面形態は推定円形で、規模は直径5.4m、深さは完掘していないため不明であるが、確認面から約1.5m以上を測る。上面はすり鉢状で、下面は筒状に掘り込まれていた。出土遺物は上層から下層まで含まれているが、中層以下でまとまって出土している。

主な出土遺物は須恵器壺・高台壺・横瓶・甕、口クロ土師器、土師器甕、刀子がある。須恵器壺1は口径12.0cm、底部周辺回転籠ケズリ、南比企産である。2、3は高台壺で、2は須恵器であるが、3は深身で焼成があまく、ロクロ土師器に近い。未野産。4はロクロ土師器で内面に黒色処理と籠ミガキを施す。5は短頭壺口縁部の破片で、焼きは良好で胎土は緻密。表面に自然釉がかかる。群馬産（秋間窯）と思われる。6は土師質の甕で口縁部が短く、口唇部に凹線がある。内面は木口状工具によるナデを施す。7は須恵器横瓶で外面に平行叩き後かるいナデを施す。未野産。8は須恵器甕で外面平行叩き後回転ナデを施す。未野産。9は刀子の茎部の破片と思われる。

時期は遺物に年代幅があるため、8世紀後半～9世紀後半頃まで機能していた可能性がある。

【B区第1溝跡】

第1号溝跡は調査区B区西側に位置し、北東から南西に走行する。調査区北側で、B区第2号土坑に切られている。また溝中央部が擾乱により破壊されており遺存状態は良くない。規模は南西で最大幅2.9m、北東側で1.6m、深さは約20cmで浅い。

出土遺物はなかった。

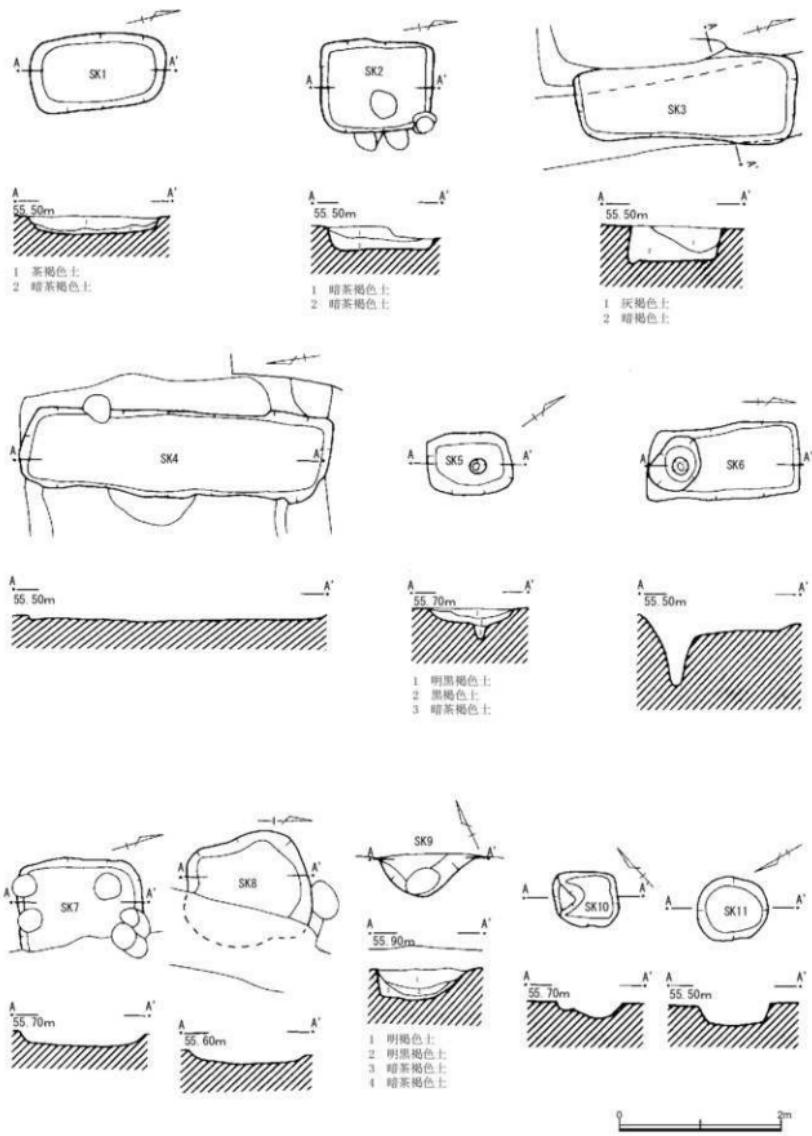
時期は第2号土坑との重複関係から中世以前と考えられる。

【B区第2号溝跡】

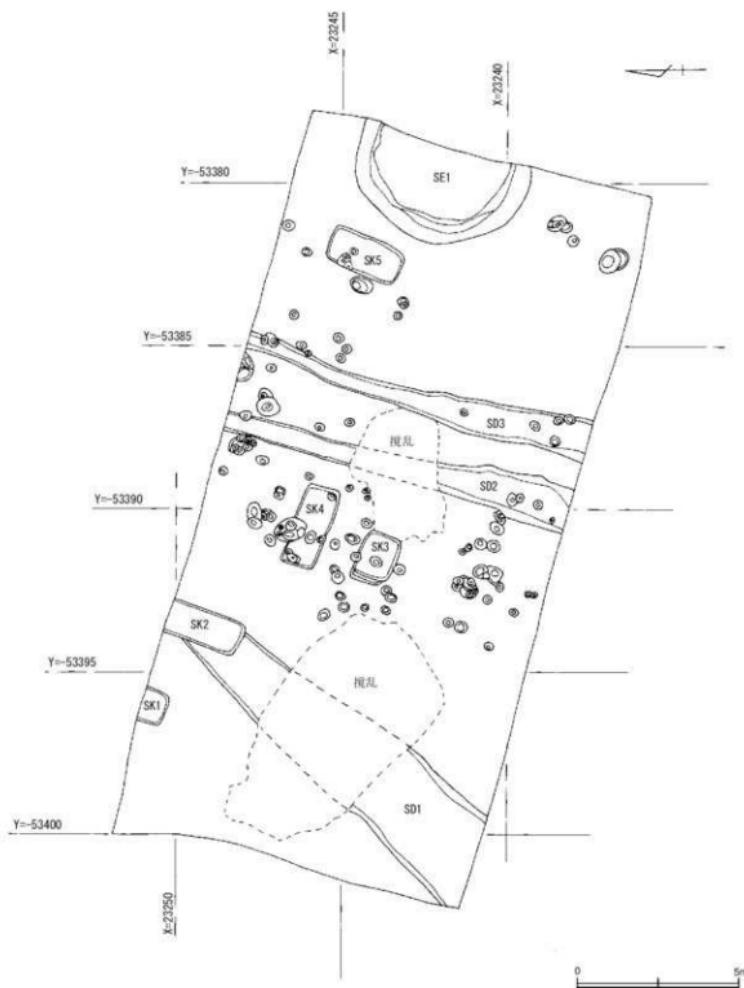
第2号溝跡は調査区B区のほぼ中央に位置し、北東から南西方向に走行する。また第3号溝跡が約1～2m離れて東側にあり並行している。規模は最大幅1.5m、最小幅0.6m、北に向かい細くなる。深さは10cmで浅い。

出土遺物はなかった。

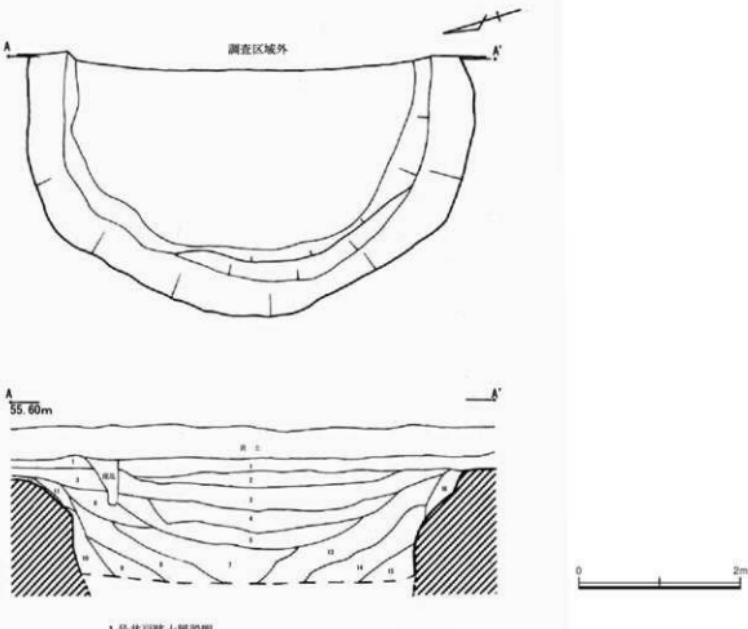
時期は不明確だが中・近世の土坑と軸が同じことから中世以降の可能性が高い。



第48図 1~11号土坑実測図



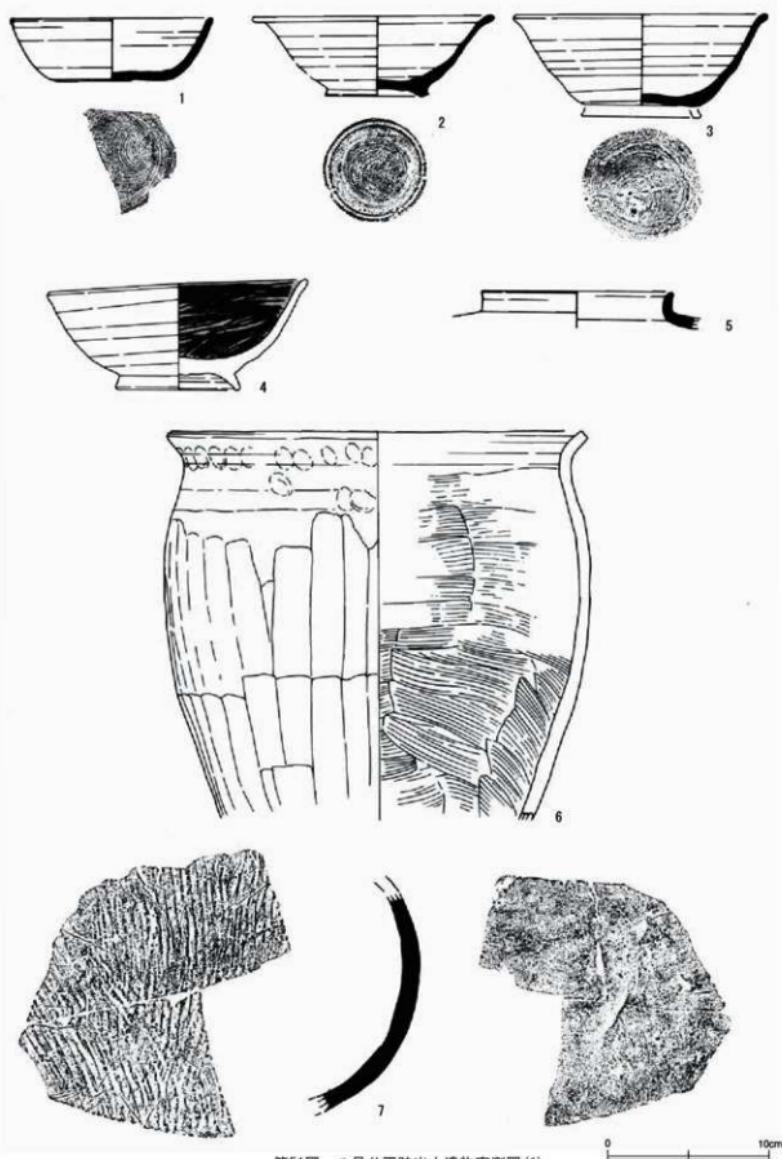
第49図 熊野遺跡135次B区調査全測図



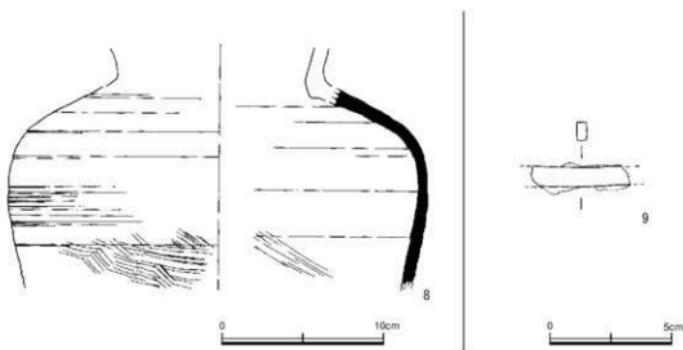
1号井戸跡土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒・バミス（浅間A）少量含む。しまり弱。
- 2 黒褐色土 バミス（浅間A）多量、小砂利少量含む。
- 3 黑褐色土 バミス粒微量、バミス少量、小砂利多量含む。しまり弱。
- 4 暗茶褐色土 ローム土体、ローム粒微量、バミス少量、小砂利多量含む。
- 5 暗褐色土 ローム粒微量、小砂利、細繊（3～5mm）少量含む。
- 6 暗茶褐色土 ローム粒微量、小砂利少量含む。
- 7 暗茶褐色土 ローム粒・塊土粒・炭化物微量、小砂利多量含む。
- 8 暗褐色土 ローム粒・塊土粒微量、小砂利多量含む。
- 9 暗茶褐色土 小砂利多量、細繊（3～5cm）少量含む。
- 10 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック（5cm）少量、小砂利微量含む。
- 11 暗茶褐色土 ローム粒微量、細繊（3～5cm）少量含む。
- 12 黄褐色土 ソフトローム主体、小砂利微量含む。
- 13 茶褐色土 ローム粒・塊土粒微量、小砂利、細繊少量含む。
- 14 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・小砂利・細繊少量含む。
- 15 黄褐色土 ロームブロック多量、小砂利少量含む。
- 16 黄褐色土 フラットローム主体、小砂利微量含む。

第50図 1号井戸跡実測図



第51図 1号井戸跡出土遺物実測図(1)



第52図 1号井戸跡出土遺物実測図(2)

第1号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵壺	(12.0)	3.8	(7.2)	淡灰褐色	普通	石英、長石、チャート、南緯骨片	25%	中～下層一括、底部周辺回転掛けずり、南北全
2	須恵高台壺	14.0	4.9	6.1	灰色	普通	石英、長石、黒色粒	55%	中～下層一括、未野
3	須恵高台壺	15.0	《5.8》	(7.2)	橙褐色～暗褐色	不良	石英、長石、酸化鉄粒、繊維	80%	上～中層一括、土師質、燒成あり、未野
4	高台壺	15.4	6.5	7.2	灰褐色～漆黒	やや悪	石英、角閃石、チャート、微砂粒	95%	中～下層一括、ロクロ土師器、内面黑色処理、葉ミサキ
5	須恵短頸壺	(11.4)	《2.2》	-	淡灰～濃緑	良好、堅硬	長石、黒色粒	図示15%	中～下層一括、土師質、群馬(秋間窯)か
6	甕	(24.7)	(23.8)	-	暗褐色	良好	石英、長石、チャート、角閃石(バミス)、砂粒	図示30%	上～下層一括、土師質、井口クロ
7	須恵横瓶	-	-	-	灰色	普通	石英、長石、片岩	破片	上～下層一括、外面平行叩き後ナデ内面あて具根、未野
8	須恵甕	-	(12.4)	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	図示15%	上～下層、外面平行叩き後回転ナデ、内面ナデ、未野
9	刀子	長さ4.0cm	幅0.8cm	厚さ0.4cm	重さ3.4g	-	-	破片	覆土、刀子の茎部か

【B区第3号溝跡】

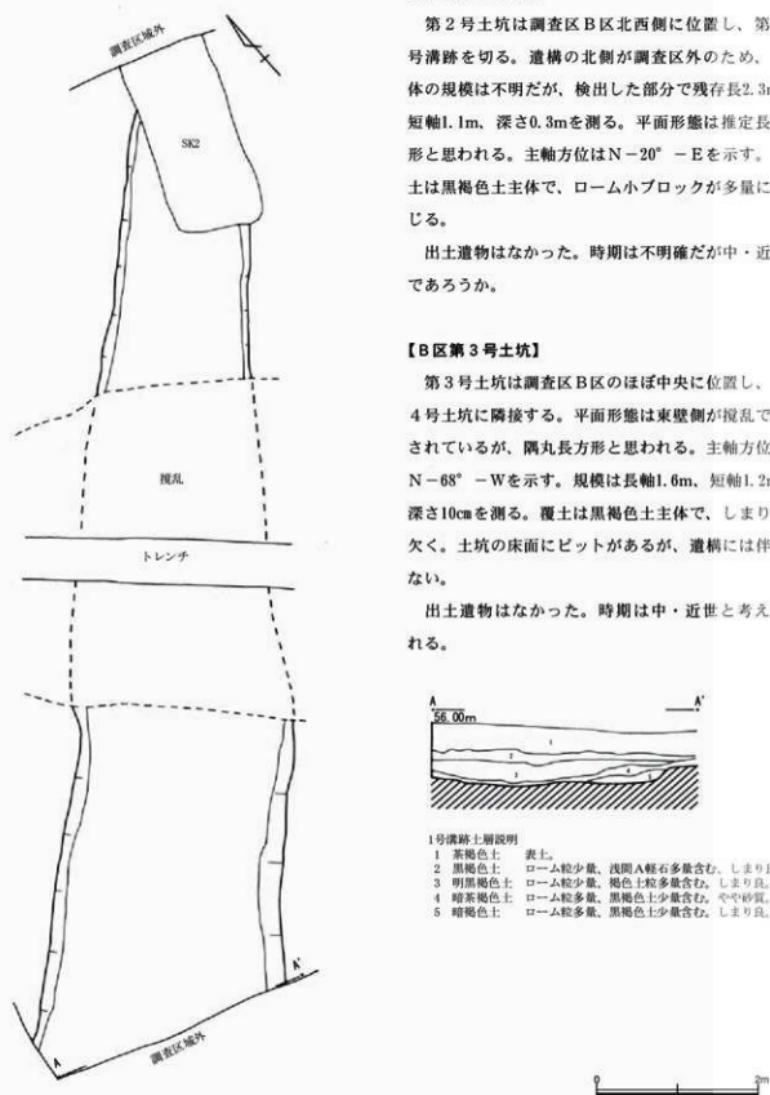
第3号溝跡は調査区B区の中央やや東に位置し、北東から南西方向に走行する。規模は最大幅1.3m、最小幅0.5m、北に向かい細くなる。深さは15cmで浅い。第2号溝跡と平行し、規模もほぼ同じことから同時期の所産と思われる。

出土遺物はなかった。

【B区第1号土坑】

第1号土坑は調査区B区の北西側に位置し、第1号溝跡と第2号土坑に隣接する。遺構の大半が調査区外のため全体の規模は不明だが、検出した部分で残存長1.0m、短軸1.1m、深さ40cmを測る。平面形態は推定長方形と思われる。覆土は黒褐色土を主体とする。

出土遺物はなかった。時期は不明確だが中・近世の所産であろうか。



【B区第2号土坑】

第2号土坑は調査区B区北西側に位置し、第1号溝跡を切る。遺構の北側が調査区外のため、全体の規模は不明だが、検出した部分で残存長2.3m、短軸1.1m、深さ0.3mを測る。平面形態は推定長方形と思われる。主軸方位はN-20°-Eを示す。覆土は黒褐色土主体で、ローム小ブロックが多量に混じる。

出土遺物はなかった。時期は不明確だが中・近世であろうか。

【B区第3号土坑】

第3号土坑は調査区B区のほぼ中央に位置し、第4号土坑に隣接する。平面形態は東壁側が搅乱で壊されているが、隅丸長方形と思われる。主軸方位はN-68°-Wを示す。規模は長軸1.6m、短軸1.2m、深さ10cmを測る。覆土は黒褐色土主体で、しまりを欠く。土坑の床面にピットがあるが、遺構には伴わない。

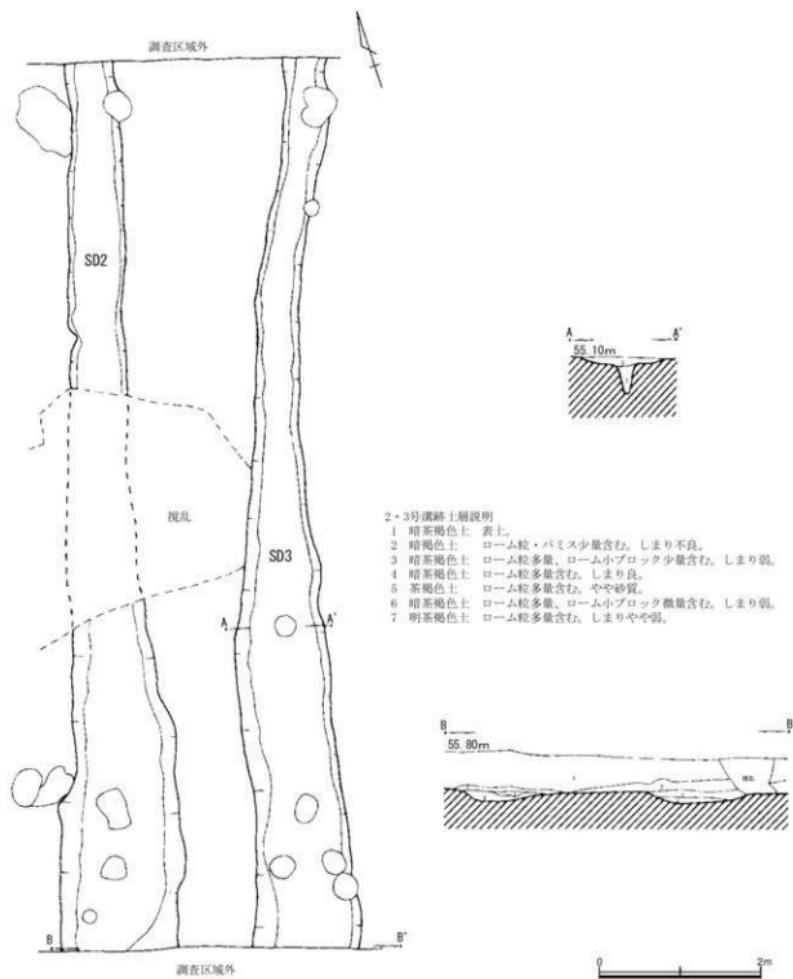
出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。



1号溝跡層説明

- | | | |
|---|-------|------------------------|
| 1 | 茶褐色土 | 表土。 |
| 2 | 黒褐色土 | ローム粒少數、浅間A軽石多量含む。しまり良。 |
| 3 | 明黒褐色土 | ローム粒少數、褐色土粒多量含む。しまり良。 |
| 4 | 暗茶褐色土 | ローム粒多數、黒褐色土少數含む。やや砂質。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒多數、黒褐色土少數含む。しまり良。 |

第53図 1号溝跡測定図



第54図 2・3号溝跡実測図

【B区第4号土坑】

第4号土坑は調査区B区のほぼ中央に位置し、第3号土坑に隣接する。平面形態は扇丸長方形で、遺構の一部がピットにより切られる。規模は長軸2.6m、短軸1.1m、深さ12cmを測る。主軸方位はN-71°-Wを示す。覆土はローム粒子を多く含む茶褐色土主体で、しまりに欠ける。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

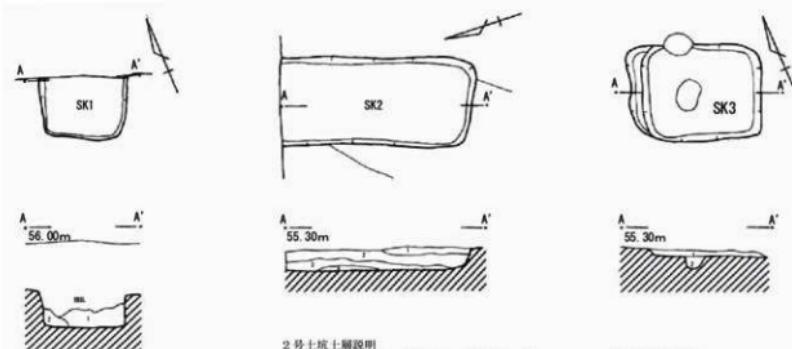
【B区第5号土坑】

第5号土坑は調査区B区の東側やや北寄りに位置する。第1号井戸跡の西側に隣接する。平面形態は長方形で、規模は長軸2.4m、短軸1.2m、深さ20cm

を測る。主軸方位はN-25°-Eを示す。覆土はローム小ブロックを少量含みしまりに欠ける。出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中・近世の所産と考えられる。

【A、B区ピット】

ピットは調査区全域から多数検出した。A区では調査区の中央寄りに集中するようである。形態は円形を基本とし、梢円形のものも含まれる。建物跡と考えられるものは認められず、また柱痕跡も確認できなかった。遺物も時期を特定できるものが出土しなかったため帰属時期は不明確であるが、ピット集中部には中・近世と考えられる土坑が多く、ピットの大半は中・近世と考えられる。



1号土坑土層説明

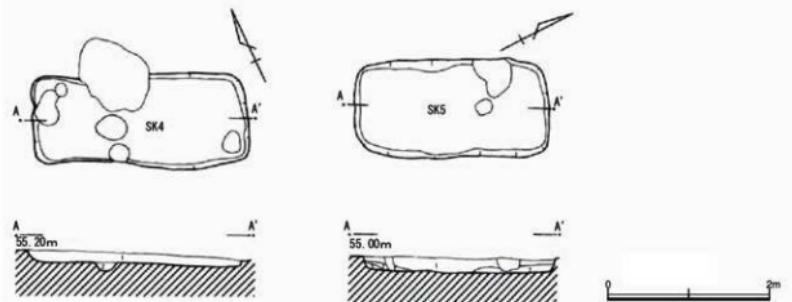
- 1 黒褐色土 ローム粒・ローム 小ブロック少量含む。しまり良。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・ローム 小ブロック(1~3cm) 少量含む。しまり弱。

2号土坑土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ローム 少量含む。しまりやや弱。
- 2 明黒褐色土 ローム粒・ローム 少量含む。しまり良。
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック (2cm) 少量含む。
- 4 明黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロック 多量含む。しまり弱。

3号土坑土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・褐色土 少量含む。しまりやや弱い。
- 2 茶褐色土 ローム土主体。ロームブロック少量含む。しまりやや弱い。



4号土坑土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒多量。ローム小ブロック 少量含む。しまりやや弱。
- 2 茶褐色土 ローム粒多量含む。しまり弱。(バサバサ)

5号土坑土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ローム小ブロック 少量。少々含む。しまり弱。
- 2 明黒褐色土 ローム粒少量、ローム小ブロック 微量含む。しまり弱。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒多量、ローム小ブロック 少量含む。しまり弱。

第55図 1～5号土坑実測図



第56図 熊野遺跡152次調査全測図

2. 熊野遺跡 152 次調査

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計5棟検出された。調査区東部に2棟、西部に3棟で、第1号掘立柱建物は5×2間、南北棟の側柱建物で、第1～3号溝跡の内側に位置する。第2号掘立柱建物跡は4×2間、東西棟の側柱建物で、第4～6号溝跡の内側に位置する。第3～5号掘立柱建物跡は3×2間、2×2間、2×1間で第8号溝跡の内側に位置する。いずれも中世の建物跡と考えられ、溝によって区画された施設の一つと考えられる。時期は15世紀代と推定される。この時期は武藏国において古河公方足利成氏と山内・扇谷上杉氏の戦いが繰り返されていた頃で、本遺跡から小山川を挟んだ北西約2kmには山内上杉氏の構築した五十子陣跡があり、前線基地として当地が関係しているとすれば、それらの騒乱に関係する施設の可能性もある。

第1号掘立柱建物跡（第57図）

第1号掘立柱建物跡はG-7グリッドに位置する。重複する第1号溝跡、第3号土坑より新しく、第99号土坑、第1号住居跡より古く。5×2間の大型側柱建物で、規模は桁行長0.5m、梁行長4.4mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。柱間は桁行1.9m、梁行2.2m等間でほぼ揃う。柱穴は円形または楕円形で、隅丸方形に近いものもある。深さは0.3～0.6mを測る。

出土遺物はP1からカワラケ（第58図1）、P6から薄板状鉄製品（第58図2）が出土した。カワラケは小形のもので、体部下端にやや丸みがある。口縁部と体部外面～底部に油脂状の黒色物が

付着している。時期は15世紀中葉～後半と考えられる。

第2号掘立柱建物跡（第59図）

第2号掘立柱建物跡はE-7・8グリッドに位置する。第5・7号住居跡と第22・76号土坑と重複する。4×2間の大型側柱建物で、規模は桁行長10.2m、梁行長4.4mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。柱間は桁行2.55m、梁行2.2m等間になる。柱穴は円形または楕円形でP1、P11は隅丸方形に近いものである。深さは0.4～0.8mを測る。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、中世後期15世紀代と推定される。

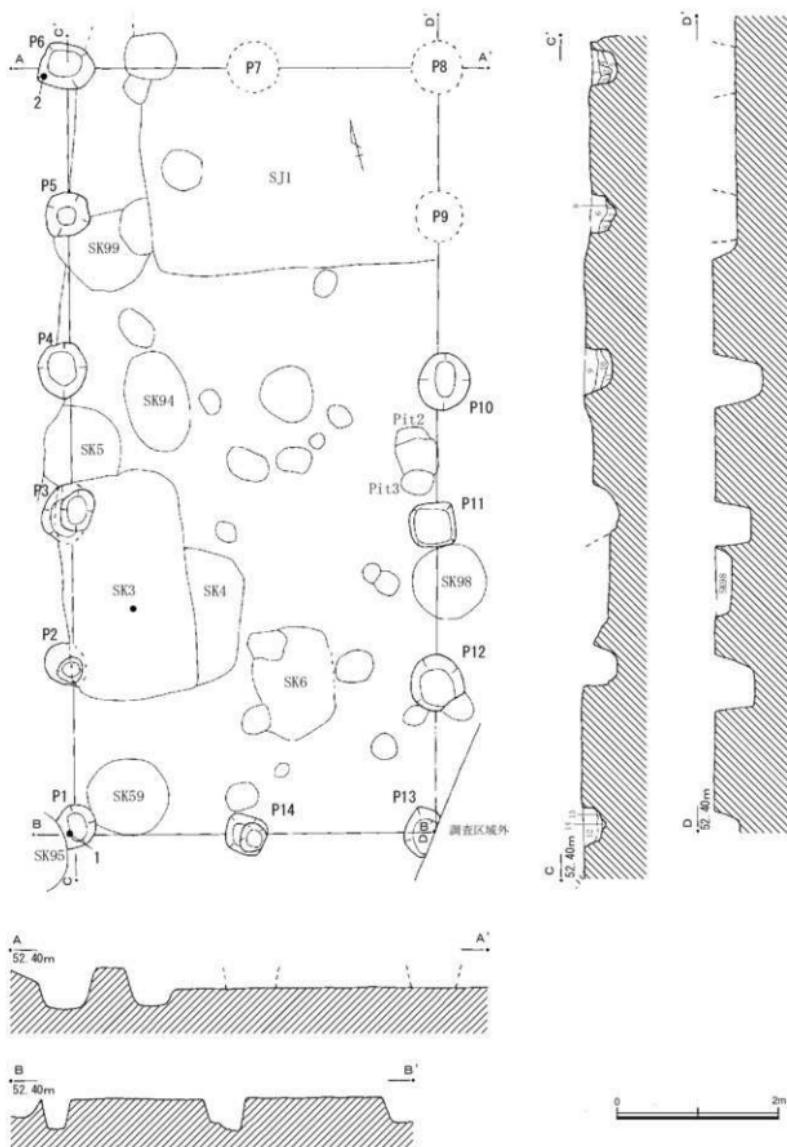
第3号掘立柱建物跡（第60図）

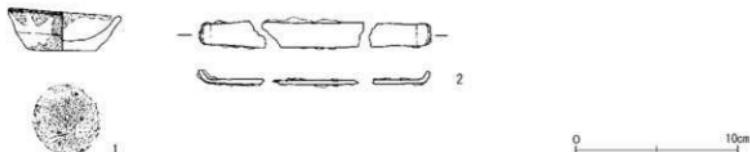
第3号掘立柱建物跡はC-4グリッドに位置する。重複関係は第130号土坑より古く、第113・120・135・145・147号土坑より新しいことが判明している。3×2間の側柱建物で、規模は桁行長5.3m、梁行長3.2mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。柱間は桁行1.5～1.8m、梁行1.6mとなる。桁行、梁行とも柱列がややずれ気味である。柱穴は円形ないし楕円形で、深さは0.15～0.57mで一定ではない。

出土遺物はなかった。時期は15世紀以降と考えられる。

第4号掘立柱建物跡（第61図）

第4号掘立柱建物跡はC-3グリッドに位置する。第11号住居跡、第162・178号土坑と重複し、第11号住居跡、第162号土坑より新しいことが判明している。2×2間の側柱建物で、規模は桁行長4.3m、梁行長3.7mである。主軸方位はN-83°-





第58図 1号掘立柱建物跡出土遺物実測図

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	施成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	6.7	2.6	4.0	褐褐色	良好	雲母、角閃石。酸化鉄粒	60%	P1図示。底部と口縁部に油脂状黒色物付着
2	不明鉄製品	長さ(9.5)cm	幅1.1cm	厚さ0.2cm	重さ4.1g			90%	P6図示。薄板状で両端部が反る

Wを示す。柱間は桁行1.8～2.5m、梁行1.6～2.1mで不規則。柱列も桁行がずれ気味である。柱穴は円形または楕円形で、深さは0.25～0.6mと不揃いである。

出土遺物はなかった。時期は中世で15世紀以降と考えられる。

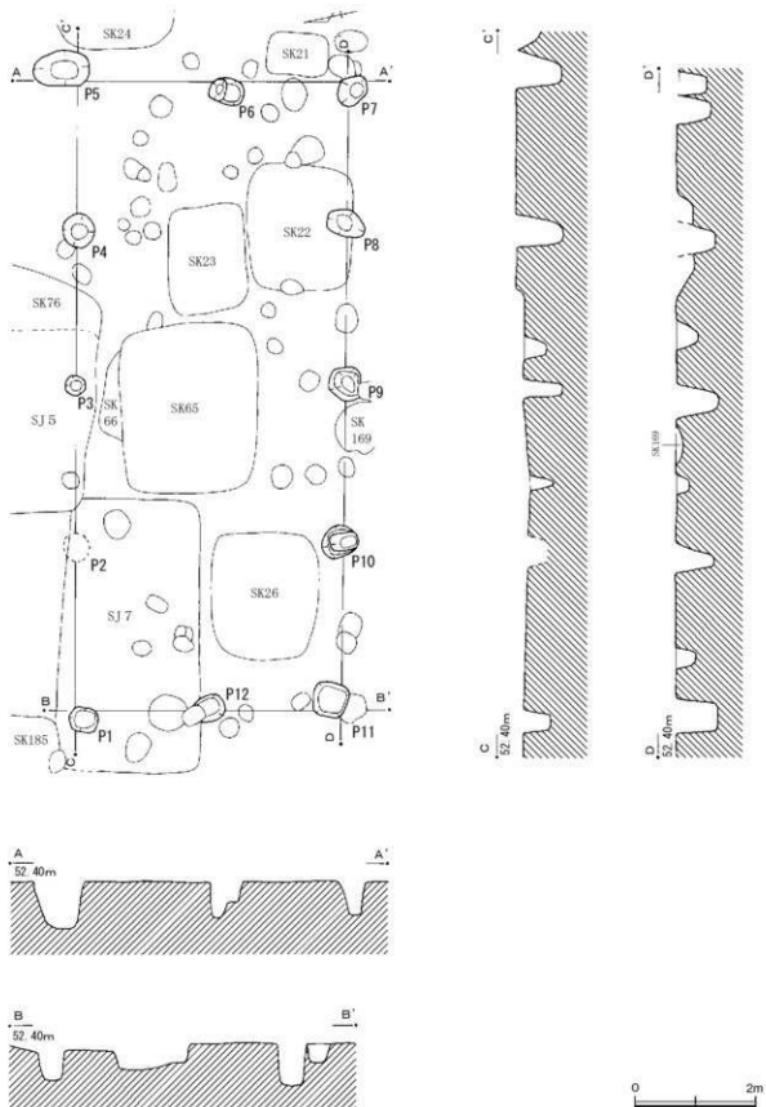
第5号掘立柱建物跡（第62図）

第5号掘立柱建物跡はC-2・3グリッドに位置する。重複する第10・11号住居跡、第151号土坑より新しい。2×1間の側柱建物で、規模は桁行長5.0m、梁行長2.7mである。主軸方位はN-8°-Eを示す。柱間は桁行2.5m等間である。

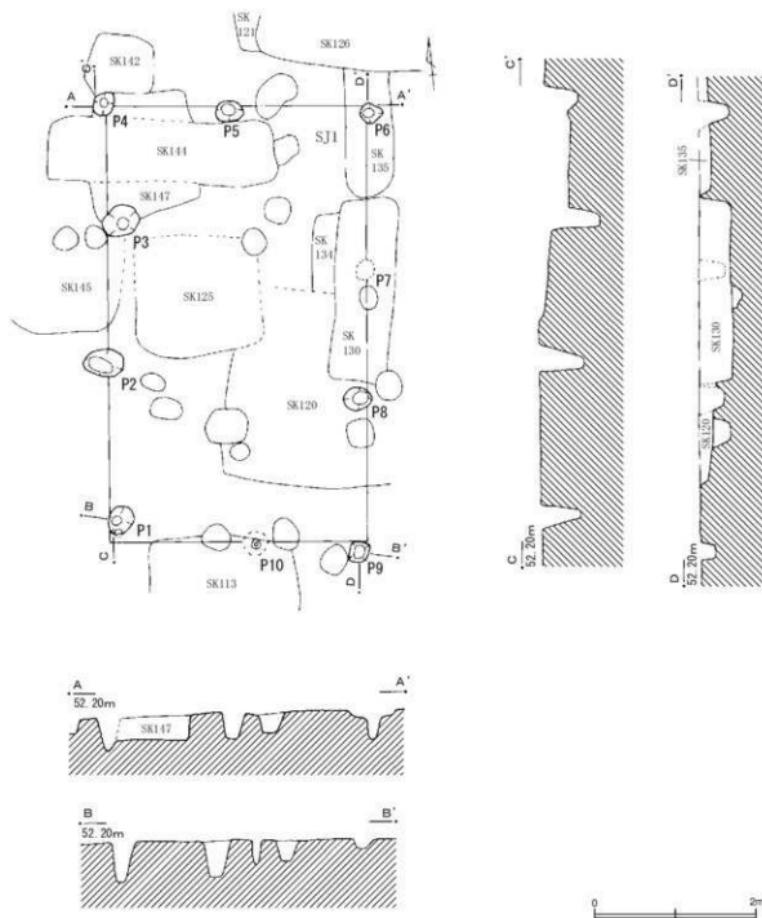
柱穴は円形または楕円形で、深さ0.4～0.6mを測る。また建物の西側に長さ4.3m、深さ0.12～0.17mを測る2.15m間隔のピット列がある。第5号掘立柱建物の一部と考えると底の可能性もある。

建物の範囲内には土間状の踏み固まった部分があり、その範囲内から多量の炭化物が検出された。このことから床張りの建物ではないかも知れない。

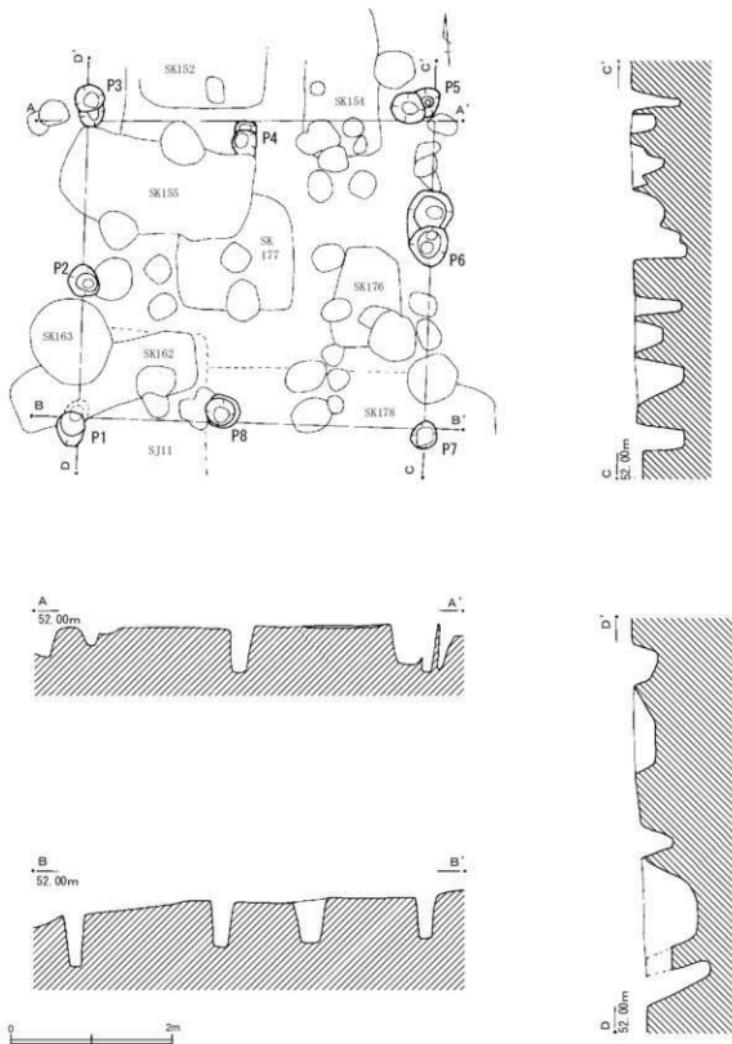
出土遺物はなかった。時期は14～15世紀の第11号住居跡を切っていることから、中世後期15世紀以降と考えられる。



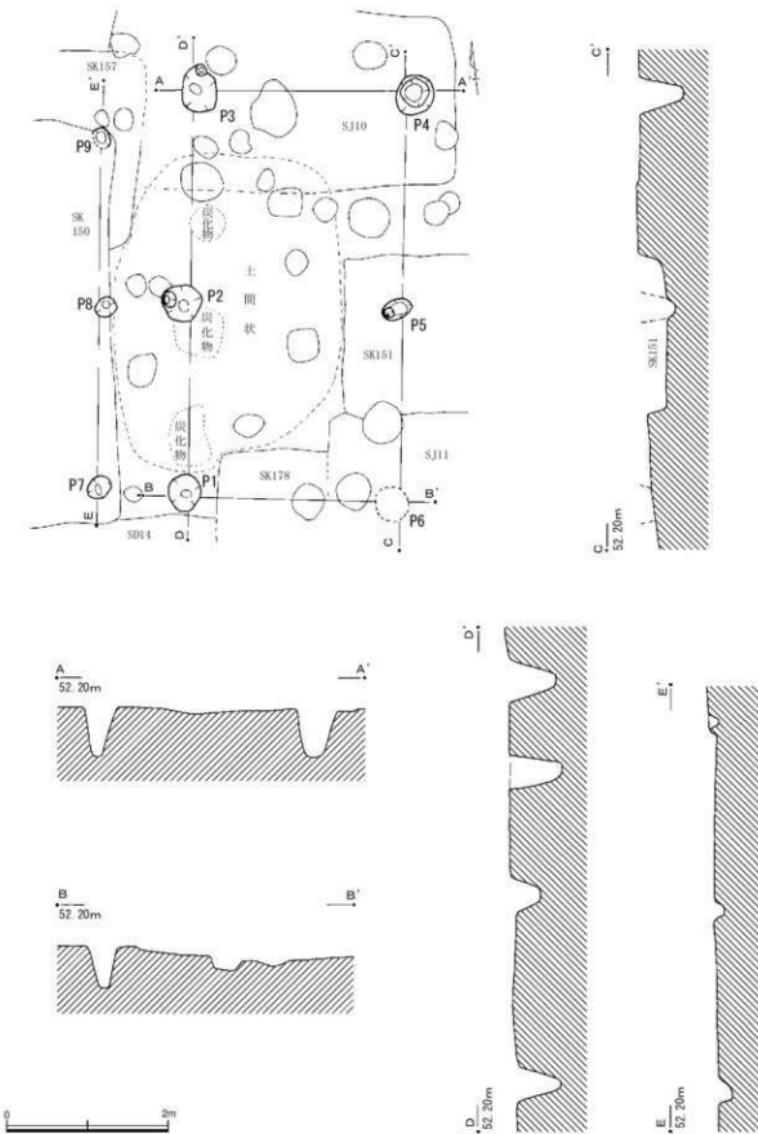
第59図 2号据立柱建物跡実測図



第60図 3号据立柱建物跡実測図



第61図 4号据立柱建物跡実測図



第62図 5号掘立柱建物跡実測図

豎穴住居跡

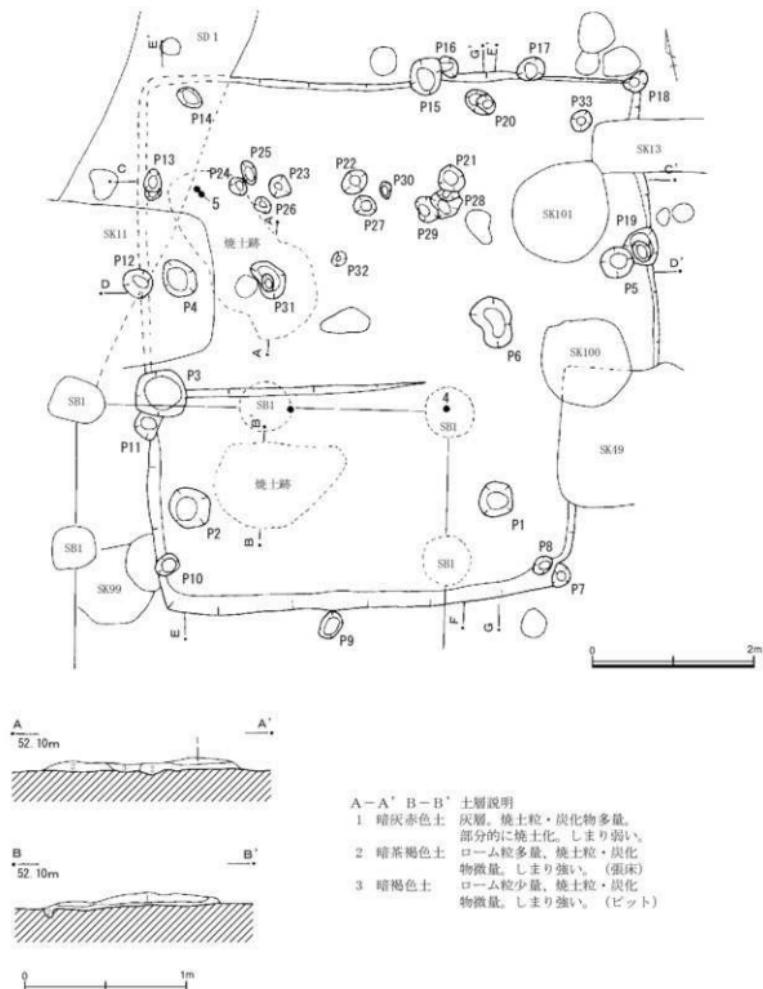
豎穴住居跡は合計13軒検出された。内訳は古代の住居跡が1軒、中世の住居跡が12軒である。中世の住居跡はカマドをもたない方形ないし長方形の建物で、主軸線を通る2本柱穴をもつものと、壁柱穴で構成されるものがある。床面はよく縮まっていて土間状になっているものや、床面に炉跡のような焼土や炭化物が検出されたものがある。出土遺物は少なく、生活観に乏しいことから、一時性が高く、解体、埋め戻しを前提とした施設と考えられる。便宜的に住居跡と呼称したが、豎穴簡易建物跡とした方がいいかもしれない。

第1号住居跡（第63図）

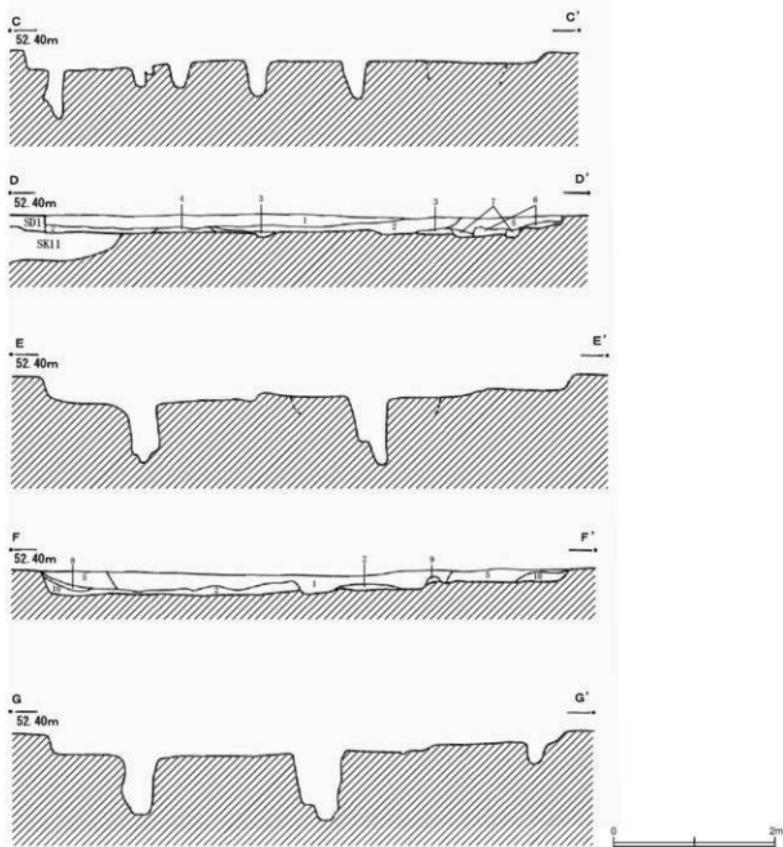
第1号住居跡はF・G-7グリッドに位置する。重複する第11、100、101土坑、第1号掘立柱建物跡、第1号溝跡より新しく、第13、49号土坑より古いことが確認されている。平面形態は規模の違う2つの長方形が並んだ形で、建て替えか或いは拡張の為この様な形態になった可能性があ

る。それぞれの規模は6.4m×3.8m、5.3m×2.7mで、合わせると東西6.4m、南北6.5mとなり、ほぼ方形に近くなる。深さは0.3～0.15mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。床面は平坦でよく縮まっていた。重複する第100、101号土坑の上面には張り床が形成されていた。また住居西側の床面から焼土跡が2ヶ所検出された。炉跡の可能性があるが掘り込みはなく、灰と炭化物が堆積しており、床面が部分的に硬く焼土化していた。ピットは32基検出した。P1～P6は主柱穴と考えられ、P7～P19は壁柱穴と考えられる。P21～P30は不明確な点が多いが間仕切りのピットの可能性がある。

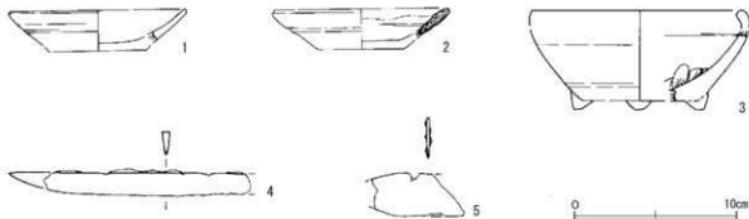
出土遺物は少なくカワラケ、灰釉小皿、香炉、刀子、不明鉄製品（第65図1～5）がある。1のカワラケは口縁部の開きが大きいもので、2は古瀬戸の灰釉小皿である。3は在地産の土師質の香炉で三足が付く。4は刀子、5は薄板状の鉄製品の破片で種別は不明である。時期は第1号溝跡との重複関係と古瀬戸灰釉小皿や在地産の香炉の年代から15世紀後半～16世紀初頭と推定される。



第63図 1号住居跡実測図



第64図 1号住居跡断面図



第65図 1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	構成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	(10.8)	(2.1)	-	灰赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示10%	覆土
2	灰釉小皿	(10.6)	(1.9)	-	淡緑～黄灰色	良好	黒色微粒少量	図示15%	覆土、瀬戸
3	香炉	-	(5.0)	(7.7)	淡灰赤褐色	やや悪	微砂粒	図示20%	覆土、土師質、在地
4	刀子	長さ12.7cm	幅1.4cm	厚さ0.4cm	重さ15.1g			70%	図示、切先と茎部欠損
5	不明鉄製品	長さ5.9cm	幅2.5cm	厚さ0.2cm	重さ6.0g				図示、薄板状

第2号住居跡（第66図）

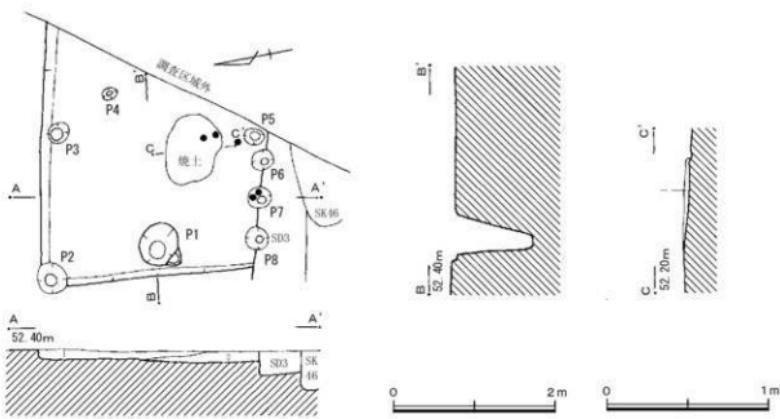
第2号住居跡はE-8・9グリッドに位置する。第3号溝跡に切られている。平面形態は遺構の大半が調査区外のため詳細は不明であるが、長方形ないし方形と推定される。残存規模は長軸3.2m、短軸2.6m、深さ0.13mで、主軸方位は不明である。床面は平坦でよく締まっていた。カマド、壁溝など付属施設は検出されなかった。床面より焼土跡が検出された。長さ0.9m、幅0.6m、厚さ約0.2mでやや締まりに欠ける。ピットは8基検出した。西壁際のP1は深さ0.92mである。主軸を通る2基柱穴のうちの1基と推定される。

出土遺物は須恵器高台塊（第67図1）と礎が出た。高台塊は末野産で混入と思われる。時期は不明確であるが重複関係から14～15世紀と推定される。

第3号住居跡（第68図）

第3号住居跡はF-6・7グリッドに位置する。重複する第106号土坑より古く、第69・71・72・73号土坑より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸4.75m、短軸3.15m、深さ0.2mである。主軸方位はN-79°-Wを示す。床面は平坦で締まっていた。ピットは主軸線上に2基、他に3基検出された。主軸線上のP1、P2は主柱穴と考えられる。P3～P5は性格不明である。カマド、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は土師器甕の残片、古銭が1点（第69図1～3）出土した。古銭は祥符元寶で北宋銭である。土師器甕は混入と思われる。時期は中世と考えられる。



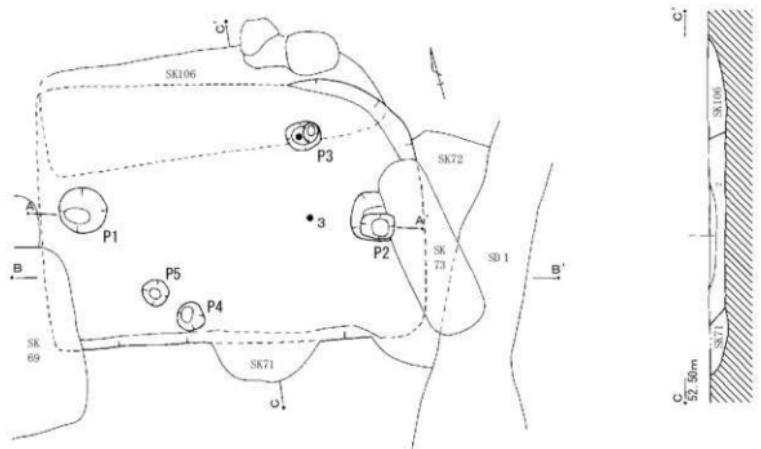
第66図 2号住居跡実測図



第67図 2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

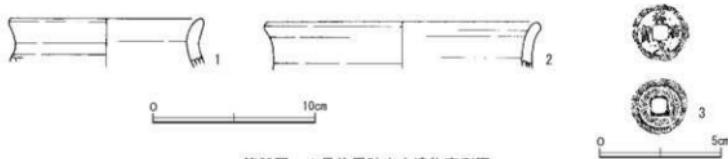
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵高台碗	-	(1.5)	(6.2)	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示90%	覆土、末野、混入



B - B' C - C' 土層説明
 1 暗茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。



第68図 3号住居跡実測図



第69図 3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

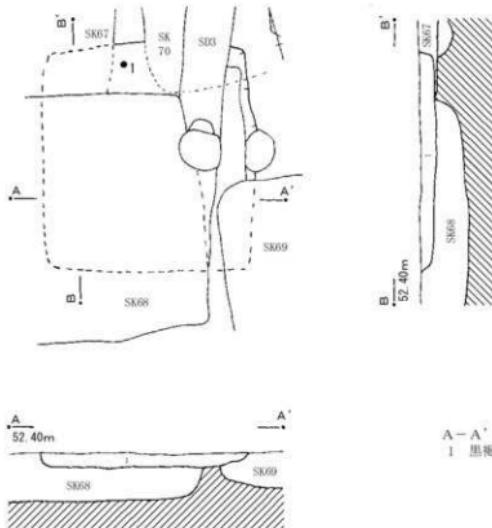
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	小型甕	(11.5)	(3.0)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、チャート、バミス、砂粒	図示10%	覆土、混入
2	甕	(16.5)	(2.9)	-	にぶい褐褐色	普通	石英、角閃石、チャート、砂粒	図示10%	覆土、混入
3	銭貨	計測値は別表の銭貨観察表を参照							図示、祥符元宝(北宋)

第4号住居跡（第70図）

第4号住居跡はE・F-6グリッドに位置する。重複する第3号溝跡、第67～69号土坑より新しく、第70号土坑より古い。重複が著しいため平面形態は不明確だが、方形に近いものと推定される。規模は長軸2.7m、短軸2.6m、深さ0.2mである。主軸方位はN-15°-E示す。床面は平

坦で埋土は黒褐色土主体である。カマド・壁溝・ピット等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は古瀬戸の灰釉小皿（第71図1）が1点出土した。時期は灰釉小皿が伴うとすれば15世紀後半と推定される。尚便宜上住居跡としたが不明確な点も多く、堅穴状造構或いは土坑としたほうがいいかもしれない。



第70図 4号住居跡実測図



第71図 4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	灰釉小皿	(10.4)	(1.8)	-	乳白色	良好	堅緻	黒色微粒子少量 図示20%	図示、廻り

第5号住居跡（第72図）

第5号住居跡はD・E-7グリッドに位置する。重複する第76号土坑より古く、第77号土坑より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸4.6m、短軸3.1m、深さは0.1mである。主軸方位はN-11°-Eを示す。床面は平坦でよく締まっていた。ピットは10基検出された。P1とP2は主軸線上にあり主柱穴と考えられる。P5-P8は壁柱穴の可能性がある。カマド、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物は須恵器壺の破片（第73図）が出土したが混入と考えられる。時期は不明確だが中世と考えられる。

第6号住居跡（第74図）

第6号住居跡はD-E-6-7グリッドに位置する。重複する第185号土坑より古いことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸4.1m、短軸2.8m、深さ0.23mである。主軸方位はN-11°-Eを示す。床面は若干の凹凸があるがよく

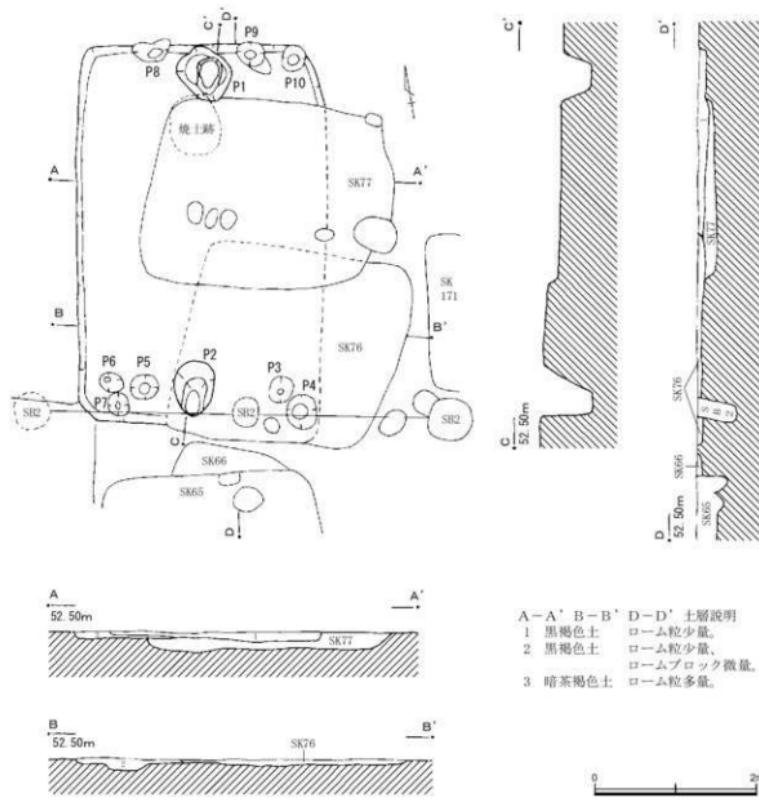
締まっていた。埋土はローム粒子を多量に含む暗茶褐色土で、一括埋め戻しと思われる。ピットは8基検出された。P1、P2は主軸線上にあり主柱穴と考えられる。P5-P8は壁柱穴の可能性がある。カマド、壁溝等の付属施設は検出されなかつた。

出土遺物は砾石（第75図1）が出土した。時期は不明確であるが、中世と考えられる。

第7号住居跡（第76図）

第7号住居跡はE-7グリッドに位置する。重複する第2号掘立柱建物跡より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸4.5m、短軸2.35m、深さ0.15mで、主軸方位はN-79°-Wを示す。床面は平坦でよく締まっていた。ピットは主軸線上にあるP1、P2が主柱穴と考えられる。その他のピットは帰属不明である。カマド、壁溝等の付属施設は検出しなかつた。

出土遺物は土師器皿、須恵器壺の破片（第77図1、2）が出土したが混入と考えられる。時期は中世と考えられる。



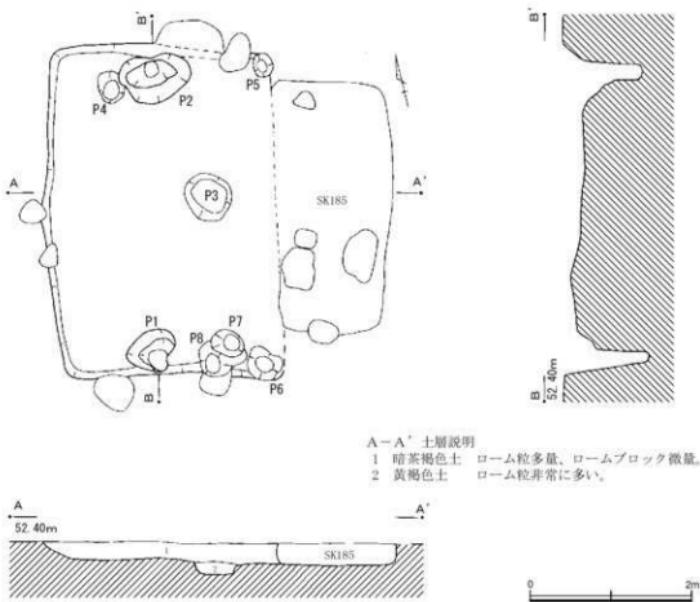
第72図 5号住居跡実測図



第73図 5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵壺	(10.2)	(2.3)	-	明灰色	普通	石英、黒色粒、片岩	図示10%	覆土、未野、混入



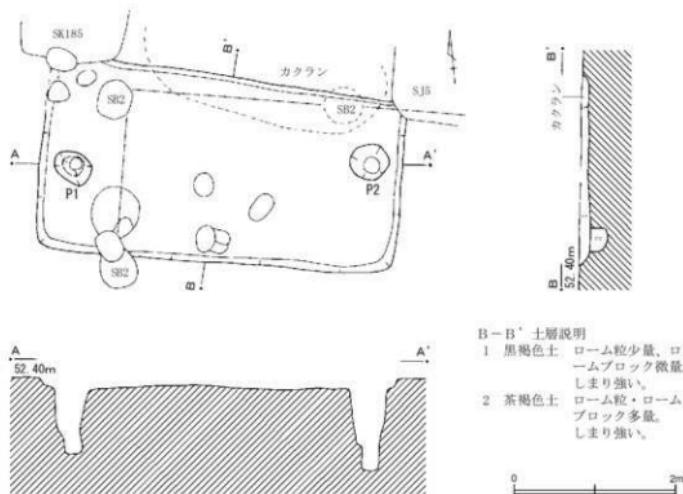
第74図 6号住居跡実測図



第75図 6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材			備考
1	砥石	6.4	5.1	2.5	84.0 g	凝灰岩			



第76図 7号住居跡実測図



第77図 7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	皿	-	-	-	褐褐色	普通	石英、角閃石	破片	覆土
2	碗底裏	-	-	-	灰白色	良好	石英、長石	破片	覆土、外面平行叩き後ナメ

第8号住居跡（第78図）

第8号住居跡は調査区最西端のC・D-1・2グリッドに位置する。重複する中世の第13号溝跡に切られている。平面形態及び規模は住居の一部が調査区外のため不明確であるが、平面形態は長方形と推定される。残存規模は東西2.8m、南北2.9m、深さ0.3mである。主軸方位は不明である。カマドは北東壁側に設けられている。カマドの全長は0.75m、焚き口幅0.28m、燃焼部幅0.28mである。カマド袖は灰白色粘土と褐色土の造りつけで、土師器甕が補強材として両袖に使われていた。カマド右側に貯蔵穴がある。ピットは9基検出された。P6、P8は柱穴と考えられるが他のピットは不明確である。壁溝は検出されなかった。

出土遺物は須恵器壺・蓋、土師器壺・皿・甕・瓶（第81・82図1～17）がある。1の須恵器壺は深身で底部～体部下端に回転籠ケズリを施す。2は短頸蓋蓋で口縁部が開くタイプ。いずれも末野産である。土師器3は北武藏型壺、4は暗文壺形態の無文壺、7、14は甕、8～11、13、15は長胴甕、12、16、17は胴張甕である。時期は7世紀後半と考えられる。

第9号住居跡（第83図）

第9号住居跡はC-3・4グリッドに位置する。重複する第175号土坑より新しい。平面形態は長方形で、南西コーナーに張り出し部がある。規模は長軸4.7m、短軸2.5m、深さ0.15m、張り出し部の幅1.7m、長さ0.55mを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。床面はほぼ平坦である。張り出し部から長さ2.3m、幅1.5mの範囲で土間状に固く踏み固められていた。張り出し部は出入り口の可能性がある。また床面中央部から炭化物と灰色粘土が検出された。ピットは7基検出され

た。P1、P2は主柱穴と考えられるが他は不明確である。カマド、壁溝等の付属施設は検出されなかった。

出土遺物はカワラケ、青磁碗、鉢皿、折縁深皿、古銭（第84図1～6）がある。1、2はカワラケで、1は口径と底径の差が小さい。3は青磁蓮弁碗で龍泉窯系と思われる。4は古瀬戸の鉢皿、5は古瀬戸の灰釉折縁深皿で古瀬戸後期と考えられる。6は永楽通寶で明銭である。時期は出土遺物から14世紀中葉～15世紀前半と考えられる。

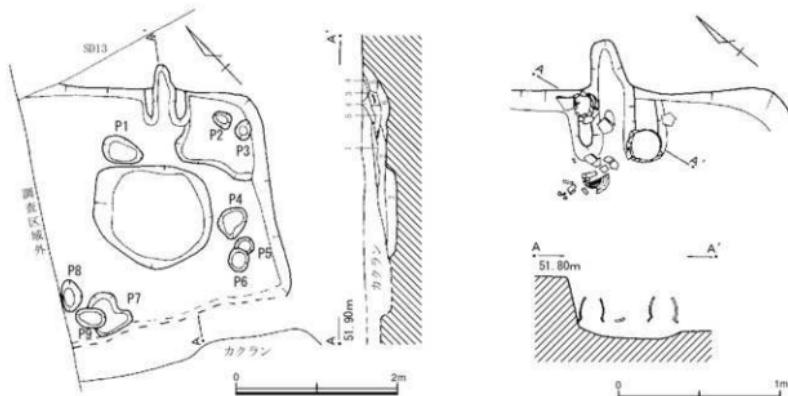
第10号住居跡（第85図）

第10号住居跡はC-2・3グリッドに位置する。重複する第5号掘立柱建物跡、第157号土坑より古い。平面形態は不整長方形で、長軸4.25m、短軸2.1～2.8m、深さ0.7mである。主軸方位はN-79°-Wを示す。床面は平坦でよく締まっていた。ピットは9基検出された。P1～P8は壁柱穴の可能性がある。カマド、壁溝等の施設は検出されなかった。

出土遺物はなかった。時期は第5号掘立柱建物跡より古いことから、14～15世紀前半と推定される。

第11号住居跡（第86図）

第11号住居跡はC-2・3グリッドに位置する。第4号掘立柱建物跡、第151、163号土坑より古く、第162、164、178号土坑、第13号溝跡より新しい。平面形態は長方形と推定される。規模は長軸6.1m、短軸2.7m、深さ0.25mで、主軸方位はN-85°-Wを示す。床面はほぼ平坦である。ピットは12基が検出された。主軸を通るP2、P3、P7、P8は深さ15～64cmで主柱穴の可能性がある。P5、P6、P9～P12は深さ13～32cmで

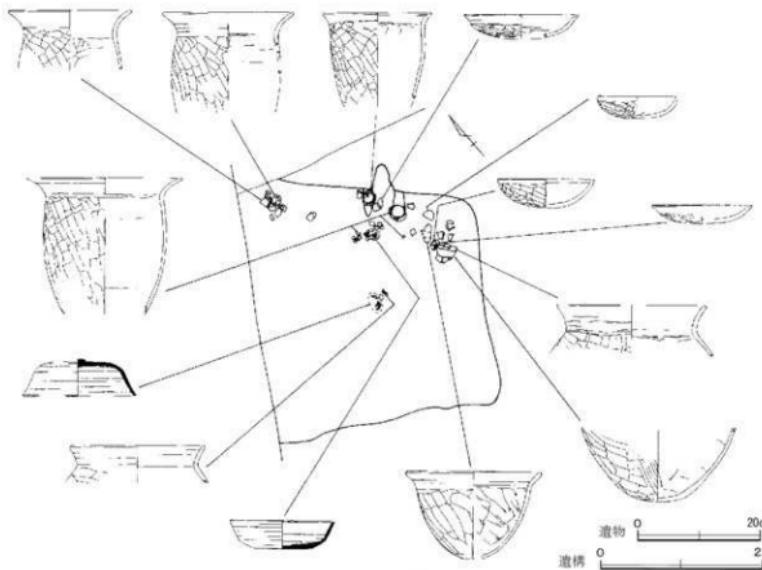


A-A' 土層説明

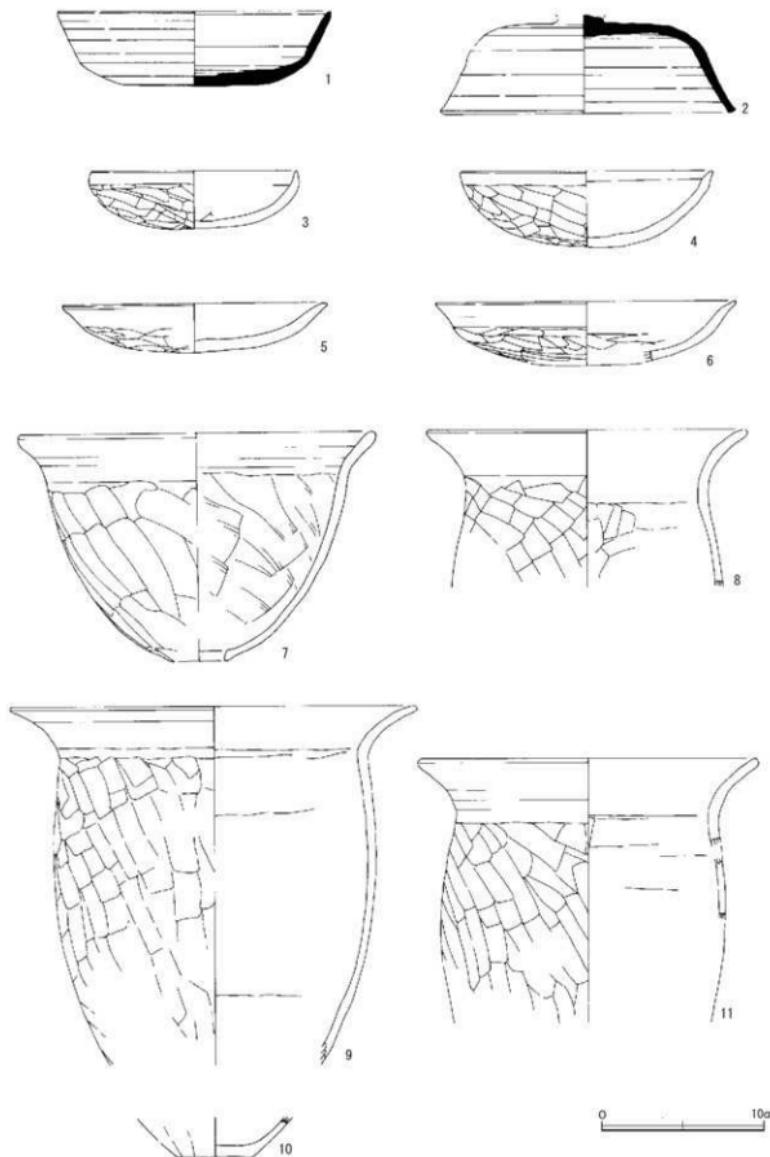
- 1 暗褐色土 ローム粒・焼土粒少量。粘性ややあり。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒少量。粘性ややあり。しまりよい。
- 3 暗赤褐色土 ローム粒・焼土ブロック多量。粘性あり。しまり弱い。
- 4 黑褐色土 ローム粒・焼土小ブロック少量。粘性ややあり。しまり弱い。
- 5 暗赤褐色土 ローム粒・焼土小ブロック多量。ロームブロック少量。しまり弱い。
- 6 暗黄褐色土 ロームブロック多量・焼土ブロック・炭化物少量。粘性あり。しまり弱い。

第78図 8号住居跡実測図

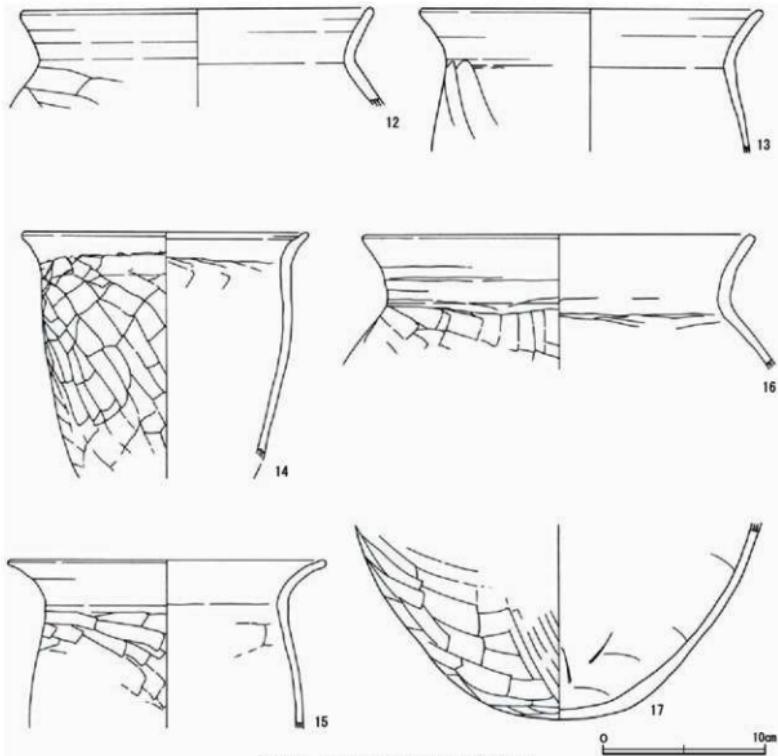
第79図 8号住居跡カマド実測図



第80図 8号住居跡遺物出土状況図



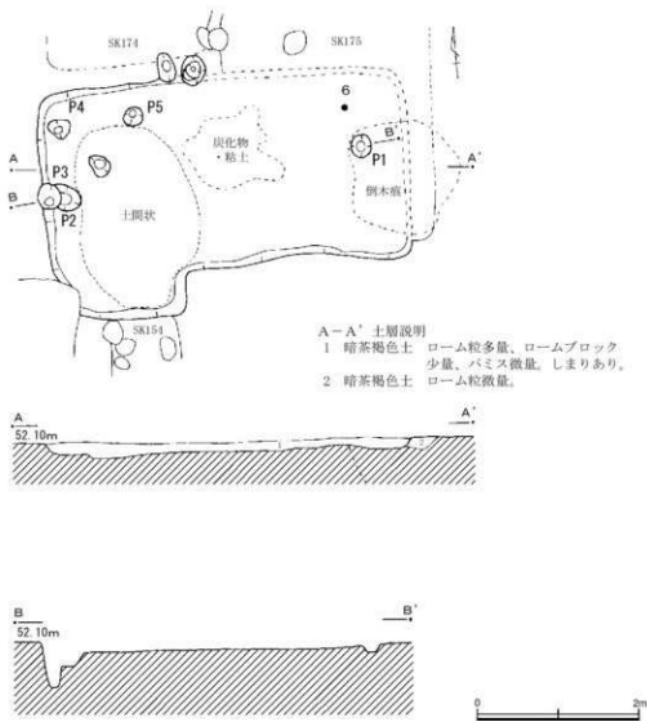
第81図 8号住居跡出土遺物実測図(1)



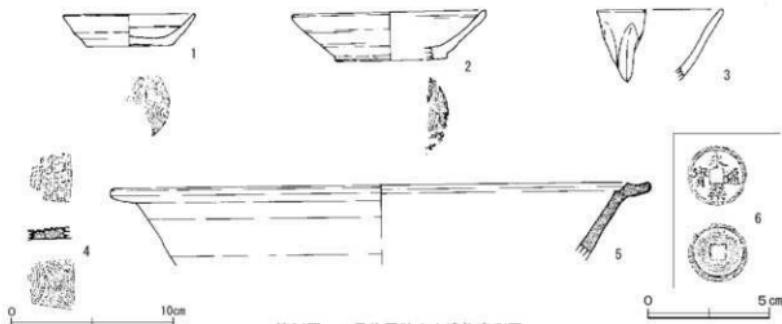
第82図 8号住居跡出土遺物実測図(2)

第8号住居跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵壺	(16.4)	4.6	(13.8)	灰色	普通	石英、黒色粒、長石	40%	図示、底部全面回転置けり未野
2	須恵蓋	(17.0)	(5.8)	-	暗灰色	良好	石英、黒色粒、長石	40%	図示、未野
3	壺	12.4	3.6	-	褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒	85%	図示、磨滅あり
4	壺	15.4	4.6	-	橙褐色	普通	角閃石、白色粒、酸化鉄粒	95%	図示、磨滅あり
5	皿	(16.0)	3.1	-	明橙褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	40%	図示
6	皿	(18.1)	(3.9)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	40%	図示
7	甌	(21.6)	14.0	孔径3.0	暗橙褐色	普通	石英、角閃石、長石、砂粒	35%	図示
8	甌	(19.2)	(9.7)	-	橙褐色	良好	雲母、角閃石、酸化鉄粒	図示20%	図示
9	甌	24.2	(22.0)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	図示40%	図示
10	甌	-	(2.5)	4.5	灰黒褐色	普通	石英、長石、パミス	図示70%	覆土
11	甌	(20.3)	(16.2)	-	橙褐色	良好	石英、雲母、酸化鉄粒	図示40%	図示
12	甌	(21.2)	(6.0)	-	明褐色	普通	石英、角閃石、雲母	図示15%	図示
13	甌	(20.8)	(8.8)	-	にぶい橙褐色	普通	石英、角閃石、チャート	図示15%	覆土
14	甌	17.1	(15.5)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、酸化鉄粒	80%	図示
15	甌	(19.1)	(10.3)	-	橙色	やや悪	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	図示30%	覆土
16	甌	(23.5)	(8.3)	-	褐色	良好	石英、角閃石、雲母、酸化鉄粒	図示35%	図示
17	甌	-	(12.0)	-	灰橙～灰黒色	普通	石英、長石、角閃石、パミス	図示80%	図示



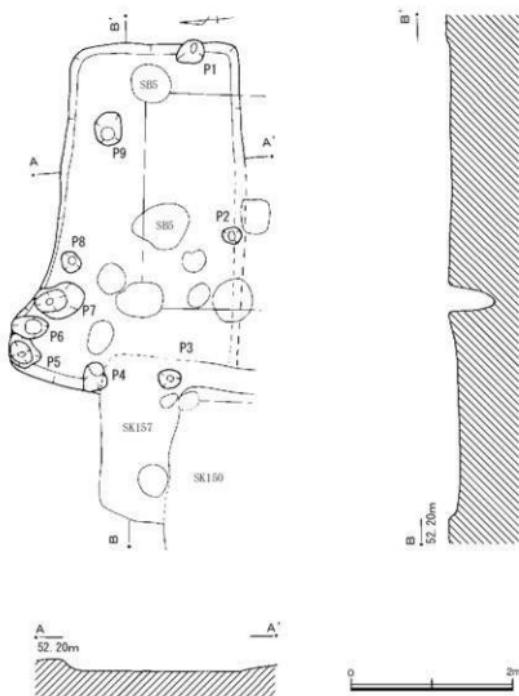
第83図 9号住居跡実測図



第84図 9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	(8.0)	2.0	(5.4)	明褐色	普通	雲母、微砂粒	20%	覆土、底部回転糸切り未調整口縁部に煤付着
2	カワラケ	(11.8)	(3.0)	(7.0)	灰橙色	普通	雲母、赤色粒	図示30%	覆土一括とSK153覆土と接合底部に板目状圧痕
3	青磁蓮弁碗	-	-	-	灰緑色	良好	緻密	破片	覆土、龍泉窯系
4	鉢皿	-	-	-	灰白色	良好 堅緻	石英、黒色微粒子	破片	覆土、瀬戸
5	灰釉折縁深皿	(33.0)	(4.8)	-	灰白色	良好	緻密	図示10%	覆土、瀬戸
6	銭貨	計測値は別表の銭貨觀察表を参照							図示、永楽通宝(明)

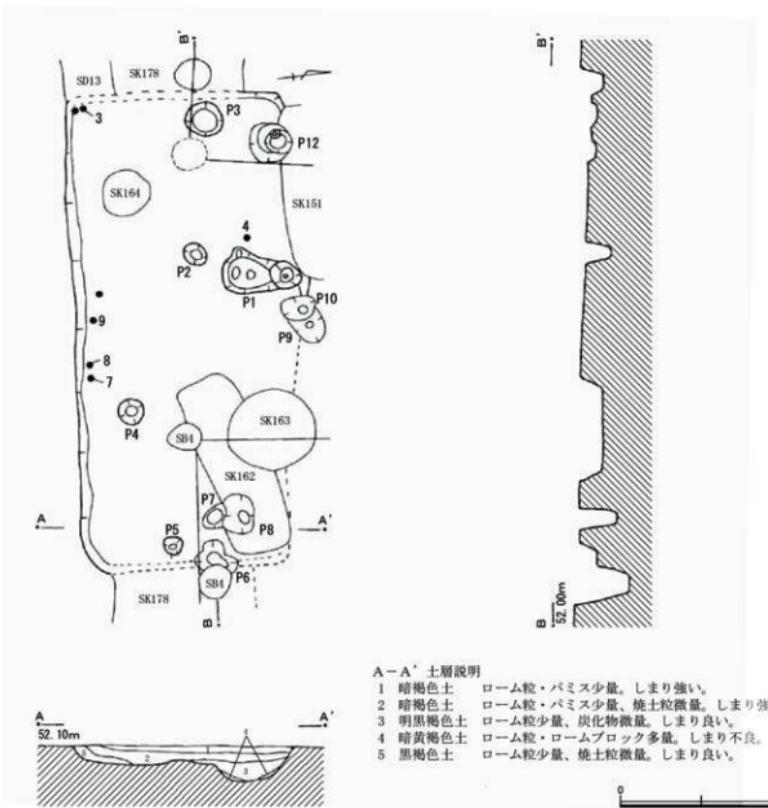


第85図 10号住居跡実測図

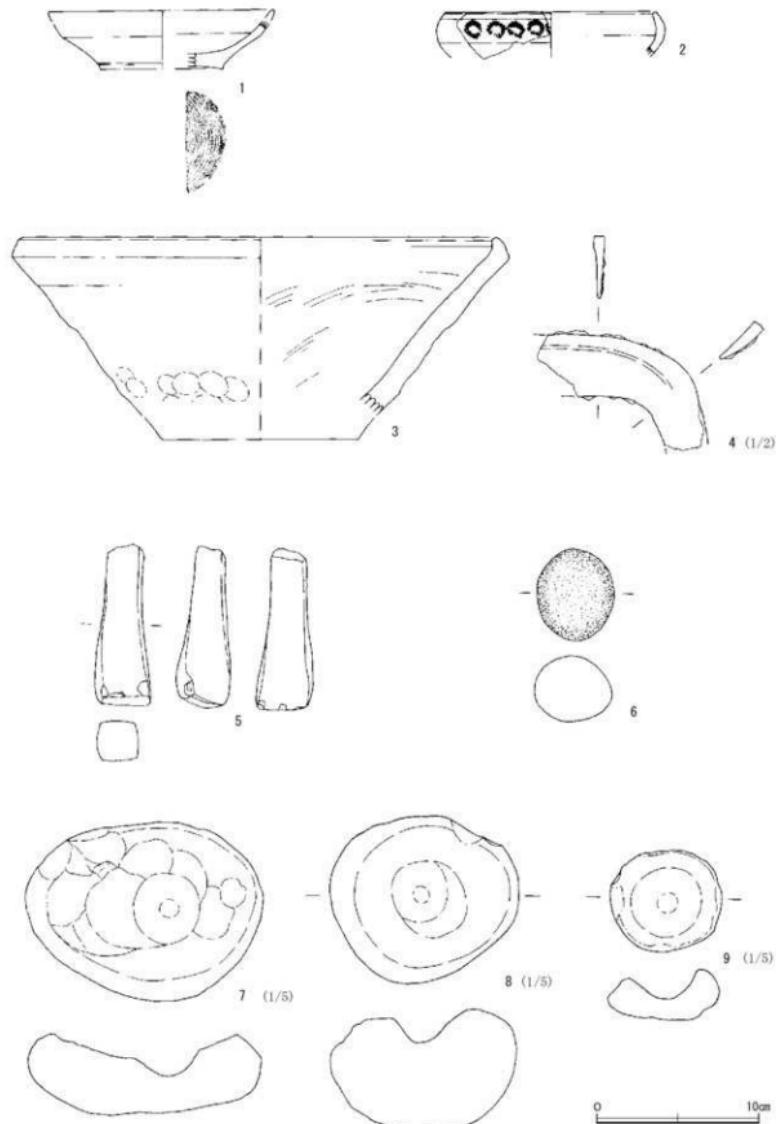
壁柱穴であろうか。

出土遺物はカワラケ、香炉、片口鉢、鉄製品、砥石、磨痕石、加工礫（第87図1～9）がある。1はカワラケで底径と口径に差があり、体部下端から内湾ぎみに立ち上がる。2は瓦質の香炉で口縁部外周にスタンプの菊花文を施す。3は瓦質の

片口鉢で酸化焰焼成である。4の鉄製品は搔籠か鎌と思われる。5は凝灰岩製の砥石、6は磨痕のある円礫、7～9は片面を窪ませた角閃石安山岩の加工礫である。柱穴内の根固め石か。時期は14世紀中葉～15世紀前半と考えられる。



第86図 11号住居跡実測図



第87図 11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物觀察表

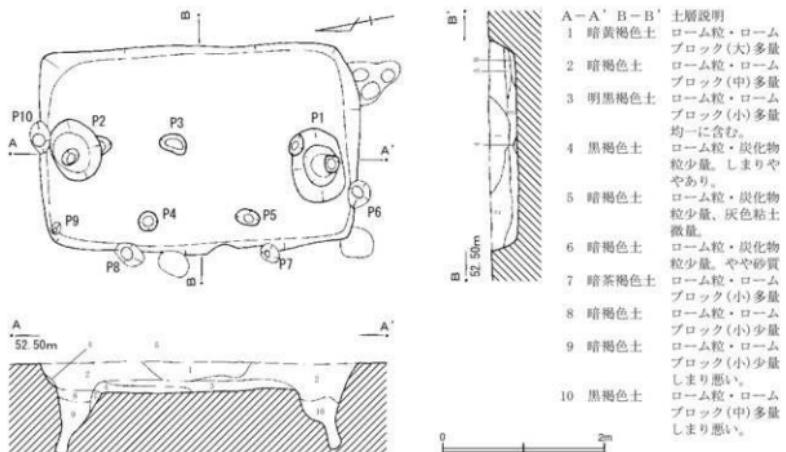
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	-	(2.9)	(7.5)	灰褐色	普通	石英、長石、角閃石	図示20%	覆土、底部回転糸切り木調整
2	香炉	(13.0)	(2.8)	-	灰色	普通	石英、長石	図示10%	覆土、瓦質、菊花文スター
3	片口鉢	(29.0)	(11.0)	-	暗褐色	やや墨	石英、長石、角閃石、チャート	図示20%	図示、瓦質(酸化焰)剥離、煤付着
4	縁鉢?	長さ6.9cm	幅2.6cm	厚さ0.5cm	重さ21.8g				破片
5	碗	長さ10.0cm	幅3.3cm	厚さ3.5cm	重さ123.8g	石質	凝灰岩		覆土
6	球形磨痕石	長さ5.8cm	幅4.5cm	厚さ4.0cm	重さ138.1g	石質	石英安山岩		覆土
7	加工磚	長さ24.5cm	幅18.4cm	厚さ8.4cm	重さ2.37kg	石質	角閃石安山岩		図示、片面が凹む、根固め石
8	加工磚	長さ19.5cm	幅17.3cm	厚さ12.5g	重さ2.31kg	石質	角閃石安山岩		図示、片面中央が凹む、根固め石
9	加工磚	長さ11.5cm	幅10.5cm	厚さ5.3cm	重さ260.0g	石質	角閃石安山岩		図示、片面中央が凹む、根固め石

第12号住居跡（第88図）

第12号住居跡はE-6グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸3.95m、短軸2.55m、深さ0.35mである。主軸方位はN-13°-Eを示す。床面は平坦でよく締まっていた。埋土はロームブロックを多量に含む一括埋め戻しである。ピットは10基検出された。P1、P2は主軸

を通り斜めに掘り込まれている斜行ピットで、主柱穴と考えられる。P4、P5は対になるピットで、出入り口に関わるピットか。P6～P10は壁柱穴と考えられる。

出土遺物は、瓦質の片口鉢の底部（第89図1）が出土している。酸化焰焼成で厚みがある。時期は14～15世紀代と考えられる。



第88図 12号住居跡実測図



第89図 12号住居跡出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表

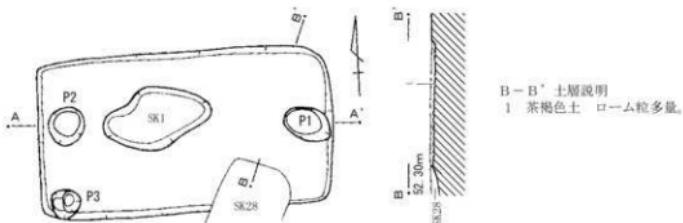
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	片口鉢	-	(3.8)	(11.2)	灰褐色	普通	黒色粒、赤色粒、精良	回示35%	覆土、瓦質(酸化端)、底部回転各切り未調整

第13号住居跡（第90図）

第13号住居跡はF-5・6グリッドに位置する。重複する第28号土坑に切られている。平面形態は長方形で、規模は長軸3.7m、短軸2.0m、深さ0.05～0.10mである。主軸方位はN-88°～Wを示す。床面はほぼ平坦である。ピットは3基検出した。P1、P2は主軸線上にあり主柱穴と

考えられる。また床面に長さ1.3m、幅0.8m、深さ0.1mの浅い掘り込み（SK1）が検出されたが、とくに焼土や炭化物は確認されなかった。

出土遺物はなかった。時期は第1号火葬土坑に切られている第28号土坑より古いことから14～15世紀頃と推定される。



第90図 13号住居跡実測図

井戸跡

井戸跡は調査区から3基検出した。調査区中央に1基、南東部に2基であった。規模は第1号井戸跡が直径約5mで最も大きく、第8号溝跡を切って掘削されていた。いずれも素掘りの井戸で、木枠や石組みは検出されなかった。出土遺物は第1号井戸跡からカワラケ、古瀬戸の灰釉瓶、古銭が出土している。遺構の時期は出土遺物や、周辺の遺構の時期から中世のものと推定される。

第1号井戸跡（第91図）

第1号井戸跡はC-4・5、D-4・5グリッドに位置する。第8号溝と重複し、第1号井戸跡が新しいことが確認されている。

平面形態は不整円形で、断面は漏斗状と推定される。規模は長軸4.78m、短軸4.55m、深さは不明である。

出土遺物は覆土中層から多量の自然礫と加工礫、カワラケ、灰釉瓶、古銭が2点（第92図1～5）出土した。加工礫3は角閃石安山岩製で中央に穴が空けられている。カワラケ1は底部に板目状圧痕がある。灰釉瓶2は瀬戸産と思われる。古銭4、5は北宋銭と明銭であった。遺構の時期は中世と思われ、出土遺物から15世紀中～後半頃と推定される。

第2号井戸跡（第91図）

第2号井戸跡はF-5、G-5グリッドに位置する。調査区の南東にあり、第4号溝に隣接する。平面形態は円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.47m、深さ1.14mを測り、底面は平坦である。覆土上層に自然礫が大量に投棄されていた。

出土遺物は、土師質鉢（第93図1）底部の破片

で片口鉢と思われる。井戸跡としたが、底面が平坦で漏斗状に水脈まで掘られておらず、別の遺構の可能性もある。時期は15世紀代と思われる。

第3号井戸跡（第94図）

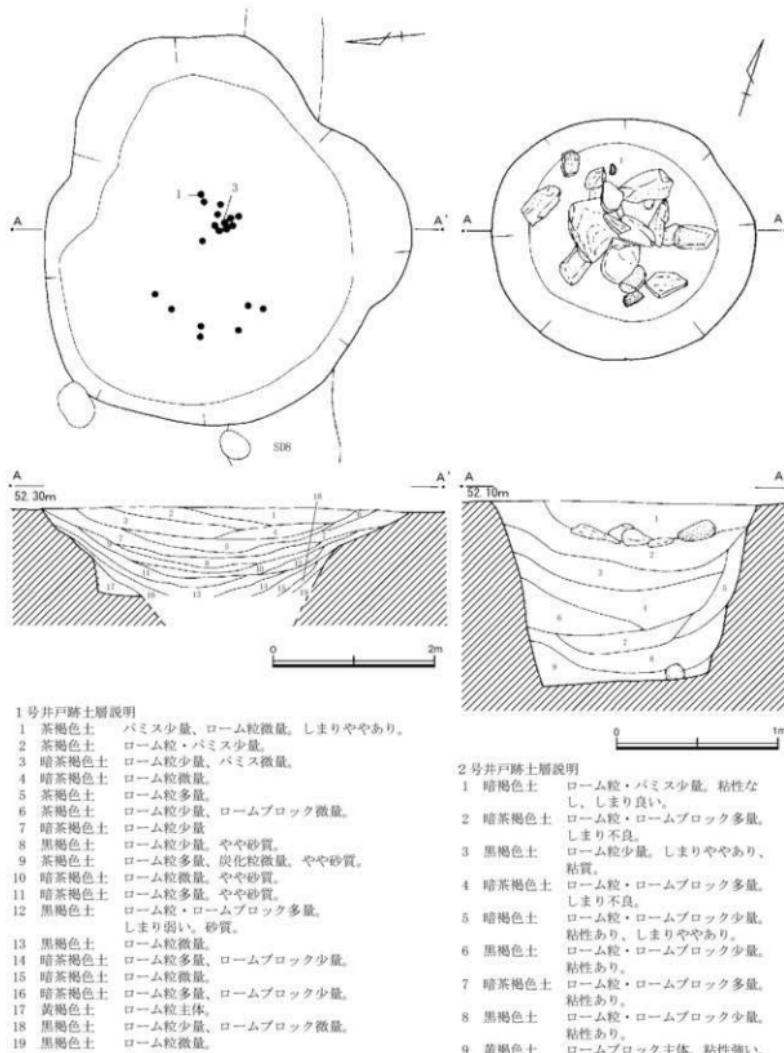
第3号井戸跡はG-6グリッドに位置する。遺構の南側が調査区外のため正確な規模は不明であるが、直径2.23m、円形の井戸跡と推定される。深さは全掘していないため不明である。底面は漏斗状に掘り込まれている。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、中世と考えられる。

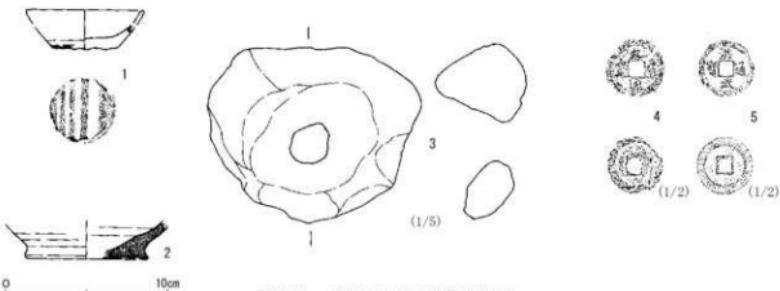
溝 跡

調査区からは合計20条の溝跡が検出された。溝の性格については、一部は墓坑を含む土坑群と住居跡、掘立柱建物跡に関わる区画溝の可能性がある。第8号溝跡は調査区北西部にある土坑群と掘立柱建物跡・住居跡を囲むように走行しており、また第1、3、4、6号溝跡は、第1～7、12、13号住居跡と第1、2号掘立柱建物跡を4重に囲むように走行している。掘立柱建物跡や住居跡が同一時期に存在したとは考えられないが、溝の存続した時間幅の中で構築、廃棄された結果このような形になったものと推定される。

出土遺物は第1号溝跡からカワラケ、第6号溝跡からカワラケ、片口鉢、土鍋、土釜、石臼、板碑、加工礫が出土した。混入品を除いて出土遺物は15世紀代のものが中心であった。時期は第8号溝跡が最も古く15世紀後半までには埋没していたものと思われ、第1、3、4、6号溝跡は15世紀後半までは機能していたものと考えられる。



第91図 1・2号井戸跡実測図



第92図 1号井戸跡出土遺物実測図

第1号井戸跡出土遺物観察表

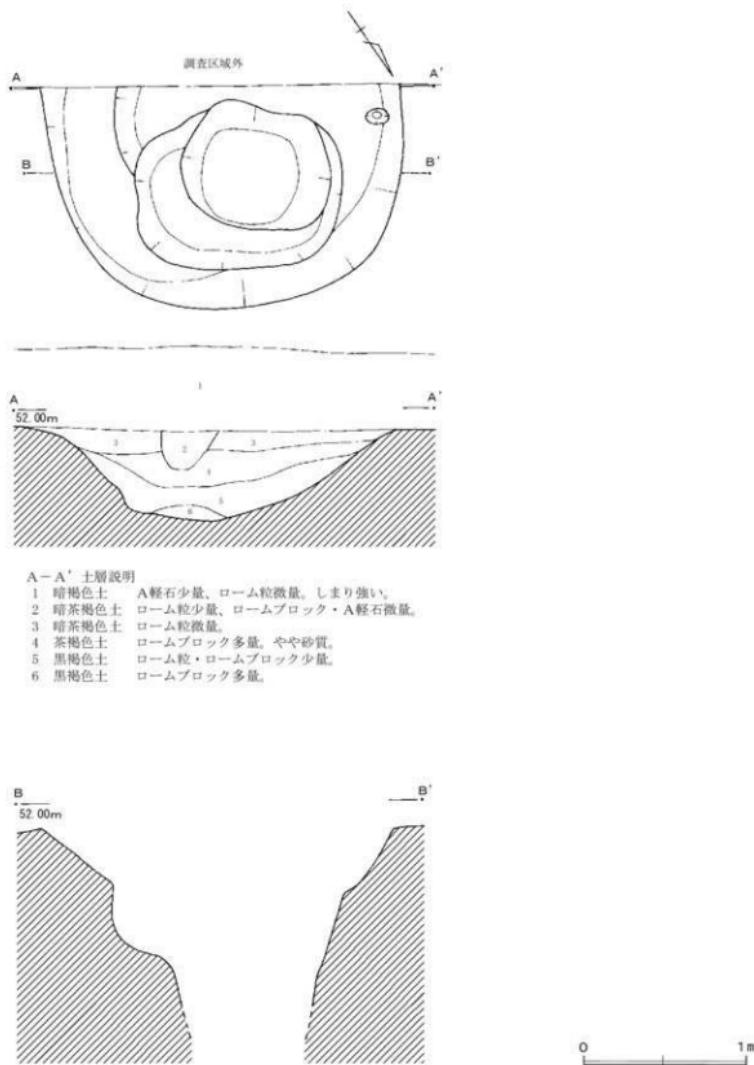
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	-	(1, 6)	4, 0	灰黄赤色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示80%	図示、底部に板目状汙痕
2	灰釉瓶頸	-	(2, 5)	(7, 2)	淡灰色	淡灰色	黑色微粒子	図示15%	覆土
3	加工窯	長さ22, 0cm	幅18, 0cm	厚さ9, 4cm	重さ1, 69kg	石質 角閃石安山岩			図示、中央部穿孔、根固め石
4	銭貨	計測値は別表の銭貨観察表を参照							覆土、元豐通宝(北宋)
5	銭貨	計測値は別表の銭貨観察表を参照							覆土、洪武通宝(明)



第93図 2号井戸跡出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	土師質鉢	-	(2, 1)	(7, 4)	暗灰褐色	普通	雲母、微砂粒	図示40%	覆土、底部回転系切り未調整



第94図 3号井戸跡実測図

第1号溝跡（第95図）

第1号溝跡はE～H-6～8グリッドに位置する。南端から北東方向へ延び、E-7グリッドで東へ屈曲し調査区外へ続く。規模は長さ39.7m、幅0.40～1.30m、深さ0.18～0.22mである。重複する土坑群より新しく、第1号住居跡、第1号掘立柱建物跡より古い。

出土遺物はカワラケ、須恵器高台塊、常滑鉢の残片、鉄製品破片（第96図1～6）が出土している。カワラケ1～3は小形品で、口径と底径の差が小さく、体部の開きが弱いタイプである。時期は15世紀前半～中葉と考えられる。

第2号溝跡（第98図）

第2号溝跡はF・G-6グリッドに位置する。南北に延び、重複する第9号土坑より新しい。断面は薺研形で埋土は黒褐色土である。規模は長さ7.3m、幅0.55～0.65m、深さ0.50～0.56mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、中世と考えられる第9号土坑を切っていることから、中世以降と考えられる。

第3号溝跡（第100図）

第3号溝跡はE-6～3、F・G-6グリッドに位置する。規模は長さ約43m、幅0.7～0.9m、深さ0.4～0.5mで、断面はU字形または船底形である。溝は調査区南側から北へ延び、E-6・7グリッドで東へ約80°屈曲して調査区外へ続く。第1号溝跡の外側にほぼ沿って延びていることから関連する遺構の可能性がある。中世土坑群と第2・4号住居跡、第19号溝跡と重複している。

出土遺物は須恵器壺・盤・長頸瓶・甕（第97図1～4）の破片が出土したが混入と思われる。時

期は15世紀後半と考えられる第4号住居跡に切られており、15世紀前半の土坑群より新しいことから、15世紀中葉と考えられる。

第4号溝跡（第101図）

第4号溝跡はD～G-5～9グリッドに位置する。調査区南側から北へ延び、D-6グリッドで東へ屈曲しD-8グリッドで浅くなり途切れる。規模は長さ約51m、幅0.2～0.4m、深さ0.25m～0.4mである。南北に走行する部分では1m程空けて第5溝跡と平行に延びており、同時期に掘削されたものか、関連あるものと考えられる。

出土遺物はなかった。時期は重複する中世土坑群より古いことから15世紀前半かそれ以前と考えられる。

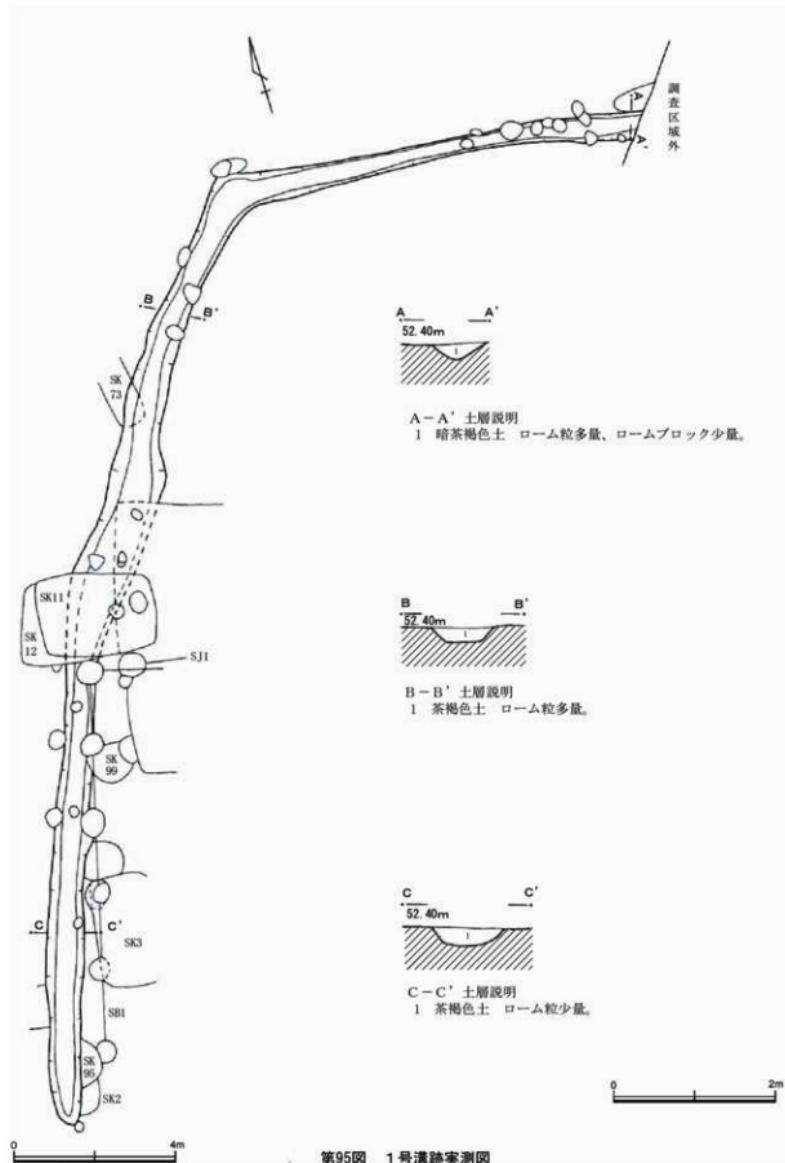
第5号溝跡（第102図）

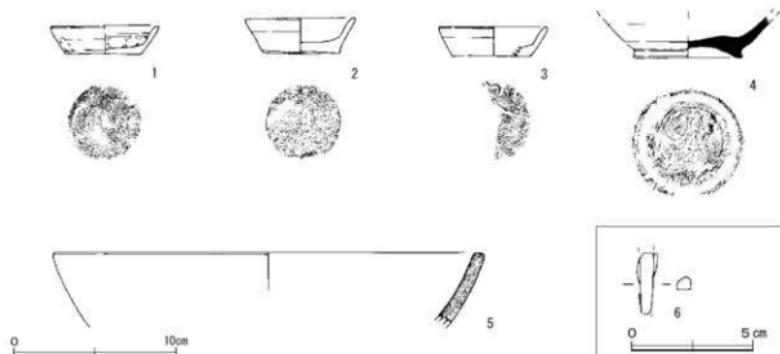
第5号溝跡はD～F-5グリッドに位置する。第4号溝跡と平行に南北に延び、南端は調査区外へ続く。重複する第33・34号土坑、第20号溝跡より新しい。規模は長さ25.4m、幅0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、第4号溝跡と同時期の可能性がある。

第6号溝跡（第103図）

第6号溝跡はD-4～9、E・F-4・5グリッドに位置する。D-5・6グリッドで溝幅を広げ、第8号溝跡と合流し東へ延びる。またD-8・9グリッドで2.5m程途切れさらに調査区外へ続く。途切れ部分は土橋の可能性がある。規模は全長約69m、幅0.8～1.5m、深さ0.2～0.4mである。断面は箱薺研または逆台形で、D-5グリッドの溝幅が最も広がる部分には多量の自然礫と共に加

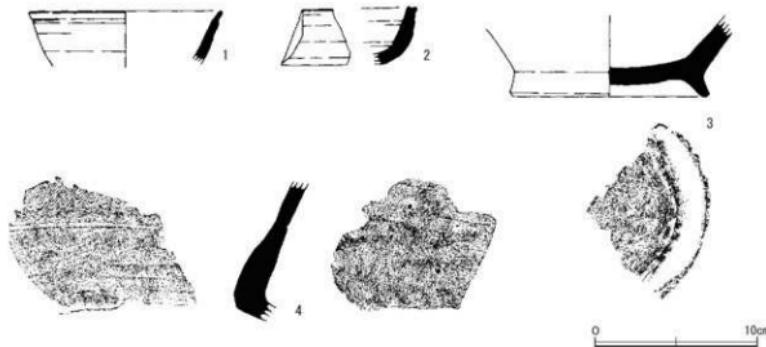




第96図 1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表

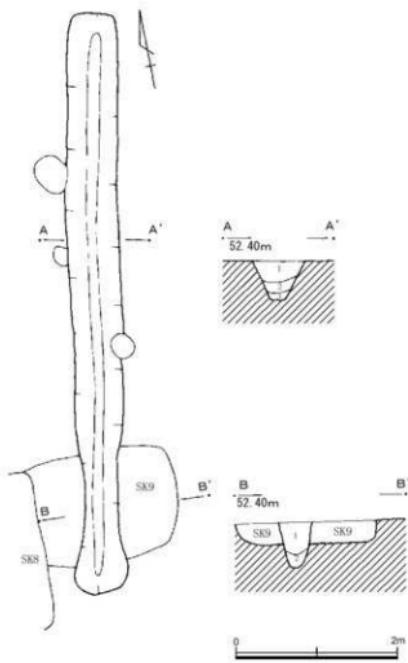
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	6.0	1.7	4.6	灰褐色	普通	雲母、微砂粒	100%	覆土、底部回転系切り未調整
2	カワラケ	6.0	2.1	4.6	暗褐色	普通	石英、雲母、角閃石、微砂粒	70%	覆土とSK4覆土と接合、底部回転系切り未調整
3	カワラケ	6.0	1.8	(4.8)	明褐色	普通	石英、雲母、角閃石、微砂粒	図示80%	覆土、底部回転系切り未調整
4	須恵高台壇	-	(2.6)	6.7	灰褐色	不良	石英、チャート、角閃石、青岩黑色粒	図示80%	覆土、着減あり、未野
5	鉢	(26.4)	(4.7)	-	暗灰赤褐色	良好	石英、長石	図示7%	覆土、常滑か?
6	棒状鉄製品	長さ2.5cm	幅0.6cm	厚さ0.5cm	重さ2.4g				破片 覆土、鐵錠の茎部か?



第97図 3号溝跡出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵壺	(11.8)	(3.3)	-	淡灰色	普通	微砂粒	図示7%	覆土、口縁部に沈殿。未野
2	須恵盤	-	-	-	明灰色	良好	石英、長石	破片	覆土、未野
3	須恵長颈瓶	-	(5.2)	(12.0)	にぶい灰褐色	良好	石英、長石、片岩	図示30%	覆土、未野
4	須恵甕	-	-	-	暗灰色	良好	石英、長石	破片	覆土、波状文3条

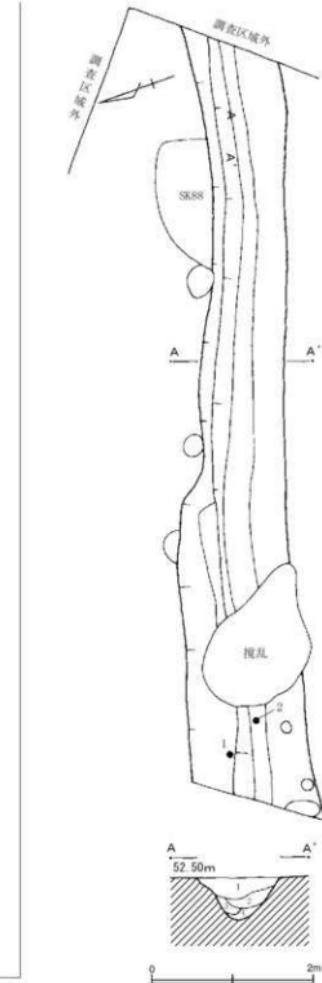


A-A' 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒少量、バミス微量。しまり良い。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまりやや弱い。
- 3 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり悪い。

B-B' 土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 2 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。

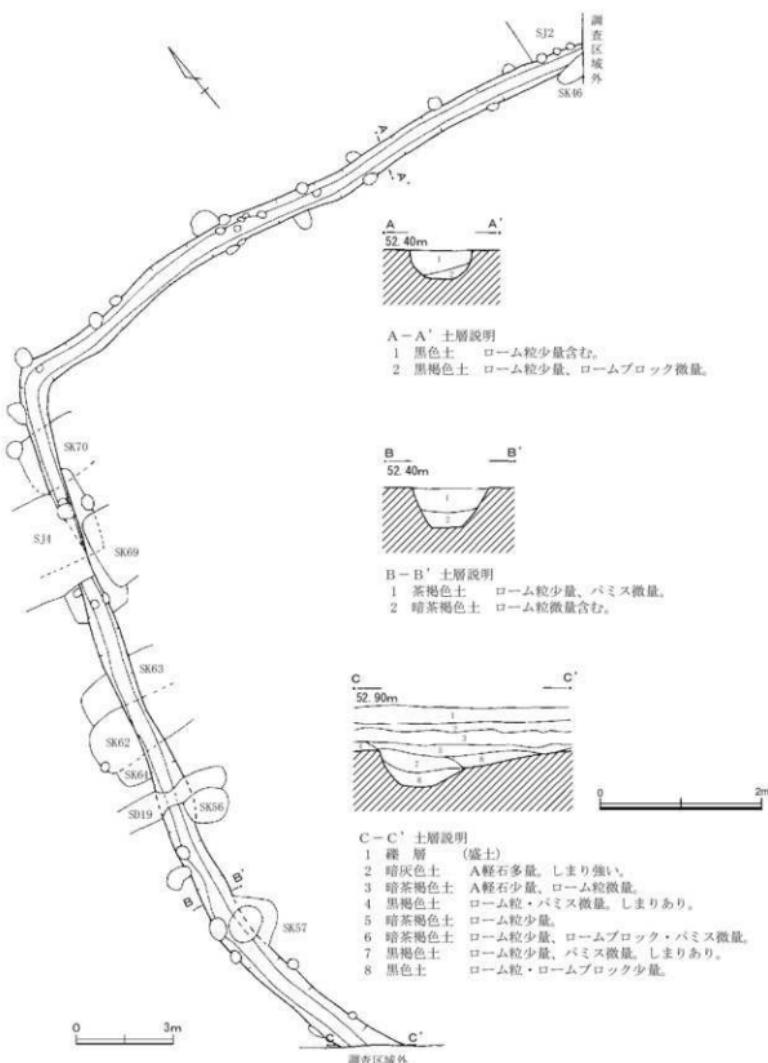


A-A' 土層説明

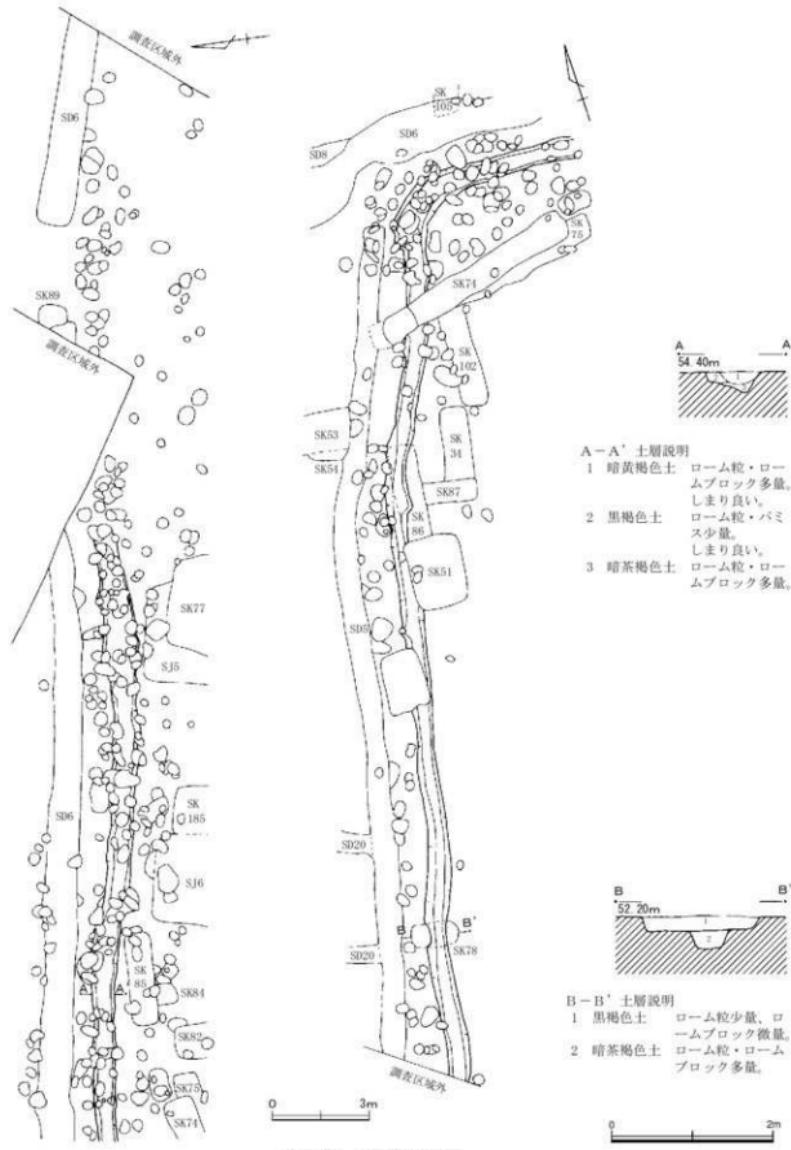
- 1 茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 2 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
- 3 暗黄褐色土 ロームブロック主体。粘性あり。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒少量。

第98図 2号溝跡実測図

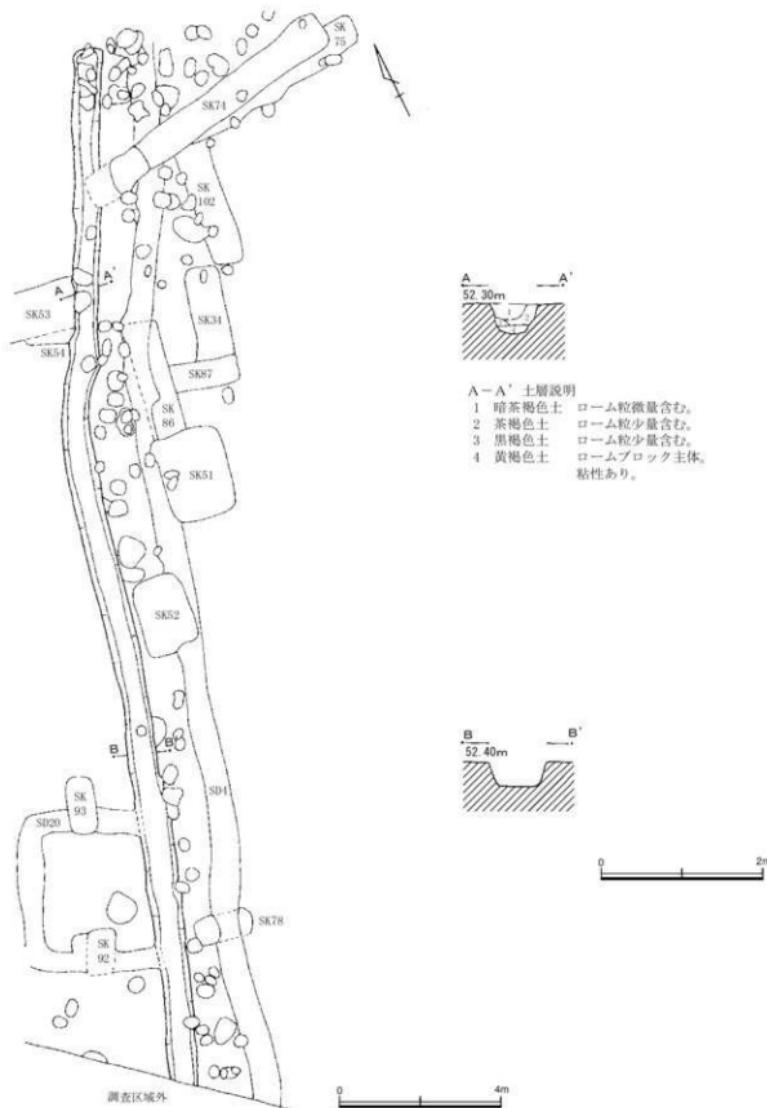
第99図 7号溝跡実測図



第100図 3号溝跡実測図



第101図 4号溝跡実測図



第102図 5号溝跡実測図

工礫、土器、板碑他が投棄されていた。

出土遺物はカワラケ、片口鉢、土鍋、土釜、砥石（第104図1～12）の他、石臼の上臼、角閃石安山岩の円礫の片面を削めた加工礫（第105図13～22）、種子が阿弥陀一尊の板碑（第106図23）がある。時期はカワラケの年代が15世紀中葉～後半と考えられることから、15世紀中頃～後半に機能していたものと思われる。

第7号溝跡（第99図）

第7号溝跡は調査区北東隅D-9グリッドに位置する。東西に走行し調査区外へ続く。重複する第88号土坑より新しい。規模は長さ約9.3m、幅0.9～1.5m、深さ約0.6mである。断面は葉研形で西側に向かい幅が広がる。

出土遺物は甕、擂鉢（第113図1、2）がある。甕1は在地産の瓦質甕の底部で、2は瀬戸産の鉄釉擂鉢である。時期は15世紀中葉と考えられる。

第8号溝跡（第107・108図）

第8号溝跡はC-D-2～5グリッドに位置する。西側は調査区外から南北に延び、D-2グリッドで東へ直角に屈曲し第6号溝跡と合流する。またD-4・5グリッドで第1号井戸跡と重複し、切り合い関係から第8号溝跡が古いことが確認されている。規模は全長約39.5m、幅0.6～1.2m、深さ0.3～0.45mである。

出土遺物は鍵金具とみられる鉄製品（第113図3）が出土したが混入品の可能性がある。時期は第1号井戸跡との重複関係から、15世紀後半までには埋没していたものと考えられる。

第9号溝跡（第109図）

第9号溝跡はD-2～5グリッドに位置する。

東西に走行し第8・10・12号溝とほぼ平行に延びる。第27号土坑と重複し、西側端部で第12号溝跡と接する。規模は長さ22.7m、幅0.7～1.1m、深さ0.1～0.37mである。

出土遺物は瓦質片口鉢、常滑甕、古瀬戸深皿、須恵器甕（第113図4～7）がある。4は在地産の片口鉢。6の古瀬戸深皿は刷毛塗りで燃土の足が付く。折縁深皿の底部と思われる。7の須恵器甕は混入である。時期は15世紀前半～中葉と考えられる。

第10号溝跡（第109図）

第10号溝跡はD-3・4グリッドに位置する。第8・9・12号溝跡とほぼ平行に延び、西側端部で第8号溝跡と重複する。切り合い関係から第8号溝跡より古いことが確認されている。規模は長さ14.7m、幅0.3～0.6m、深さ0.2～0.4mである。

出土遺物はなく、時期は不明確であるが第8号溝跡以前のそれほど遠くない時期に機能していたものと考えられる。

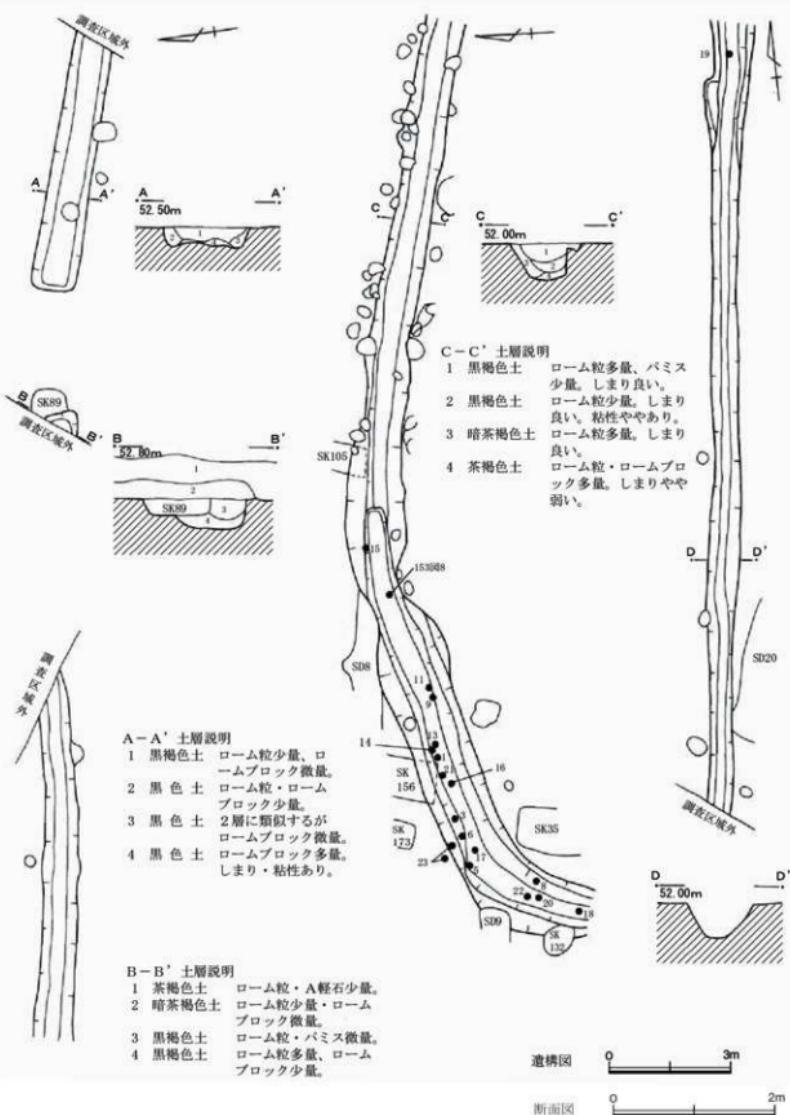
第11号溝跡（第110図）

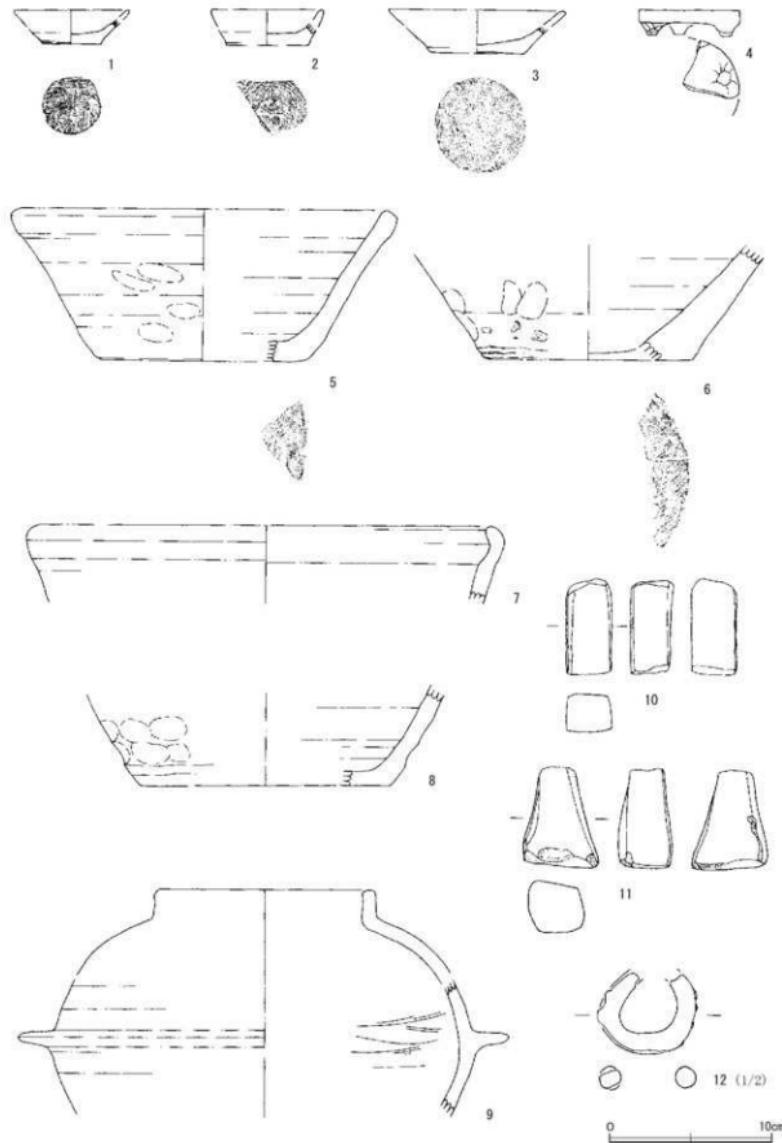
第11号溝跡はC-2、D-2・3・4グリッドに位置する。第8・13号溝跡と重複し、新旧は不明だが走行方向はほぼ同じである。規模は長さ約16m、幅0.35～0.9m、深さ0.4mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確だが第8号溝跡の時期に近いものと考えられる。

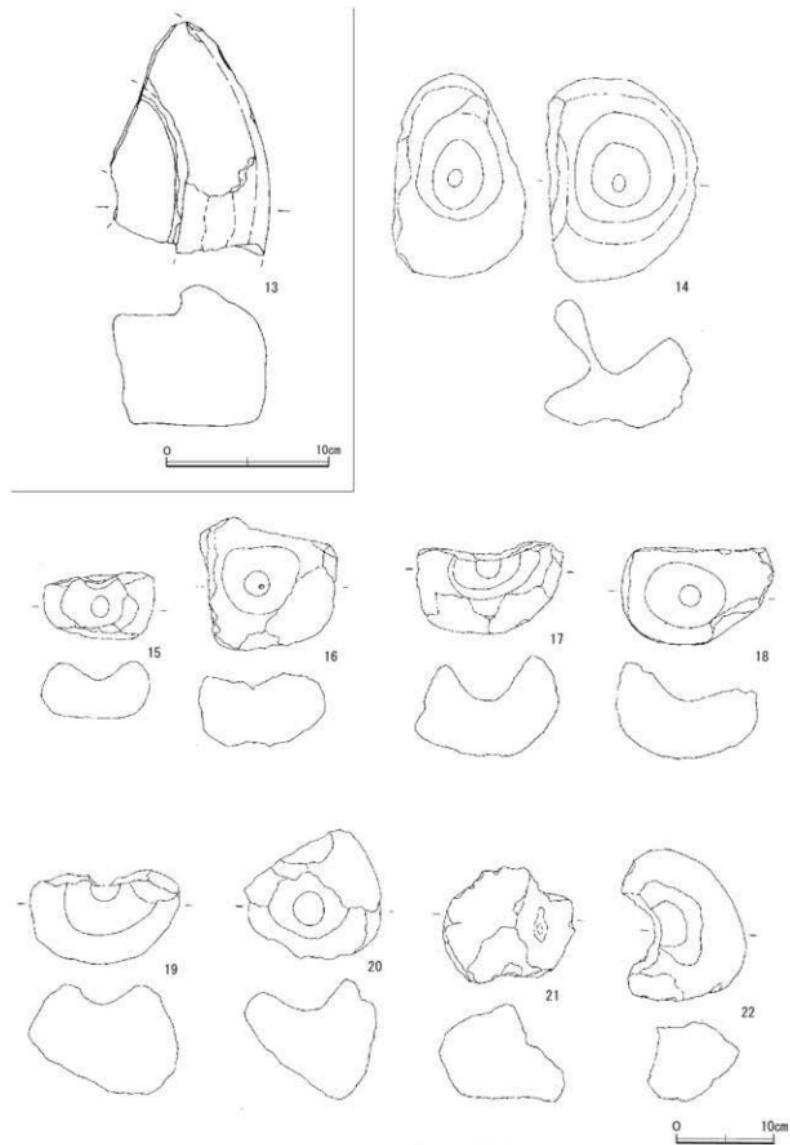
第12号溝跡（第109図）

第12号溝跡はD-2・3・4グリッドに位置する。第9号溝跡と第10号溝跡の間にあり、西端部で第9号溝跡と重複する。新旧は不明である。規模は長さ約17.3m、幅0.6～0.9m、深さ0.2～0.4

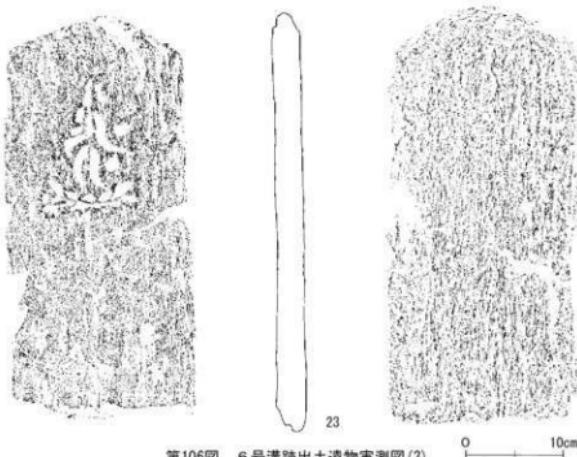




第104図 6号溝跡出土遺物実測図(1)



第105図 6号溝跡出土遺物実測図(2)



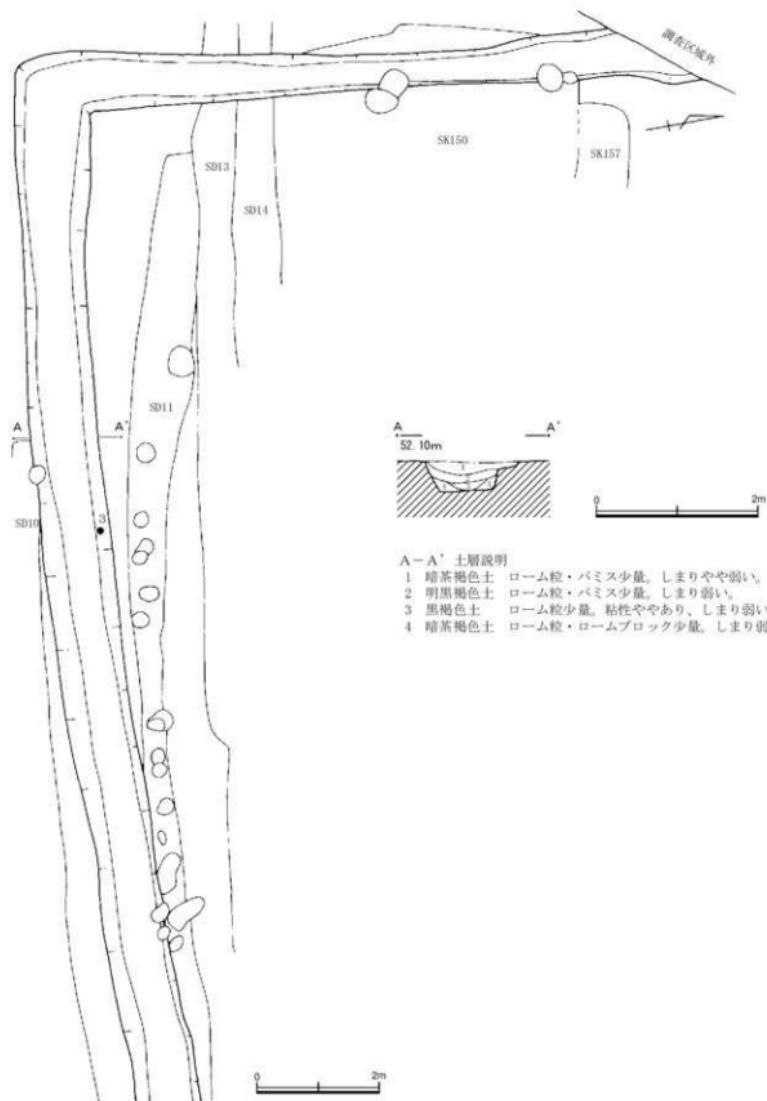
第106図 6号溝跡出土遺物実測図(3)

第6号溝跡出土遺物観察表

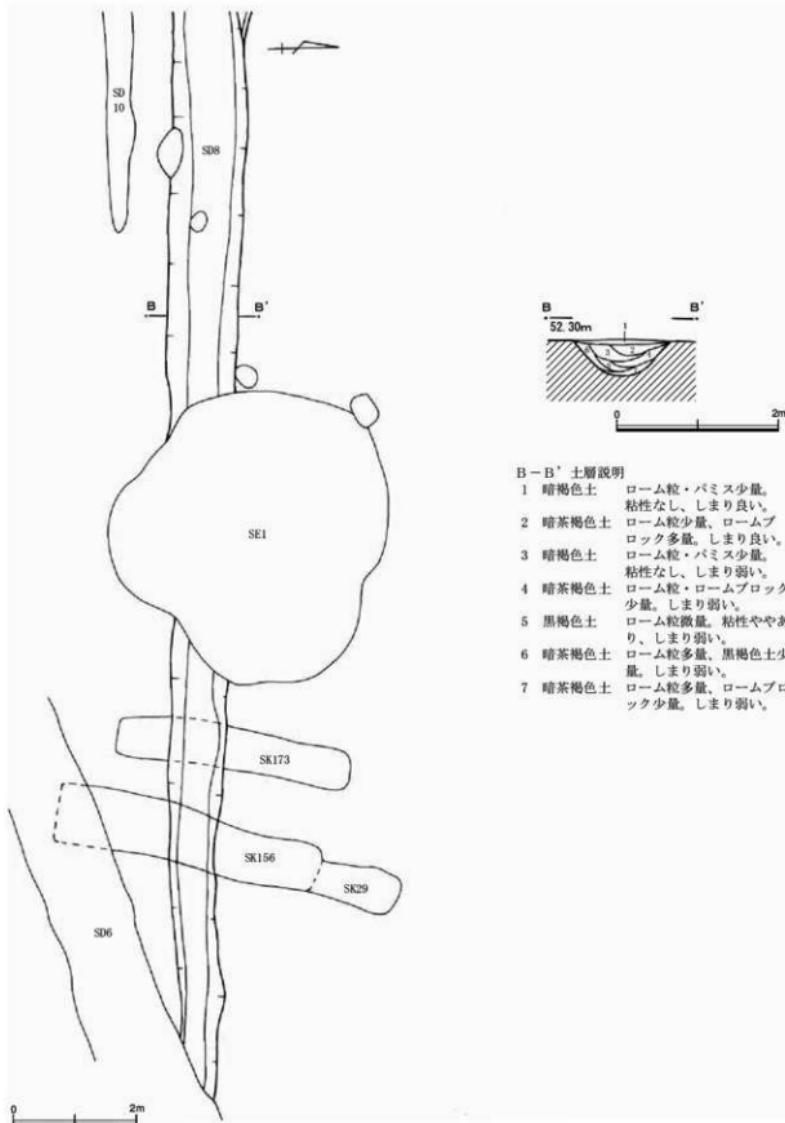
番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	カワラケ	-	(1.5)	3.7	灰褐色	普通	石英、雲母、角閃石	図示90%	図示、底部回転糸切り未調整、板目状圧痕。復数箇所付着
2	カワラケ	-	(1.5)	(5.0)	灰褐色・黒褐色	普通	石英、雲母、角閃石	図示30%	図示、底部回転糸切り未調整
3	カワラケ	-	(1.7)	5.8	灰赤褐色	普通	雲母、角閃石	図示90%	図示、底部回転糸切り未調整、板目状圧痕。外面に煤付着
4	不明	直径(6.3)	(1.4)	-	灰白色	やや悪	砂粒	図示20%	覆土、瓦質、台状
5	片口鉢	(22.5)	(9.3)	(12.8)	明灰色	良好	石英、チャート	図示20%	図示、瓦質、在地
6	片口鉢	-	(7.1)	(13.2)	淡灰色	普通	長石、片岩	図示20%	図示、瓦質、在地
7	土鍋	(27.8)	(4.8)	-	暗灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示5%	図示、瓦質、在地
8	土鍋	-	(6.3)	(15.5)	暗灰色	普通	石英、長石	図示25%	図示、瓦質、在地
9	土釜	-	(8.6)	-	黒褐色	やや悪	石英、長石、細繊	図示10%	図示、土質質、在地
10	砾石	長さ5.9cm	幅2.8cm	厚さ2.7cm	重さ73.2g	石質 緩凝岩	-	-	覆土
11	砾石	長さ6.2cm	幅4.8cm	厚さ3.3cm	重さ110.5g	石質 緩凝岩	-	-	図示
12	不明鉄製品	直径4.0cm	太さ0.9cm	重さ13.2g	-	-	破片	-	覆土、馬具の一部か、劍刺、表面が著しく
13	石臼	外径(29.0) 内径(19.0)	厚さ 9.1cm	重さ 1.24kg	石質 安山岩	-	20%	図示、	図示、表面2ヶ所凹む、根固め石
14	加工鉢	長さ20.4cm	幅15.2cm	厚さ12.4cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
15	加工鉢	長さ11.1cm	幅6.7cm	厚さ 5.3cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
16	加工鉢	長さ13.3cm	幅13.3cm	厚さ 7.0cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
17	加工鉢	長さ14.7cm	幅 8.1cm	厚さ 9.0cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
18	加工鉢	長さ15.0cm	幅 7.7cm	厚さ 7.7cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
19	加工鉢	長さ15.0cm	幅 8.9cm	厚さ 10.8cm	石質 角閃石安山岩	-	-	-	図示、表面中央が凹む、根固め石
20	加工鉢	長さ13.7cm	幅13.0cm	厚さ12.1cm	重さ859.7g	石質 角閃石安山岩	-	-	図示、片面中央が凹む、根固め石
21	加工鉢	長さ15.3cm	幅11.3cm	厚さ 9.4cm	重さ707.8g	石質 角閃石安山岩	-	-	図示
22	加工鉢	長さ15.2cm	幅 9.0cm	厚さ 8.0cm	重さ652.0g	石質 角閃石安山岩	-	-	図示、片面中央が若干凹む、根固め石
23	板碑	高さ42.5cm	幅18.8cm	厚さ2.9cm	主導(阿弥陀一尊)、蓮座、ギリック、石質 緩混片岩	-	-	-	図示、下部欠損、剥離

第7.8.9.13.15.18号溝跡出土遺物観察表

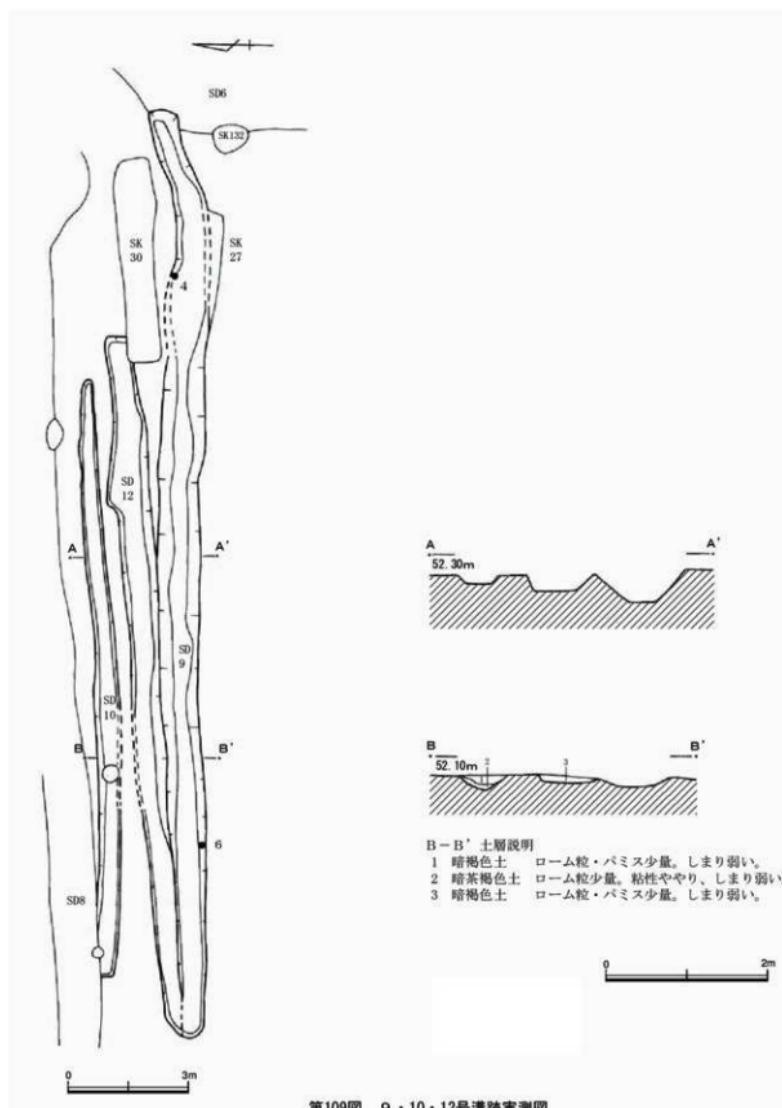
番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	甕	-	(6.5)	(10.0)	黒褐色	不良	石英、雲母、砂粒、粗い	図示30%	SD7図示、在地
2	鉄袖深鉢	-	(6.0)	(11.2)	茶褐色	良好	石英、長石、精良	図示25%	SD7図示、瀬戸、標目13条
3	鍍金貝?	長さ4.1cm	幅2.3cm	厚さ0.4cm	重さ10.0g	-	-	-	SD8図示、銅色駆れ
4	片口鉢	(27.7)	(6.0)	-	淡灰色	やや悪	石英、長石、微砂粒	図示10%	SD9図示、瓦質、在地
5	甕	-	-	-	暗赤褐色	良好	石英、長石	SD9、常滑	-
6	灰釉深鉢	-	(4.7)	(15.6)	淡黄灰色	良好	長石	図示10%	SD9図示、瀬戸、刷毛ぬり
7	須恵甕	(38.8)	(12.5)	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	図示20%	SD9、外面平行引き後手子 木野
8	片口鉢	-	-	-	明灰色	普通	石英、長石	破片	SD13、瓦質、在地
9	カワラケ	(8.0)	2.0	4.4	灰褐色	普通	砂粒	55%	SD13、底部回転糸切り未調整
10	カワラケ	-	(1.5)	4.3	灰褐色	普通	石英、雲母、微砂粒	図示65%	SD18、底部に板目状圧痕



第107図 8号溝跡実測図(1)



第108図 8号溝跡実測図(2)



第109図 9・10・12号跡実測図

mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが第9号溝跡と同じ15世紀代と考えられる。

13号溝跡（第110図）

第13号溝跡はC-2グリッドに位置する。第14号溝跡と並行し、第8号溝跡と直交する。また第8・11号住居跡、第150・178号土坑と重複する。規模は長さ8.7m、幅0.3～0.72m、深さ0.15～0.2mである。

出土遺物は瓦質片口鉢残片（第113図8）が出土した。時期は不明確だが第8号溝跡に切られていることから15世紀前半には埋設していたと考えられる。

第14号溝跡（第110図）

第14号溝跡はC-2グリッドに位置する。第13号溝跡と並行し、第8号溝跡と直交する。東側で第178号土坑に切られている。規模は長さ7.2m、幅0.2～0.75m、深さ0.18～0.2mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、切り合い関係から第8・13号溝跡より古く、14～15世紀前後に機能していたものと考えられる。

第15号溝跡（第111図）

第15号溝跡はB・C-3グリッドに位置する。南北に走行し第16・17号溝跡と並行する。第158号土坑と重複し、第15号溝跡が古いことが確認されている。規模は長さ10.5m、幅0.2～0.4m、深さ0.05mである。

出土遺物はカワラケ（第113図9）が1点出土している。体部の開きが大きく、口唇部が肥厚する。時期は15世紀中～後半と考えられる。

第16号溝跡（第111図）

第16号溝跡はB-3グリッドに位置する。第15号溝跡と並行し、南北に直線に延びる。南端で第179号土坑に切られる。規模は長さ4.2m、幅0.13～0.36m、深さ約0.1mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世以降と考えられる。

第17号溝跡（第111図）

第17号溝跡はB・C-3グリッドに位置する。第15号溝跡と並行し南北に延びる。南端で第155号土坑、第4号掘立柱建物跡と重複する。切り合い関係で第17号溝跡が古いことが確認されている。規模は長さ6.3m、幅0.37～0.47m、深さ0.1mである。出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第18号溝跡（第111図）

第18号溝跡はB-4グリッドに位置する。南側で第184号土坑と重複し、北側は調査区外へ続く。規模は長さ3.9m、幅0.52～0.67m、深さ約0.1mである。

出土遺物はカワラケ（第113図10）が出土した。口径と底径の差が少なく体部の開きが小さいもので、底部に板目状圧痕がある。時期は15世紀後半と考えられる。

第19号溝跡（第112図）

第19号溝跡はF・G-5・6グリッドに位置する。重複する第56号土坑、第3号溝跡より古い。断面は薺研形または船底形で、規模は長さ8.14m、幅0.78～0.95m、深さ0.4mである。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが、重複する第3号溝跡が15世紀中葉と考えられるこ

とから、第19号溝跡は15世紀中葉以前に掘削されたものと考えられる。

第20号溝跡（第112図）

第20号溝跡はF-4・5グリッドに位置する。第5号溝跡、第92・93号土坑と重複する。規模は南北4.0m、東西3.0m、溝幅0.48～0.65m、深さ0.3mで方形に廻る。この方形溝の性格については不明な点が多いが、中世の塚墓の可能性が考えられる。重複する第92・93号土坑が南北に溝に併せて掘られていることから、この方形溝を伴う塚を意識して掘られたか、或いは土坑と一体の遺構の可能性もある。時期については、出土遺物はなかつたが、土坑の存在から15世紀代に構築されたものと推定される。

火葬土坑

火葬土坑は全部で3基検出した。形態は一辺に突出部を付けた「T字形」火葬土坑で、調査区北西部から2基、南東部から1基検出された。規模はほぼ同じである。火葬土坑内からは骨片化した焼骨と多量の炭化物が検出された。遺構の時期は年代を特定できる出土遺物がないため不明確だが、土坑群との重複関係から中世後期の所産と推定される。

第1号火葬土坑（第114図）

第1号火葬土坑は、F-6グリッドに位置する。遺構北側で第28号土坑と重複し、第1号火葬土坑が新しいことが確認されている。

平面形態は隅丸長方形で、西壁に突出部を付け

た「T字形」火葬土坑である。突出部は緩やかな傾斜をもち底部に至る。規模は長軸1.35m、短軸0.76m、煙道0.14m、深さ0.17mである。主軸方位はN-15°-Wを示す。土坑から炭化物と共に骨片化した焼骨が出土した。骨片は細かく遺存量も2・3号火葬土坑に比べ少ない。土坑の西側壁が比較的よく焼けしまっていた。時期は中世と考えられる。

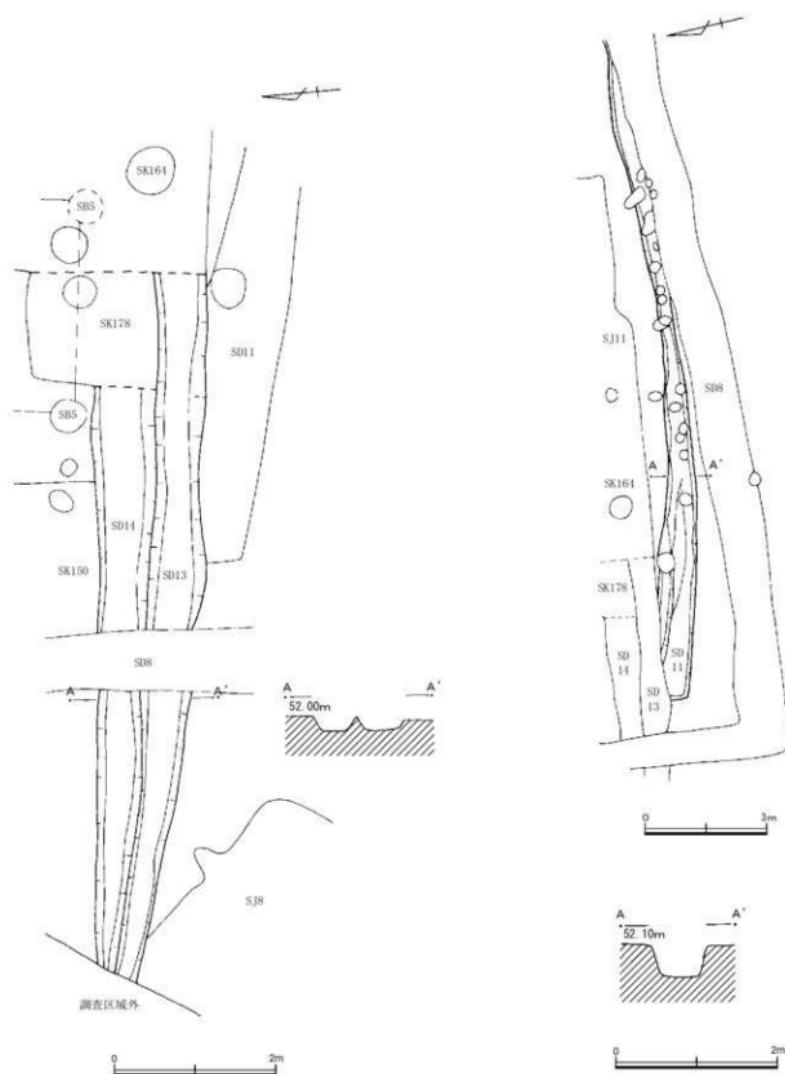
第2号火葬土坑（第114図）

第2号火葬土坑は、C-4グリッドに位置する。第118・139号土坑と重複し、第2号火葬土坑が新しいことが確認されている。

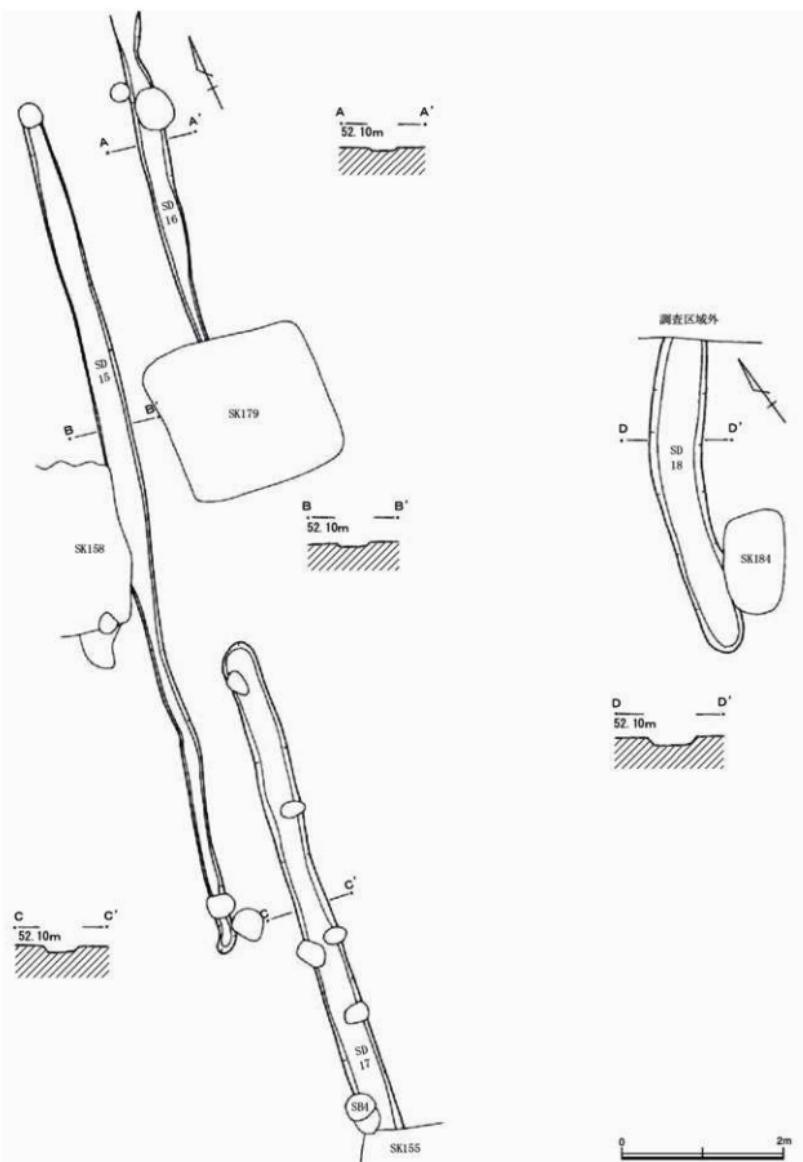
平面形態は長方形で、所謂「T字形」の火葬土坑と思われるが、突出部が崩れているため三角状になっている。規模は長軸1.11m、短軸0.65m、煙道0.31m、深さ0.15mである。主軸方位はN-38°-Eを示す。土坑から炭化物、焼土、灰と共に骨片化した焼骨が出土した。突出部と土坑中央部に硬く焼土化した部分が確認された。時期は中世と考えられる。

第3号火葬土坑（第115図）

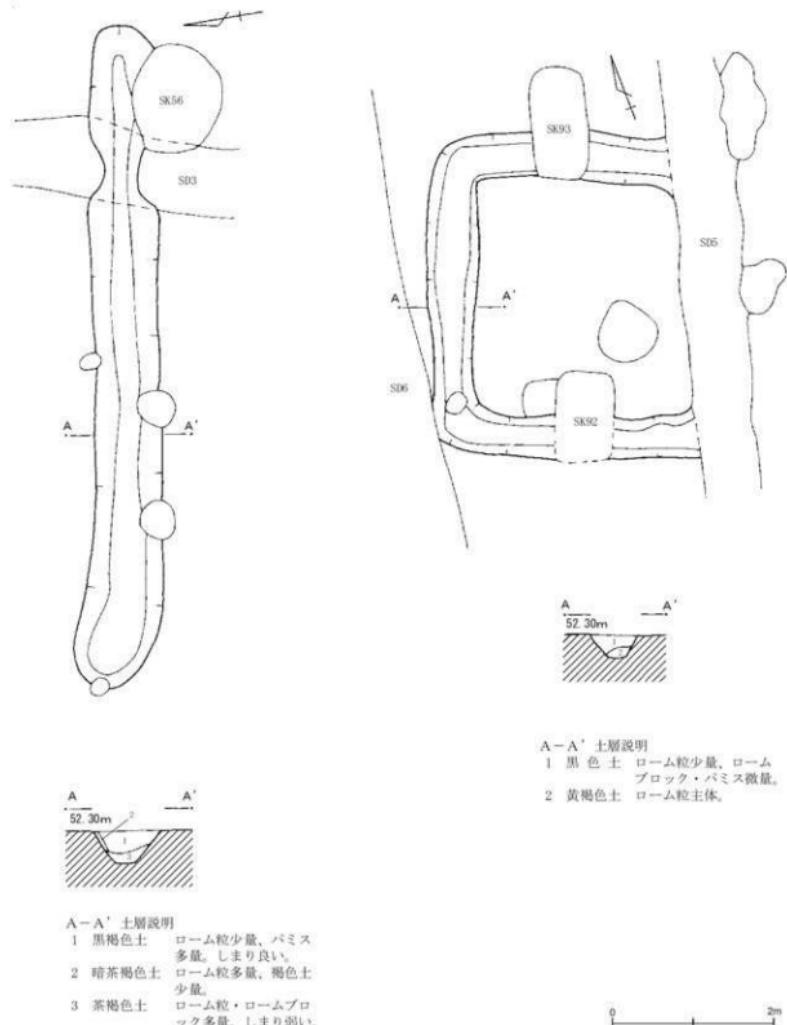
第3号火葬土坑はC-3グリッドに位置する。平面形態は長方形で、突出部を付けた「T字形」の火葬土坑である。突出部は第1・2号火葬土坑が西側に設置されているのに対し、第3号火葬土坑は東側に設置されていた。規模は長軸1.08m、短軸0.57m、煙道0.12m、深さ0.08mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。土坑から炭化物と焼土、灰と共に骨片化した焼骨が出土した。時期は中世と考えられる。



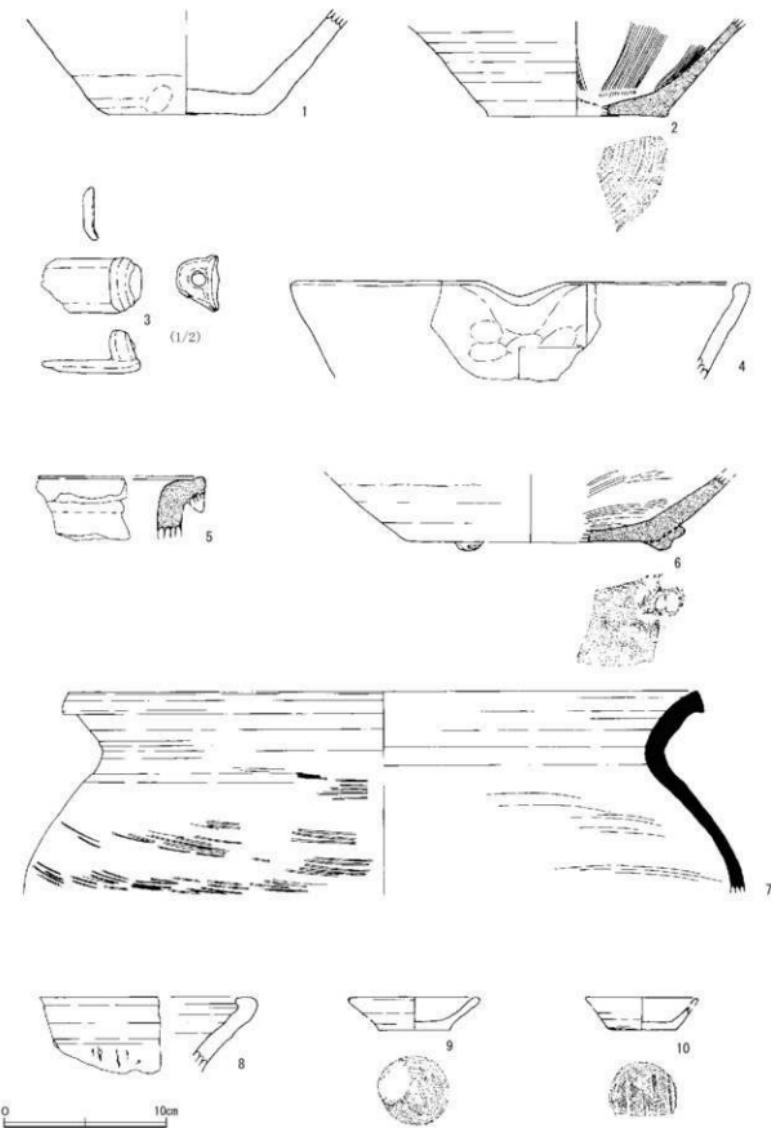
第110図 11・13・14号溝跡実測図



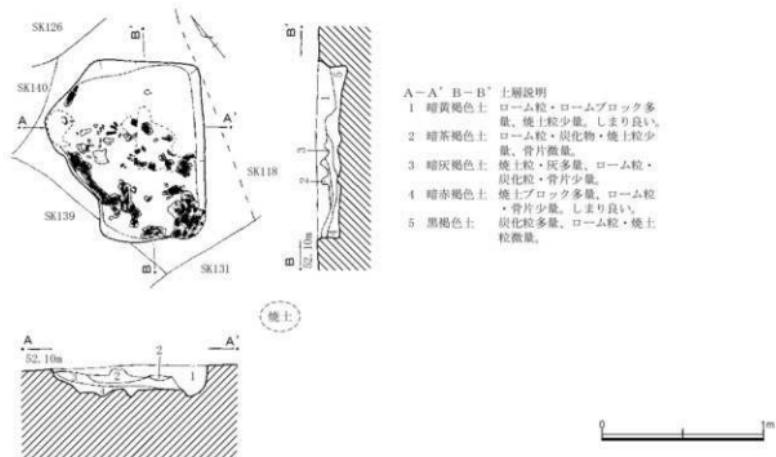
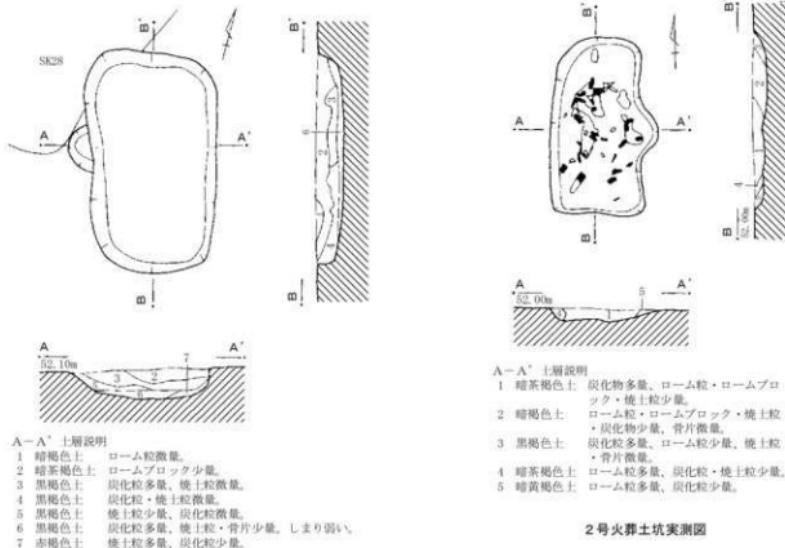
第111図 15~18号溝跡実測図



第112図 19・20号清跡実測図



第113図 7・8・9・13・15・18号溝跡出土遺物実測図



土 坑

調査区からは合計186基の土坑が検出された。形態は長方形、方形、円形を基本とし、長方形では一辺の比率が1:3以内のものと、1:4を超える超長方形、隅丸長方形がある。主軸は南北或いは東西に向く例が多い。その他、橢円形、隅丸方形、不整形に分かれる。

土坑の性格については不明確な点が多く断定できるものは少ない。六道鏡やカワラケ等が出土した墓坑の性格を有するもの、牛骨を検出した祭祀的なものや、從来から貯蔵穴と考えられていたもの等がある。墓坑と考えられる遺構の形態は長方形或いは隅丸長方形で、時期的には中世ないしそれ以降と考えられるものである。超長方形の土坑は從来芋穴や貯蔵穴、墓坑等と考えられていたものであるが、埋土がロームブロック混じりの一括埋め戻しであること、最下層に薄い黒色土が堆積していること、遺物がほとんど出土しないこと等が判明しているが、その遺構の性格を特定するまでは至っていない。

土坑の分布は一定のまとまりがあるようで、調査区の北東部、中央部、南東部に集中している。溝によってある程度区画されていると考えられる。土坑の分布域と中世住居跡の分布域が一部重なることから、時間幅があるものの墓域と居住区が一定期間共存していた可能性がある。

第1号土坑（第137図）

第1号土坑はH-7グリッドに位置する。平面形態は長方形を呈するものと思われる。土坑の東側が調査区外のため規模の詳細は不明であるが、残存規模は長軸1.10m、短軸0.84m、深さ0.31mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第2号土坑（第138図）

第2号土坑はG-H-6グリッドに位置する。土坑の西側が第1号溝跡と重複し北側が第95号土坑と重複する。切り合い関係から第2号土坑の方が古いことが確認されている。

平面形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。残存規模は長軸0.72m、残存短軸0.52m、深さ0.17mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第3号土坑（第139図）

第3号土坑はG-7グリッドに位置する。平面形態は長方形を呈する。主軸方位はN-3°-Eを示す。規模は長軸2.78m、短軸1.56m深さ0.34mである。北側で第5号土坑、東側で第4号土坑と重複し、また第1号掘立柱建物跡と重複する。切り合い関係から第3号土坑の方が新しいことが確認されている。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第4号土坑（第139図）

第4号土坑はG-7グリッドに位置する。西側で第3号土坑と重複し、切り合い関係から第4号土坑が古いことが確認されている。平面形態は略長方形を呈するものと思われる。規模は残存長1.66m、残存幅0.60m、深さ0.04mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第5号土坑（第139図）

第5号土坑はG-7グリッドに位置する。

平面形態は円形を呈するものと思われる。残存規模は長軸1.04m、短軸0.98m、深さ0.19mである。南側で第3号土坑と重複、西側で第1号溝跡と重複する。切り合い関係から第5号土坑が古いことが確認されていることから、中世と推定される。

出土遺物はなかった。

第6号土坑（第135図）

第6号土坑はG-7グリッドに位置する。

平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.40m、短軸0.92m、深さ0.14mを測る。主軸方位はN-8°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第7号土坑（第132図）

第7号土坑はG-7グリッドに位置する。

平面形態は造構の大半が調査区外のため不明である。残存規模は長軸0.78m、短軸0.30m、深さ0.50mである。

出土遺物はなく、時期も不明である。

第8号土坑（第139図）

第8号土坑はG-6グリッドに位置する。

土坑の東壁側で第9号土坑と重複し、第8号土坑が新しいことが確認されている。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は長軸2.16m、短軸1.20m、深さ0.32mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第9号土坑（第139図）

第9号土坑はG-6グリッドに位置する。

第8号土坑と第2号溝跡と重複する。切り合い関係から第9号土坑が古いことが確認されている。平面形態は長方形を呈する。残存規模は長軸1.76m、短軸1.32m、深さ0.26mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第10号土坑（第135図）

第10号土坑はG-6グリッドに位置する。平面形態は不整梢円形で、規模は長軸1.00m、短軸0.80m、深さ0.57mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第11号土坑（第128図）

第11号土坑はF-7グリッドに位置する。

第1号住居跡、第1号溝跡、第12号土坑と重複する。切り合い関係から第1号住居跡と第1号溝跡より古く、第12号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸2.88m、短軸2.04m、深さ0.56mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第12号土坑（第128図）

第12号土坑はF-7グリッドに位置する。

第11号土坑、第1号溝跡と重複し、切り合い関係から第12号土坑が古いことが確認されている。平面形態は長方形を呈するものと思われる。規模は土坑の大半が第11号土坑に切られているため詳細は不明だが、残存長2.12m、短軸が約2.00m、深さ約0.26mを測る。

出土遺物は常滑の甕胴部の残片、鉄滓が出土している。時期は中世と考えられる。

第13号土坑（第138図）

第13号土坑はF-7・8グリッドに位置する。平面形態は超長方形で東西に延び、西側で第1号住居跡と東側で第14号土坑と重複する。切り合い関係で第1号住居跡より新しく、第14号土坑より古いことが確認されている。規模は東側が調査区外のため全長は不明だが、残存長3.64m、短軸0.72m、深さ0.44mを測る。主軸方位はN-77°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第14号土坑（第138図）

第14号土坑はF-8グリッドに位置する。西側で第13号土坑と重複する。切り合い関係で第14号土坑が新しいことが確認されている。平面形態は東側が調査区外のため詳細は不明であるが長方形と推定される。規模は残存長1.56m、幅0.60m、深さは約0.32mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第15号土坑（第138図）

第15号土坑はF-8グリッドに位置する。第14号土坑に隣接する。大半が調査区外のため規模の詳細は不明であるが、残存長1.28m、幅0.80m、深さは約0.44mである。平面形態は長方形と推定される。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第16号土坑（第137図）

第16号土坑はF-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形を呈する。規模は長軸2.08m、短軸1.28m、深さ0.40mを測る。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第17号土坑（第138図）

第17号土坑はF-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.80m、短軸0.68m、深さ0.64mである。主軸方位はN-82°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第18号土坑（第139図）

第18号土坑はF-8グリッドに位置する。

東側で第19号土坑と重複する。切り合い関係で第19号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は残存長1.80m、短軸0.72m、深さ0.38mを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第19号土坑（第139図）

第19号土坑はF-8グリッドに位置する。第18号土坑に土坑の西側が切られている。

平面形態は略長方形を呈すると思われる。規模は残存長1.08m、短軸0.64m、深さ0.24mである。主軸方位はN-90°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第20号土坑（第135図）

第20号土坑はE-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.68m、短軸1.12m、深さ0.46mである。主軸方位はN-75°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

中世と考えられる。

第21号土坑（第135図）

第21号土坑はE-8グリッドに位置し、第2号掘立柱建物跡と重複する。新旧は不明。

平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.68m、深さ0.26mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第24号土坑（第145図）

第24号土坑はE-8グリッドに位置する。

第2号掘立柱建物跡の東側に隣接する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.96m、短軸1.12m、深さ0.25mである。主軸方位はN-13°-Eを示す。埋土は灰色粘土とロームブロック多量含む黒褐色土である。

出土遺物は獸骨が出土している。検出した骨は牛の上下顎骨体と下肢骨体で、老獸と思われ、前臼歯と大臼歯が磨り減っていた。牛骨以外の遺物は出土しなかった。動物祭祀の可能性がある。時期は中世と考えられる。

第22号土坑（第134図）

第22号土坑はE-7・8グリッドに位置する。第2号掘立柱建物跡と重複し、切り合い関係から

第22号土坑のほうが古いことが確認されている。平面形態は長方形を呈する。規模は長軸2.08m、短軸1.72m、深さ0.22mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第25号土坑（第138図）

第25号土坑はE-7グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.12m、短軸0.72m、深さ0.36mである。主軸方位はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第23号土坑（第134図）

第23号土坑はE-7・8グリッドに位置する。

第22号土坑の北に隣接し、第2号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は不明である。

平面形態は長方形を呈する。規模は長軸1.76m、短軸1.28m、深さ0.36mである。主軸方位はN-84°-Wを示す。

出土遺物は常滑の甕片が出土している。時期は

第26号土坑（第134図）

第26号土坑はE-7グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.08m、短軸1.80m、深さ0.21mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。

出土遺物はカワラケ（第146図2）が出土している。口径8.0cmで小形のものである。時期は15世紀頃と考えられる。

第27号土坑（第128図）

第27号土坑はD-4グリッドに位置する。重複

する第9号溝跡に切られていた。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長2.34m、幅0.38m、深さ0.18mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第28号土坑（第130図）

第28号土坑はF-5・6グリッドに位置する。第13号住居跡、第1号火葬土坑と重複し、切り合ひ関係から第13号住居跡より新しく、第1号火葬土坑より古いことが確認されている。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.34m、短軸0.88m、深さ0.12mである。主軸方位はN-25°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第29号土坑（第126図）

第29号土坑はC・D-5グリッドに位置する。第156号土坑と重複し、切り合ひ関係から第29号土坑が古いことが確認されている。平面形態は長方形と思われる。規模は残存長1.36m、短軸0.66m、深さ0.16mである。主軸方位はN-20°-Eを示し、第156号土坑と軸がほぼ重なる。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第30号土坑（第128図）

第30号土坑はD-4グリッドに位置する。第12号溝跡と重複し、第30号土坑のほうが新しいことが確認されている。平面形態は超長方形で、規模は長軸5.02m、短軸0.83m、深さ0.33mで、主軸方位はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第31号土坑（第129図）

第31号土坑はD・E-6グリッドに位置する。第80号土坑と重複し、第31号土坑が古いことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸3.60m、短軸1.04m、深さ0.16mである。主軸方位はN-2°-Wを示し、第80、81、82号土坑とほぼ軸を揃える。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第32号土坑（第136図）

第32号土坑はE-6グリッドに位置する。

第33号土坑と並列するが、軸がややずれる。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.80m、短軸0.74m、深さ0.40mである。主軸方位はN-16°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第33号土坑（第136図）

第33号土坑はE-6グリッドに位置する。第32号土坑と並列する。平面形態は長方形で、規模は長軸4.28m、短軸1.00m、深さ0.32mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第34号土坑（第132図）

第34号土坑はE-5グリッドに位置する。土坑の南側で第87号土坑と重複する。切り合ひ関係から第34号土坑が新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は残存長2.28m、短軸0.80m、深さ0.08mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第35号土坑（第124図）

第35号土坑はD-5グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸3.14m、短軸1.14m、深さ0.16mである。主軸方位はN-4°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第36号土坑（第125図）

第36号土坑はD-4グリッドに位置する。

第37号土坑と重複し、切り合い関係から第37号土坑より新しいことが確認されている。

平面形態は長方形で、規模は残存長2.72m、短軸0.47m、深さ0.06mである。主軸方位はN-89°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第37号土坑（第125図）

第37号土坑はD-4グリッドに位置する。第36号土坑と重複し、第37号土坑が古いことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸4.40m、短軸0.98m、深さ0.30mである。主軸方位はN-72°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第38号土坑（第127図）

第38号土坑はD-E-4グリッドに位置する。平面形態は超長方形で、規模は長軸5.50m、短軸0.94m、深さ0.48mである。主軸方位はN-7°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量

に含む黒褐色土主体である。

出土遺物は瓦質の片口鉢の残片が出土している。時期は中世と考えられる。

第39号土坑（第126図）

第39号土坑はE-4グリッドに位置する。第40号土坑を切り、直交するかたちで重複している。平面形態は長方形で、規模は長軸3.22m、短軸0.80m、深さは0.10mで浅い。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第40号土坑（第126図）

第40号土坑はD-E-4グリッドに位置する。第39号土坑と重複し、第40号土坑のほうが古いことが確認されている。平面形態は超長方形で、規模は長軸5.88m、短軸0.88m、深さ0.53mである。主軸方位はN-12°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土主体である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第41号土坑（第127図）

第41号土坑はD-4グリッドに位置する。

第43号土坑と重複し、切り合い関係から第41号土坑が新しいことが確認されている。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.88m、短軸0.64m、深さ0.10mで浅い。主軸方位はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第42号土坑（第127図）

第42号土坑はD-E-4グリッドに位置する。

第43号土坑と重複し、切り合い関係から第42号土

坑が新しいことが確認されている。平面形態は超長方形で、規模は長軸6.76m、短軸0.84m、深さ0.53mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む褐色土主体である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第43号土坑（第127図）

第43号土坑はD-E-4グリッドに位置する。重複する第41、42号土坑より古いことが確認されている。平面形態は超長方形と推定される。規模は長軸5.92m、短軸0.92m、深さ0.24mである。主軸方位はN-24°-Eを示す。埋土はロームブロックを少量含む黒褐色土主体である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第44号土坑（第125図）

第44号土坑はD-E-3グリッドに位置する。平面形態は超長方形で、規模は長軸5.76m、短軸0.84m、深さ0.70mである。主軸方位はN-14°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第45号土坑（第125図）

第45号土坑はD-3グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸3.36m、短軸0.72m、深さ0.12mで浅い。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第46号土坑（第135図）

第46号土坑はE-F-8グリッドに位置する。

第3号溝跡を切っており第46号土坑が新しいことが確認されている。調査区東端にあり、大半が調査区外のため全体の規模は不明であるが、残存長0.92m、幅0.52m、深さ0.48mを測る。平面形態は長楕円形と推定される。主軸方位はN-85°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第47号土坑（第138図）

第47号土坑はF-8グリッドに位置する。調査区の東端にあり、土坑の東側が調査区外にのびている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.04m、短軸0.92m、深さ0.50mである。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第48号土坑（第137図）

第48号土坑はG-7・8グリッドに位置する。調査区の東端にあり、第49号土坑を切っている。東側は調査区外にのびている。

平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.35m、短軸0.94m、深さ0.19mである。主軸方位はN-69°-Wを示す。

出土遺物は常滑の甕の残片が出土地している。時期は中世と考えられる。

第49号土坑（第137図）

第49号土坑はG-7グリッドに位置する。調査区東端にあり、重複する第1号住居跡、第100号土坑より新しく、第48号土坑より古い。平面形態は略方形で、規模は長軸1.76m、短軸1.64m、深さ0.19mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第50号土坑（第138図）

第50号土坑はF-8グリッドに位置する。調査区東端にあり、大半が調査区外のため規模は不明であるが、残存長1.00m、幅0.28m、深さ0.30mを測る。

出土遺物はなく時期は不明である。

第51号土坑（第132図）

第51号土坑はE-5グリッドに位置する。重複する第86号土坑、第4号溝跡より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸2.20m、短軸1.68m、深さ0.40mである。主軸方位はN-7°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第52号土坑（第131図）

第52号土坑はE-5グリッドに位置する。第4号溝跡と重複し、第52号土坑が新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸1.84m、短軸1.32m、深さ0.40mである。主軸方位はN-3°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第53号土坑（第131図）

第53号土坑はD-E-5グリッドに位置する。第5号溝跡と第54号土坑と重複し、第5号溝跡より古く、第54号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は残存長3.24m、短軸1.16m、深さ0.15mである。主軸方位はN-84°-Wを示す。

出土遺物は常滑の甕の残片が出土している。時期は重複関係から14世紀頃と考えられる。

第54号土坑（第131図）

第54号土坑はE-5グリッドに位置する。重複する第53号土坑、第5号溝跡に切られている。平面形態は長方形と推定される。全体の規模は不明であるが、残存長1.12m、幅0.46m深さ0.15mを測る。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から13～14世紀頃と考えられる。

第55号土坑（第143図）

第55号土坑はC-6グリッドに位置する。西側が重複する第167号土坑に切られ、東側は調査区外にのびる。平面形態は超長方形と推定される。規模は残存長3.32m、短軸0.52m、深さ0.04mを測る。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第56号土坑（第144図）

第56号土坑はG-6グリッドに位置する。重複する第3号溝跡より古く、第19号溝跡より新しい。平面形態は円形で、規模は長径1.34m、短径1.10m、深さ0.98mである。埋土は下層がロームブロックを含む黒色土主体である。

出土遺物はなかった。土坑としたが、井戸の可能性もある。時期は重複関係から15世紀前半と考えられる。

第57号土坑（第144図）

第57号土坑はG-6グリッドに位置する。重複する第3号溝跡より古く。平面形態は円形で、規

模は長径1.64m、短径1.60m、深さは不明である。出土遺物はなかった。土坑としたが井戸の可能性がある。時期は重複関係から15世紀前半かそれ以前と考えられる。

第58号土坑（第140図）

第58号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第4号住居跡、第68、69号土坑、第3号溝跡より古いことが確認されている。

平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.08m、幅は1.88m、深さ0.13mを測る。主軸方位はN-13°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から13～14世紀頃と考えられる。

第59号土坑（第138図）

第59号土坑はG-7グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡と重複する。新旧は不明である。平面形態は円形で、規模は直径0.96m、深さ0.12mを測る。出土遺物はなかった。時期は不明である。

第60号土坑（第139図）

第60号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第61号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形と推定され、規模は残存長0.52m、短軸0.88m、深さ0.32mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第61号土坑（第139図）

第61号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第60号土坑より古く、第62号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸2.40m、短軸1.88m、深さ0.50m

である。主軸方位はN-7°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第62号土坑（第139図）

第62号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第61号土坑より古く、第63号土坑、第3号溝跡より新しいことが確認されている。

平面形態は長方形で、残存長3.20m、短軸1.52m、深さ0.14mを測る。主軸方位はN-86°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から15世紀後半～16世紀頃と考えられる。

第63号土坑（第139図）

第63号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第62、64号土坑、第3号溝跡より古いことが確認されている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長3.54m、短軸1.29m、深さ0.40mである。主軸方位はN-87°-Wを示す。

出土遺物はなかったが、床面より炭化物を検出した。時期は重複関係から14～15世紀前半と考えられる。

第64号土坑（第139図）

第64号土坑はF-6グリッドに位置する。重複する第62、63号土坑、第3号溝跡より古いことが確認されている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長0.96m、短軸0.88m、深さ0.21mである。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から14世紀頃と考えられる。

第65号土坑（第134図）

第65号土坑はE-7グリッドに位置する。重複

する第66号土坑より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸2.76m、短軸2.24m、深さ0.24mである。主軸方位はN-81°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第66号土坑（第134図）

第66号土坑はE-7グリッドに位置する。重複する第65号土坑に切られている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.43m、幅0.40m、深さ0.06mである。主軸方位はN-68°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第67号土坑（第141図）

第67号土坑はE-F-6グリッドに位置する。重複する第4号住居跡より古く、第68号土坑より新しい。平面形態は略方形で、規模は長軸3.00m、短軸2.64m、深さ0.26mである。主軸方位はN-70°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から15世紀前半と考えられる。

第68号土坑（第141図）

第68号土坑はE-F-6グリッドに位置する。重複する第4号住居跡、第67号土坑より古く、第58号土坑、第3号溝跡より新しいことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸3.72m、短軸3.04m、深さ0.60mである。

出土遺物は常滑の鉢（第146図3）、瓦質片口鉢が出土している。時期は13～14世紀頃と考えられる。

第69号土坑（第140図）

第69号土坑は、F-6・7グリッドに位置する。重複する第3、4号住居跡より古く、第58号土坑より新しいことが確認されている。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.36m、短軸2.08m、深さ0.42mである。主軸方位はN-5°-Eを示す。

出土遺物は瓦質の片口鉢、土鍤（第146図4、5）が出土している。時期は重複関係から15世紀前半と考えられる。

第70号土坑（第141図）

第70号土坑はE-F-6・7グリッドに位置する。重複する第4号住居跡、第3号溝跡より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸2.52m、短軸1.76m、深さ0.27mである。主軸方位はN-86°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第71号土坑（第142図）

第71号土坑はF-7グリッドに位置する。重複する第3号住居跡より古い。平面形態は円形と推定され、残存規模は長径1.34m、短径0.44m、深さ0.20mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

第72号土坑（第142図）

第72号土坑はF-7グリッドに位置する。重複する第3号住居跡、第1号溝跡、第73号土坑より古いことが確認されている。平面形態は造構の大半が切られており不明である。残存規模は長軸2.84m、短軸1.00m深さ0.46mを測る。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第73号土坑（第142図）

第73号土坑はF-7グリッドに位置する。

重複する第72号土坑より新しく、第3号住居跡、第1号溝跡より古いことが確認されている。平面形態は長方形で、規模は長軸2.20m、短軸0.76m、深さ0.10mである。主軸方位はN-8°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第74号土坑（第130図）

第74号土坑はD-5・6グリッドに位置する。重複する第4、5号溝跡、第75、102号土坑より新しい。平面形態は超長方形で、規模は長軸7.10m、短軸0.80m、深さ0.60mである。主軸方位はN-76°-Eを示す。

出土遺物は瓦質片口鉢が出土している。時期は重複関係から15世紀後半～16世紀と考えられる。

第75号土坑（第130図）

第75号土坑はD-6グリッドに位置する。重複する第74号土坑より古く、第102号土坑より新しい。平面形態は超長方形で、規模は残存長4.90m、短軸0.76m、深さ0.36mで。主軸方位はN-82°-Eを示す。

出土遺物は瓦質の土鍋（第146図6）が出土している。時期は15世紀頃と考えられる。

第76号土坑（第133図）

第76号土坑はE-7・8グリッドに位置する。重複する第5号住居跡、第77号土坑より新しく、第2号掘立柱建物跡より古い。平面形態は略方形で、規模は残存長2.40m、短軸2.30m、深さ0.06

mである。主軸方位はN-72°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第77号土坑（第133図）

第75号土坑はD-E-7・8、グリッドに位置する。重複する第5号住居跡、第76号土坑より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸3.00m、短軸2.32m、深さ0.20mである。主軸方位はN-74°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第78号土坑（第143図）

第78号土坑はF-5グリッドに位置する。重複する第4号溝跡より新しい。平面形態は略長方形で、規模は長軸1.44m、短軸0.64m、深さ0.18mである。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第79号土坑（第129図）

第79号土坑はE-6グリッドに位置する。重複する第80、81、82号土坑より古い。平面形態は略長方形で、規模は長軸4.28m、短軸2.12m、深さ0.46mである。主軸方位はN-3°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む単一層で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物はなかった。時期は14～15世紀頃と考えられる。

第80号土坑（第129図）

第80号土坑はE-6グリッドに位置する。重複する第31、79、81号土坑より新しく、第82号土坑より古い。平面形態は長方形と推定され、規模は残存長2.64m、短軸1.12m、深さ0.42mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。埋土は黒褐色土

を主体とする。

出土遺物は瓦質の土鍋、土釜、古銭（第146図7、8、9）が出土している。古銭は北宋銭で、墓坑の可能性がある。時期は15世紀頃と推定される。

第81号土坑（第129図）

第81号土坑はD・E-6グリッドに位置する。

重複する第79、80、82号土坑より古い。平面形態は長方形と推定されるが、大半が第79、80、82号土坑に切られており規模の詳細は不明である。残存長0.83m、幅0.83m、深さ0.36mを測る。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第82号土坑（第129図）

第82号土坑はD・E-6グリッドに位置する。

重複する第79、81、83号土坑より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸3.56m、短軸1.04m、深さ0.24mである。主軸方位はN-4°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む。一括埋め戻しと考えられる。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第83号土坑（第129図）

第83号土坑はD-6グリッドに位置する。重複する第82号土坑に切られている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.52m、短軸0.76m、深さ0.26mである。主軸方位はN-93°-Eを示す。埋土はロームブロックを均一に含む。一括埋め戻しと考えられる。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第84号土坑（第132図）

第84号土坑はD-6グリッドに位置する。

重複する第85号土坑に切られる。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長0.64m、短軸0.64m、深さ0.12mである。主軸方位はN-3°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第85号土坑（第132図）

第85号土坑はD-6グリッドに位置する。

重複する第84号土坑を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.80m、短軸0.76m、深さ0.22mである。主軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は黒褐色土の單一層である。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第86号土坑（第132図）

第86号土坑はE-5グリッドに位置する。

重複する第4号溝跡、第87号土坑より新しく、第51号土坑より古い。平面形態は超長方形と考えられる。規模は残存長が2.88mで、短軸0.76m、深さは0.29mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物は刀子（第147図10）、土鍋の残片が出土地している。時期は重複関係から15世紀中～後半と考えられる。

第87号土坑（第132図）

第87号土坑はE-5グリッドに位置する。

重複する第34、86号土坑より古い。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.64m、短軸0.64m、深さ0.16mである。主軸方位はN-81°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から14～15世紀前半と考えられる。

第88号土坑（第135図）

第88号土坑はD-9グリッドに位置する。重複する第7号溝跡より古い。平面形態は不整長方形で、規模は残存長1.64m、幅0.68m深さ0.26mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第89号土坑（第134図）

第89号土坑はD-8グリッドに位置する。重複する第6号溝跡を切る。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長0.80m、幅0.84m、深さ0.20mである。主軸方位はN-88°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第90号土坑（第135図）

第90号土坑はD-9・10グリッドに位置する。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.12m、幅0.36m、深さ0.14mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第91号土坑（第140図）

第91号土坑はE-6グリッドに位置する。第67号土坑の北西コーナーに隣接する。平面形態は不整長方形で、長軸1.08m、短軸0.36m、深さ0.22mである。主軸方位はN-70°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第92号土坑（第136図）

第92号土坑はF-5グリッドに位置する。方形に廻る第20号溝跡の南辺に接し、北辺には第93号土坑がある。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.12m、短軸0.72m、深さ0.28mである。

主軸方位はN-25°-Eを示す。埋土は黒褐色土主体である。

出土遺物はなかったが、相対する位置にある第93号土坑が墓坑と考えられる事から第92号土坑も墓坑と推定される。時期は15世紀頃と考えられる。

第93号土坑（第136図）

第93号土坑はF-5グリッドに位置する。方形に廻る第20号溝跡の北辺にあり、相対する南辺に第92号土坑がある。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.44m、短軸0.68m、深さ0.50mである。主軸方位はN-16°-Eを示す。埋土はしまりに欠ける黒色土主体である。

出土遺物は古銭が2点（第147図11、12）出土した。古銭は北宋銭である。時期は15世紀頃と推定される。墓坑と考えられ、第92号土坑、第20号溝跡と一体の可能性がある。

第94号土坑（第144図）

第94号土坑はG-7グリッドに位置する。北側に第1号住居跡があり、重複する第1号掘立柱建物跡より新しい。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.24m、短軸0.76m、深さ0.28mである。主軸方位はN-2°-Wを示す。埋土はしまりに欠ける黒褐色土と暗茶褐色土である。

出土遺物はカワラケが3点、古銭が6点（第147図13～21）出土した。カワラケ13は底部に板目状圧痕がある。14、15は底部回転糸切り未調整。カワラケは灰橙褐色を呈し、いずれも焼きが良い。体部の調整が丁寧で、口縁部が開くものである。古銭はすべて北宋銭で、六道銭と考えられる事から墓坑であろう。時期は15世紀後半頃と推定される。

第95号土坑（第138図）

第95号土坑はG-6グリッドに位置する。

重複する第1号溝跡より古く、第2号土坑より新しい。平面形態は円形と推定される。規模は大半が第1号溝跡に切られているが残存長1.18m、短径0.50m、深さ0.21mである。

出土遺物は土鍋の残片が出土している。時期は中世と考えられる。

第96号土坑（第139図）

第96号土坑はG-6グリッドに位置する。第1号溝跡、第97号土坑に切られている。

平面形態は不明である。残存長1.00m、幅1.04m、深さ0.22mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第97号土坑（第139図）

第97号土坑はG-6グリッドに位置する。重複する第96号土坑より新しい。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸1.46m、短軸1.36m、深さ0.52mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第98号土坑（第137図）

第98号土坑はG-7グリッドに位置する。

第1号掘立柱建物跡と重複する。新旧関係は不明である。平面形態は円形で、規模は直径0.96m、深さ0.41mである。底面に浅いピットがある。時期は不明である。

第99号土坑（第144図）

第99号土坑はG-7グリッドに位置する。重複する第1号掘立柱建物跡に切られている。

平面形態は楕円形で、規模は長径0.96m、短径0.72m、深さ0.17mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第100号土坑（第137図）

第100号土坑はG-7グリッドに位置する。重複する第1号住居跡、第49号土坑より古い。

平面形態は円形で、底面は平坦で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長径1.16m、短径1.10m、深さ1.00mである。埋土は1層がロームブロック主体でしまりが強い（第1号住居跡の床面）、2層以下はロームブロックを多量に含む層と黒色土が交互に堆積する。人為的に埋め戻されたものと思われる。

出土遺物はなかった。不明確だが墓坑の可能性がある。時期は中世と考えられる。

第101号土坑（第137図）

第101号土坑はF-7グリッドに位置する。重複する第1号住居跡より古い。平面形態は円形で、底面は平坦、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長径1.32m、短径1.20m、深さ1.06mである。埋土は上層がロームブロックを多く含む茶褐色土で、下層は黒色土主体である。人為的に埋め戻されたものと思われる。第100号土坑に隣接し、規模もほぼ同じである。

出土遺物はなかった。時期は第100号土坑とほぼ同時期と考えられ、不明確であるが墓坑の可能性がある。

第102号土坑（第130図）

第102号土坑はD-6、E-5・6グリッドに位置する。重複する第74、75号土坑に北側が切られている。平面形態は超長方形と推定される。規

模は残存長3.04m、短軸0.80m、深さ0.30mである。主軸方位はN-4°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第103号土坑（第117図）

第103号土坑はC-5グリッドに位置する。

平面形態は超長方形で、規模は土坑の北側が調査区外のため全長は不明。残存長は3.98m、短軸は0.94m、深さは0.53mである。

主軸方位はN-8°-Eを示す。土層観察から軸を同じくする別の土坑（第103B号土坑）が切っている（或いは拡張か）ことが判明した。

出土遺物は常滑の甕、瓦質の片口鉢、土鍋の残片が出土した。時期は15世紀頃と推定される。

第104号土坑（第121図）

第104号土坑はC-5・6グリッドに位置する。平面形態は超長方形で、規模は長軸3.76m、短軸0.98m、深さ0.24mである。主軸方位はN-85°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土と黒色土である。

出土遺物はなかった。時期は不明確であるが中世と考えられる。

第105号土坑（第131図）

第105号土坑はD-6グリッドに位置する。重複する第6号溝跡と第127号土坑より新しい。平面形態は長方形で、規模は残存長1.96m、短軸0.64m、深さ0.57mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第106号土坑（第142図）

第106号土坑はF-7グリッドに位置する。重

複する第3号住居跡を切る。平面形態は不整長方形で、規模は残存長4.00m、短軸1.28m、深さ0.23mである。主軸方位はN-81°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第107号土坑（第115図）

第107号土坑はC-5グリッドに位置する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.32m、短軸1.00m、深さ0.14mである。主軸方位はN-3°-Eを示す。埋土は黒褐色土の單一層である。

出土遺物は瓦質土鍋の残片が出土した。時期は中世と考えられる。

第108号土坑（第117図）

第108号土坑はC-5グリッドに位置する。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.18m、短軸0.64m、深さ0.16mである。主軸方位はN-92°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色土で、一括埋め戻しと考えられる。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と推定される。

第109号土坑（第117図）

第109号土坑はB-5グリッドに位置し、第110号土坑の南に隣接する。平面形態は不整形で、規模は長軸1.44m、短軸1.28m、深さ0.18mである。主軸方位はN-79°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土である。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と推定される。

第110号土坑（第117図）

第110号土坑はB-4・5グリッドに位置し、

重複する第111号土坑より古い。埋土はロームブロックを多量に含む暗褐色の單一層で一括埋め戻しである。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸1.62m、短軸1.38m、深さ0.18mである。主軸方位はN-68°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と推定される。

第111号土坑（第117図）

第111号土坑はB-5グリッドに位置する。重複する第110号土坑より新しい。平面形態及び規模は造構の大半が調査区外のため不明である。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第112号土坑（第121図）

第112号土坑はC-D-4グリッドに位置する。重複する第113号土坑、第114号土坑より新しい。平面形態は不整長方形で、規模は長軸4.20m、短軸1.46m、深さ0.30mである。主軸方位はN-87°-Wを示す。床面はやや凹凸がある。

出土遺物は常滑の甕、灰釉瓶子、瓦質土鍋等の残片が出土している。時期は15世紀後半と推定される。

第113号土坑（第124図）

第113号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第114号土坑、第3号掘立柱建物跡より新しく、第112号土坑より古い。平面形態は長方形で、規模は残存長2.62m、短軸1.88m、深さ0.29mである。主軸方位はN-9°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は重複関係から15世紀中～後半と推定される。

第114号土坑（第124図）

第114号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第112、113号土坑に切られていた。

平面形態は長方形と推定されるが、規模は不明である。残存長1.12m、幅1.03m、深さ0.23mを測る。

出土遺物は常滑の甕、瓦質擂鉢、砥石（第147図22～24）が出土している。時期は15世紀中葉と推定される。

第115号土坑（第142図）

第115号土坑はG-6グリッドに位置する。

平面形態は円形で、規模は長径0.84m、短径0.80m、深さ0.70mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第116号土坑（第135図）

第116号土坑はD-9グリッドに位置する。

平面形態は椿円形で、規模は長軸0.96m、短軸0.52m、深さ0.17mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第117号土坑（第123図）

第117号土坑はC-4グリッドに位置する。

重複する第119、120、137号土坑より新しい。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.30m、短軸0.88m、深さ0.49mである。主軸方位はN-5°-Wを示す。

出土遺物は古銭（第148図25、26）が2点出土した。いずれも北宋銭で、不明確であるが墓坑の可能性がある。時期は15世紀頃と推定される。

第118号土坑（第123図）

第118号土坑はC-4・5グリッドに位置する。

重複する第133、136、138号土坑より古い。

平面形態は長方形で、規模は長軸4.38m、短軸1.76m、深さ0.14mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。

出土遺物は鉛と考えられる鉄製品が出土している。時期は中世と考えられる。

第119号土坑（第123図）

第119号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第117、131、133、137号土坑より古く、第120号土坑より新しい。平面形態は超長方形で、規模は残存長3.96m、短軸0.76m、深さ0.13mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第120号土坑（第123図）

第120号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第117、119、125、130、137号土坑、第3号掘立柱建物跡より古く、第134号土坑より新しい。平面形態は長方形か方形と推定される。残存規模は残存長2.40m、短軸1.54m、深さ0.15mである。

出土遺物は常滑窯の残片が出土した。時期は中世と考えられる。

第121号土坑（第120図）

第121号土坑はB-C-4グリッドに位置する。重複する第126号土坑に切られている。平面形態は長方形で、規模は長軸1.78m、短軸0.62m、深さ0.08mである。主軸方位N-5°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む暗茶褐色土で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第122号土坑（第116図）

第122号土坑はB-4グリッドに位置する。重複する第123号土坑に切られている。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.70m、短軸0.98m、深さ0.25mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む茶褐色土で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物は常滑窯の残片、灰釉鉢の残片、古銭が3点（第148図28～30）出土した。古銭は明銭が1点、北宋銭が2点であった。墓坑と考えられ、時期は15世紀頃と推定される。

第123号土坑（第116図）

第123号土坑はB-4グリッドに位置する。重複する第122、124号土坑を切っている。

平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.70m、短軸0.64m、深さ0.38mである。主軸方位はN-12°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む混合土で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物は、青磁碗（第148図31）と古銭が1点出土している。墓坑と考えられ、時期は15世紀頃と推定される。

第124号土坑（第116図）

第124号土坑はB-4グリッドに位置する。第123号土坑に切られている。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸1.52m、短軸0.88m、深さ0.14mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む黒褐色土で、一括埋め戻しと思われる。

出土遺物はなかった。不明確であるが墓坑と考えられ、時期は重複関係から14～15世紀と考え

られる。

第125号土坑（第123図）

第125号土坑はC-4グリッドに位置する。

重複する第120号土坑より新しい。平面形態は一部を欠くが方形と考えられる。規模は残存長1.26m、短軸0.63m、深さ0.07mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第126号土坑（第122図）

第126号土坑はB・C-4グリッドに位置する。

重複する第121、135、140号土坑より新しい。平面形態は超長方形で、規模は長軸4.28m、短軸0.74m、深さ0.60mである。底部は平坦で、壁面はややオーバーハングしながら立ち上がる。主軸方位はN-78°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む一括埋め戻しと思われる。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第127号土坑（第131図）

第127号土坑はD-6グリッドに位置する。重複する第105号土坑に切られている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.42m、幅0.72m、深さ0.20mである。

出土遺物は瓦質土鍋の残片が出土している。時期は15世紀頃と推定される。

第128号土坑（第131図）

第128号土坑はC-6・7グリッドに位置する。平面形態は長方形と考えられる。遺構の一部が調査区外のため規模の詳細は不明である。残存長1.36m、幅0.98m、深さ0.03mを測る。主軸方位はN-14°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第129号土坑（第135図）

第129号土坑はD-9グリッドに位置する。

遺構の大半が調査区外のため規模の詳細は不明である。残存長は0.64m、幅0.48m、0.11mを測る。平面形態は楕円形と推定される。主軸方位はN-92°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第130号土坑（第123図）

第130号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第120、131、134号土坑、第3号掘立柱建物跡より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸2.22m、短軸0.76m、深さ0.21mである。主軸方位はN-8°-Eを示し、第135号土坑とはほぼ軸が揃う。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第131号土坑（第123図）

第131号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第119号土坑より新しく、第130、133号土坑より古い。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長2.14m、短軸0.82m、深さ0.24mである。主軸方位はN-77°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第132号土坑（第131図）

第132号土坑はD-5グリッドに位置する。重複する第6号溝跡に切られている。平面形態は不整椭円形で、規模は長径0.80m、短径0.68m、深さ0.27mである。

出土遺物は常滑窯の残片、片面を凹ませた加工

穢（第148図32）が出土した。時期は中世と考えられる。

第133号土坑（第123図）

第133号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第118、119、131号土坑より新しい。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.10m、短軸0.66m、深さ0.20mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

第134号土坑（第123図）

第134号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第120、130号土坑に切られている。

平面形態は不明で、残存規模は残存長0.94m、短軸0.28m、深さ0.07mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

第135号土坑（第122図）

第135号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する126、140号土坑と第3号掘立柱建物跡に切られている。平面形態は長方形で、規模は残存長が1.54m、短軸0.60m、深さ0.10mである。主軸方位はN-4°-Eを示す。第130号土坑と南側が隣接し軸がほぼ揃う。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

第136号土坑（第123図）

第136号土坑はC-4グリッドに位置する。第118号土坑に大半が切られている。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長0.66m、幅0.61m、深さ0.06mである。主軸方位はN-6°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と推定される。

第137号土坑（第123図）

第137号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第117号土坑より古く、第119、120号土坑より新しい。平面形態は長方形と推定される。残存規模は長軸1.13m、短軸0.76m、深さ0.24mで、主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第138号土坑（第123図）

第138号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第118号土坑より新しい。平面形態は不整長方形で、規模は長軸1.04m、短軸0.56m、深さ0.14mである。主軸方位はN-15°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第139号土坑（第123図）

第139号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第119号土坑、第2号火葬土坑より古い。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.26m、短軸0.50m、深さ0.25mである。主軸方位はN-2°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第140号土坑（第122図）

第140号土坑はB・C-4グリッドに位置する。重複する第126号土坑より新しく、第141号土坑より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸3.64m、短軸1.08m、深さ0.20mである。主軸方位はN-20°-Wを示す。埋土はロームブロックを多量に含む一括埋め戻しで、最下層に薄く黒色土が堆積していた。

出土遺物は常滑窯の残片が出土した。時期は中世と考えられる。

第141号土坑（第122図）

第141号土坑はB-4グリッドに位置する。重複する第140号土坑に切られている。平面形態は長方形と推定される。残存規模は長軸2.42m、短軸1.29m、深さ0.08mである。主軸方位はN-18°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第142号土坑（第120図）

第142号土坑はB・C-4グリッドに位置する。第147号土坑に接するが重複関係は不明である。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸0.80m、短軸0.72m、深さ0.05mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第143号土坑（第115図）

第143号土坑はB-4グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸0.92m、短軸0.56m、深さ0.16mである。主軸方位はN-23°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第144号土坑（第120図）

第144号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第145、147号土坑より新しい。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.80m、短軸0.74m、深さ0.41mである。主軸方位はN-84°-Wを示す。

出土遺物は常滑甕、瓦質土鍋の残片、刀子の茎部？（第148図33）が出土した。時期は15世紀頃と推定される。

第145号土坑（第120図）

第145号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第144、147号土坑、第3号掘立柱建物跡より古い。平面形態は長方形と推定される。残存規模は長軸0.76m、短軸1.44m、深さ0.09mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。

出土遺物は常滑甕、瓦質土鍋の残片が出土した。時期は不明確であるが15世紀頃と推定される。

第146号土坑（第120図）

第146号土坑はB・C-4グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸1.42m、短軸1.00m、深さ0.06mである。主軸方位はN-8°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第147号土坑（第120図）

第147号土坑はC-4グリッドに位置する。重複する第145号土坑より新しく、第144号土坑より古い。平面形態は不整形で、規模は長軸1.50m、短軸1.44m、深さ0.35mである。主軸方位はN-2°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第148号土坑（第116図）

第148号土坑はB-3・4グリッドに位置する。重複する第149号土坑より新しい。

平面形態は不整長方形と推定され、規模は残存長が1.56m、短軸0.82m、深さ0.06mである。主軸方位はN-17°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第149号土坑（第116図）

第149号土坑はB-3・4グリッドに位置する。重複する148、175号土坑より古い。

平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.94m、短軸1.66m、深さ0.18mである。主軸方位はN-5°-Eを示す。埋土はロームブロックを多量に含む茶褐色土で、一括埋め戻しと思われる。土坑中央部は搅乱により破壊されていた。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第150号土坑（第119図）

第150号土坑はC-2グリッドに位置する。重複する第157号土坑より新しく、第8号溝跡より古い。平面形態は長方形と推定され、残存規模は長軸5.00m、短軸1.92m、深さ0.12mである。主軸方位はN-5°-Eを示す。

出土遺物は瓦質の片口鉢破片が出土した。時期は中世と考えられる。

第151号土坑（第118図）

第151号土坑はC-2・3グリッドに位置する。重複する第5号掘立柱建物跡より古く、第11号住居跡より新しい。平面形態は長方形で、長軸2.18m、短軸1.92m、深さ0.35mである。主軸方位はN-85°-Wを示す。

出土遺物は瓦質土鍋の残片が出土した。時期は重複関係から15世紀中葉と考えられる。

第152号土坑（第118図）

第152号土坑はC-3グリッドに位置する。第9号住居跡に接するが新旧関係は不明である。平面形態は略方形で、規模は長軸1.70m、短軸1.54m、深さ0.34mである。主軸方位はN-8°-E

を示す。

出土遺物は灰釉瓶子、灰釉鉢皿（第148図34、35）が出土した。灰釉瓶子は瀬戸産で印花文を施す。灰釉鉢皿は口縁部に施釉、時期は14世紀頃と推定される。

第153号土坑（第118図）

第153号土坑はC-3・4グリッドに位置する。土坑の北側が第9号住居跡に隣接している。平面形態は長方形で、規模は長軸3.30m、短軸1.94m、深さ0.24mである。主軸方位はN-5°-Eを示す。

出土遺物は北宋銭（第148図37）が1点とカラケ（第148図36）が出土している。時期は15世紀頃と考えられる。

第154号土坑（第118図）

第154号土坑はC-3グリッドに位置する。土坑の北側が第9号住居跡と隣接する。平面形態は長方形で、規模は長軸1.80m、短軸0.92m、深さ0.02mである。主軸方位はN-3°-Wを示す。

出土遺物は小破片のため図示しなかったが、瀬戸産の灰釉折縁深皿残片、在地産の瓦質土鍋残片が出土している。時期は14世紀末～15世紀頃と考えられる。

第155号土坑（第118図）

第155号土坑はC-3グリッドに位置する。重複する第17号溝跡、第177号土坑より新しい。平面形態は長方形で、規模は長軸2.34m、短軸1.14m、深さ0.23mである。主軸方位はN-75°-Wを示す。

出土遺物は青磁蓮弁碗の残片が出土している。

時期は中世と考えられる。

第156号土坑（第126図）

第156号土坑はD-5グリッドに位置する。重複する第29号土坑、第6、8号溝跡より新しい。平面形態は長方形で、規模は残存長3.60m、短軸0.84m、深さ0.16mである。主軸方位はN-20°-Eを示す。

出土遺物は瓦質片口鉢の残片が出土している。時期は中世と考えられる。

第157号土坑（第119図）

第157号土坑はC-2グリッドに位置する。重複する第150号土坑より古い。平面形態は略方形で、規模は長軸2.44m、短軸2.00m、深さ0.10mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物は常滑窯の残片、古銭、鉄滓（第148図38、39）が出土している。時期は中世と考えられる。

第158号土坑（第119図）

第158号土坑はB-3グリッドに位置する。重複する第15号溝跡より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.64m、深さ0.36mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物は鉄製品（第148図40）の破片が出土した。細い棒状で種別は不明である。時期は中・近世と考えられる。

第159号土坑（第115図）

第159号土坑はA・B-3グリッドに位置する。重複する第15号溝跡より新しい。

平面形態は北側が擾乱により破壊されているため不明であるが、長方形か方形と推定される。規

模は残存長1.97m、短軸0.76m、深さ0.16mである。主軸方位はN-7°-Eを示す。

出土遺物は古銭が1点出土した。時期は中・近世と考えられる。

第160号土坑（第115図）

第160号土坑はB-3・4グリッドに位置する。平面形態は長方形で、規模は長軸2.19m、短軸1.02m、深さ0.22mである。主軸方位はN-90°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第161号土坑（第115図）

第161号土坑はA-3グリッドに位置する。平面形態は遺構の北側が調査区外で、西側が擾乱により破壊されているため不明であるが、長方形か方形と推定される。規模は残存長1.90m、短軸1.13m、深さ0.11mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第162号土坑（第117図）

第162号土坑はC-3グリッドに位置する。重複する第11号住居跡、第163号土坑より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸2.32m、短軸0.74m、深さ0.23mである。主軸方位はN-75°-Eを示す。

出土遺物は瓦質片口鉢（第148図41）が出土した。底部の破片で厚みがあり、体部下端の指頭痕が顯著、底部は回転糸切り後かるい回転ナデ調整を施す。外面に煤が付着。時期は14世紀後半～15世紀と考えられる。

第163号土坑（第117図）

第163号土坑はC-3グリッドに位置する。重複する第11号住居跡、第162号土坑より新しい。平面形態は円形で、規模は長径1.08m、短径1.00m、深さ0.65mである。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第164号土坑（第117図）

第164号土坑はC-3グリッドに位置する。重複する第178号土坑、第11号住居跡に切られている。平面形態は円形で、規模は直径0.58m、深さは完掘していないため不明である。

出土遺物は土師器北武藏型暗文坏、甌、甕（第149図42～45）が深さ約0.8mの位置から出土した。土坑としたが、深さ1mほどから水が湧き出すことから井戸の可能性もある。遺物は投棄されたものと考えられるが、土師器甌が逆位で出土しており、祭祀が行われた可能性もある。時期は7世紀末～8世紀前半と考えられる。

第165号土坑（第116図）

第165号土坑はC-6グリッドに位置する。北側は調査区外で、南側は第166号土坑に切られている。平面形態は不明である。規模は残存長0.86m、短軸0.36m、深さ0.24mである。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第166号土坑（第116図）

第166号土坑はC-6グリッドに位置する。重複する第165号土坑より新しく、第167号土坑より古い。平面形態は長方形で、規模は長軸3.20m、短軸0.80m、深さ0.26mである。主軸方位はN-10°-Eを示す。

出土遺物は瓦質片口鉢（第149図46）が出土している。時期は15世紀と考えられる。

第167号土坑（第116図）

第167号土坑はC-6グリッドに位置する。重複する第55号土坑、第166号土坑より新しい。

平面形態は長方形で、規模は長軸2.12m、短軸0.76m、深さ0.20mである。主軸方位はN-95°-Eを示す。

出土遺物は瓦質土器残片と多量の礫が出土した。時期は中世と考えられる。

第168号土坑（第115図）

第168号土坑はB-4グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長軸1.70m、短軸0.83m、深さ0.15mである。主軸方位はN-63°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第169号土坑（第142図）

第169号土坑はE-7グリッドに位置する。

第3号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

平面形態は楕円形で、規模は残存長0.64m、幅0.60m、深さ0.06mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第170号土坑（第134図）

第170号土坑はD-E-8グリッドに位置する。

平面形態は楕円形で、規模は長軸0.76m、短軸0.56m、深さ0.55mである。主軸方位はN-78°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第171号土坑（第134図）

第171号土坑はE-8グリッドに位置する。

平面形態は長方形で、規模は長軸1.92m、短軸0.46m、深さ0.06mである。主軸方位はN-7°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第172号土坑（第116図）

第172号土坑はC-6グリッドに位置する。

遺構の大半が調査区外のため平面形態は不明であるが、長方形か方形と推定される。規模は残存長1.22m、幅0.42m、深さ0.15mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第173号土坑（第121図）

第173号土坑はC・D-5グリッドに位置する。

重複する第8号溝跡より新しい。平面形態は超長方形で、規模は長軸3.78m、短軸0.65m深さ0.20m、主軸方位はN-14°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第174号土坑（第120図）

第174号土坑はB・C-3グリッドに位置し、第175号土坑の西側、第9号住居跡の北側に隣接する。平面形態は長方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.56m、深さ0.05mである。主軸方位はN-89°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第175号土坑（第120図）

第175号土坑はB・C-3・4グリッドに位置する。重複する第9号住居跡より古く、第149号

土坑より新しい。平面形態は長方形と推定される。規模は長軸3.67m、短軸2.48m、深さ0.17m、主軸方位はN-2°-Eを示す。出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第176号土坑（第122図）

第176号土坑はC-3グリッドに位置する。

平面形態は略長方形で、規模は長軸1.22m、短軸0.78m、深さ0.07mである。主軸方位はN-7°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第177号土坑（第118図）

第177号土坑はC-3グリッドに位置する。

重複する第155号土坑より古い。平面形態は略方形で、規模は長軸1.42m、短軸1.41m、深さ0.09mである。主軸方位はN-83°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第178号土坑（第121図）

第178号土坑はC-2・3グリッドに位置する。

重複する第11号住居跡、第162号土坑より古く、第164号土坑より新しい。第4、5号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形態は超長方形で、規模は長軸11.00m、短軸1.70m、深さ0.05mである。主軸方位はN-80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第179号土坑（第119図）

第179号土坑はB-3グリッドに位置する。重複する第16号溝跡より新しい。平面形態は方形で、規模は長軸2.00m、短軸1.94m、深さ0.26mである。主軸方位はN 80°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は中・近世と考えられる。

第180号土坑（第128図）

第180号土坑はB・C-2グリッドに位置する。土坑の西側は調査区外のため詳細は不明である。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長0.84m短軸0.89m、深さ0.05mである。主軸方位はN-55°-Wを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第181号土坑（第117図）

第181号土坑はB・C-5グリッドに位置する。土坑の北東部は調査区外のため詳細は不明である。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.76m、短軸1.41m、深さ0.13mである。主軸方位はN-78°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第182号土坑（第115図）

第182号土坑はB-4グリッドに位置する。土坑北側が調査区外のため規模の詳細は不明である。平面形態は長方形と推定される。規模は残存長1.71m、残存幅1.32m、深さ0.26mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第183号土坑（第115図）

第183号土坑はB-4グリッドに位置する。土坑の大半が調査区外のため詳細は不明である。平面形態は不明、規模は残存長1.26m、残存幅0.74m、深さ0.30mである。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第184号土坑（第115図）

第184号土坑はB-4グリッドに位置する。第18号溝跡と重複する。新旧は不明である。

平面形態は不整長方形で、規模は長軸1.30m、短軸0.75m、深さ0.11mである。主軸方位はN-34°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は不明である。

第185号土坑（第128図）

第185号土坑はD・E-7グリッドに位置する。重複する第6、7号住居跡より新しい。

平面形態は長方形で、規模は長軸3.10m、短軸1.28m、深さ0.26mである。主軸方位はN-13°-Eを示す。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

第186号土坑（第118図）

第186号土坑はC-3グリッドに位置する。重複する第153号土坑、第4号掘立柱建物跡より古い。土坑の大半が第153号土坑に切られているため規模などの詳細は不明である。残存長1.70m、残存幅0.28m、深さ0.16mを測る。

出土遺物はなかった。時期は中世と考えられる。

ピット（第150図）

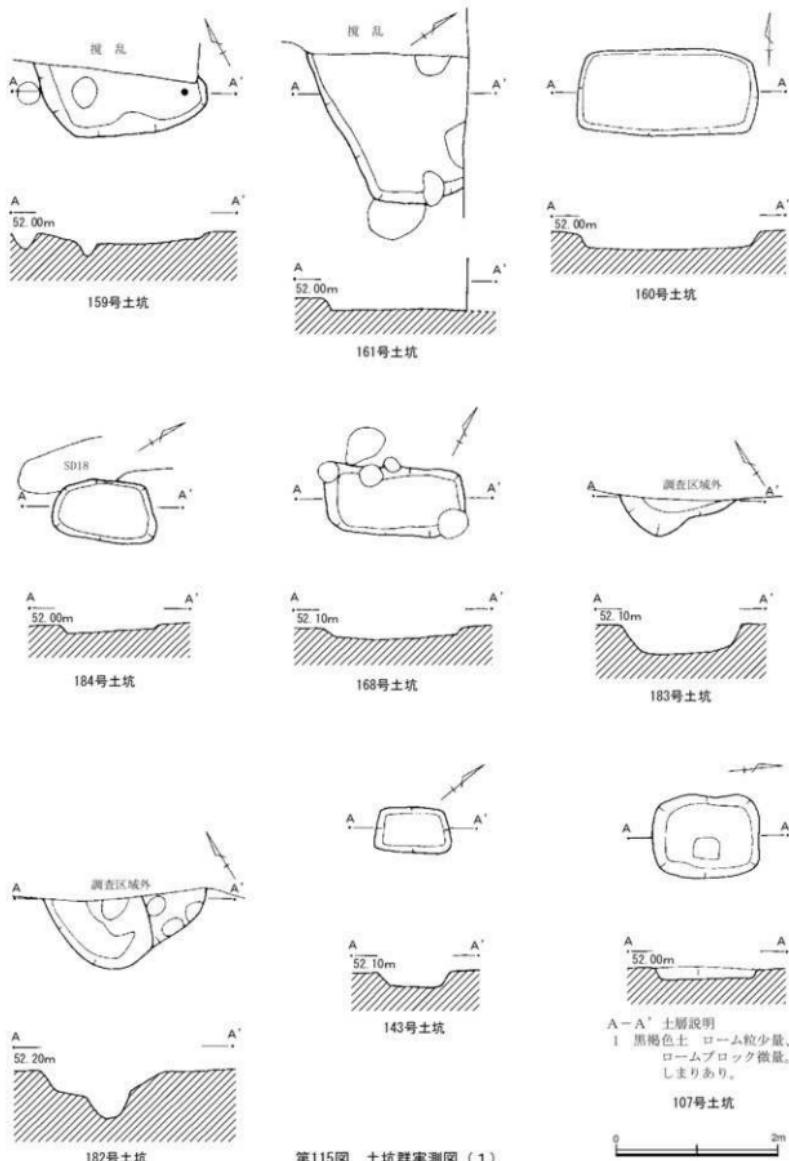
調査区内からは多数のピットが検出されている。個々のピットについては不明な点が多く、その性格を理解することは難しい。ただいくつかのピットからその性格を推測できる遺物を検出したものがある。検出された構造に伴わず、遺物の出土した単独ピットは8基確認されている。ピット1はG-7グリッドに位置する。第1号掘立柱建物跡東にあり、3基乃至4基の連結ピットで、一番南のピットから刀子（第151図1）の破片が出土地した。ピット2、3はG-7グリッドに位置す

る。第1号掘立柱建物跡の東側柱列中間に接する。2基乃至3基の連結ピットで、中央部から20cm前後の角閃石安山岩3個が出土した。ピット4はD-9グリッドに位置する。

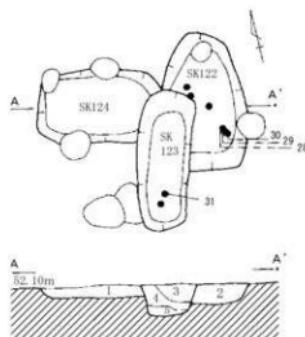
第7号溝跡の北側約0.3mにある。底から片面を窪ませた角閃石安山岩（第151図4）の円礫1個が出土した。ピット5はF-8グリッドに位置する。第16号土坑の東約0.6mにある。3基の連結ピットで、中央のピット覆土中から古銭・開元通寶（第151図2）が1点出土した。ピット6はB-5グリッドに位置する。第181号土坑の西約0.35mにある。覆土中から古銭・皇宋通寶（第151図3）が1点出土した。ピット7はF-7グリッドに位置する。第11号土坑の北約0.25m、第1号溝跡の西0.05mにある。角閃石安山岩の加工礫が2個出土した。その内の1点は角閃石安山岩をドーナツ状にくり貫いたもの（第151図5）で

ある。ピット8はB-4グリッドに位置し、第123号土坑の西側に位置する。2基の連結ピットで、西側のピット内から角閃石安山岩の円礫が3個重ねた状態で検出された。

本遺跡からは片面を窪ませたり、ドーナツ状にくり貫いたりした角閃石安山岩の加工礫が遺構から多数出土している。ピット4、7のようにピットの底から出土したものがあることから、建物に関連する柱や杭の根固め石（礎石）的な役目を果たしたもののが可能性がある。また、塔婆を立てた際の台石的なものであろうか。このような加工礫の出土例は西龍ヶ谷遺跡（佐藤忠雄1984）、六反田遺跡（浅野晴樹ほか1981）、熊野遺跡（富田和夫2002）があり、同様なものが検出されている。また古銭が出土したものは、塔婆を建てるためのピットで、その時に埋納された六道銭と考えることもできるが確証はない。



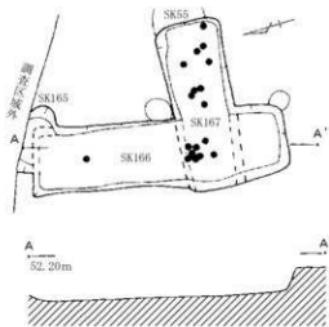
第115図 土坑群実測図(1)



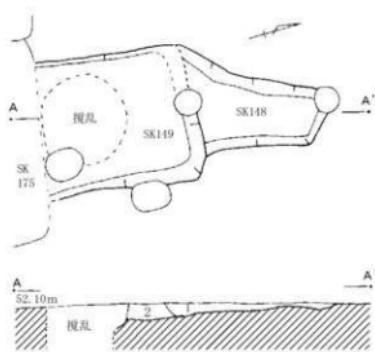
A-A' 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
- 2 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
- 3 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。
- 4 暗黃褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。

122~124号土坑



165・166・167号土坑



A-A' 土層説明

- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。
- 2 茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・黒色土多量。

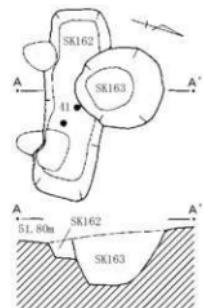
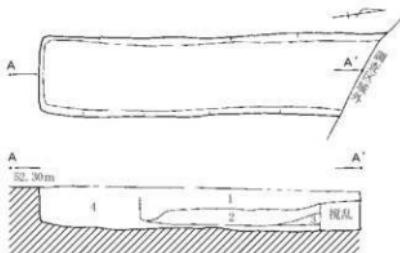
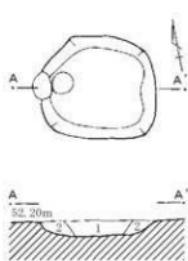
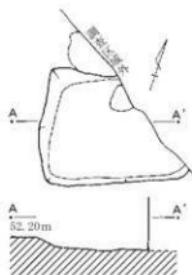
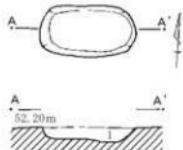
148・149・175号土坑



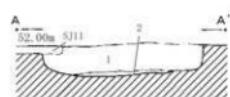
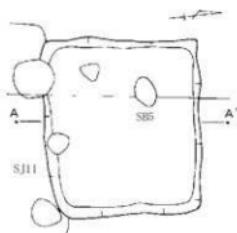
172号土坑



第116図 土坑群実測図(2)



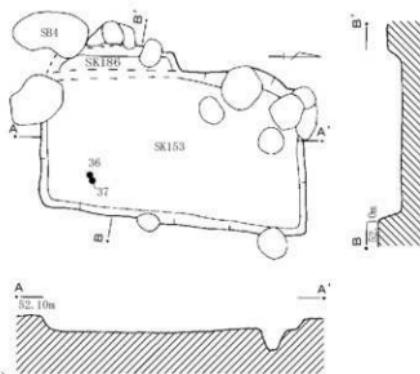
第117図 土坑群実測図(3)



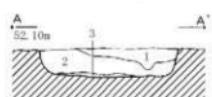
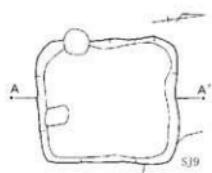
A-A' 土解説

- 1 暗茶褐色土 ローム粘・ロームブロック多量。しまり良い。
- 2 珊黃褐色土 ローム粘・ロームブロック多量。しまりやや弱い。

151号土坑



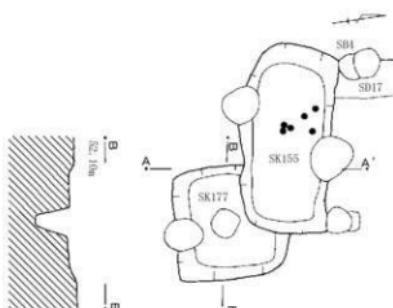
186・153号土坑



A-A' 土解説

- 1 暗茶褐色土 ローム粘・ロームブロック多量。しまり良い。
- 2 珊黃褐色土 ローム粘・ロームブロック多量。しまり良い。
- 3 黒褐色土 ローム粘少量。しまり弱い。

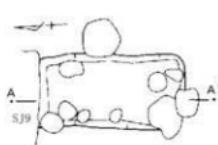
152号土坑



A-A' 土解説

- 1 暗褐色土 ローム粘・ロームブロック・バミ少量。しまり良い。
- 2 暗茶褐色土 ローム粘・ロームブロック多量。しまり良い。
- 3 黑褐色土 ローム粘・ロームブロック少量。しまり良い。
- 4 黄褐色土 ロームブロック主体。

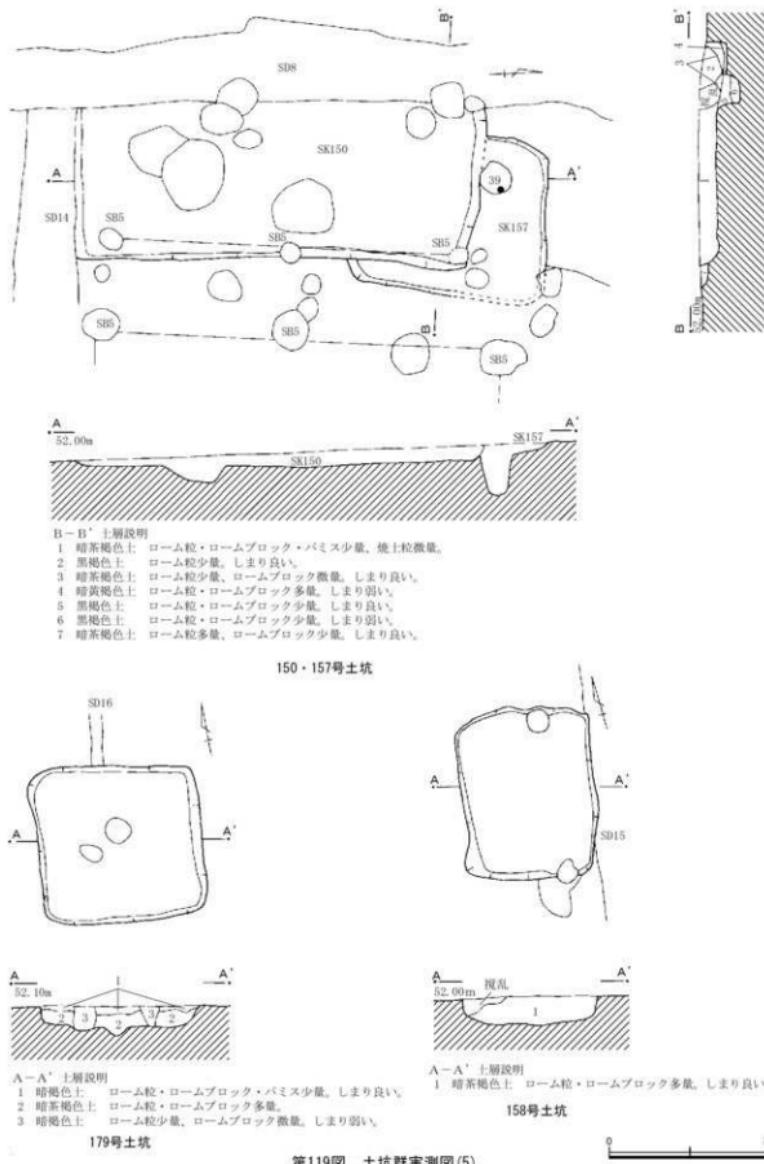
155・177号土坑



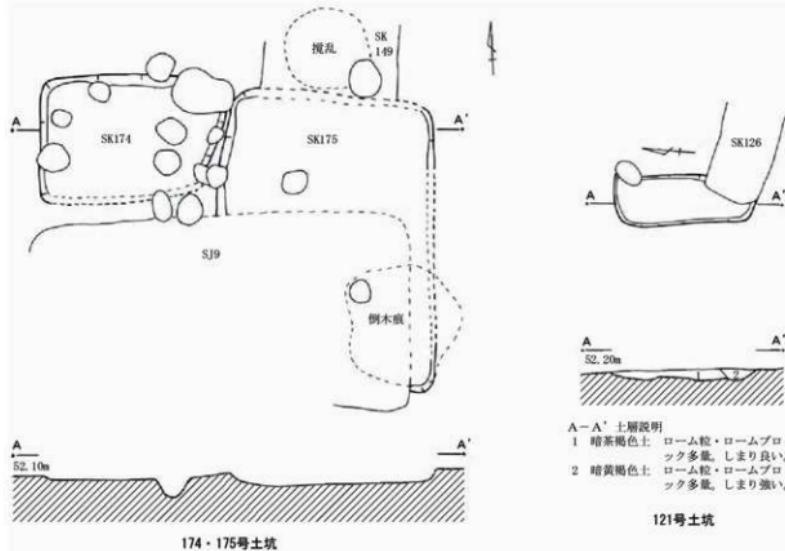
154号土坑



第118図 土坑群実測図(4)

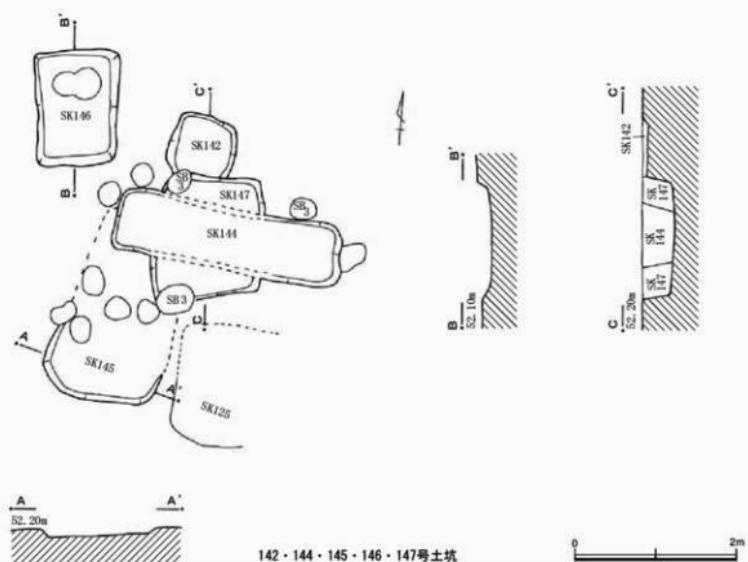


第119図 土坑群実測図(5)

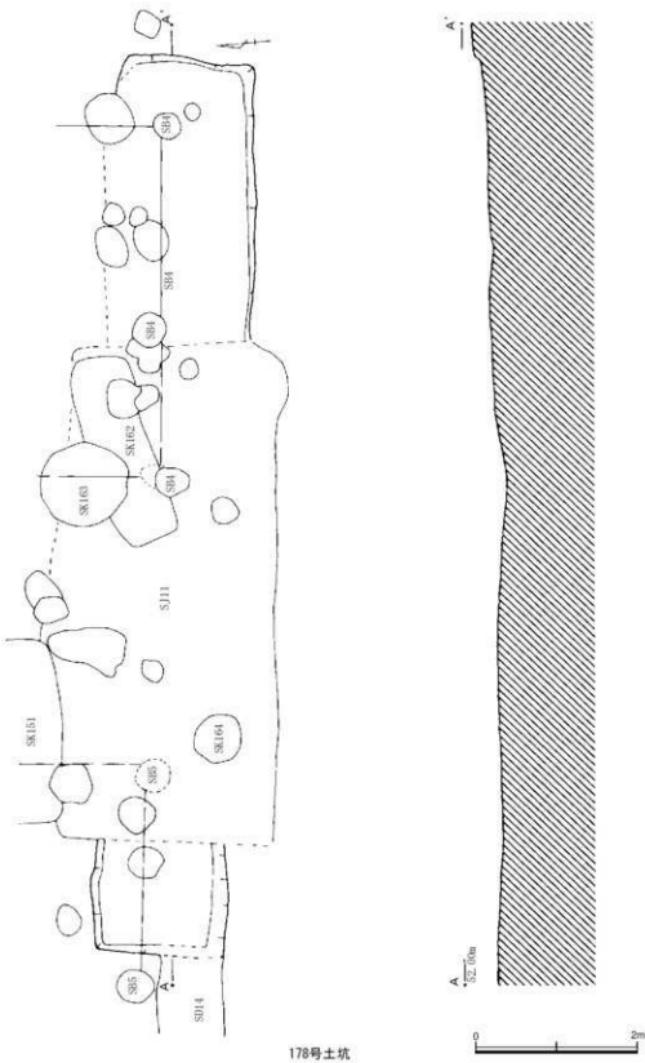


A-A' 土解説
1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
2 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。

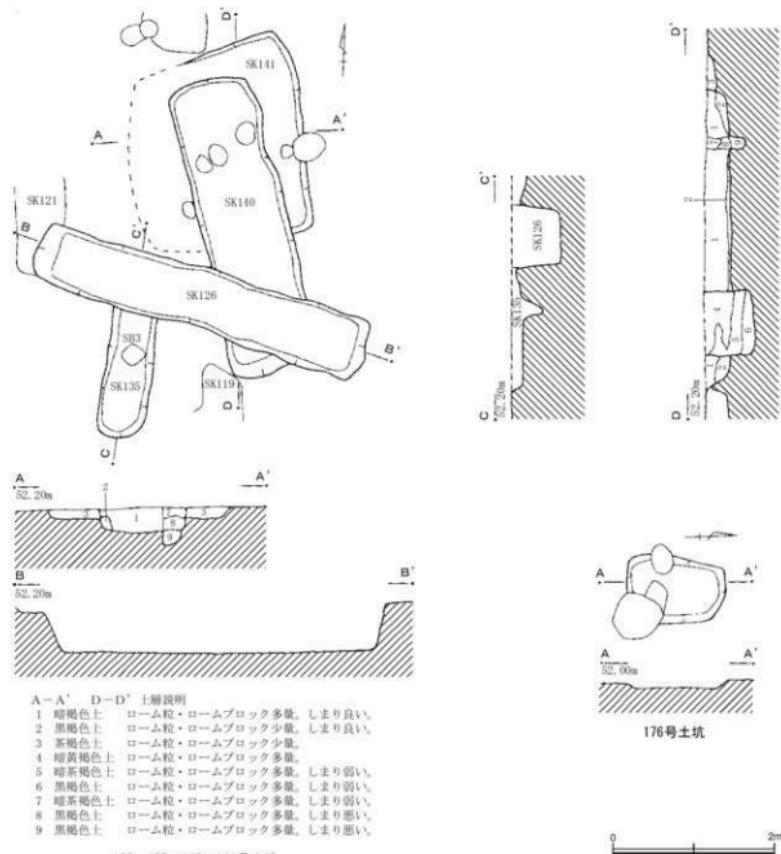
121号土坑



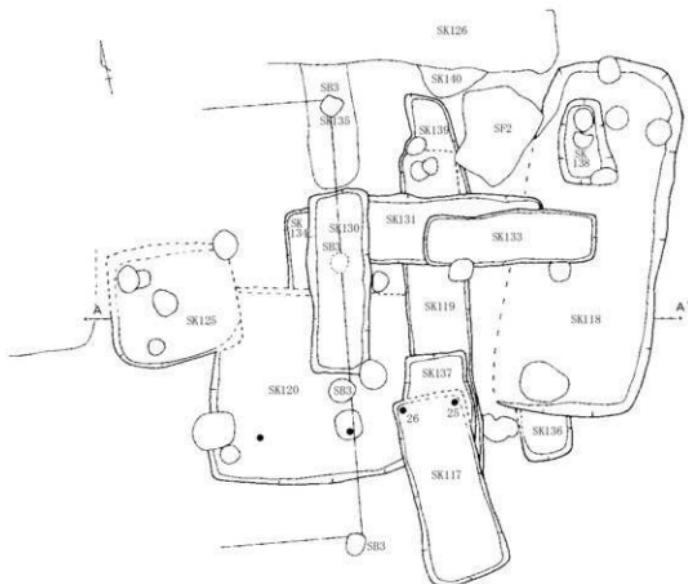
第120図 土坑群実測図(6)



第121図 土坑群実測図(7)



第122図 土坑群実測図(8)



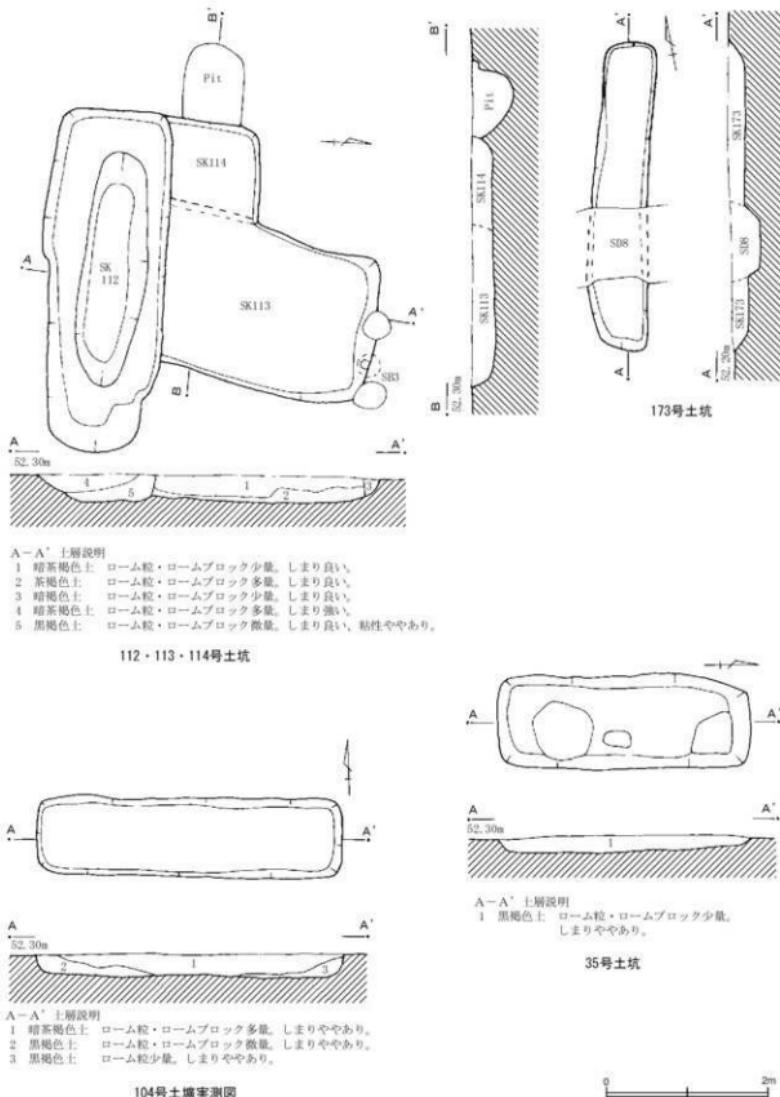
A-A' 土層説明

- 1 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。
- 2 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 3 暗褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。
- 4 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。粘土ブロック少量。しまり良い。
- 6 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 7 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。焼土粒微量。しまり強い。
- 8 暗黄褐色土 ロームブロック主体。しまり強い。

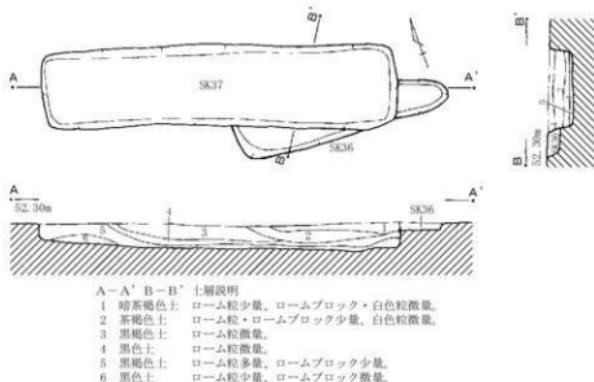
0 2m

117~120・125・130・131・133・134・136~139号土坑

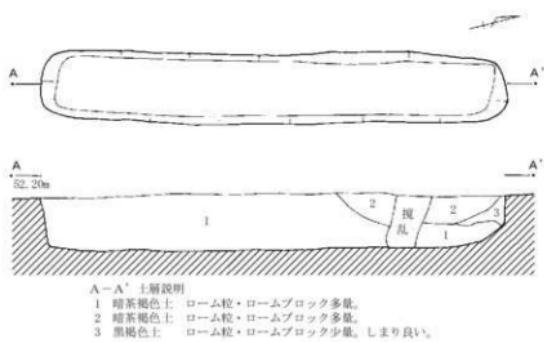
第123図 土坑群実測図(9)



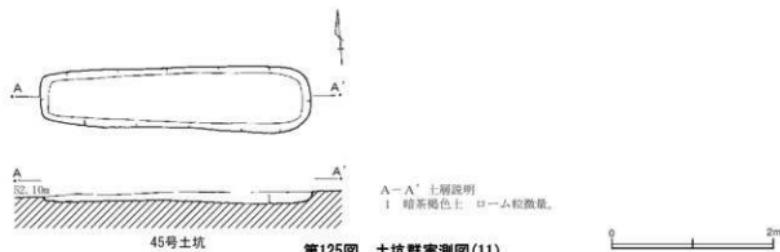
第124図 土坑群実測図(10)



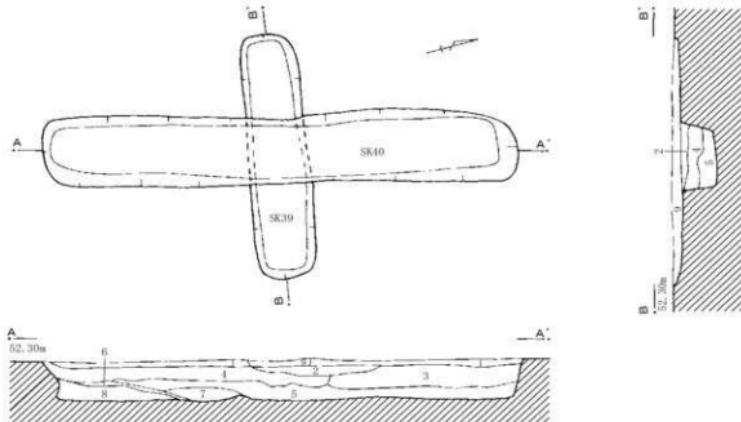
36・37号土坑



44号土坑

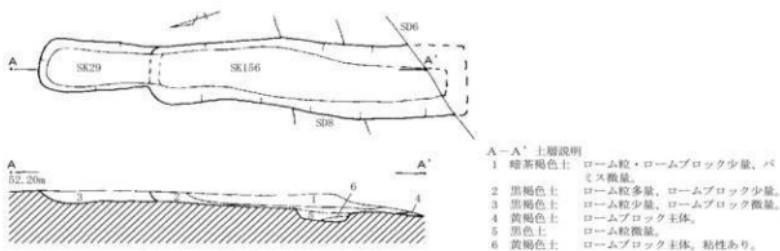


第125図 土坑群実測図(11)



- A-A' B-B' 土層説明
- 1 單褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、しまりあり。
 - 2 單紫褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、炭化物粒微量。
 - 3 單褐色土 ローム粒・ロームブロック均一。
 - 4 單紫褐色土 ローム粒・ロームブロック斑状。
 - 5 單紫褐色土 ローム粒・ロームブロック多量、しまり弱い。
 - 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
 - 7 單紫褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
 - 8 單茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
 - 9 單褐色土 ローム粒少量。やや砂質。

39・40号土坑

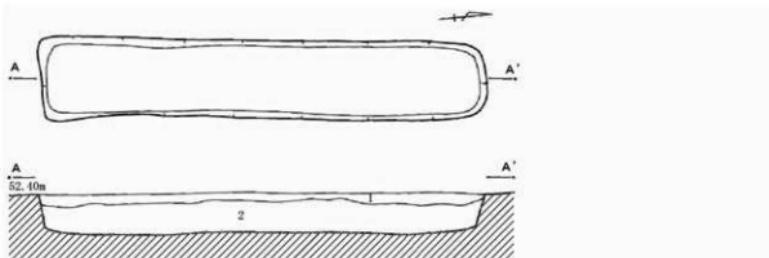


- A-A' 土層説明
- 1 單茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量、バクシス微量。
 - 2 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
 - 3 黑褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
 - 4 黄褐色土 ロームブロック主体。
 - 5 黒褐色土 ローム粒微量。
 - 6 黄褐色土 ロームブロック主体。粘性あり。

29・156号土坑

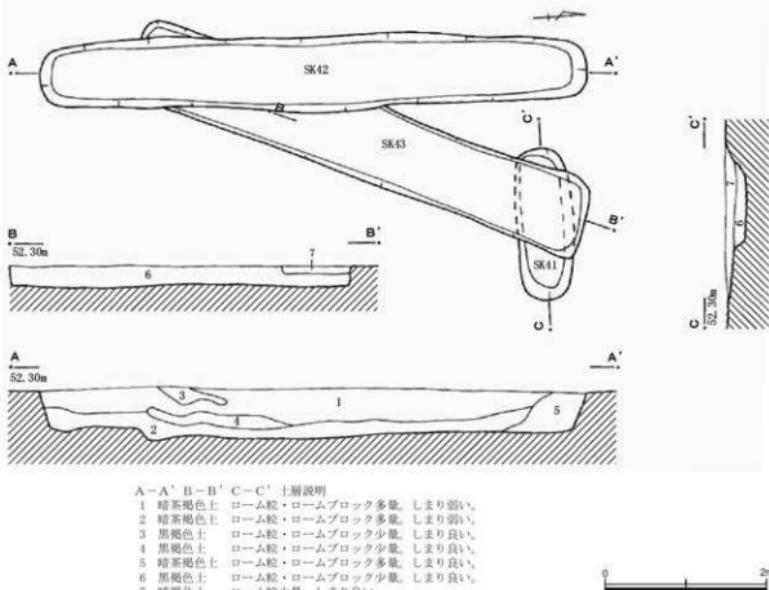
第126図 土坑群実測図(12)





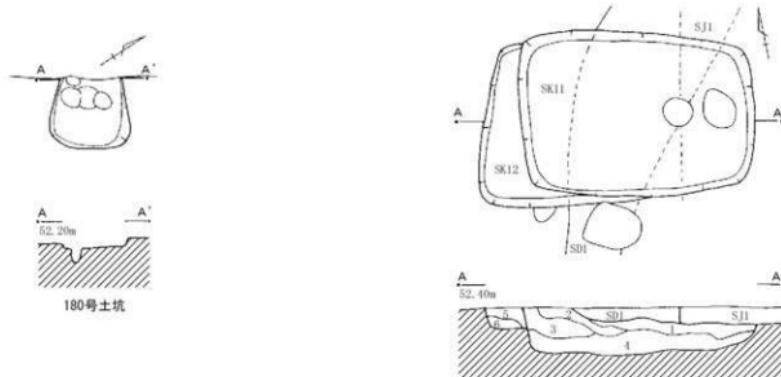
A-A' 土層説明
 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりややあり。
 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり弱い。

38号土坑



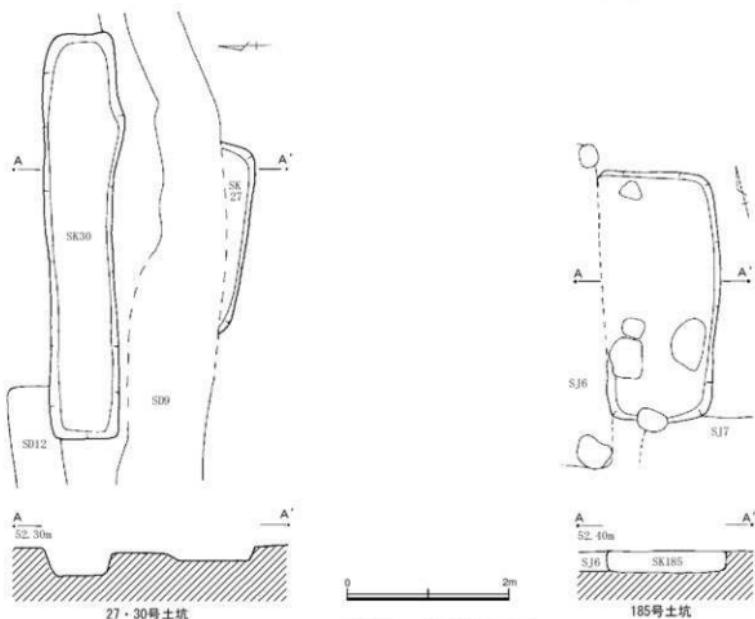
41・42・43号土坑

第127図 土坑群実測図(13)

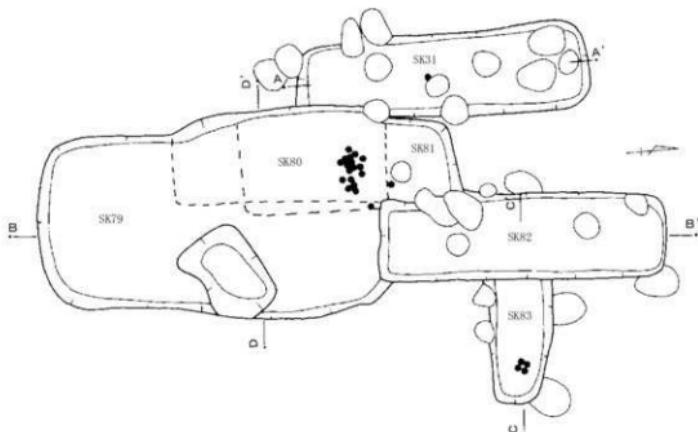


- A - A' 土層説明
 1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり強い。
 2 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
 3 暗黄褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
 4 暗黄褐色土 ロームブロックと黒色土の混在土。
 5 暗茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
 6 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりあり。

11・12号土坑

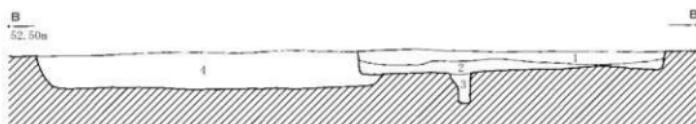


第128図 土坑群実測図(14)



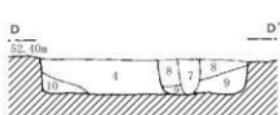
A-A' 土層説明

- 1 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやあり。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
- 3 噴霧褐色土 ローム粒少量、ロームブロック多量。しまり弱い。



B-B' C-C' D-D' 土層説明

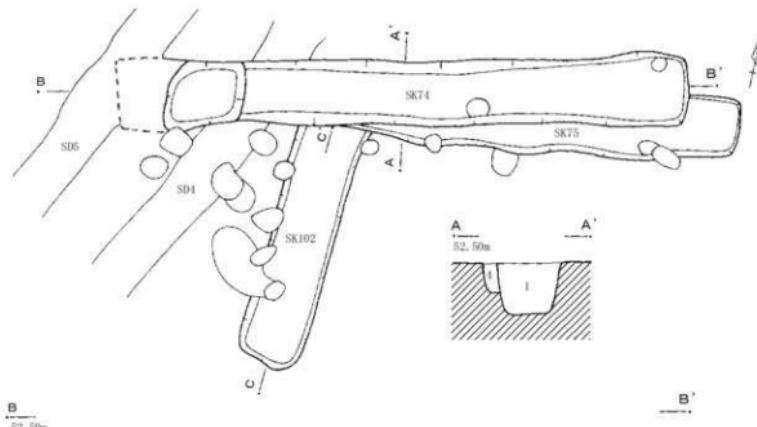
- 1 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 2 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 3 噴霧褐色土 ローム粒少量、ロームブロック多量。しまり弱い。
- 4 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 5 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 6 噴霧褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 7 噴霧褐色土 ローム粒微量。
- 8 黑褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
- 9 黑褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 10 黑褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。



31・79・80・81・82・83土坑



第129図 土坑群実測図(15)



A-A' B-B' 上層説明

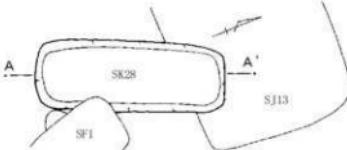
- 1 喙茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 2 黒褐色土 ローム粒均一。しまり良い。
- 3 喙黄褐色土 ローム粒・ロームブロック主体。しまり弱い。
- 4 喙茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまり良い。
- 5 喙茶褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。



C-C' 上層説明

- 1 喙茶褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量、バミス微量。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。

74・75・102号土坑

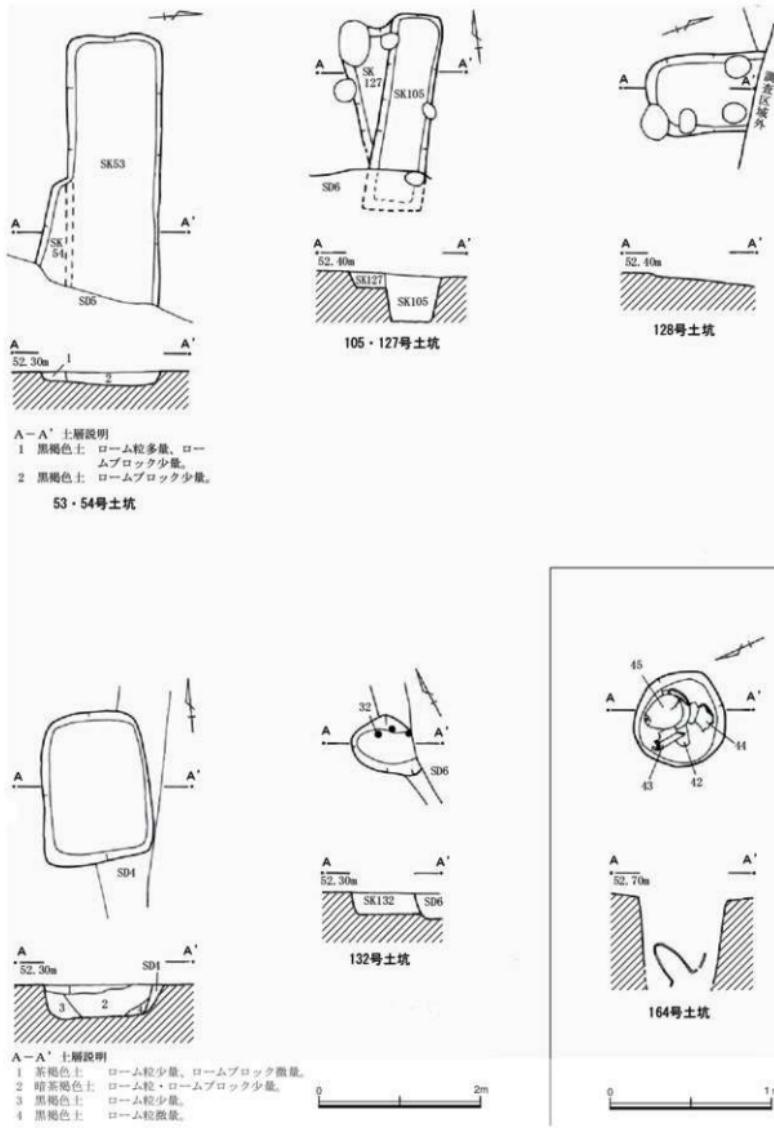


A-A' 上層説明

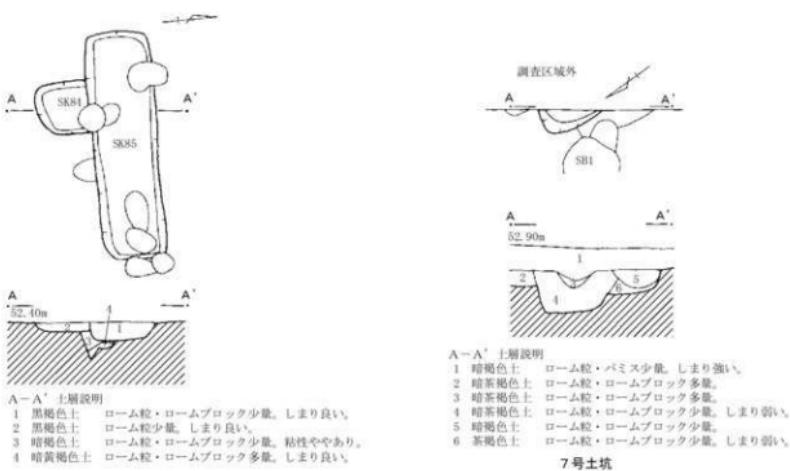
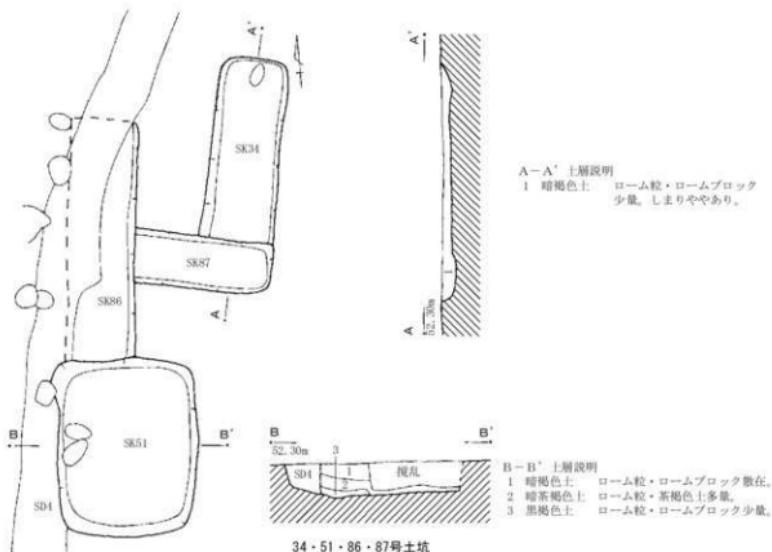
- 1 黒褐色土 ローム粒微量。
- 2 黒褐色土 ロームブロック少量。

28号土坑

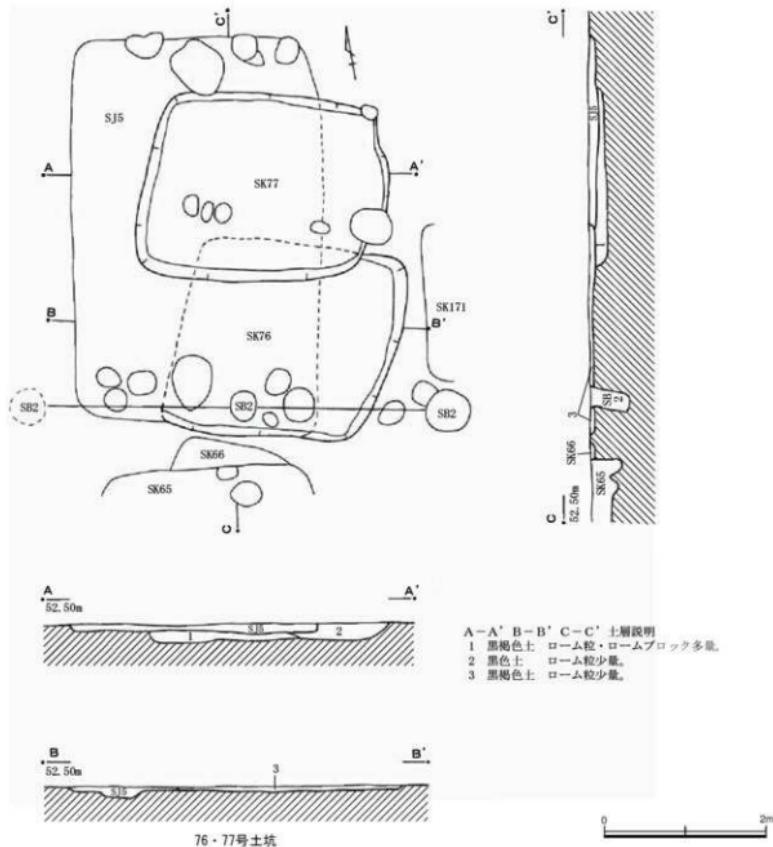
第130図 土坑群実測図(16)



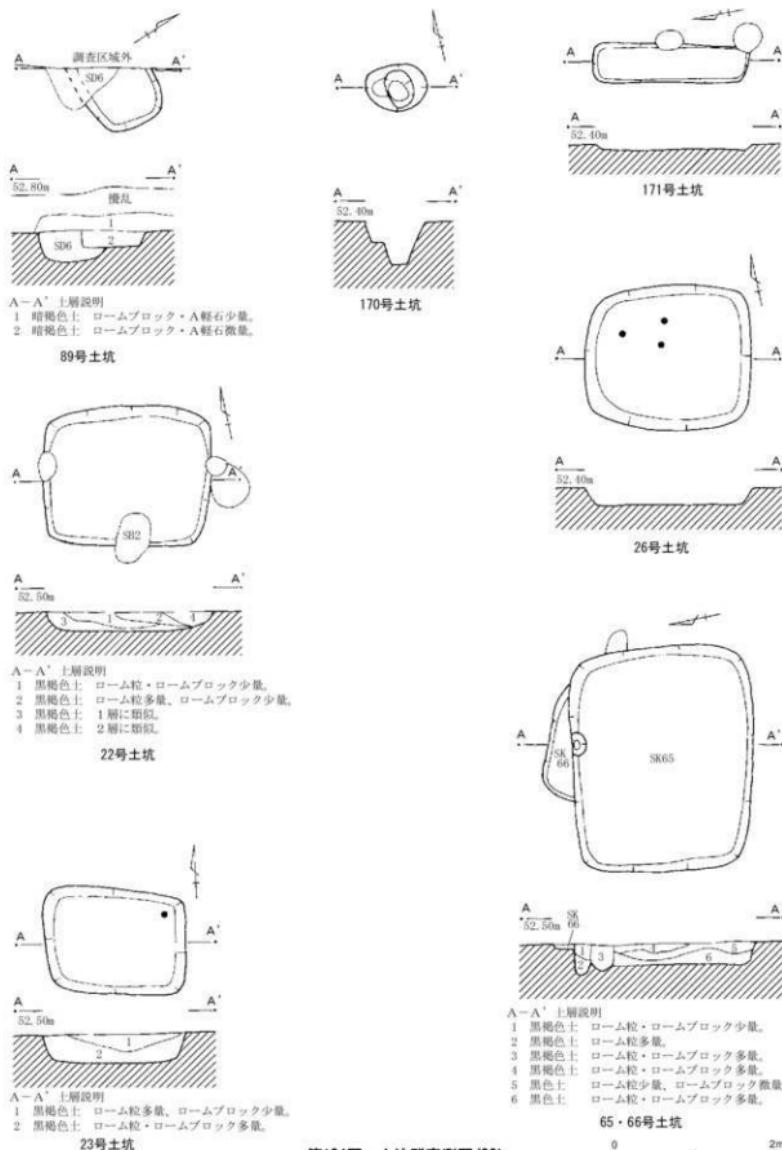
第131図 土坑群実測図(17)



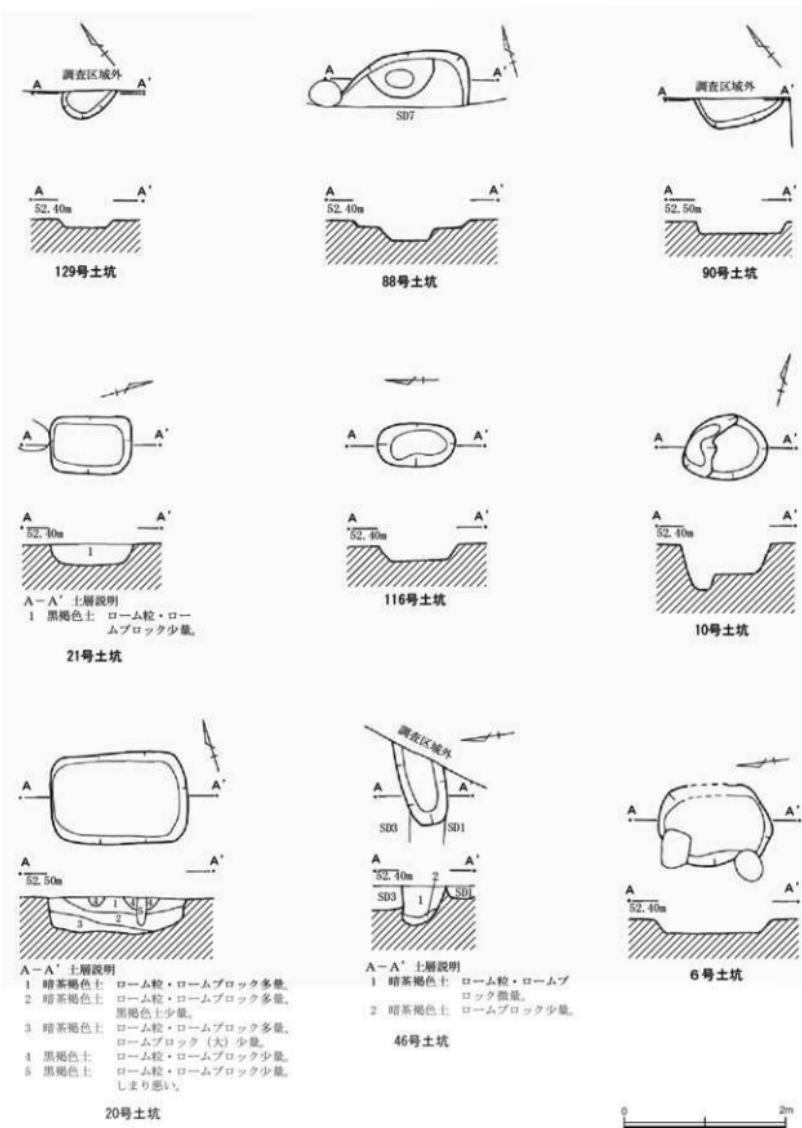
第132図 土坑群実測図(18)



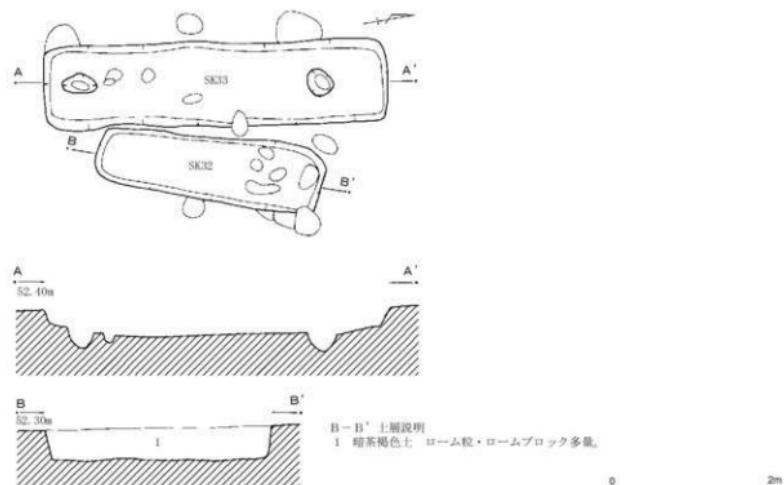
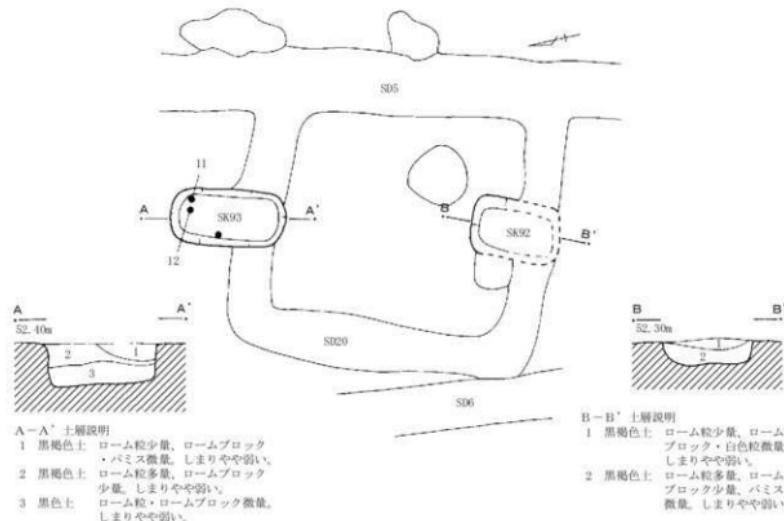
第133図 土坑群実測図(19)



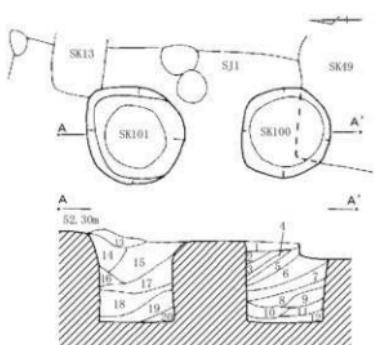
第134図 土坑群実測図(20)



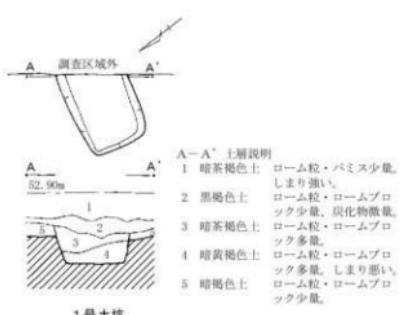
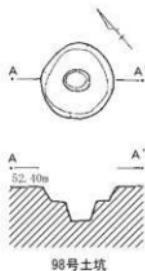
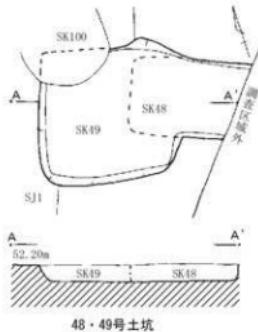
第135図 土坑群実測図(21)



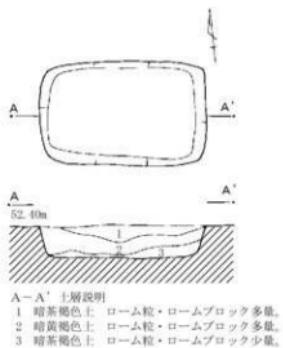
第136図 土坑群実測図(22)



100・101号土坑

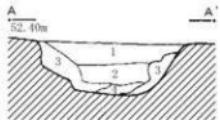
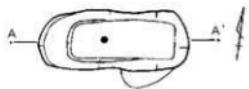


1号土坑



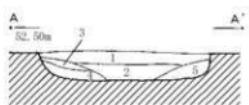
16号土坑

第137図 土坑群実測図(23)



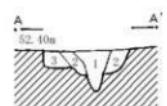
A-A' 上層説明
1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック散在。
2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
3 暗黃褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
しまり悪い。
4 雜褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
しまり悪い、粘性ややあり。

17号土坑

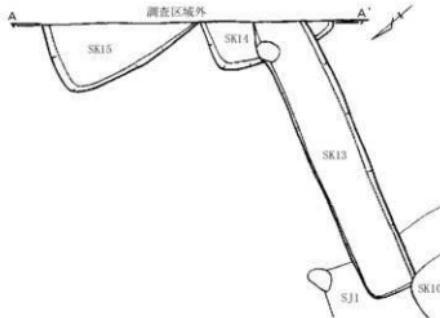


A-A' 上層説明
1 暗茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
2 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック微量。
3 暗黃褐色土 ローム粒非常に多い。
4 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
5 黑褐色土 ロームブロック少量、粘性ややあり。

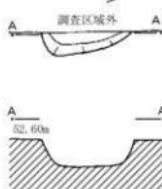
25号土坑



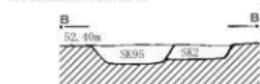
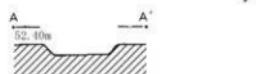
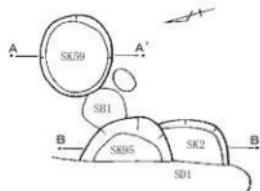
47号土坑



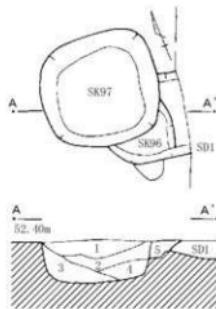
13・14・15号土坑



50号土坑



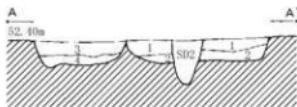
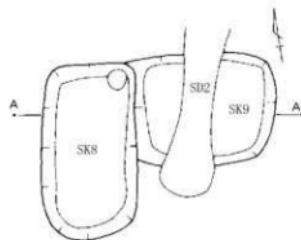
第138図 土坑群実測図(24)



A-A' 上層説明

- 1 緑茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 2 緑茶褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。しまりやや弱い。
- 3 緑茶褐色土 ローム粒・ロームブロック主体。しまり不良。
- 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。しまり良い。
- 5 緑褐色土 ローム粒微量。

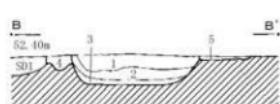
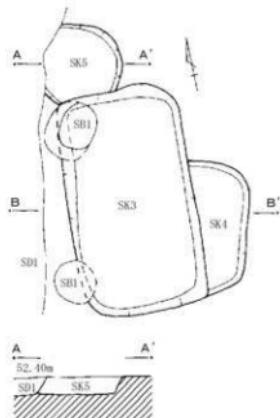
96・97号土坑



A-A' 上層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
- 2 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 3 黒色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
- 4 黒色土 ロームブロック非常に多い。

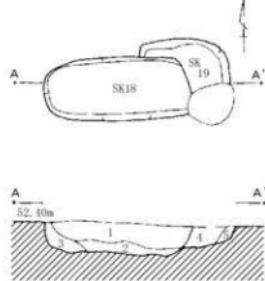
8・9号土坑



B-B' 上層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 2 黒色土 ローム粒微量、ロームブロック少量。
- 3 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
- 4 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
- 5 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。

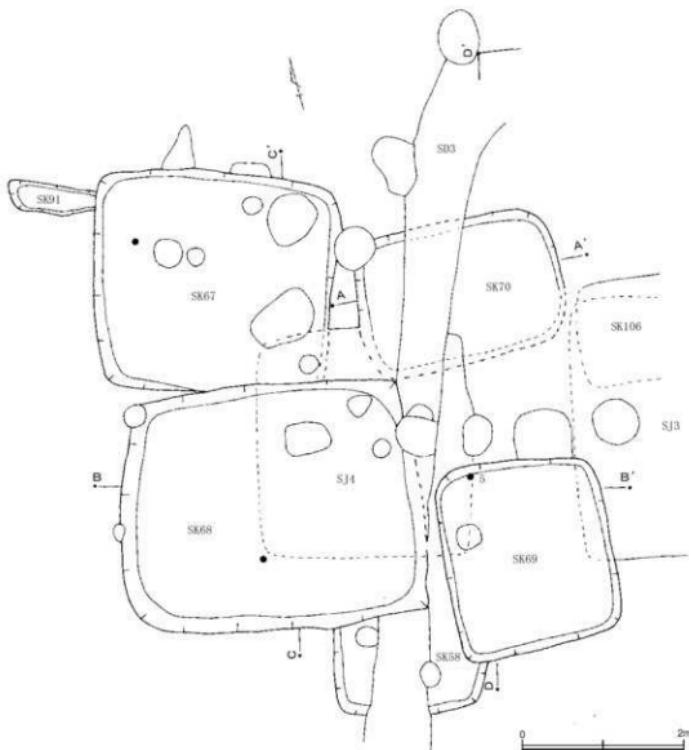
3・4・5号土坑



18・19号土坑

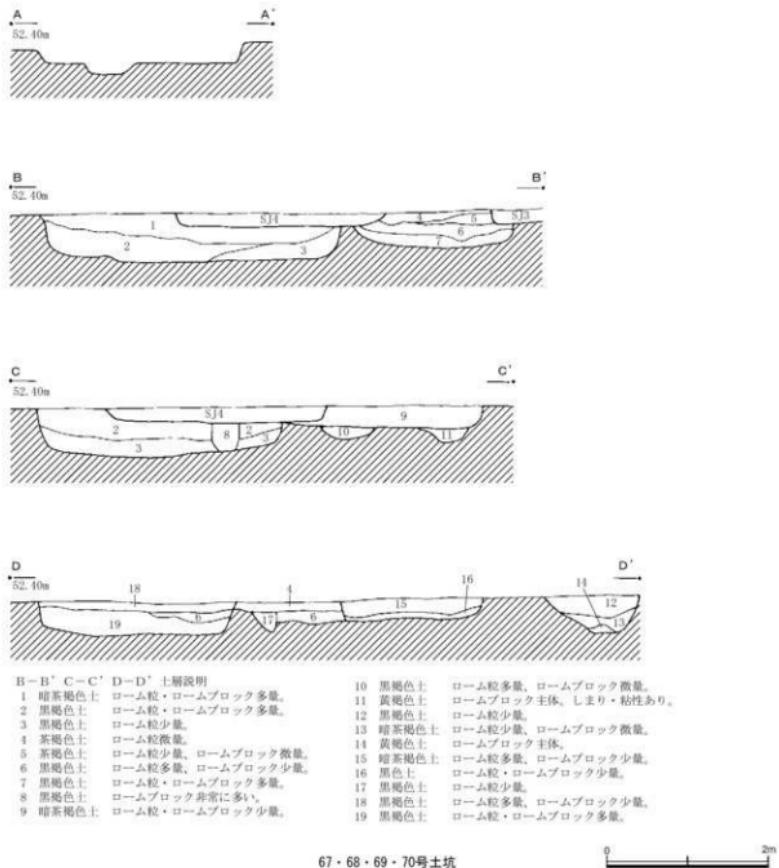
第139図 土坑群実測図(25)



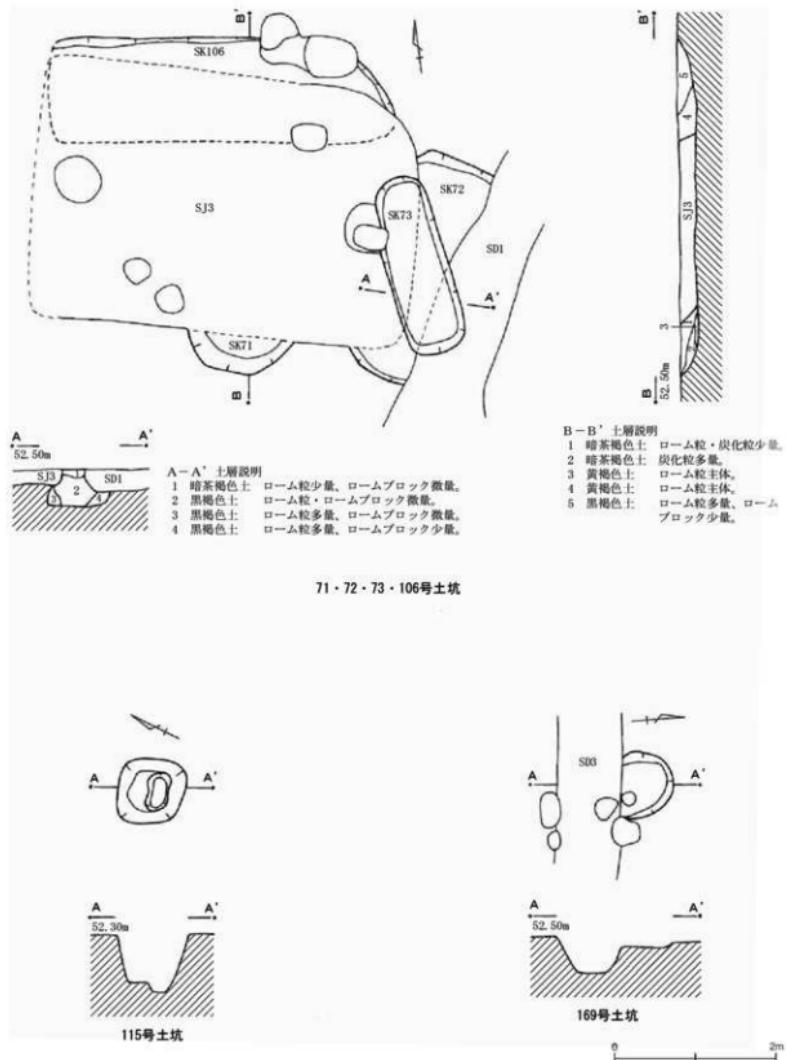


58・67・68・69・70・91号土坑実測図

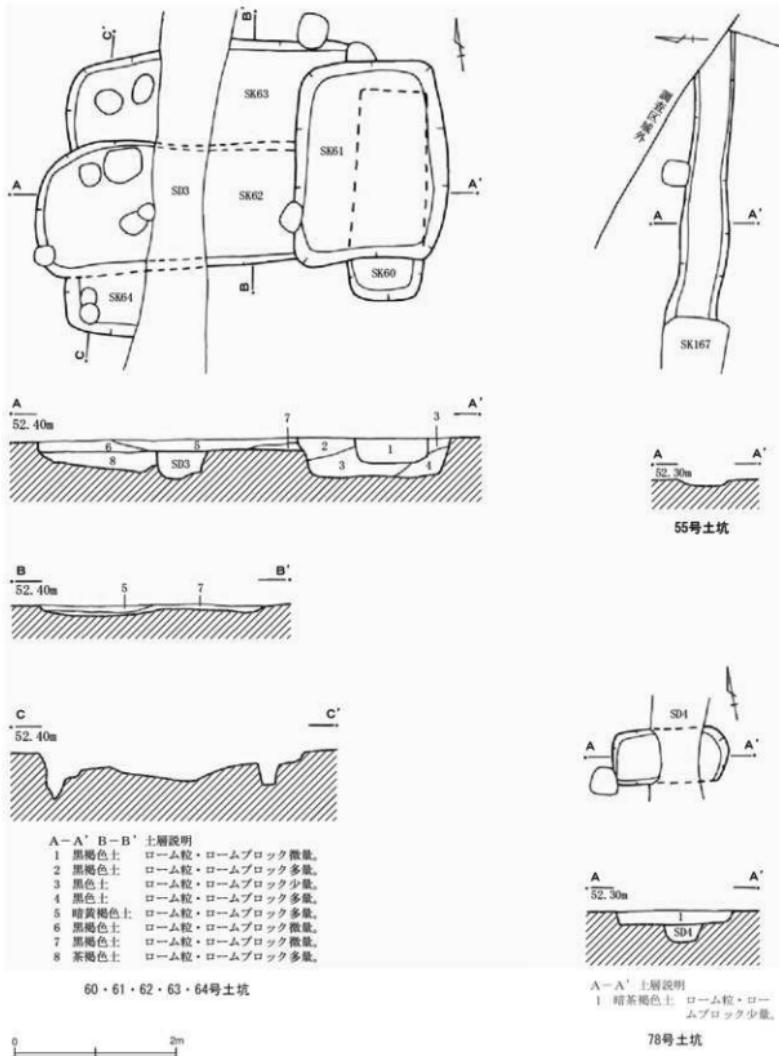
第140図 土坑群実測図(26)



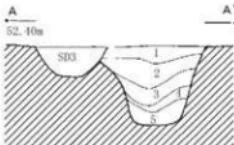
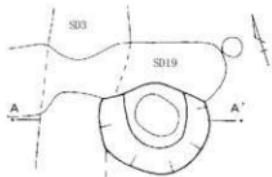
第141図 土坑群実測図(27)



第142図 土坑群実測図(28)

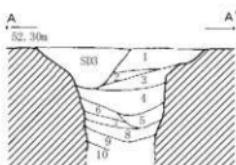
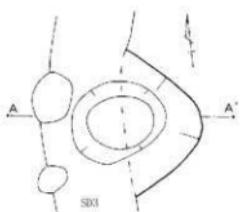


第143図 土坑群実測図(29)



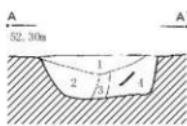
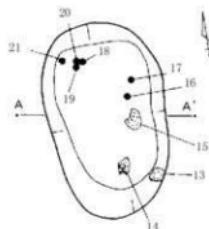
- A - A' 土層説明
- 1 茶褐色土 ローム粒微量。
 - 2 暗茶褐色土 ローム粒少量。
 - 3 黒色土 ローム粒・ロームブロック少量。
 - 4 黒褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
 - 5 黒色土 ローム粒・ロームブロック少量。
粘性あり。

56号土坑



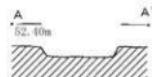
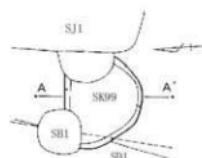
- A - A' 土層説明
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・バシス微量。
 - 2 黒褐色土 ローム粒少量。
 - 3 黑褐色土 ローム粒微量。
 - 4 黑褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
 - 5 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック少量。
 - 6 暗茶褐色土 ローム粒微量。
 - 7 黑褐色土 ローム粒微量。
 - 8 黑褐色土 ローム粒多量、ロームブロック少量。
 - 9 黑褐色土 ローム粒・ロームブロック多量。
 - 10 黑色土 ローム粒微量。

57号土坑



- A - A' 土層説明
- 1 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック微量。
 - 2 黒褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。
 - 3 暗茶褐色土 ローム粒微量。
 - 4 暗茶褐色土 ローム粒少量、ロームブロック微量。

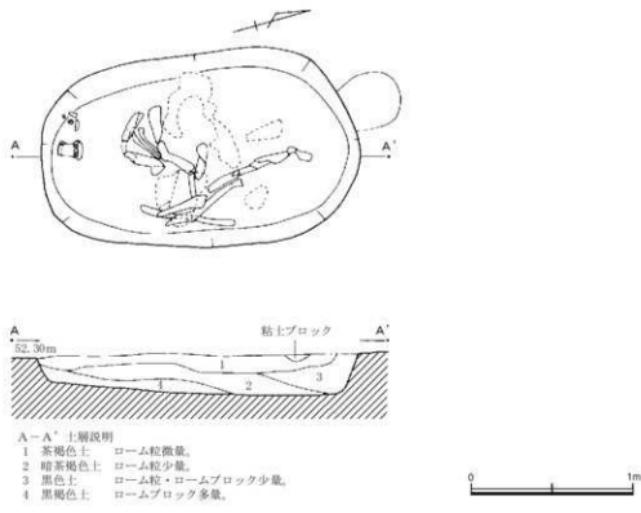
94号土坑



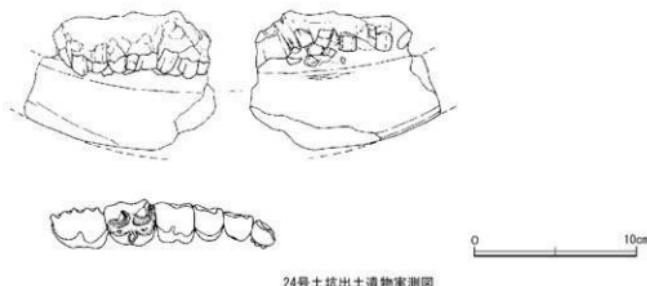
99号土坑



第144図 土坑群実測図(30)

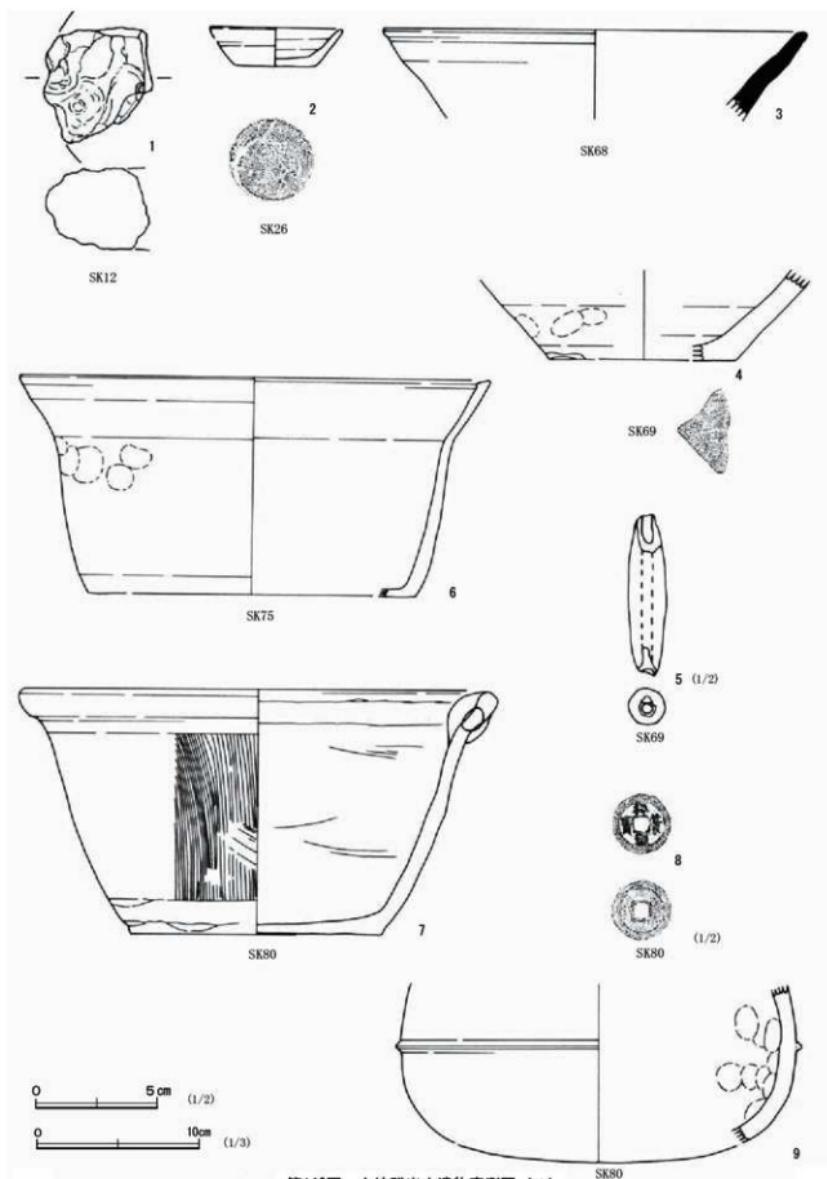


24号土坑

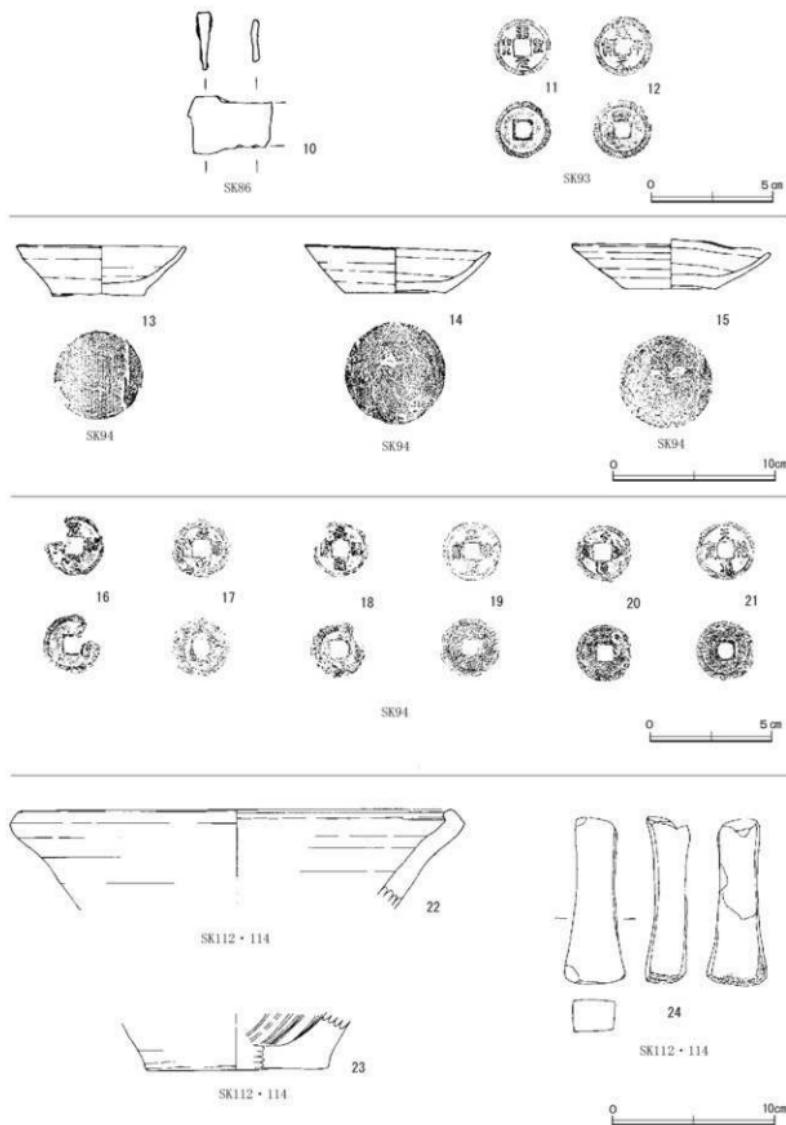


24号土坑出土遺物実測図

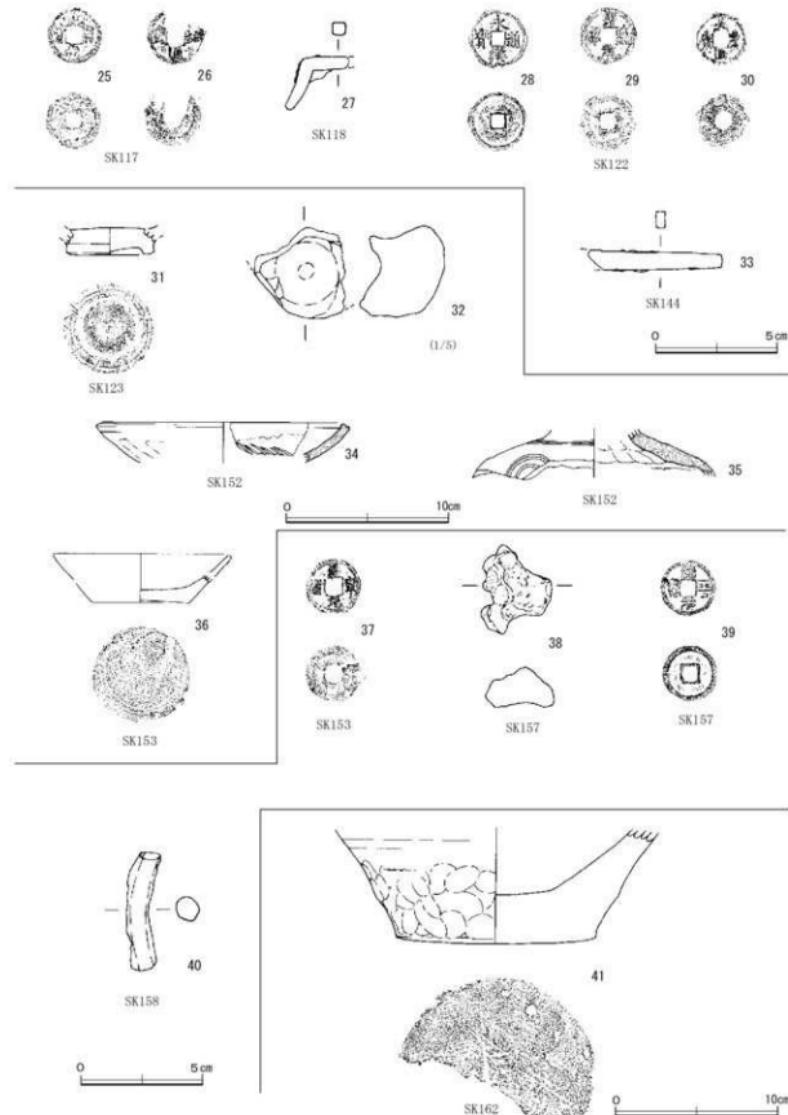
第145図 土坑群実測図(31)



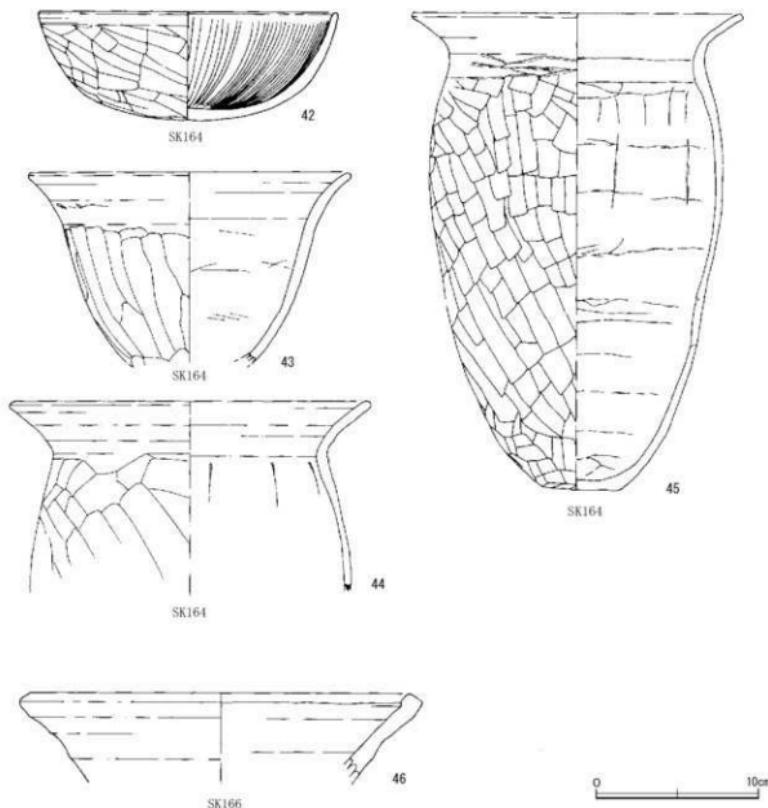
第146図 土坑群出土遺物実測図（1）



第147図 土坑群出土遺物実測図（2）



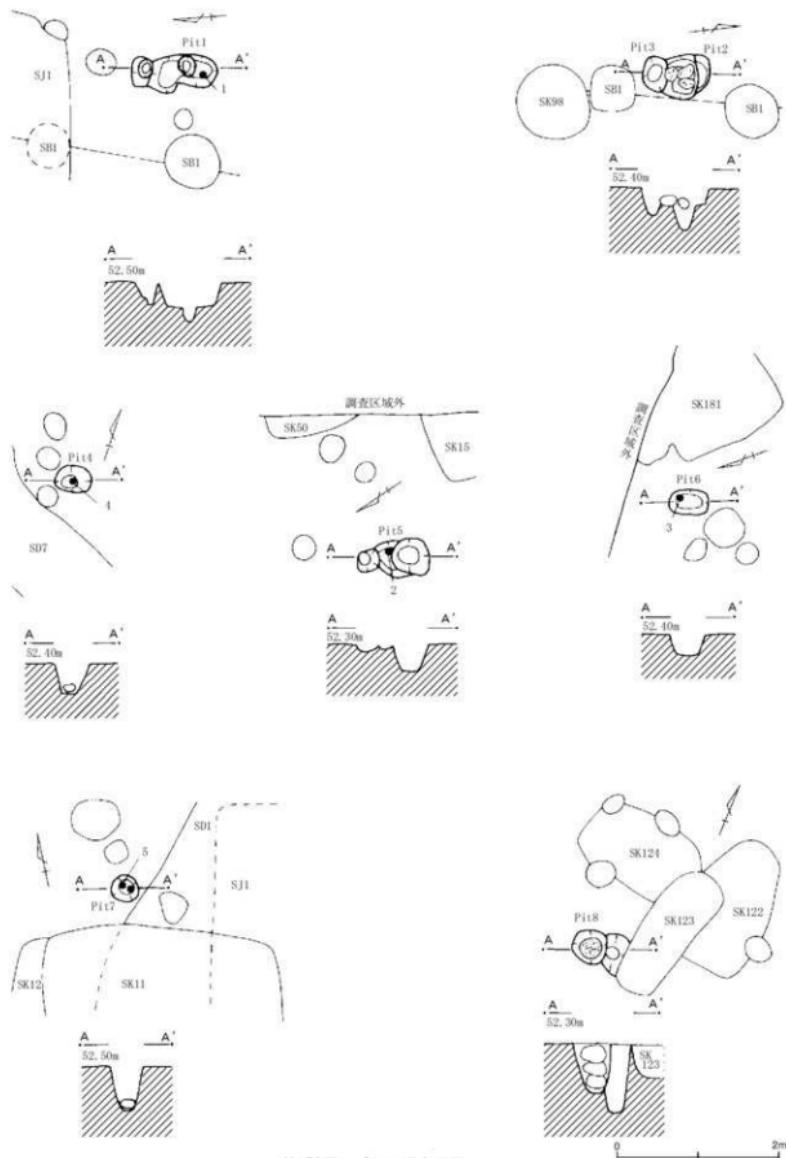
第148図 土坑群出土遺物実測図（3）



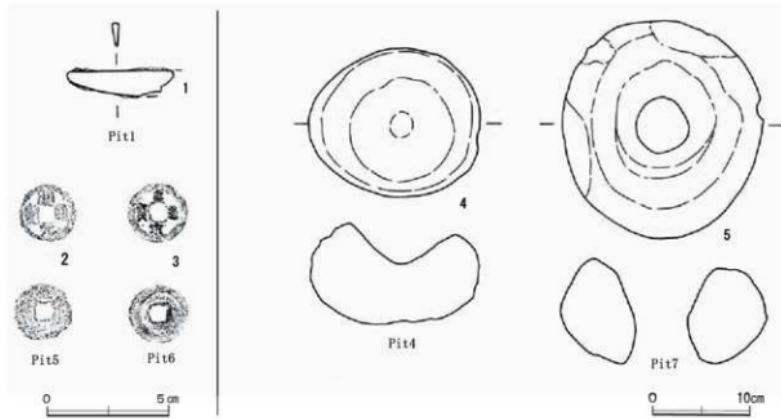
第149図 土坑群出土遺物実測図（4）

土坑出土遺物觀察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	壺形津	長さ4.7cm	幅4.5cm	厚さ3.3cm	重さ98.7g				SK12
2	カワラケ	(8.0)	2.4	4.9	淡灰黃赤色	不良	石英、角閃石	70%	SK26、底部回転糸切り未調整
3	鉢	(25.7)	《5.5》	-	灰褐色	良好	石英、長石、赤色粒	図示10%	SK68、常滑
4	片口鉢	-	《5.6》	(11.6)	明灰色	普通	石英、長石	図示12%	SK69、瓦質、底部回転糸切り未調整
5	土鍋	長さ6.6cm	幅1.5cm	孔径0.4cm	重さ11.8g	普通	微砂粒	90%	SK69図示
6	土鍋	(28.0)	13.3	(20.0)	黒褐色	やや悪	石英、長石、チャート	図示20%	SK75、SD1覆土と接合、瓦質
7	土鍋	(28.4)	15.0	(15.3)	暗灰色	普通	石英、長石、片岩	25%	SK80、瓦質、外側ハゲ目調整、外側に付着
8	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK80、祥符元年(北宋)
9	土釜	-	《9.8》	-	灰黒色	普通	石英、長石、片岩	図示20%	SK80、瓦質
10	刀子	長さ3.4cm	幅2.4cm	厚さ0.6cm	重さ5.6g				破片 SK88
11	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK93図示、紹聖元年(北宋)
12	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK93図示、咸平元年(北宋)
13	カワラケ	10.2	3.2	5.5	灰橙褐色	良好	石英、雲母	60%	SK94図示、底部に板目状圧痕
14	カワラケ	11.3	3.0	6.0	灰橙褐色	良好	石英、雲母	90%	SK94図示、底部回転糸切り未調整、並みあり
15	カワラケ	12.1	3.0	5.5	灰橙褐色	良好	石英、チャート、雲母	95%	SK94図示、底部回転糸切り未調整、並みあり
16	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、元祐通宝(北宋)
17	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、至和通宝(北宋)
18	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、皇宋通宝(北宋)
19	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、皇宋通宝(北宋)
20	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、元祐通宝(北宋)
21	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK94図示、天祐通宝(北宋)
22	片口鉢	(26.0)	《6.1》	-	淡灰褐色	普通	微砂粒	図示10%	SK112, H4、瓦質、在地
23	植鉢	-	《3.6》	(11.2)	明灰色	やや悪	微砂粒	図示25%	SK112, H4、瓦質、在地
24	砾石	長さ10.3cm	幅3.7cm	厚さ2.6cm	重さ102.4g		石質 硬岩		SK112, H4
25	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK117図示、元祐通宝(北宋)
26	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK117図示、元祐通宝(北宋)
27	鏡	長さ2.6cm	幅2.2cm	厚さ0.5cm	重さ2.3g				破片 SK118
28	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK122図示、永楽通宝(明)
29	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK122図示、熙寧元宝(北宋)
30	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK122図示、元豐通宝(北宋)
31	青磁碗?	-	《1.7》	5.4	灰緑色	良好	精良	図示95%	SK123図示
32	加工窯	長さ9.4cm	幅9.2cm	厚さ8.9cm	重さ395g	石質 角閃石安山岩			SK132図示、片面中央が凹む、根脚有り
33	刀子	長さ5.6cm	幅0.8cm	厚さ0.4cm	重さ4.8g				破片 SK144、茎部
34	灰釉御皿	(14.8)	《2.4》	-	淡灰褐色	良好	精良	図示10%	SK152、瀬戸
35	灰釉瓶子	-	《3.0》	-	灰暗緑色	良好	長石	図示20%	SK152、瀬戸、印花文
36	カワラケ	-	《1.7》	4.0	灰橙色	普通	石英、雲母、角閃石、微砂粒	図示90%	SK153、底部回転糸切り未調整外側に付着
37	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK153図示、熙寧元宝(北宋)
38	鐵洋	長さ3.7cm	幅2.9cm	厚さ1.6cm	重さ17.4g	磁着度 中			SK157
39	銭貨	計測値は別表の錢貨觀察表を参照	-	-	-	-	-	-	SK157図示、治平元年(北宋)
40	不明鉄製品	長さ4.8cm	幅1.1cm	重さ0.8g					破片 SK158、細い棒状、錆び跡れ
41	片口鉢	-	《7.2》	(12.4)	淡灰褐色	普通	石英、長石、黒色粒	図示40%	SK162図示、瓦質、在地。底部に油滴状黒斑多量
42	环	18.1	6.7	-	橙色	普通	細繩、角閃石、鈣化鉄粒	60%	SK164図示、内面放射状暗文
43	瓶・鉢	(19.7)	《11.8》	-	にぶい赤褐色	普通	石英、長石、バミス、角閃石	図示40%	SK164図示
44	甕	(21.9)	《11.8》	-	にぶい棕褐色	普通	石英、長石、角閃石、砂粒	図示45%	SK164図示
45	甕	(20.3)	29.3	4.8	棕褐色	普通	石英、チャート、雲母、赤色粒	60%	SK164図示
46	片口鉢	(23.4)	《5.6》	-	灰橙褐色	普通	微砂粒	図示15%	SK166、瓦質、在地



第150図 ピット群実測図



第151図 1・4～7号ピット出土遺物実測図

ピット出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色 虞	施成	胎 土	残存率	備 考
1	刀子	長さ4.3cm	幅1.1cm	厚さ0.2cm	重さ 3.5g			破片	Pit 1 図示、切先、錫び跡れ
2	銭貨	計測値は別表の銭貨観察表を参照							Pit 5 図示、開元通宝(唐)
3	銭貨	計測値は別表の銭貨観察表を参照							Pit 6 図示、皇木通宝(北宋)
4	加工鍬	長さ17.5cm	幅15.3cm	厚さ10.3cm	重さ1.657kg	石質 角閃石安山岩			Pit 4 図示、片面中央部凹む、根固め石
5	加工鍬	長さ22.2cm	幅20.6cm	厚さ10.7cm	重さ2.740kg	石質 角閃石安山岩			Pit 7 図示、ドーナツ状に穿孔、根固め石

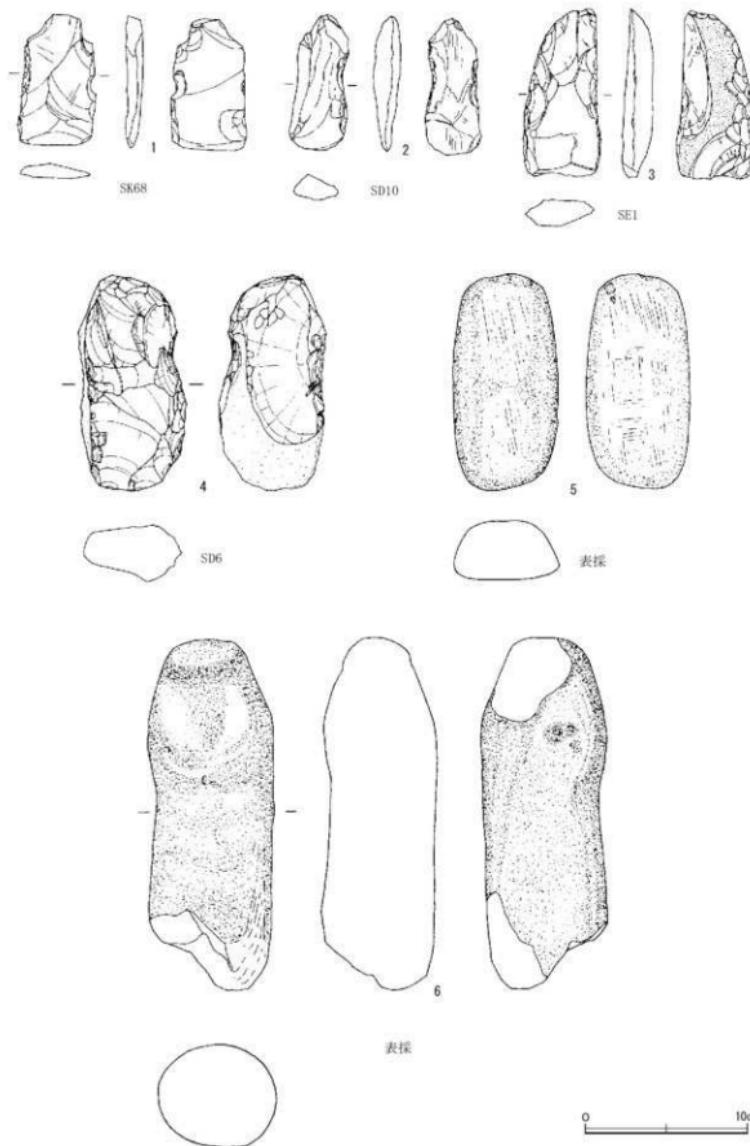
グリッド出土遺物 (152図1～6、第153図1～8)

遺構に伴わざり出土した覆土一括と表採の資料である。

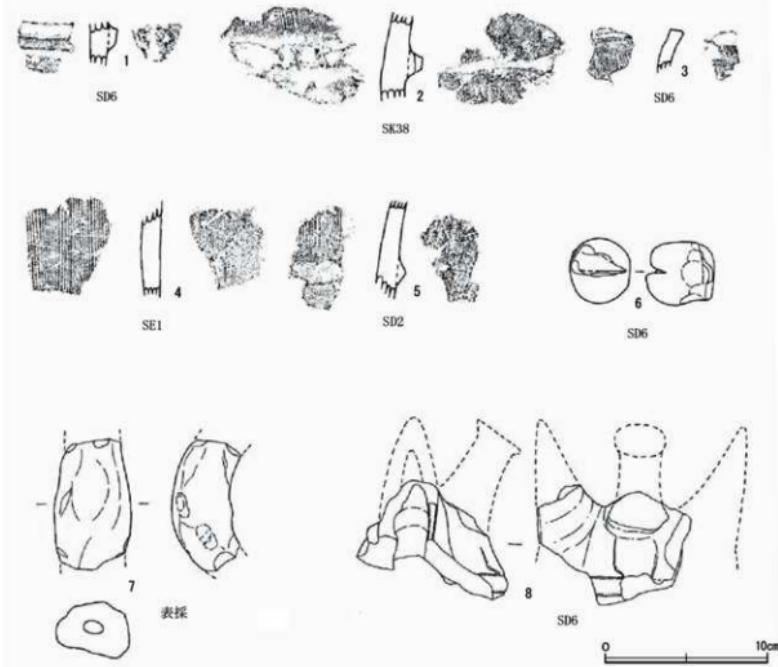
第153図1～8は古墳時代の埴輪片である。1～5は円筒埴輪の破片で、突帯の形状は台形と三角形がある。6～8は形象埴輪の破片で、6・8は馬形埴輪である。頭部と馬鉤と思われる。7は人

物埴輪の腕の破片と思われる。

第152図1～6は縄文時代の石器で、1は搔器で、剥片のエッジに調整剥離を施している。2～4は打製石斧で、2は小型の分銅形、3は撥形、4は横長剥片を加工した石斧である。5は磨石で表裏に磨り跡が顯著。6は石棒で綠泥片岩を加工し表面を滑らかに仕上げている。



第152図 調査区出土石器実測図



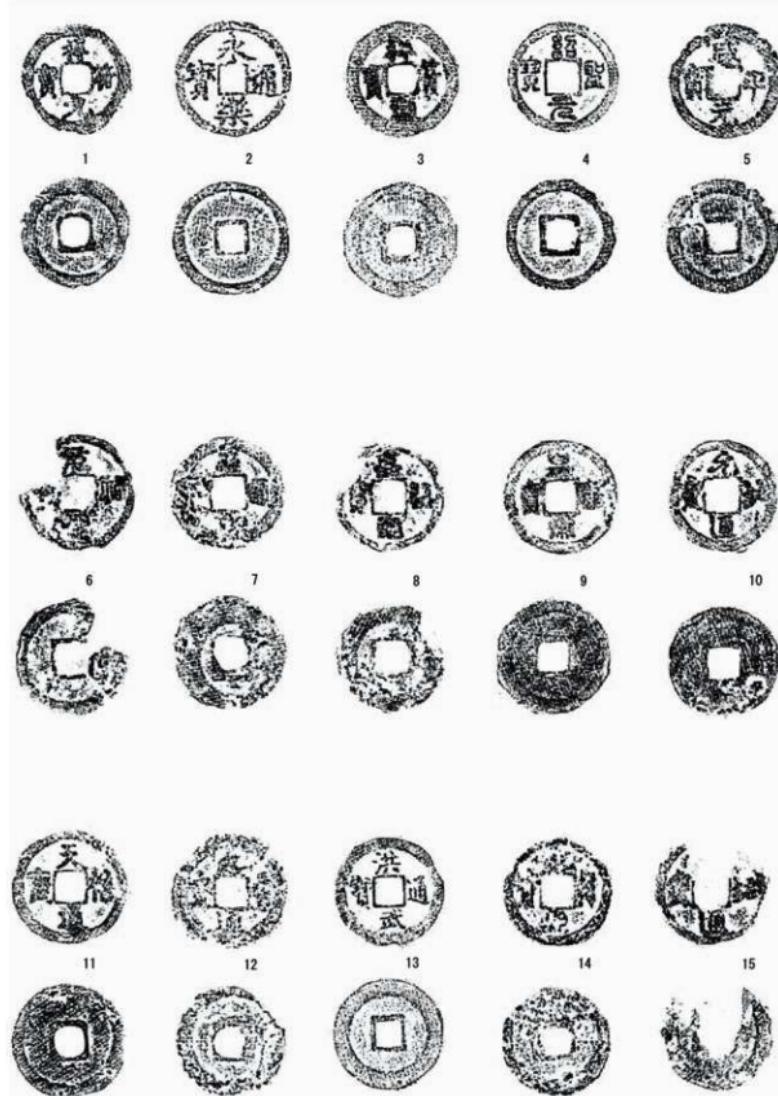
第153図 調査区出土石器実測図

石器観察表

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	備考
1	縁器	8.0	4.7	1.0	43.6	ホルンフェルス	SK68、側面調整削離
2	打製石斧	8.3	3.5	1.6	43.3	真岩	SD10、分断型、弱い抉れ、風化
3	打製石斧	10.3	4.7	1.8	100.3	ホルンフェルス	SE1、縁型、縫面残る
4	打製石斧	13.2	6.5	3.4	325.6	黒色頁岩	SD6、横長剥片を使用、片刃、縫面残る
5	磨石	13.2	6.4	3.6	410.0	チャート	表採、表面よく磨り込まれている
6	石棒	21.7	7.6	6.9	1879	綠泥片岩	表採、表面研磨、先端部と基部を欠損

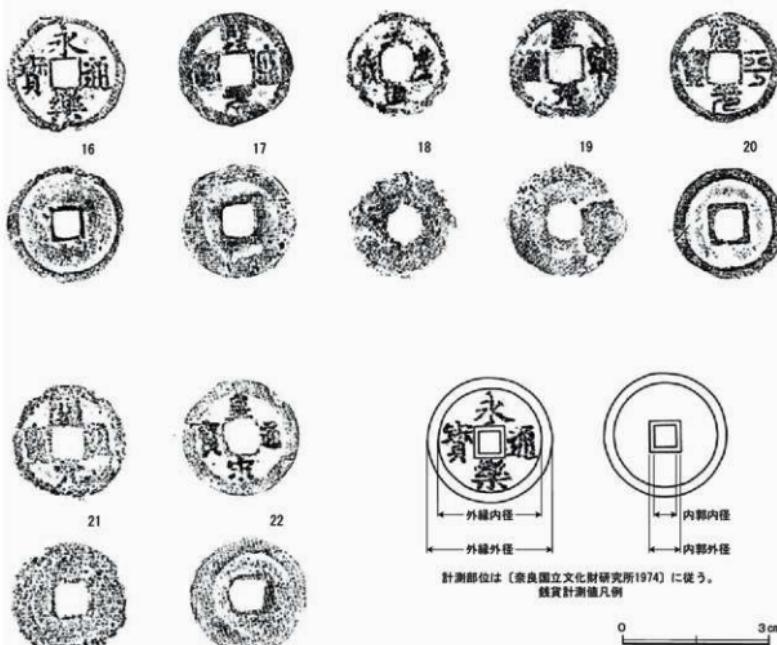
埴輪観察表

番号	種別	色調	焼成	胎土	外面調整	内面調整	備考
1	円筒	明褐色	普通	石英、白色粒、微砂粒	タテハケ	ナデ	SD6、突堤(台形)
2	円筒	灰赤褐色	普通	石英、長石、角閃石	タテハケ14本/2cm	ナデ	SK38、突堤(台形)
3	円筒	褐色	普通	微砂粒、白色粒、赤色粒	タテハケ	ナデ	SD6
4	円筒	灰褐色	普通	石英、角閃石、バミス、砂粒	タテハケ 12本/2cm	ナデ	SE1
5	円筒	灰黄赤色	やや悪	石英、角閃石、バミス、粗砂粒	タテハケ 12本/2cm	ナデ	SD2、突堤(三角形)
6	形象	褐色	普通	石英、長石、雲母、バミス、砂粒	ユビナデ		SD6、馬形埴輪の頭部
7	形象	褐色	普通	石英、長石、微砂粒	ユビナデ		表採、人物埴輪の胸か?
8	形象	褐色	良好	石英、長石、片岩	ナデ	ユビナデ	SD6、馬形埴輪の頭部



第154図 調査区出土銭貨拓影(1)

0 3cm



第155図 調査区出土銭貨拓影(2)

錢貨観察表

番号	錢種	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内縁外径(mm)	内縁内径(mm)	外縁厚(mm)	文字面厚(mm)	重量(g)	造銘名	初鑄年
1	祥符元宝	24.5	17.9	7.7	4.9	1.3	0.8	2.1	SJ3 No.1	北宋(1008)
2	永樂通宝	25.4	20.8	7.4	5.0	1.4	0.7	2.1	SJ9 No.1	明(1408)
3	祥符元宝	25.5	17.5	8.0	6.0	1.2	0.7	2.4	SK80 No.1	北宋(1008)
4	紹聖元宝	23.9	18.8	9.0	5.6	1.55	0.8	2.3	SK93 No.1	北宋(1094)
5	咸平元宝	25.0	18.8	7.9	4.8	1.2	0.7	1.5	SK93 No.2	北宋(998)
6	元祐通宝	25.1	20.8	8.9	6.8	1.5	0.7	2.0	SK94 No.4	北宋(1086)
7	聖宋通寶	24.8	17.4	9.0	6.7	1.0	0.8	2.3	SK94 No.5	北宋(1054)
8	皇宋通宝	23.3	18.9	8.3	5.5	1.1	0.9	1.4	SK94 No.6	北宋(1039)
9	皇宋通宝	25.5	18.3	8.6	5.4	1.3	1.0	3.6	SK94 No.7	北宋(1039)
10	元祐通宝	24.3	19.4	8.8	6.5	1.1	0.75	2.6	SK94 No.8	北宋(1086)
11	天禧通宝	25.4	19.7	7.7	5.7	1.05	0.7	2.4	SK94 No.9	北宋(1017)
12	元豐通宝	23.8	18.0	8.2	5.1	1.9	1.3	2.6	SE1 No.1	北宋(1073)
13	洪武通宝	23.8	18.2	7.8	5.6	1.7	0.8	3.3	SE1 中崩	明(1387)
14	元符通宝	24.1	19.0	8.2	5.8	1.5	1.1	2.3	SK117 No.1	北宋(1098)
15	元祐通宝	24.4	20.2	9.1	6.5	1.4	1.0	1.4	SK117 No.2	北宋(1086)
16	永樂通宝	25.3	21.0	7.6	4.8	1.8	1.05	3.4	SK122 No.1	明(1408)
17	熙寧元宝	24.0	18.5	8.5	5.5	1.3	1.1	2.5	SK122 No.1	北宋(1068)
18	元豐通宝	22.4	18.3	8.5	5.9	1.35	0.8	2.0	SK122 No.1	北宋(1078)
19	熙寧元宝	23.7	18.8	8.3	6.0	1.5	1.05	2.0	SK153 No.1	北宋(1068)
20	治平元宝	23.8	19.5	8.6	5.2	1.4	0.6	2.0	SK157 No.1	北宋(1064)
21	開元通寶	24.3	19.3	8.5	6.3	1.6	1.1	2.7	Pi6 No.1	唐(621)
22	皇宋通宝	24.9	18.1	8.9	6.2	1.4	1.0	2.8	Pi6 No.1	北宋(1039)

3. 熊野遺跡 156 次調査

【1号住居跡】

調査区西部に位置する。平面形態は長方形を呈し、長軸3.30m、短軸2.64mを測る。主軸方位はN-8°-Eを示す。確認面から床面までの深さは、42cmを測る。床面は、ほぼ平坦である。壁溝は深さ約6cmでほぼ全周する。

カマドは2か所で検出された。1号カマドは、南東コーナー付近の南壁を掘り込み、白色粘土を造り付けて構築されていた。規模は、焚き口の幅51cm、煙道部の長さ96cmで、焚き口から煙道部へ緩やかに立ち上がる。火床面の下は掘り方で船底状を呈する。

2号カマドは、東壁のやや南寄りに構築されていた。火床面と住居の床面が連続せず、袖も寸断されていることから、住居建築当初のカマドであり、建て替えの際に住居床面が深く掘り込まれ、1号カマドが新たに設置されたものと想定される。残存する燃焼部幅は72cm、煙道の長さは180cmである。

ピットは2基検出した。P1は南東コーナーに位置し、平面形態は長方形を呈し、長軸54cm、短軸45cm、深さ20cmを測る。P2は南西コーナーに位置し、直径36cm、深さ13cmを測る。

出土遺物は、土師器の甕・台付甕、須恵器の甕、高台甕・皿、土錐、鉄滓、編物石が出土した。

住居の時期は、出土遺物から9世紀後半と考えられる。

【2号住居跡】

調査区北端に位置する。検出されたのは南壁周辺の一部であり、大半が調査区域外にあるため、全容は不明である。

規模は、確認された東西辺で5.84m、確認面から床面までの深さは41cmである。床面はほぼ平坦で、

確認できた範囲では周溝が巡っていた。ピットは2基が検出された。いずれも平面形態は円形を呈し、直径34~44cm、床面からの深さ14~18cmを測る。

カマドは確認できなかった。

出土した遺物は、土師器の甕・皿・甕、須恵器の甕・蓋・盤・高盤・長頸瓶・甕、円面鏡、鉄滓が出土した。

時期は7世紀末と考えられる。

【3号住居跡】

調査区東端に位置する。検出されたのは西壁周辺の一部のみであり、大半が調査区域外にあるため、全容は不明である。

規模は、確認された南北辺で2.70m、確認面から床面までの深さは0.54mである。床面は若干の凹凸をもち、確認できた範囲では周溝が巡っていた。ピットは南西コーナーで1基検出された。平面形態は梢円形を呈し、長軸40cm、短軸30cm、床面からの深さ12cmを測る。

カマドは確認できなかった。

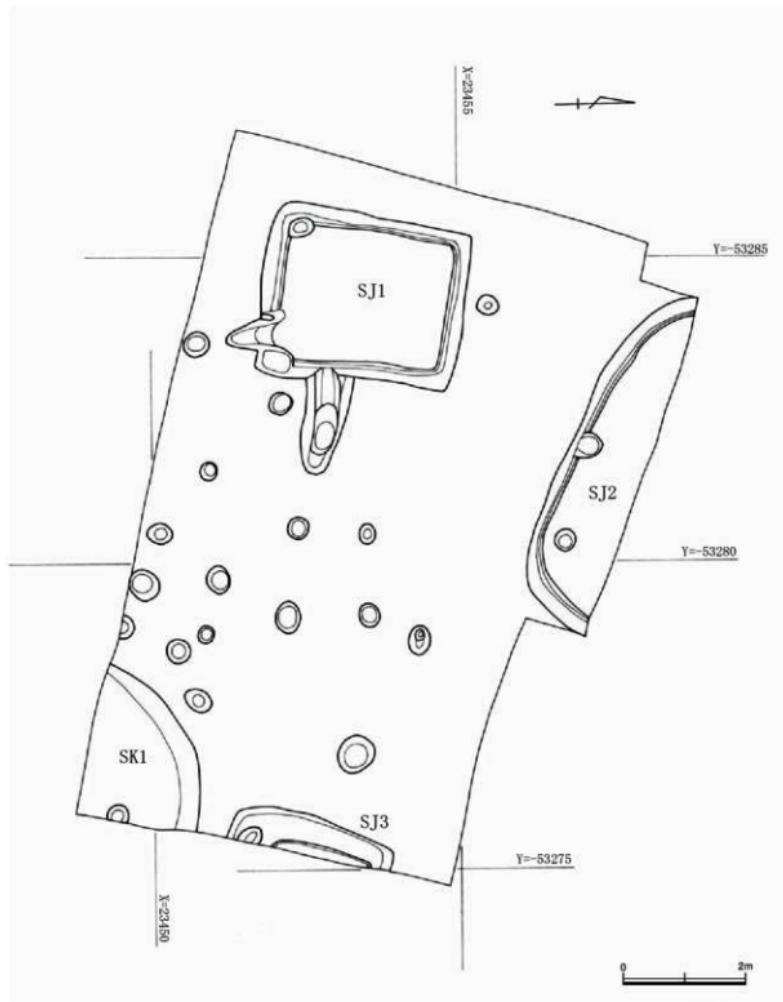
図示し得る出土遺物はなく、時期は不明である。

【1号土坑】

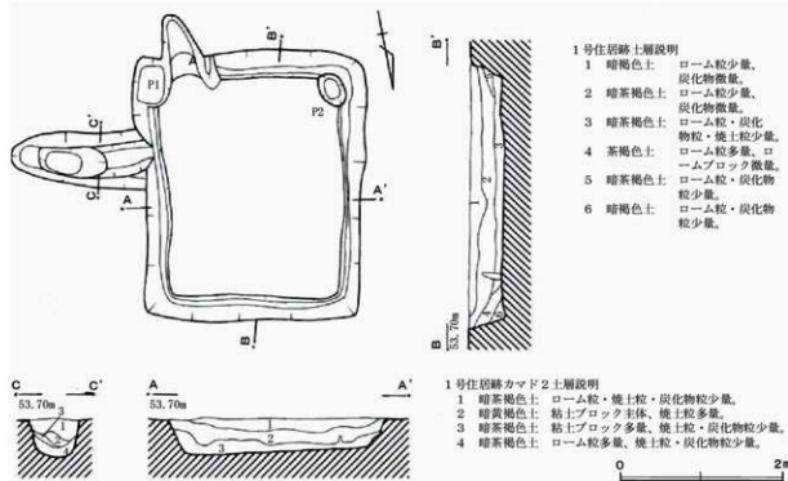
調査区南東コーナー附近に位置する。

確認されたのは南北1.90m、東西2.48mの範囲で、全容は不明である。壁は緩やかに掘り込まれ、底面は若干の凹凸を持つ。確認面からの深さは、30cmである。ピットは1基が検出された。平面は梢円形で、直径34cm、底面からの深さは16cmを測る。ただし、覆土中より掘削されているため、後世のものと考えられる。

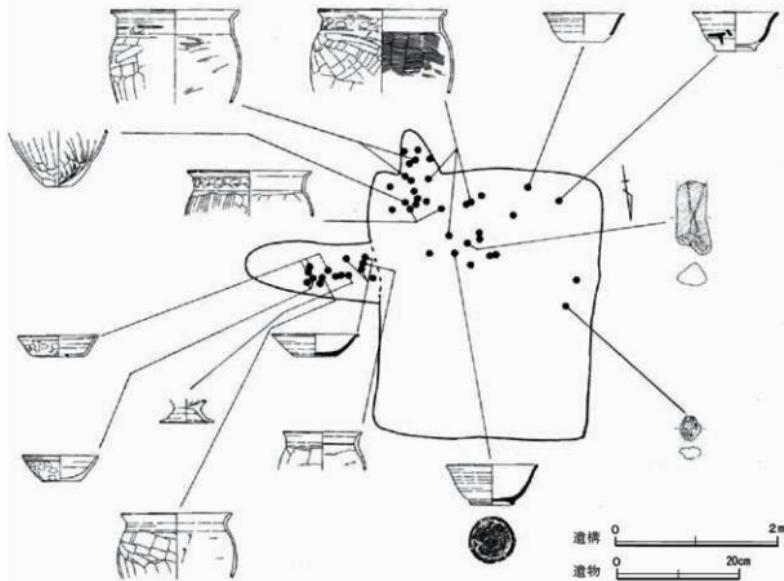
出土した遺物には、土師器の甕・甕・台付甕、須恵器の甕・高台甕・皿がある。時期は9世紀後半と考えられる。



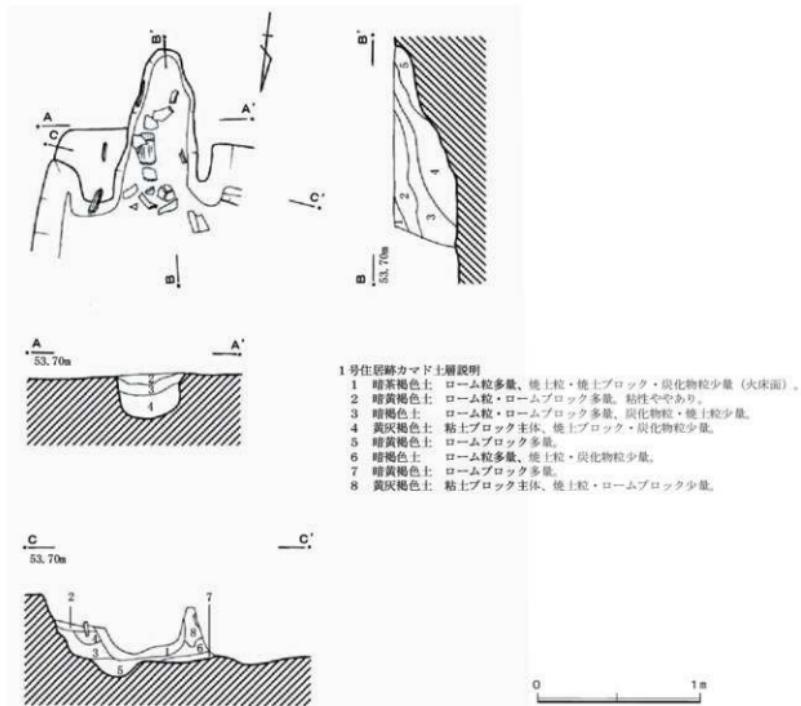
第156図 熊野遺跡156次調査全測図



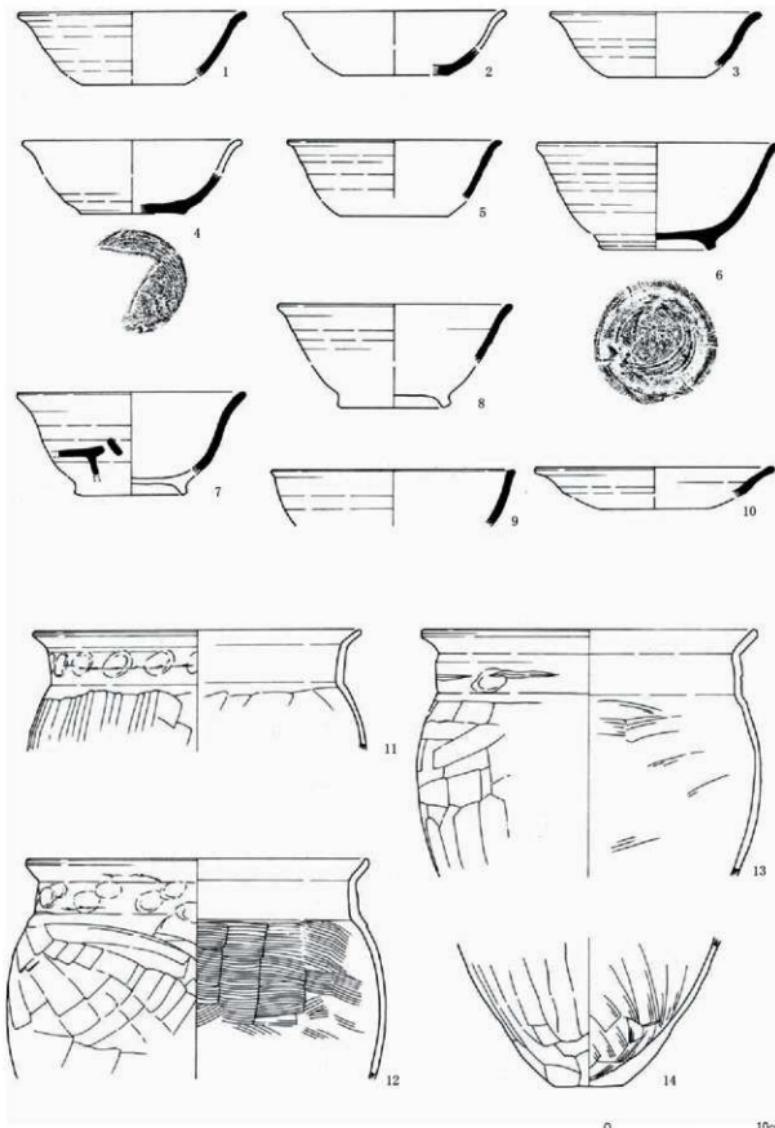
第157図 1号住居跡実測図



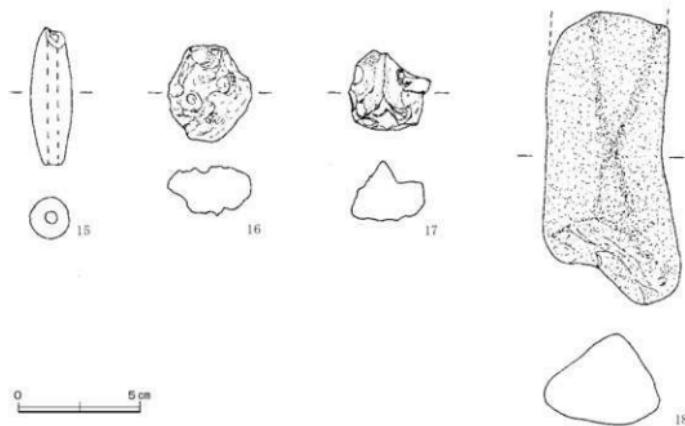
第158図 1号住居跡遺物出土状況図



第159図 1号住居跡カマド実測図



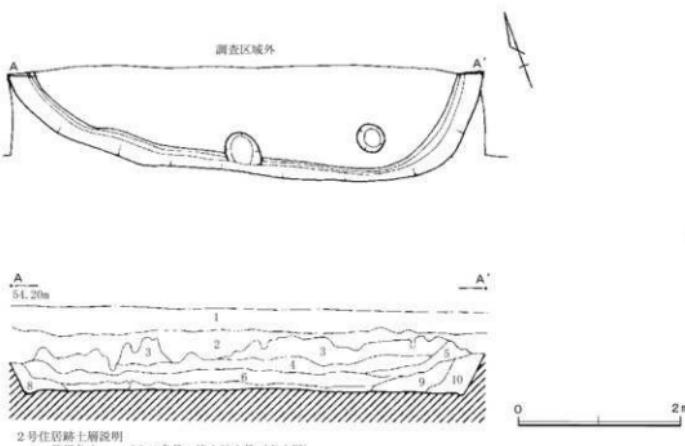
第160図 1号住居跡出土遺物実測図(1)



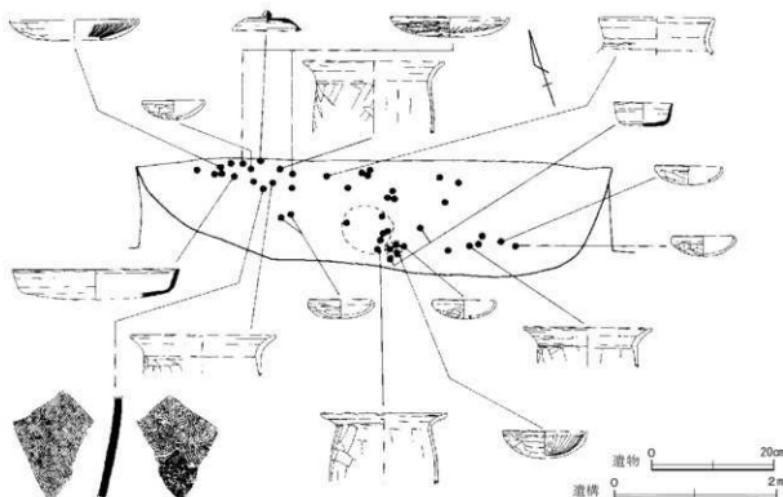
第161図 1号住居跡出土遺物実測図(2)

1号住居跡出土遺物観察表

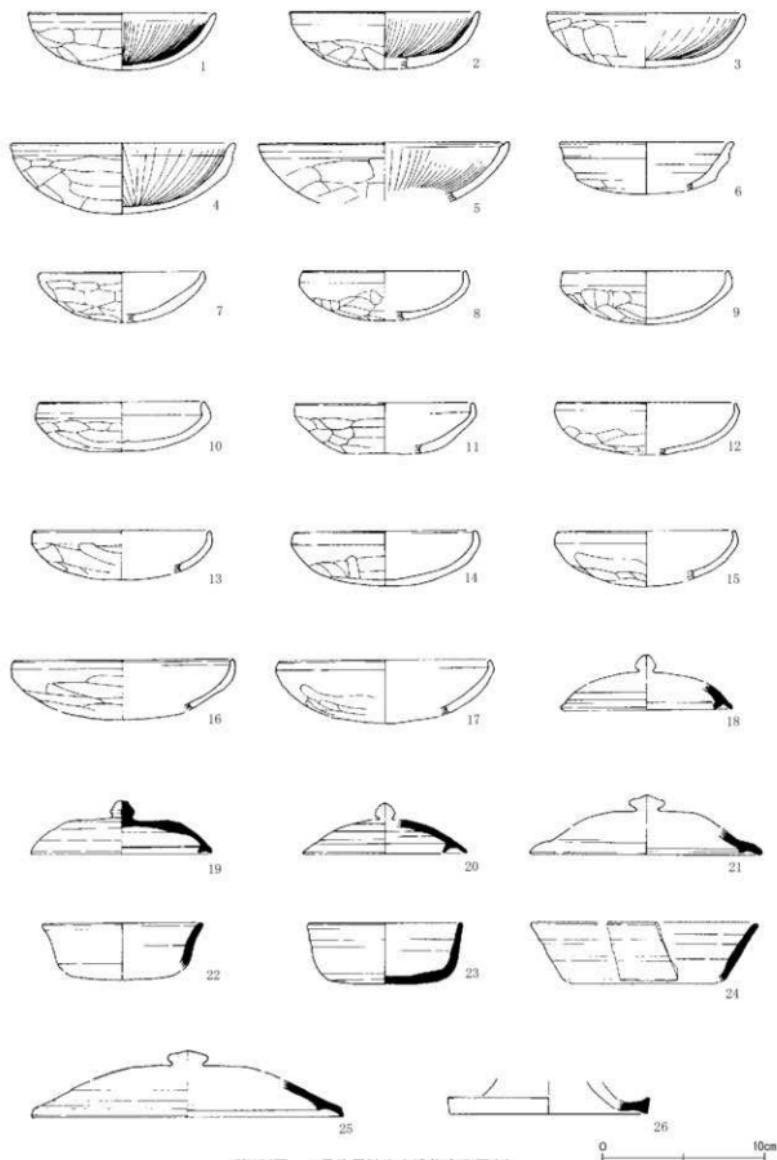
番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	須恵器壺	(13.7)	(4.0)	-	淡灰褐色	やや悪	石英、長石、チャート、黒色粒	図示15%	覆土、未野
2	須恵器壺	-	(1.7)	(6.4)	灰色	普通	長石、黒色粒	図示15%	覆土、底部回転糸切り未調整、未野
3	須恵器壺	(12.7)	(3.4)	-	明灰色	普通	石英、長石、黒色粒	-	覆土、未野
4	須恵器壺	-	(2.5)	(6.4)	灰色	普通	石英、長石、片岩	図示60%	覆土、底部回転糸切り未調整、未野
5	須恵器壺	(12.8)	(3.7)	-	暗灰～淡灰	やや悪	石英、長石、微砂粒	図示20%	図示、未野
6	須恵高台壷	(14.6)	6.5	7.2	灰色	普通	石英、長石、片岩	40%	図示、底部回転糸切り後高台貼り付け、未野
7	須恵高台壷	(13.8)	(5.1)	-	淡黄褐色	不良	石英、長石、黒色粒	図示30%	図示、体部下端に墨書きあり、判読不能、未野
8	須恵高台壷	(14.1)	(3.6)	-	明灰色	やや悪	長石、黒色粒	図示10%	覆土、未野
9	須恵高台壷	(14.8)	(3.4)	-	灰白色	普通	石英、黒色粒	図示10%	覆土、未野
10	須恵器皿	(14.4)	(1.8)	-	暗灰色	普通	長石、片岩	図示10%	覆土、未野
11	甕	(19.8)	(7.4)	-	灰褐色	良好	石英、角閃石、(精良)	図示40%	カマド
12	甕	(20.6)	(13.5)	-	灰赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示35%	カマド、内面ハケヌ
13	甕	(20.4)	(15.2)	-	黒褐～赤褐	普通	石英、角閃石、微砂粒	図示35%	カマド
14	甕	-	(10.1)	(4.2)	暗褐色	良好	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示35%	カマド+カマド袖内
15	土錐	長さ5.7	幅1.7	重さ12.9g	暗褐色	普通	微砂粒	95%	覆土
16	鉄滓	長さ4.0	幅3.4	厚さ2.0	重さ31.5g	磁着度弱	-	-	図示、不整円筒形状で全体的に細かな発泡
17	鉄滓	長さ3.3	幅3.3	厚さ2.4	重さ19.9g	磁着度微弱	-	-	覆土、表面の一部に砂粒付着、大小の発泡痕
18	編物石	長さ11.9	幅5.7	厚さ3.7	重さ284.0g	石材妙岩	-	-	図示



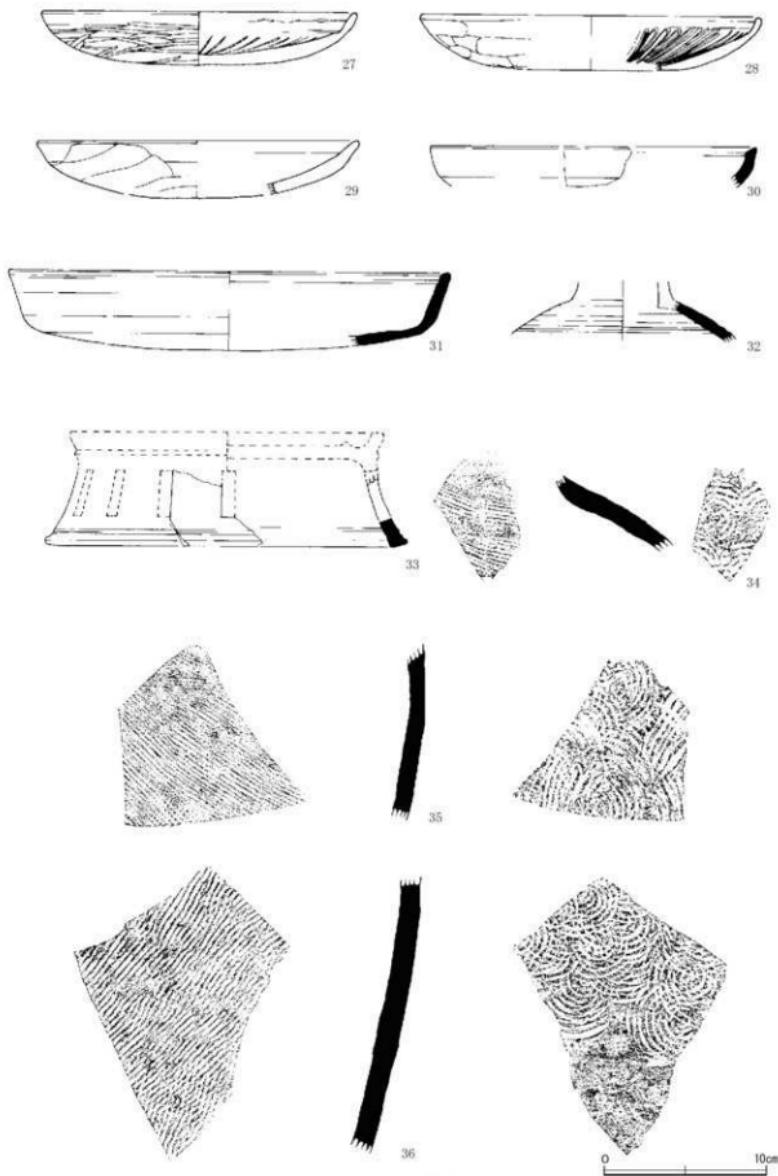
第162図 2号住居跡実測図



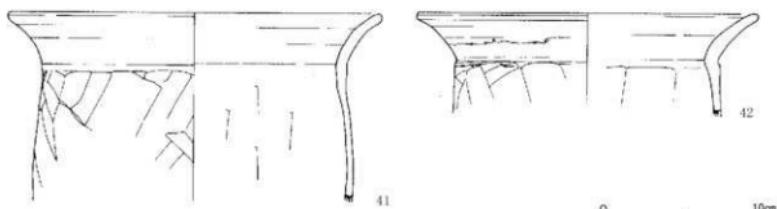
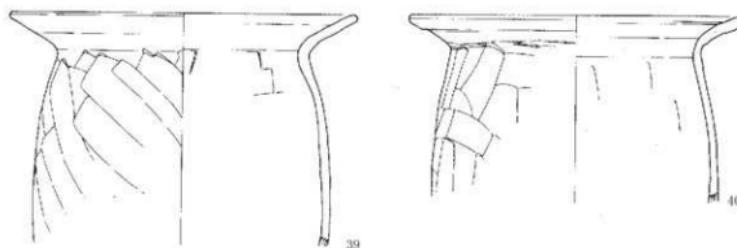
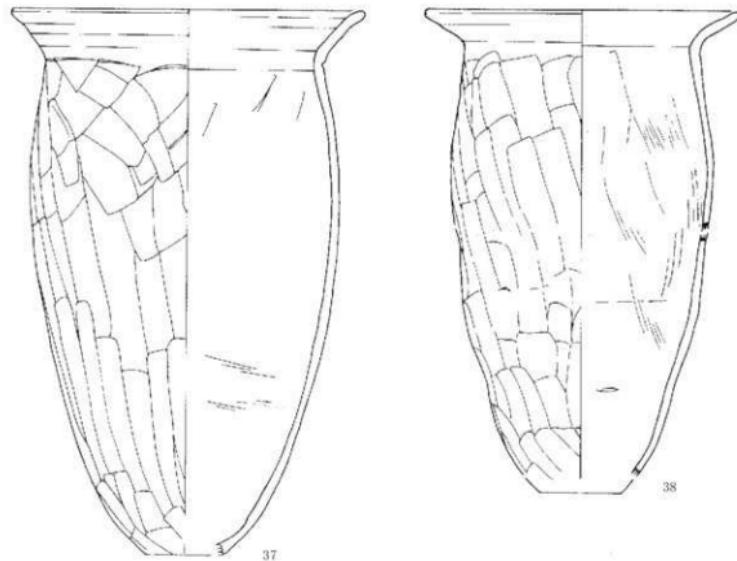
第163図 2号住居跡遺物出土状況図



第164図 2号住居跡出土遺物実測図(1)

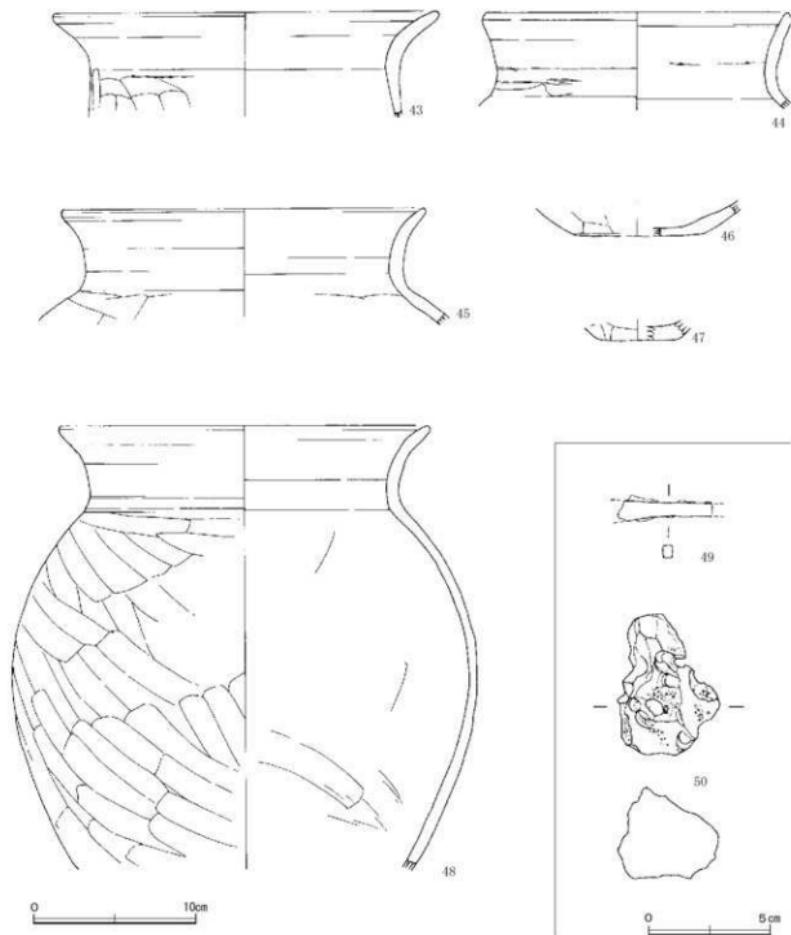


第165図 2号住居跡出土遺物実測図(2)



0 10cm

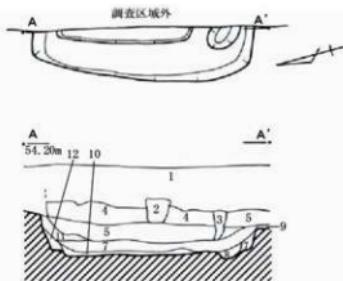
第166図 2号住居跡出土遺物実測図(3)



第167図 2号住居跡出土遺物実測図(4)

2号住居跡出土遺物観察表

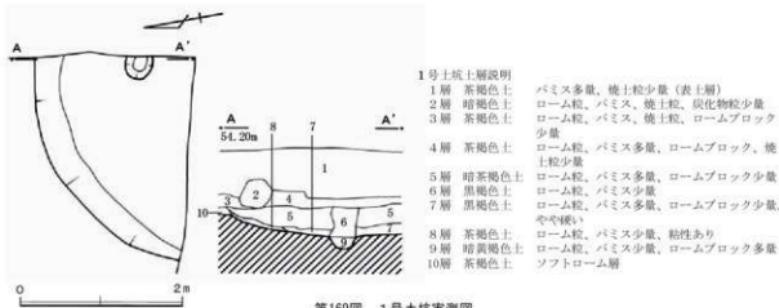
番号	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	色	構成	胎土	残存率	備考
1	环	11.4	3.6	-	黄褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	75%	陶土、内面放射状暗文
2	环	(11.4)	(3.5)	-	灰褐色	やや黒	石英、角閃石、微砂粒鉄	40%	陶土、内面放射状暗文
3	环	(12.0)	3.3	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	25%	陶土、内面放射状暗文、外外面に油膜状黒斑
4	环	13.6	4.3	-	棕褐色	普通	石英、角閃石、長石、微砂粒	90%	陶土、内面放射状暗文
5	环	(15.1)	(3.7)	-	棕褐色	普通	石英、角閃石、微砂粒	15%	陶土、内面放射状暗文
6	环	(16.5)	(3.2)	-	暗灰褐色	やや黒	石英、角閃石、微砂粒	20%	陶土、内外面に油膜状黒斑
7	环	15.7	(3.1)	-	暗赤褐色	普通	石英、透閃石、白雲母、鈍食	80%	陶土
8	环	(16.9)	(3.2)	-	明赤褐色	普通	石英、角閃石、ハミス	100%	陶土
9	环	(16.0)	2.5	-	茶褐色	普通	石英、角閃石、長石	80%	陶土
10	环	16.0	3.0	-	にがい赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母	70%	陶土、底部焼け痕
11	环	(16.8)	(3.1)	-	桃色	普通	石英、角閃石	100%	陶土
12	环	(11.0)	(3.2)	-	棕褐色	普通	石英、角閃石、雲母	5%	カマド
13	环	(16.7)	(3.0)	-	暗褐色	良好	石英、角閃石、雲母、赤色鉄	25%	陶土
14	环	(16.9)	3.2	-	灰褐色~黒褐色	普通	石英、角閃石、雲母	20%	陶土
15	环	(16.8)	(3.4)	-	棕褐色	普通	石英、角閃石、雲母、舞石	80%	陶土
16	环	(13.3)	(3.1)	-	暗赤褐色	良好	石英、角閃石、雲母	80%	陶土
17	环	(12.8)	(3.9)	-	棕褐色	良好	石英、角閃石	80%	陶土
18	重底圓盤	(10.4)	(2.1)	-	灰灰褐色	良好	石英、長石、(鈍食)	95%	陶土、木野
19	重底圓盤	10.8	3.2	-	灰灰褐色	やや黒	石英、長石、チート、黑色鉄	60%	陶土、木野
20	重底圓盤	(9.8)	(2.1)	-	明赤褐色	良好	石英、長石、黒色鉄、(鈍食)	15%	陶土、木野
21	重底圓盤	(14.0)	(1.6)	-	灰色	良好	石英、長石	10%	陶土、木野
22	重底圓盤	(9.6)	(2.9)	-	灰白色	不良	石英、微砂粒、黒色鉄	15%	陶土、木野
23	須底圓盤	9.2	3.7	7.9	灰褐色	良好	石英、長石、黑色鉄	90%	陶土、底部全周回転鏡ケズリ、木野
24	須底圓盤	(13.8)	(3.8)	(9.9)	明赤褐色	普通	石英、長石	5%	陶土、底部外周面凹り、木野
25	須底圓盤	(18.8)	(2.2)	-	明灰褐色	良好	石英、長石、片岩	10%	陶土、木野
26	須底圓盤	-	(1.0)	(11.8)	明赤褐色	良好	石英、長石	20%	陶土、木野
27	皿	(19.0)	3.2	-	黃褐色~黒褐色	やや黒	石英、角閃石、微砂粒	30%	陶土、内面放射状暗文、外曲面持ち重ねアリ後縁3.5ガリ
28	皿	(20.6)	(3.3)	-	にがい赤褐色	良好	石英、角閃石、白色鉄	55%	陶土、内面放射状暗文、端三万牛
29	皿	(19.4)	(3.6)	-	にがい赤褐色	良好	石英、角閃石	20%	陶土、内面に油膜状黒斑
30	須底圓盤	(19.8)	(2.5)	-	灰色	良好	石英、長石、片岩	7%	陶土、木野
31	須底圓盤	(26.6)	(4.8)	(22.8)	灰色	良好	石英、長石、片岩	5%	陶土、木野
32	須底長脚瓶	-	(2.5)	-	明赤褐色	普通	石英、長石	10%	陶土、木野
33	須底円盤	-	(4.6)	(21.9)	灰色	良好	石英、長石	7%	陶土、透かし乱れ方形、木野
34	須底圓盤	-	-	-	淡灰色	普通	石英、長石、黑色鉄	碎部破片	陶土、外曲面平行引き、内面青海波引き、木野
35	須底圓盤	-	-	-	青灰色	良好	石英、長石、片岩	碎部破片	カマド内、外曲面平行引き、内面青海波引き、木野
36	須底圓盤	-	-	-	灰褐色~灰色	良好	石英、長石	碎部破片	陶土、外曲面平行引き、内面青海波引き、木野
37	甕	(21.3)	33.4	(4.7)	棕褐色	普通	石英、角閃石、赤色鉄	80%	カマド内壁被覆材
38	甕	(19.1)	(25.5)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、ハミス、微砂粒	80%	カマド内
39	甕	(20.8)	(14.2)	-	茶褐色	普通	石英、角閃石、ハミス、砂粒	30%	カマド内
40	甕	(20.2)	(11.5)	-	灰灰褐色	普通	石英、角閃石、雲母	80%	陶土
41	甕	(22.4)	(11.6)	-	にがい赤褐色	普通	石英、チート、雲母、微砂粒	85%	陶土
42	甕	(20.7)	(6.3)	-	にがい赤褐色	普通	石英、角閃石、雲母、ハミス、微砂粒	55%	陶土
43	甕	(23.2)	(6.5)	-	灰褐色	普通	石英、角閃石、ハミス、砂粒	85%	陶土
44	甕	(18.3)	(6.0)	-	灰灰褐色	良好	石英、角閃石、砂粒	60%	陶土
45	甕	(22.0)	(7.2)	-	にがい赤褐色	普通	石英、角閃石、チート、砂粒	55%	陶土
46	甕	-	(2.2)	(8.0)	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、ハミス、砂粒	25%	陶土
47	甕	-	(1.2)	(4.9)	暗灰褐色	普通	石英、角閃石、ハミス、微砂粒	25%	陶土
48	甕	(22.3)	(21.1)	-	暗赤褐色	普通	石英、角閃石、ハミス、砂粒	55%	陶土
49	鉢底?	長さ3.9	幅0.5 ~ 0.7	厚さ0.4	-	-	-	-	陶土、大小の気泡があり凹凸がめだつ、重量感あり
50	鉢津	長さ5.8	幅1.1	厚さ3.7	重さ96.8g	耐候度: 中	-	-	



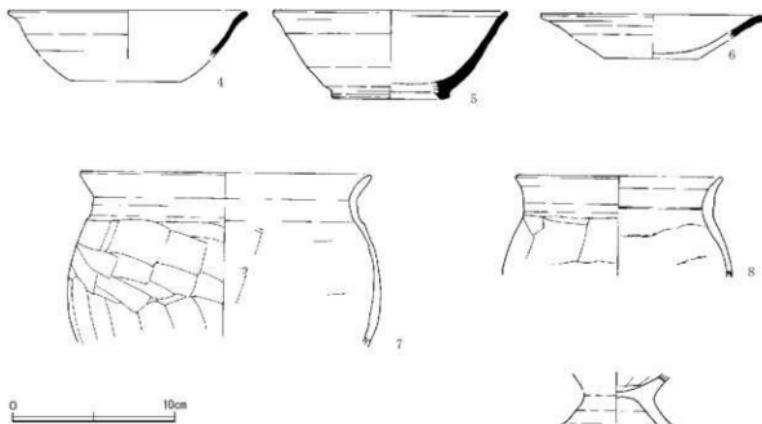
3号住居跡土層説明

- 1 茶褐色土 ハミス多量、燒土粒少量（表土層）。
- 2 暗茶褐色土 暗褐色土主体、擾乱が激しく表土層が混入。
- 3 暗茶褐色土 暗褐色土主体。
- 4 暗褐色土 ローム粒・ハミス・ロームブロック・燒土粒少量。
- 5 暗褐色土 ローム粒・ハミス少量、燒土粒微量。
- 6 黑褐色土 ローム粒・ハミス少量。
- 7 黑褐色土 ローム粒・ハミス少量。
- 8 暗黃褐色土 ローム粒・ハミス・ロームブロック少量。
- 9 新褐色土 ソフトローム層。
- 10 暗黃褐色土 ローム粒・ハミス多量、ロームブロック少量。
- 11 新茶褐色土 ローム粒・ハミス少量。
- 12 暗黃褐色土 ローム粒・ロームブロック主体。

第168図 3号住居跡実測図



第169図 1号土坑実測図



第170図 1号土坑出土遺物実測図

1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	焼成	胎土	残存率	備考
1	环	12.6	3.5	8.0	にぶい赤褐色	普通	石英、角閃石、片岩、雲母	70%	図示, 底部手持ち箇ケズリ
2	环	12.0	4.2	6.0	赤褐色	良好	石英、角閃石、微砂粒	80%	図示, 底部手持ち箇ケズリ
3	須恵器環	13.8	3.6	6.4	黄褐色	やや悪	石英、長石、雲母、黒色粒多量	75%	図示, 1住力マド床面と接合, 底部回転糸切り未調整, 末野
4	須恵器環	(14.3)	(2.9)	-	明灰色	普通	石英、チャート、片岩、黒色粒	図示10%	覆土, 磨滅有り, 末野
5	須恵器高台端	(14.0)	5.4	(7.1)	明灰色	普通	石英、長石、片岩	図示15%	覆土, 末野
6	須恵器皿	(13.4)	(2.0)	-	明褐色~灰褐色	普通	石英、長石、片岩	図示	覆土
7	甕	(17.6)	(10.6)	-	橙褐色	普通	石英、角閃石、雲母、微砂粒	図示20%	図示
8	台付甕	(12.4)	(6.2)	-	明茶褐色	普通	石英、角閃石、チャート、バミス微砂粒	図示40%	図示, 覆土+1住力マド床面
9	台付甕	-	(3.8)	8.5	灰褐色	良好	石英、チャート、バミス	図示80%	図示, 1住覆土と接合

IV まとめ

今回の報告は、熊野遺跡内における3か所の調査であった。以下、調査ごとにまとめを記す。

1. 135次調査

堅穴住居跡12軒、掘立柱建物跡1棟、井戸跡1基などが検出された。まず、これらを年代別にみてみると、まず7世紀後が4・7・9・10号住居跡、7世紀末～8世紀初頭が1号掘立柱建物跡、8世紀前半～中葉が2号住居跡、8世紀中葉～後半が6・12号住居跡、8世紀後半が3・5号住居跡、9世紀前半～中葉が11号住居跡、9世紀後半が8号住居跡と1号井戸跡と考えられる。

これらの遺構から多種・多様な遺物が出土しているが、特徴的なものを改めて取り上げてみたい。

円面鏡について

10号住居跡から出土した。鏡部のみの検出で、外径17.8cmを測る。脚部に長方形の透かし孔をもつと想定されるものである。

後述する156次調査2号住居跡からも小破片であるが1点が出土しており、現在までに計24点が確認されている。1遺跡からの出土量としては他に比して突出しており、熊野遺跡を特徴づける遺物の一つといえる。そのなかでも当円面鏡は、大型の部類に入るるものである。

帶金具について

5号住居跡から銅製の丸鞘が出土した。長さ2.0cm、幅1.5cmを測る小型品で、中央に長方形の透かし孔がある。

熊野遺跡内では、これまでに鉢具2点、丸鞘3点、遙方7点、鉈尾8点の計20点が確認されており、円面鏡同様特筆すべき数量である。

銅鈴について

帶金具と同じく5住居跡から出土した。青銅製で、直径2.3cm、高さ2.5cmを測る小型鈴である。

なお、本住居跡からは、他にも刀子3点・鉄斧・鎌・足金物などの多くの金属製品が出土している。

銅鈴はこれまで、深谷市内では他に2点が検出されている。

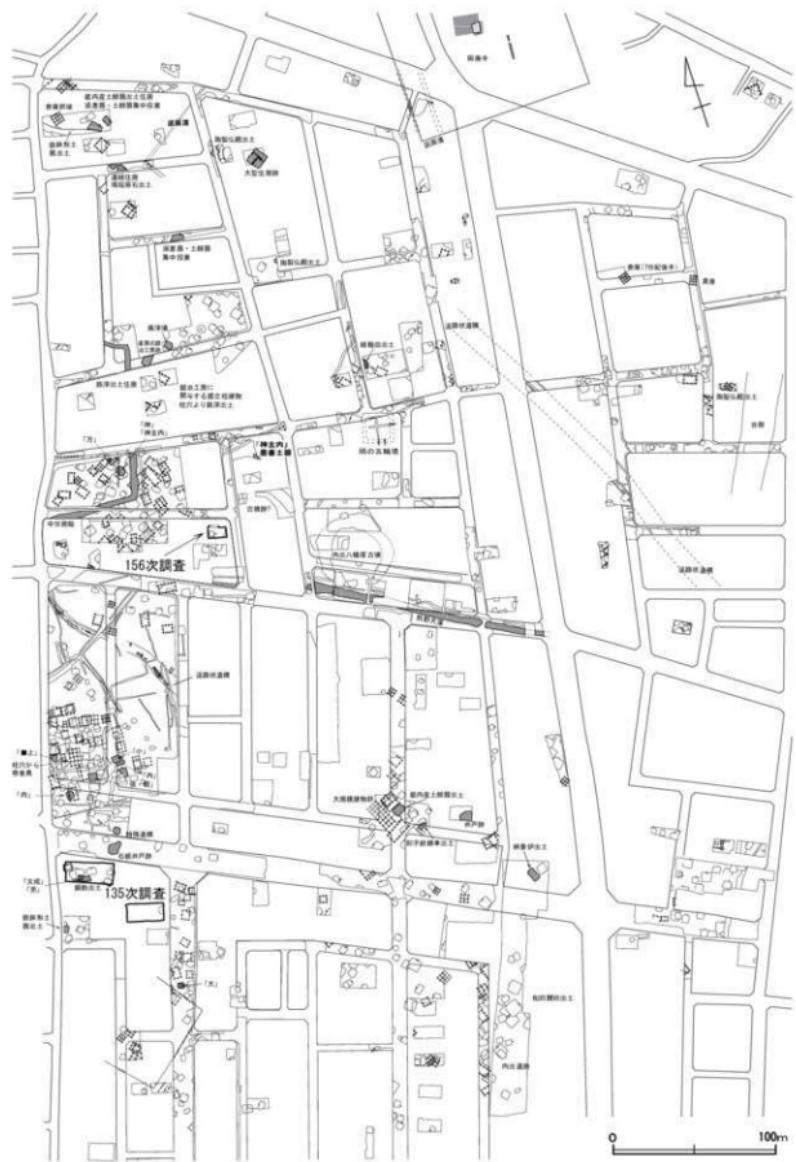
1点は北坂遺跡8号住居跡からの出土で、全高4.08cm、直径3.34cmを測る。本遺跡は、市の西南端、諏訪山丘陵の南斜面に立地し、堅穴住居跡15軒と掘立柱建物跡9棟が主軸を描えて配置されていた。掘立柱建物跡には2間×2間の総柱建物跡2棟が含まれる。「中」の焼印やクルル鉤、円面鏡などが出土しており、遺跡の立地と合わせ那珂郡の牧にかかる遺跡と推定されている。

もう1点は百済木遺跡B区2号住居跡から出土し、直径2.3cmを測る。本遺跡は、上本田地区的谷に面した高台に立地する。掘立柱建物跡55棟や堅穴住居跡46軒、倉庫7棟が整然と並んで検出された。帶金具や墨書き土器も出土し、男衾郡の郡司層の居宅と想定される。

墨書き土器について

今回検出された墨書き土器は、2点である。いずれも6号住居跡からの出土で「口文成」と「男」の文字が判読できる。「文成」については人名と推定されている。「男」については、熊野遺跡北方の妻沼低地に展開する岡部条里遺跡の地割溝から出土した9世紀後半階の須恵器坏に類例をみることができる。

この他にも熊野遺跡では様々な墨書き土器が出土しているが、土器の総出土量に比してその割合は低い。



第171図 熊野遺跡135・156次調査周辺遺構図

これまでの調査により、本調査区から北にかけて1つのブロックが形成されていたことが分かる（第171図参照）。北に接して柄鏡形の石組井戸が検出され、そのすぐ北には多量の土器を出土した特殊土坑が存在する。ここから更に北方は掘立柱建物や竪穴住居跡が密集し、帶金具や墨書き土器が出土している。また、本調査地南から仏教系遺物である鉄鉢形土器の出土も特筆される。

2. 152次調査

方形に巡る溝と掘立柱建物跡・竪穴住居跡・井戸跡・土坑などが検出された。

溝について

20条が検出された。東から北に屈曲するものと、東から南に折れるものに大別される。前者は調査区北東の建物群を、後者は調査区南東の建物群を区画する溝と想定される。

特に後者は5重に巡る形で検出されており、注目される。しかしながら、時期が判明しない点や調査区外にある部分も多く、不明な点も多い。

竪穴住居跡について

13軒が検出された。8号住居跡が古代（7世紀後半）であり、残り12軒が中世に属する。中世の建物は、いずれも掘り込みが浅く、カマドを持たない。平面形態が正方形と長方形のものに大別できるが、特徴的なのは後者である。（2・3・5・6・7・9・10・12・13号住居跡）長軸中心線の両端、壁に近接して柱穴をもつもので、この主柱穴と呼べる2基の柱穴は建物の規模からするとかなり深く掘られている。各造構は、長軸の長さが4.5m前後のものが大半を占め、11号住居跡が5.8mの規模を測る。

建物の外周からは柱穴が確認されておらず、基本的には2本の柱で上屋を支えていたと考えられ、簡易な建物であったと想定される。

そのため、ピットは床面から1m以上深く掘られているものが多い。特に12号住居跡は、柱坑は長軸に対して内側に向けて傾斜をもって掘り込まれていた。2本の柱で屋根を支えるための工夫と思われる。

火葬土坑について

火葬土坑は3基が検出された。平面形態が長方形で長辺の中央に突出部をもつ「T字形」火葬土坑である。規模は、長軸で2.0～2.6mを測る。突出部は西辺に設けたもの2基と東辺に設けたもの1基がある。

いずれも覆土中に多量の炭化物・焼土に混じり焼けた骨片が出土したが、他の遺物は認められなかった。

土坑について

186基が検出された。いずれも平面長方形を基本とする。

このなかで24号土坑は、長軸を南北に向けた隅丸長方形で、馬の上下顎骨と下肢骨が検出された。完全な状態での出土ではないが、頭を南に向け肢を折り疊んだ状況が看取される。骨以外の遺物はなく、單なる埋葬なのか殺牛祭祀を伴うものなのかは、判断しかねる。

また、94号土坑からカワラケ3点と古銭が6点出土した。古銭はすべて北宋銭で、六道銭と考えられることから墓坑とした。この他に古銭（北宋銭）2点が出土した93号土坑とこれと対となる想定される92号土坑も墓坑と考えられる。

これらの造構は、出土した土器類から15世紀代の年代観が与えられる。

今回の調査地点から北西約2kmの本庄台地東端には、15世紀中頃に「五十子陣」が置かれた。関東管

領上杉房顥が、古河公方足利成氏との対決に際し、五十子に陣を構え、1457年～1458年頃に築いたものである。1459年から五十子の戦いが起こり、77年まで続いた。

この時期、周辺の岡部原や針ヶ谷でも交戦した記録が残る。

この五十子陣と小山川・針ヶ谷排水路を挟み対峙するのが四十坂遺跡である。遺跡は五十子を見下ろす櫛引台地北端に立地する。発掘調査により、五十子に向かい閉ざされる門跡が検出されている。ここから南東500m辺りは「城下」「二ノ丸」の地名が残り、五十子陣に関わる名称の可能性が指摘されてきた。さらにその南東に位置するのが今回報告した152次調査地となる。

各遺構の時期や立地、溝に囲まれた簡易な建物群などから五十子陣にかかる遺跡と考えられる。

なお、152次調査地南東の次調査及び埼玉文調査C区では南北100mを超える方形の区画溝が検出された。14～15世紀の時期と想定される。

さらに南方へ進んだ西龍ヶ谷遺跡からも室町期と想定されるL字形に折れる堀跡が検出されている。この堀は、幅2.5m、深さ1.0mを測り、長さ45m以上にわたって確認された。

3. 156次調査

竪穴住居跡3軒と土坑1基の調査であった。完掘できたのは1号住居跡のみで、カマドを東壁から南壁に付け替えたことが確認された。

また2号住居跡は1部の調査であるが、円面窓の破片が出土し、特筆される。

調査地から北西にかけて掘立柱建物跡と竪穴住居跡が混在する1つのブロックを形成している。

北方には連房式鍛冶工房とそれに付属する廃滓場がある。羽口は復元できたものだけでも100点を超え、金鉗・鑿・錐などの工具とともに小札・鉄鎌などの武具も出土している。

また、「神主内」2点と「神」1点の墨書き器の出土も注目されるが、祭祀にかかわると想定される遺構は判明していない。

なお、本ブロックと先の135次を含むブロックとは約100mの隔たりがあり、この間を道路状遺構が東西に走行している。

引用・参考文献

○増田逸朗他「北坂遺跡」1981

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

○富田和夫他「熊野遺跡A・C・D区」2002

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

○鳥羽政之・武野谷俊夫「熊野遺跡Ⅰ」2001

岡部町遺跡調査会

○鳥羽政之他「熊野遺跡Ⅲ」2004

岡部町教育委員会

○村松篤「百濟木遺跡」2003

川本町遺跡調査会

写 真 図 版

図版1 熊野遺跡135次



熊野遺跡135次A区全景



1号住居跡



1号住居跡カマド



2号住居跡



2号住居跡遺物出土状況



2号住居跡カマド

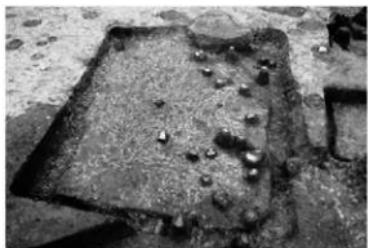


3号住居跡



3号住居跡カマド

図版2 熊野遺跡135次



3号住居跡遺物出土状況



3号住居跡カマド遺物出土状況



4号住居跡



4号住居跡遺物出土状況



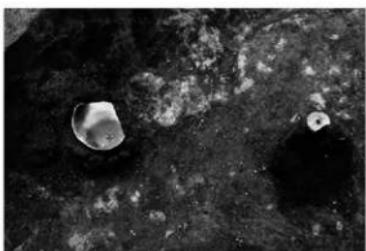
5号住居跡



5号住居跡カマド



5号住居跡遺物出土状況(1)

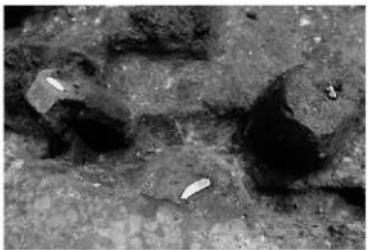


5号住居跡遺物出土状況(2)

図版3 熊野遺跡135次



5号住居跡帶金具出土状況



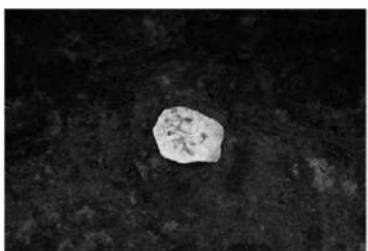
5号住居跡鉄製品出土状況



5号住居跡カマド遺物出土状況



6号住居跡（手前）



6号住居跡墨書き土器出土状況



7号住居跡

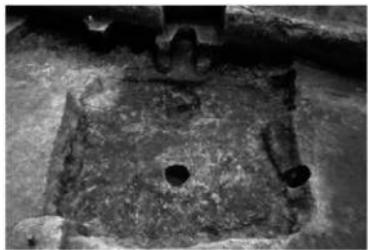


7号住居跡カマド



7号住居跡遺物出土状況

図版4 熊野遺跡135次



8号住居跡



8号住居跡カマド



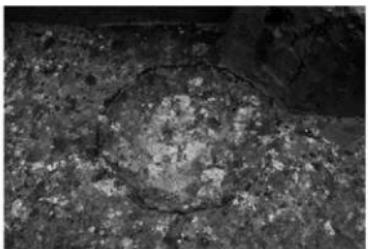
8号住居跡遺物出土状況



10・11・12号住居跡



9号住居跡



9号住居跡床面焼土

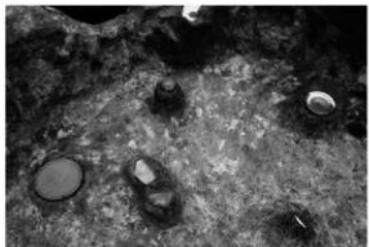


10号住居跡カマド

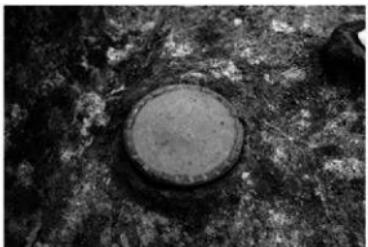


10号住居跡遺物出土状況(1)

図版5 熊野遺跡135次



10号住居跡遺物出土状況(2)



10号住居跡円面研出土状況



10号住居跡カマド遺物出土状況



11号住居跡



11号住居跡遺物出土状況(1)



11号住居跡遺物出土状況(2)



11号住居跡カマド遺物出土状況(1)



11号住居跡カマド遺物出土状況(2)

図版6 熊野遺跡135次



12号住居跡



12号住居跡カマド



1号掘立柱建物跡



1号溝跡



熊野遺跡135次B区全景



B区1号井戸跡



B区1号土坑



B区2号土坑

図版7 熊野遺跡135次



2号住居跡No. 1



2号住居跡No. 2



2号住居跡No. 3



2号住居跡No. 4



2号住居跡No. 6・7



3号住居跡No. 1



3号住居跡No. 2



3号住居跡No. 3



3号住居跡No. 7



3号住居跡No. 9



3号住居跡No. 10



3号住居跡No. 15

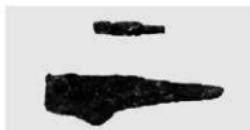


3号住居跡No. 20



3号住居跡No. 21

図版8 熊野遺跡135次



3号住居跡No.22・23



3号住居跡No.24



5号住居跡No.1



5号住居跡No.2



5号住居跡No.4



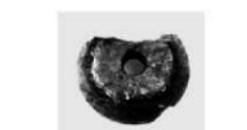
5号住居跡No.7



5号住居跡No.8



5号住居跡No.10



5号住居跡No.22



5号住居跡No.21



5号住居跡No.23



5号住居跡No.24



5号住居跡No.26



5号住居跡No.27



5号住居跡No.28・29



5号住居跡No.30



5号住居跡No.25

図版9 熊野遺跡135次



6号住居跡No. 1



6号住居跡No. 2



6号住居跡No. 3



6号住居跡No. 4



6号住居跡No. 5



6号住居跡No. 8



6号住居跡No. 9



6号住居跡No. 12



6号住居跡No. 18



7号住居跡No. 12



7号住居跡No. 13



7号住居跡No. 14



8号住居跡No. 1



8号住居跡No. 2



8号住居跡No. 4



8号住居跡No. 5

図版10 熊野遺跡135次



8号住居跡No. 6



8号住居跡No. 7



8号住居跡No. 9



8号住居跡No. 11



9号住居跡No. 6



9号住居跡No. 10



10号住居跡No. 2



10号住居跡No. 4



10号住居跡No. 5



10号住居跡No. 7



10号住居跡No. 9



10号住居跡No. 11



10号住居跡No. 12



10号住居跡No. 14

図版11 熊野遺跡135次



10号住居跡No.16



10号住居跡No.23



10号住居跡No.25・26



10号住居跡No.27



11号住居跡No.1



11号住居跡No.2



11号住居跡No.3



11号住居跡No.4



11号住居跡No.5



11号住居跡No.7



11号住居跡No.8

図版12 熊野遺跡135次



11号住居跡No.11



11号住居跡No.14



11号住居跡No.17



11号住居跡No.18



11号住居跡No.19

図版13 熊野遺跡135次



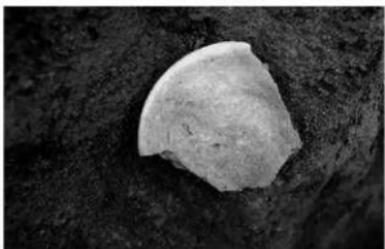
図版14 熊野遺跡152次



熊野152次調査航空写真



1号掘立柱建物跡



1号掘立柱建物跡 1号ピット遺物出土状況



3号掘立柱建物跡



5号掘立柱建物跡

図版15 熊野遺跡152次



1号住居跡



2号住居跡



4号住居跡



5号住居跡



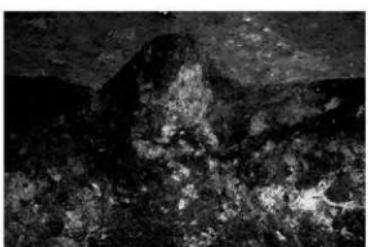
6号住居跡



7号住居跡



8号住居跡



8号住居跡カマド

図版16 熊野遺跡152次



8号住居跡遺物出土状況(1)



8号住居跡遺物出土状況(2)



8号住居跡カマド遺物出土状況



11号住居跡



11号住居跡遺物出土状況



11号住居跡石出土状況



12号住居跡



13号住居跡

図版17 熊野遺跡152次



1号井戸跡



1号井戸跡古銭出土状況



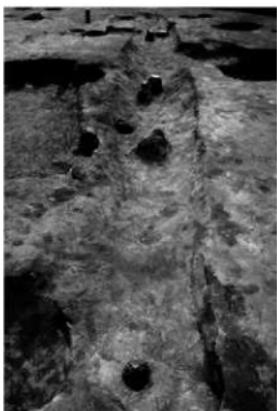
2号井戸跡



2号井戸跡石碟出土状況



3号井戸跡



1号溝跡

図版18 熊野遺跡152次



6号溝跡(1)



6号溝跡(2)



6号溝跡板碑出土状況

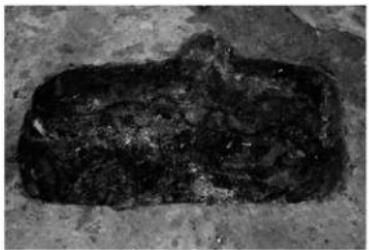


8～12号溝跡



7号溝跡

図版19 熊野遺跡152次



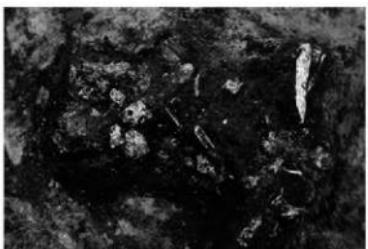
1号火葬土坑(1)



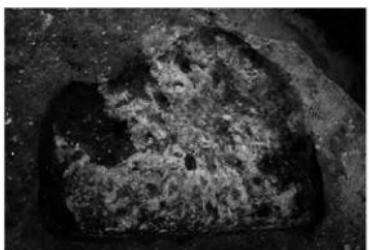
1号火葬土坑(2)



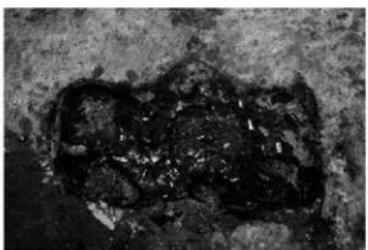
2号火葬土坑(1)



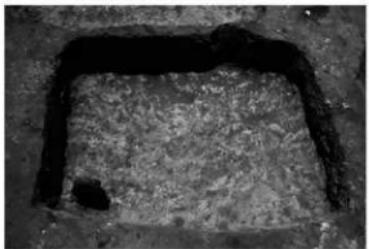
2号火葬土坑(2)



2号火葬土坑(3)



3号火葬土坑



23号土坑



24号土坑(1)

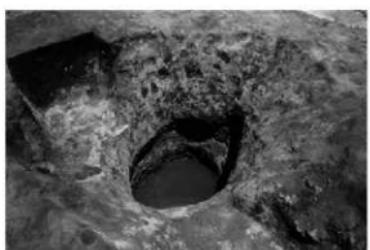
図版20 熊野遺跡152次



24号土坑(2)



26号土坑



57号土坑



67～70号土坑



80号土坑

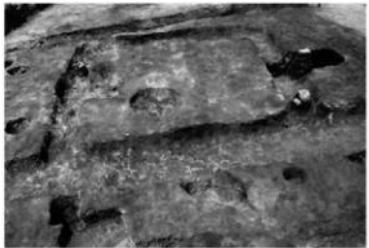


80号土坑遺物出土状況



80号土坑古銭出土状況

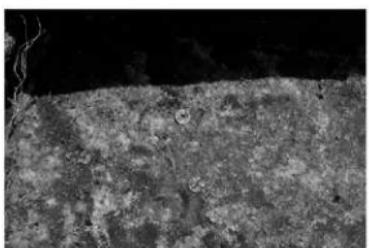
図版21 熊野遺跡152次



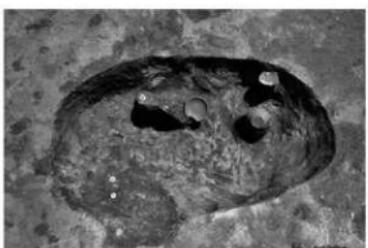
92・93号土坑、20号溝跡



93号土坑



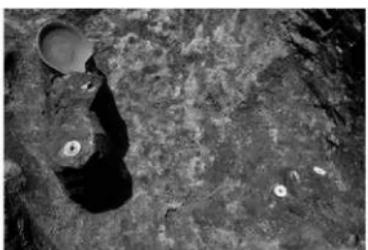
93号土坑古銭出土状況



94号土坑



94号土坑遺物出土状況(1)



94号土坑遺物出土状況(2)



100号土坑断面

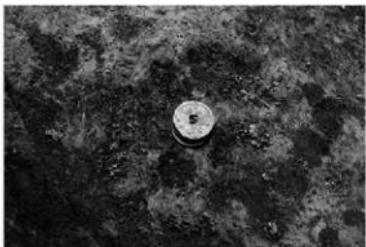


117号土坑

図版22 熊野遺跡152次



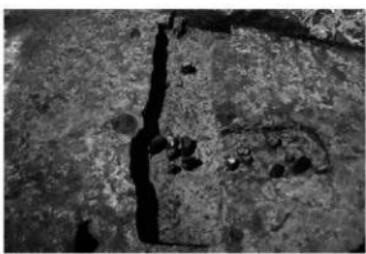
122～124号土坑



122号土坑古銭出土状況



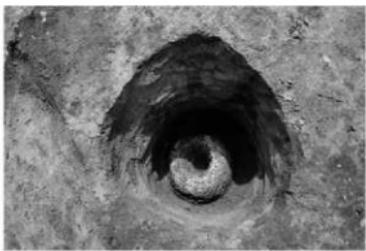
164号土坑遺物出土状況



166・167号土坑



167号土坑遺物出土状況



7号ビット根固石出土状況

図版23 熊野遺跡152次



152次 1号住居跡出土遺物



1号住居跡出土鉄製品



2号住居跡No. 1



3号住居跡No. 1・2



4号住居跡No. 1



8号住居跡No. 1



8号住居跡No. 2



6号住居跡No. 1



8号住居跡No. 3



8号住居跡No. 4



8号住居跡No. 5



8号住居跡No. 6



8号住居跡No. 7

図版24 熊野遺跡152次



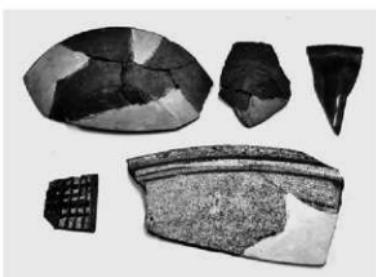
8号住居跡No.9



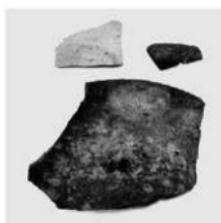
8号住居跡No.11



8号住居跡No.14



9号住居跡出土遺物



11号住居跡No.1～3



11号住居跡No.5・6



11号住居跡No.7

図版25 熊野遺跡152次



図版26 熊野遺跡156次



熊野156次調査全景



1号住居跡



1号住居跡カマド



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡カマド1遺物出土状況



1号住居跡カマド2遺物出土状況



2号住居跡



2号住居跡遺物出土状況

図版27 熊野遺跡156次



図版28 熊野遺跡156次



1号住居跡No.13



1号住居跡No.14



1号住居跡No.15



1号住居跡No.16・17



2号住居跡No.1



2号住居跡No.4



2号住居跡No.9



2号住居跡No.10



2号住居跡No.19



2号住居跡No.23



2号住居跡No.27



2号住居跡No.31



2号住居跡No.33

図版29 熊野遺跡156次



2号住居跡No.37



2号住居跡No.39



熊野156次 2号住居跡No.41



2号住居跡No.48



2号住居跡No.49



2号住居跡No.50

図版30 熊野遺跡156次



1号土坑No. 1



1号土坑No. 2



1号土坑No. 3



1号土坑No. 8



1号土坑No. 9

報告書抄録

ふりがな	くまのいせき						
書名	熊野遺跡XII						
副書名							
シリーズ	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	第121集						
編著者名	宮本直樹、竹野谷俊夫						
編集機関	深谷市教育委員会						
所在地	〒366-0823 埼玉県深谷市本住町17-3番地 TEL 048-572-9581						
発行日	平成23年3月31日						
くまのいせき 所収遺跡	くまのいせき 所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
くまのいせき 熊野遺跡 (135次調査)	埼玉県深谷市岡 字熊野2,905	11210	63°17' 36°12' 29"	139°14' 21"	平成10年6月1日から 平成10年7月31日まで	620m ²	アパート
くまのいせき 熊野遺跡 (152次調査)	埼玉県深谷市岡 字立原1,900-1他	11210	63°17' 36°12' 53"	139°14' 06"	平成12年5月9日から 平成12年7月10日まで	1,800m ²	工場
くまのいせき 熊野遺跡 (156次調査)	埼玉県深谷市岡 字熊野286-1 他	11210	63°17' 36°12' 36"	139°14' 20"	平成13年11月8日から 平成13年11月26日まで	95m ²	アパート
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
くまのいせき 熊野遺跡 (135次調査)	集落跡 官衙跡	古墳時代 平安時代	竪穴住居跡 井戸跡 溝跡	土師器 須恵器 鉄製品	竪穴建物跡から円面鏡・金具・ 銅鏡・墨書き器などが出土した。		
くまのいせき 熊野遺跡 (152次調査)	集落跡 官衙跡	古墳時代 奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 区画溝跡	土師器 カワラケ 銭貨	15世紀代の建物群は区画溝で囲まれており、近接する五十子陣との 関連が想定される。		
くまのいせき 熊野遺跡 (156次調査)	集落跡 官衙跡	古墳時代 奈良～ 平安時代	竪穴住居跡 土坑 ピット	土師器 須恵器	竪穴建物跡から円面鏡が出土した。		

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第121集

熊野遺跡 XII

印 刷 平成23年3月31日
発 行 平成23年3月31日

発 行 埼玉県深谷市教育委員会



熊野152次調査全測図